京都府遺跡調査概報

第 17 冊

1. 志　高　遺　跡
2. 国道9号バイパス関係遺跡
   (1) 千代川遺跡第9次
   (2) 北金岐遺跡
   (3) 小金岐古墳群
3. 木津地区所在遺跡
   (1) 赤ケ平遺跡
   (2) 釜ケ谷遺跡
   (3) 上人ケ平遺跡
   (4) 市坂1・4号墳

1985

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年４月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し，間もなく５年が過ぎようとしています。その設立の目的は，京都府内の埋蔵文化財の発掘調査，保存活用及び研究を行い，その保護を図るとともに，先人の遺した文化財を大切にする考え方の普及育成に努め，地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は，京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり，昭和59年度は，39件の調査を実施しました。これらの発掘調査は，「京都府遺跡調査概報」第13冊から第16冊までにまとめて既に刊行いたしました。この第17冊に収めた概要は，昭和59年度に発掘調査を実施した「志高遺跡」，「国道９号バイパス関係遺跡」，「木津地区所在遺跡」に関するものです。

当調査研究センターでは，遺跡保存のためのあらゆる努力をするとともに，たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し，その活用に努めていく所存であります。この概報を，既に刊行している「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では，開発事業関係者はもちろんのこと京都府教育委員会，関係市町教育委員会をはじめ各機関の御協力を受け，さらに炎天の下，厳寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって，これら多くの関係者に厚く御礼申しあげます。

昭和60年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1.　本冊に収めた概要は，

　　1.　志高遺跡　　2.　国道９号バイパス関係遺跡　　3.　木津地区所在遺跡

を対象としたものである。

2.　各遺跡の所在地・調査期間・経費負担及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 志　高　遺　跡	舞鶴市志高	昭59. 10. 5 ～ 昭60. 3. 27	建設省近畿地方建設局	岩松　保
2. 国道９号バイパス関係遺跡			建設省近畿地方建設局	
(1) 千代川遺跡第９次	亀岡市千代川町	昭59. 8. 27 ～ 昭59. 12. 12		森下　衛
(2) 北金岐遺跡	亀岡市大井町	昭59. 11. 5 ～ 昭59. 12. 20		田代　弘
(3) 小金岐古墳群	亀岡市大井町	昭59. 12. 3 ～ 昭60. 3. 27		田代　弘
3. 木津地区所在遺跡			住宅・都市整備公団	
(1) 赤ケ平遺跡	木津町木津赤ケ平	昭59. 12. 1 ～ 昭60. 1. 29		松井　忠春 黒坪　一樹
(2) 釜ケ谷遺跡	木津町木津釜ケ谷～東小林	昭59. 12. 1 ～ 昭60. 3. 5		松井　忠春 戸原　和人
(3) 上人ケ平遺跡	木津町木津上人ケ平	昭59. 2. 1 ～ 昭59. 3. 29		松井　忠春 小山　雅人
(4) 市坂1・4号墳	〃	昭59. 2. 4 ～ 昭59. 3. 29		戸原　和人

3.　本冊の編集には，調査課企画資料担当が当った。

目　　次

1.　志高遺跡昭和59年度発掘調査概要…… 1
2.　国道９号バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要……21
　(1)　千代川遺跡第９次……22
　(2)　北金岐遺跡……40
　(3)　小金岐古墳群……49
3.　木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要……95
　(1)　赤ケ平遺跡……99
　(2)　釜ケ谷遺跡…… 113
　(3)　上人ケ平遺跡…… 121
　(4)　市坂１・４号墳…… 130

挿 図 目 次

志高遺跡

第 1 図　周辺遺跡分布図…… 3
第 2 図　調査地位置図…… 4
第 3 図　調査トレンチ配置図…… 5
第 4 図　土層実測図…… 7
第 5 図　検出遺構実測図（黒色砂質土下面）…… 9
第 6 図　出土遺物実測図(1)……11
第 7 図　出土遺物実測図(2)……12
第 8 図　出土遺物実測図(3)……13
第 9 図　志高遺跡集落分布予想図……15
付 表 1　出土遺物観察表……16

国道 9 号バイパス関係遺跡

(1)千代川遺跡第 9 次

第 10 図　調査位置図……22
第 11 図　調査地周辺地形図……23
第 12 図　トレンチ配置図……24
第 13 図　南側平坦部土層図……25
第 14 図　南側平坦部遺構配置図……26
第 15 図　南側平坦部出土遺物実測図(1)……27
第 16 図　南側平坦部出土遺物実測図(2)……28
第 17 図　扇状地内谷状地形部土層断面図……29
第 18 図　扇状地内谷状地形部遺構配置図……30
第 19 図　扇状地内谷状地形部出土遺物実測図……31
第 20 図　北側平坦部土層図……32
第 21 図　北側平坦部遺構配置図……33
第 22 図　北側平坦部出土遺物実測図……34
第 23 図　拝田谷部土層図……35
第 24 図　拝田谷部遺構配置図……36

第 25 図　拝田谷部出土遺物実測図……37
付 表 2　トレンチ及び検出遺構一覧……38

(2)北金岐遺跡

第 26 図　調査地位置図……40
第 27 図　調査地平面図……41
第 28 図　東壁土層実測図……42
第 29 図　SB 01 平面図……44
第 30 図　SB 02・SB 08　平面図……45
第 31 図　SD 15 出土遺物実測図……46
第 32 図　SK 04 出土遺物実測図……46
第 33 図　SB 01，ピット101出土遺物実測図 ……47

(3)小金岐古墳群

第 34 図　調査地周辺古墳分布図……50
第 35 図　小金岐古墳群地形図……53
第 36 図　1号墳発掘調査図……55
第 37 図　1号墳墳丘断面図……57
第 38 図　墳丘中礫集積状況図……59
第 39 図　1号墳石室実測図……61
第 40 図　玄室見通し図……63
第 41 図　玄室床面の構築状況……65
第 42 図　排水溝断面図……66
第 43 図　排水施設の状況……66
第 44 図　排水溝平面図……67
第 45 図　1号墳遺物出土状況図……68
第 46 図　出土遺物実測図(1)……69
第 47 図　出土遺物実測図(2)……70
第 48 図　出土遺物実測図(3)……71
第 49 図　墳丘内出土遺物実測図……73
第 50 図　3・7号墳墳丘実測図……75
第 51 図　各トレンチ実測図(1)……77
第 52 図　各トレンチ実測図(2)……78

第 53 図　3号墳石室実測図……79
第 54 図　3号墳石室見通し図……80
第 55 図　3号墳遺物出土状況図……81
第 56 図　出土遺物実測図(1)……83
第 57 図　出土遺物実測図(2)……84
第 58 図　墳丘内出土遺物……84
第 59 図　79号墳トレンチ実測図……85
付 表 3　1号墳出土土器観察表……89
付 表 4　3号墳出土土器観察表……90

木津地区所在遺跡

(1)　赤ケ平遺跡

第 60 図　遺跡分布図……96
第 61 図　木津町東部の小字地図……98
第 62 図　赤ケ平遺跡・釜ケ谷遺跡トレンチ配置図……100
第 63 図　赤ケ平遺跡トレンチ配置図……101
第 64 図　赤ケ平遺跡1・4・5番地断面実測図……103
第 65 図　赤ケ平遺跡7・10番地断面実測図……105
第 66 図　柱穴状遺構検出状況（10番地）……107
第 67 図　赤ケ平遺跡出土遺物実測図(1)……108
第 68 図　赤ケ平遺跡出土遺物実測図(2)……109
第 69 図　赤ケ平遺跡7・10番地遺物分布図……111
付 表 5　石器（剥片・砕片）計測表……112

(2)　釜ケ谷遺跡

第 70 図　釜ケ谷遺跡5・10番地様面実測図……115
第 71 図　釜ケ谷遺跡18・45・114番地断面実測図……117
第 72 図　釜ケ谷遺跡出土遺物……119

(3)　上人ケ平遺跡

第 73 図　上人ケ平遺跡・市坂4号墳トレンチ配置図……122
第 74 図　上人ケ平遺跡11・12・13番地遺構平面図……123
第 75 図　上人ケ平遺跡13番地SD01実測図……126
第 76 図　上人ケ平遺跡出土遺物実測図……128

(4)　市坂１号墳・第23地点

第 77 図　市坂１・２号墳推定復元断面図…… 130
第 78 図　市坂１号墳地形図…… 131
第 79 図　市坂１号墳断面実測図…… 132
第 80 図　市坂１号墳検出遺構実測図…… 133
第 81 図　市坂１号墳出土遺物実測図…… 134
付 表 6　木津東部地区所在遺跡所在地一覧…… 137
付 表 7　木津町東部の小字符号一覧…… 139

図 版 目 次

志高遺跡

図版第１　(1)淡褐色砂上面検出遺構　（西から）　(2)淡褐色砂上面検出遺構　（東から）

図版第２　(1)暗茶褐色粘質土下面検出遺構　（北から）

(2)黒灰色砂質土下面検出遺構　（西から）

図版第３　(1)SX 41　（北から）　(2)SD 39 と SD 40　（西北から）

図版第４　(1)SD 39 土層断面図　（東から）　(2)SD 40 土層断面図（東から）

図版第５　(1)B-2 トレンチ　（南から）　(2)B-3 トレンチ　（東から）

図版第６　志高遺跡出土土器(1)

図版第７　志高遺跡出土土器(2)

図版第８　志高遺跡出土土器(3)

国道９号バイパス関係遺跡

(1)千代川遺跡第９次

図版第９　(1)調査地全景（南から）　(2)調査地全景　（北から）

図版第10　(1)No. 1 トレンチ遺構検出状況　(2)No. 3 トレンチ遺構検出状況

図版第11　(1)No. 6 トレンチ木製品出土状況　(2)No. 6 トレンチ建築材出土状況

図版第12　(1)No. 7 トレンチ遺構検出状況　(2)No. 14 トレンチ遺構検出状況

図版第13　出土遺物（須恵器・墨書土器）(1)

図版第14　出土遺物（須恵器・墨書土器）(2)

(2)北金岐遺跡

図版第15　(1)遺構検出状況　（南から）　(2)東壁土層図

図版第16　(1)掘立柱建物 SB-01　（南東から）　(2)掘立柱建物 SB-02　（南から）

図版第17　(1)瓦器皿出土状況（BS-10 ピット）　(2)溝15遺物出土状況

(3)小金岐古墳群

図版第18　(1)１号墳調査前全景　（西から）

(2)１号墳墳丘築成の状況・部分　（南西から）

図版第19　(1)１号墳石室全景　（南西から）　(2)１号墳玄室見通し　（南西から）

図版第20　(1)１号墳玄室内の施設　（北東から）

(2)１号墳玄室床面と棺障状遺構　（北東から）

図版第21　(1) 1 号墳玄室・敷石床面の状況　(南西から)
(2) 1 号墳玄室・敷石除去後の状況　(南西から)
図版第22　(1) 1 号墳玄室基底と羨道部排水施設　(南西から)
(2) 1 号墳羨道・排水施設末端の状況　(西から)
図版第23　(1) 1 号墳左側石背後の状況 (南から)　(2) 1 号墳瓦器出土状況 (南西から)
図版第24　(1) 3 ・ 7 号墳調査前墳丘の状態　(南から)
(2) 3 号墳石室検出状況　(北から)
図版第25　(1) 3 号墳石室全景　(北から)　(2) 3 号墳石室と 7 号墳墳丘　(東から)
図版第26　(1) 3 号墳石室構築状況　(右側石)　(東から)
(2) 3 号墳棺台状遺構と出土遺物　(東から)
図版第27　(1) 3 号墳第 1 トレンチ全景　(北から)　(2) 3 号墳奥壁構築状況　(東から)
図版第28　(1) 3 号墳周溝と墳丘の状況　(南西から)
(2) 3 号墳石室掘方の土層堆積状況　(南から)
図版第29　(1) 3 号墳右側石背後の状況　(西から)
(2) 3 号墳墳丘裾部列石 (第 4 トレンチ)　(西から)
図版第30　1 ・ 3 号墳出土遺物(1)
図版第31　1 ・ 3 号墳出土遺物(2)
図版第32　(1) 1 ・ 3 号墳出土遺物　(2) 1 号墳出土鉄器

木津地区所在遺跡

(1)赤ケ平遺跡

図版第33　(1)調査地全景　(北から)　(2)7 bt 調査前風景　(南西から)
図版第34　(1)7 bt 遺物出土面検出状況　(北から)　(2)1 bt 掘削状況　(北から)
図版第35　(1)4 bt 土層断面　(2)出土遺物

(2)釜ケ谷遺跡

図版第36　(1)調査地全景　(北から)　(2)10 bt 掘削状況　(北から)
図版第37　(1)45 bt 掘削状況　(西から)　(2)114 bt 掘削状況　(西から)
図版第38　(1)釜ケ谷遺跡出土遺物　(2)釜ケ谷遺跡出土陶磁器

(3)上人ケ平遺跡

図版第39　(1)調査地全景　(西から)　(2)12 bt 遺構検出状況　(南から)
図版第40　(1)掘立柱建物 SB 01 北西柱穴検出状況
(2)掘立柱建物 SB 01 北東柱穴検出状況

図版第41　(1)11 bt 溝状遺構 SD 05 検出状況 （南から）
(2)11 bt 溝状遺構 SD 05 検出状況 （東から）
図版第42　(1)17・18 bt 掘削状況（南から）　(2)17 bt 検出状況（東から）
図版第43　(1)13 bt 溝状遺構 SD 01 検出状況（北から）　(2)13 bt SD 01 出土鬼瓦
図版第44　(1)37 bt 掘削状況 （南東から）　(2)33 bt 掘削状況 （北西から）
(4)市坂1号墳
図版第45　(1)調査地全景 （東から）　(2)周溝断面 （南西から）
図版第46　(1)調査地断ち割り状況 （北から）　(2)土層断面 （東から）
上人ケ平遺跡・市坂1号墳
図版第47　(1)上人ケ平出土遺物　(2)市坂1号墳出土埴輪

1. 志高遺跡昭和59年度発掘調査概要

1. はじめに

志高遺跡は舞鶴市字志高にあり，京都府最大の河川である由良川の河口から約10km遡上した左岸に位置する。建設省近畿地方建設局福知山工事事務所が計画，実施する由良川改修工事の予定地内に含まれているため，その事前調査として，昭和55年度から58年度にかけて舞鶴市教育委員会が主体となって発掘調査を実施した。今年度からは，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが担当することとなった。今年度の調査対象地は志高舟戸地区で，由良川に沿って「L」字形をした約4,000m²である。

最初に，昨年度までの志高遺跡の成果を概観しておきたい。(注1) 志高遺跡及びその周辺地の調査は昭和55年度から行われている。

55年度――上境・浅地区で遺構の有無を確認するために試掘調査を行ったが，遺構は確認できなかった。

56年度――花ノ木地区，久田美地区，スドロ・藪下地区で調査が行われており，後二者では顕著な遺構は検出されなかった。花ノ木地区では，竪穴式住居跡(古墳時代) 6基，方形周溝墓(弥生時代中期)，自然流路等が確認された。

57年度――カキ安地区の調査を行い，弥生時代中期から古墳時代初めにかけての方形周溝墓27基をはじめとし，古墳時代の竪穴式住居跡12基，奈良・平安時代の掘立柱建物跡10数棟などの遺構を検出した。

58年度――57年度と同じく，カキ安地区の下流側を調査している。竪穴式住居跡(弥生時代) 2基，同(古墳時代末) 3基，方形周溝墓，流路跡等が包蔵されていた。また，今年度以降の調査予定地である舟戸地区の試掘調査がなされた。

現地調査は当調査研究センター調査課主任調査員辻本和美・同調査員岩松　保が担当し，本概報は岩松が執筆した。調査期間は，昭和59年10月5日より60年3月27日までを要した。また，現地調査に際しては，建設省近畿地方建設局福知山工事事務所，同舞鶴出張所，舞鶴市教育委員会社会教育課，舞鶴市史編さん室，京都府教育委員会，京都府中丹教育局，舞鶴地方振興局，京都府立丹後郷土資料館，志高区・久田美区のかたがた等の御協力を得た。特に，舞鶴市教育委員会吉岡博之氏には，多忙の中，幾度も現地にまで赴いていただき，有益な御助言をいただいた。地元の志高・久田美地区の有志の方々には，作業員として調査に参

加していただいた。[注2] 多くの学生諸君並びに卒業生には，調査補助員・整理員として現地調査に尽力していただいた。[注3] 加えて，上記以外にも概報作成にあたって多くの方々に土器や図面の整理作業に従事していただいた。[注4] 諸先生方には，専門的な見地から御指導，御助言を賜った。[注5] 記して深謝の意を表します。

2. 歴史的環境

由良川は，源が丹波高原にあり，途中大小の蛇行を繰り返して若狭湾にその流れを注ぐ全長146kmの河川である。[注6] 流域には福知山・綾部で平野を形成するが，その他には特に平野をもたない。由良川下流域[注7]では，大江盆地―河口の平均傾斜が1/8,000，志高―河口でのそれは1/10,000以上という緩傾斜であるにもかかわらず，その傾向は顕著で，発達した自然堤防・後背湿地がつくる狭隘な谷平野を抱えるにすぎない。これは山麓が由良川の両側にまで迫り，その間をぬうようにして蛇行するためである。蛇行の凸面が山脚に衝突することで固定され，それ故に凹面の位置も変動しにくくなり，ここに流路中の砂粒が堆積し自然堤防が形成されやすい状態となる。平野が狭いことと河岸段丘が未発達であることが集落立地に決定的な制約を与えており，洪水・冠水の危険にさらされながらも，相対的に高いという理由だけで自然堤防上に集落を構えざるをえなかった。志高地区にも，現在では畑である自然堤防上に明治40年の水害まで集落が営まれていた。[注8] 自然堤防と山並の間には後背湿地が形成されている。一度増水すると，まず，この低地から水没し河道と化し，増水の規模にもよるが，この自然堤防が島のように水面に浮かぶ。しかし，通常は水田耕作の適地として富を約束するものであった。『延喜式』によると，旧加佐郡内[注9]には式内社が11社記載されているが，由良川下流域に限ってみると4社が点在していた。大川神社(大川)，伊知布西神社(桑飼下)，麻良多神社(丸田)，阿良須神社(所在に異説がある)がそれらである。大川神社のみ大社である。このことからも，平野が狭小な割には農業生産力が高く，特に由良川の後背湿地が生活の基盤をなしていたことが窺い知れよう。生活基盤としての後背湿地の役割を考えると，洪水の度にこの地を捨てずに，再び舞い戻り生活を営んだことも頷る。

第1図は志高遺跡を中心とした周辺遺跡の分布図で，1972年刊行の『京都府遺跡地図』(京都府教育委員会)を基本に，その後判明した遺跡を加えたものである。山頂部・山裾の山城・古墳と，由良川自然堤防に立地する集落跡に大別できるが，これは前述の特色を反映しているものである。渡辺　誠氏[注10]は，由良川下流域で，河底から遺物が出土する遺跡(＝散布地)が多く所在する事実に着目し，その立地からこれらの遺跡を三類型に大別した。この類型化から，由良川河道の後背湿地への移行――自然堤防の島嶼化――河底へ移行・消滅と，遺跡の

第1図　周 辺 遺 跡 分 布 図（1：50,000）

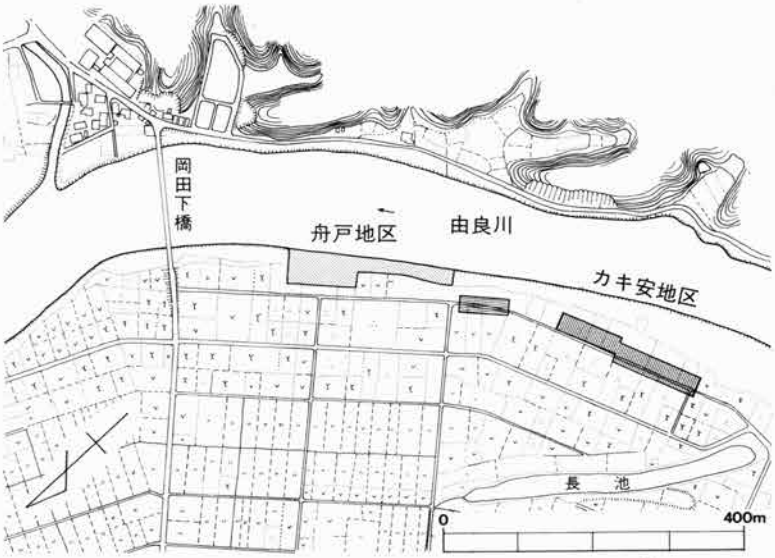
1. 大川遺跡　2. 花ノ木遺跡　3. 志高遺跡　4. 桑飼下遺跡　5. 地頭東遺跡　6. 地頭遺跡　7. 和江1・2号墳　8. 和江1～3号墳　9. 大足谷1・2号墳　10. 八田古墳　11. 徹光山古墳群　12. 古　墳　13. 城1・2号墳　14. 桑飼上1号墳　15. 桑飼上2号墳　16. 水無月山遺跡(水無月山砦)　17. 国分寺跡　18. 岡田由里滝城　19. 岡田由里城　20. 岡田由里砦　21. 荒張城　22. 志高城　23. 地頭城　24. 宇谷城　25. 原　城　26. 土穴城　27. 久田美城　　(補注) 2は吉岡氏の御教示による5は『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』による7･8は『京都府遺跡地図』のとおりである

立地が由良川の流路により変化していくと考えた。同氏の分類では，志高遺跡を消滅してしまった「河底遺跡」としたが，実際には自然堤防上に遺構が埋蔵されていることは，現在までの発掘調査が示す通りである。

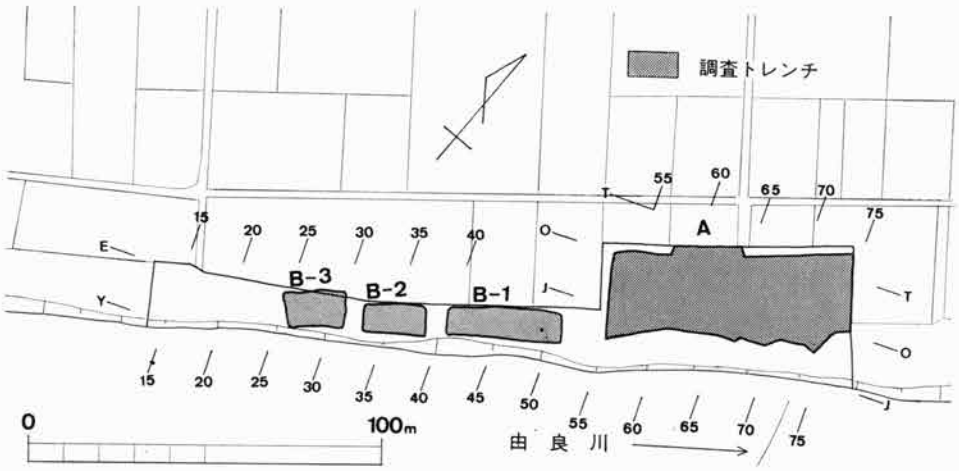
由良川下流域には多くの遺跡が所在するが，発掘調査がなされているものには志高遺跡，花ノ木遺跡，桑飼下遺跡(注11)，水無月山遺跡(以上舞鶴市)，高川原遺跡，三河宮の下遺跡（以上大江町)などがある。志高遺跡・花ノ木遺跡については前述したところであり，ここでは，桑飼下遺跡以下の調査を概述する。桑飼下遺跡(注12)では，古墳時代の竪穴式住居跡や縄文時代後期の炉跡が検出されている。渡辺　誠氏は縄文時代後期の一土器様式として桑飼下式を掲げ，さらに，集落構成及び遺物の詳細な検討，花粉分析などの科学的手法の総合的見地から，「桑飼下型経済類型」を提唱した。水無月山遺跡(注13)は由良川に面した丘陵端部にあり，弥生時代後期の壺棺墓を含む土坑３，小土坑３，中世(近世か？)の墓地跡が認められた。この報告書では，京都府北部の弥生墓の集成がなされている。高川原遺跡(注14)は，由良川河口より約22km遡上した右岸に位置する。1974年に調査が行われ，古墳時代の竪穴式住居跡が９基検出された。三河宮の下遺跡(注15)は，昭和55年度に発掘調査がなされ，縄文時代後期の住居跡４基，古墳時代の住居跡７基が確認された。

3. 調　査　概　要

調査対象地が約4,000m²と広範なため，便宜上Ａ区とＢ区に分けて，それぞれの調査方針を設定して調査を行った。Ａ区は対象地内の川下の長方形部分で，全面調査を方針とした。Ｂ区は由良川に近接して細長く横たわった地区で，大半が由良川へ下る崖であるた



第２図　調　査　地　位　置　図



第3図　調 査 ト レ ン チ 配 置 図

め，遺構の遺存状況が悪いと推測された。そこで，A区の様相を検討した後，トレンチを設けることとした。調査地区割りは，昭和58年度の舞鶴市教育委員会の調査と方向を合わせた。地区は3m毎に設定し，南一北の区割りラインを東から西へアルファベットで，東西の区割りラインを南から北へ数字で示すこととした。地区の表示は，南東隅の交点を構成する東西・南北ライン名で表わすこととした。

A区の対象地は35×70mであるが，由良川の川岸・崖を含んでいるため，調査はその部分に及ばず，約24×67mの調査地を設けた。舟戸地区全域にわたる昭和58年度の舞鶴市教育委員会の試掘調査の層位に基づいて，地表下約1.5mの淡褐色砂上面近辺までを重機で掘削し，以下順次手掘りを繰り返して各層での遺構の有無を確認した。遺構を検出したのは淡褐色砂上面，暗茶褐色砂質土上面，暗茶褐色砂混土上面，黒色砂質土下面である。(注16) 黒色砂質土より下の層はサブトレンチによる土層観察のみに終わったが，トレンチ内からの遺物の出土はなかった。しかし，色調・土質から地山と明瞭に判断されるのは黄色砂のみである。各層の遺構とは別に，調査地の川側で，由良川に向けての傾斜が全域にわたり検出できたが，これは由良川の旧河岸と判断した。出土土器から，中世頃までのものと思われる。また，67ラインより川上では自然流路が見つかり，数本のサブトレンチを設けて土層観察を行った結果，調査地外までその川幅を持つことがわかった。由良川旧河道とこの自然流路のため，平面的に掘り下げて上記の遺構面を調査した面積は約480m²にとどまった。

B区は，A区の由良川旧河岸に相当する範囲が調査対象地であるため，B-1～3までのトレンチを設けてそれを確めた。各トレンチの規模は，B-1が10×33m，B-2が10×18m，B-3が12×18mである。それぞれのトレンチで，旧河岸に相当する肩部と河道内堆積と思われる

粘土層を検出したが，湧水とそれに伴う壁の崩落が夥しく，それ以上の調査は行い得なかった。総調査面積は約2,200m²である。

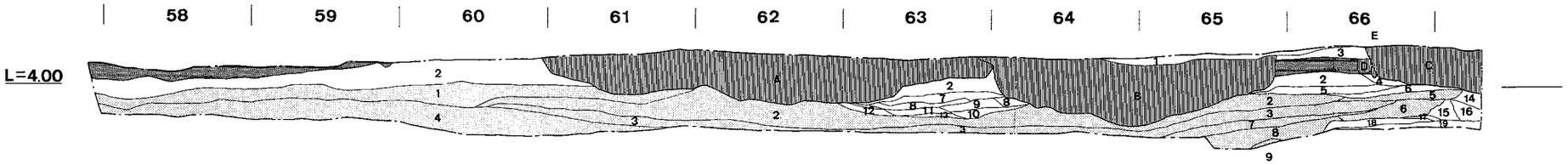
4. 検 出 遺 構 （第5図　図版1～5）

今回の調査では弥生・古墳時代の竪穴式住居跡や方形周溝墓などの遺構は検出できなかった。しかし，各時代・各層から各種の遺構が検出できたので，以下それぞれの検出面と遺構を概述する。

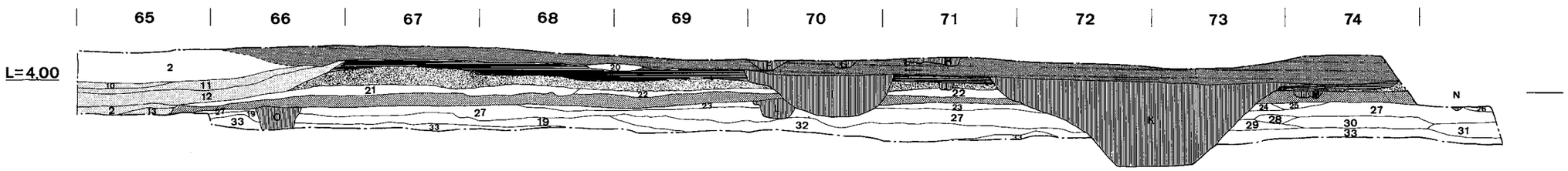
淡褐色砂上面では，全面にわたって多数の柱穴・土坑・溝状遺構や井戸・木枠組み池等が検出できた。土坑は大きなもので，径8mに及ぶものがあり，内部には磁器片，瓦片，漆塗り椀等の木製品，板材，植物質等が粘土中にはさまっていた。生活廃棄物を埋めたものと想像される。柱穴・溝状遺構からは磁器片が出土するものがあること，中世遺物の出土が皆無であることから，これらの遺構はすべて近世――特に18世紀後半以降のものと判断する（出土土器の項参照）。重機によりこの検出面まで一気に掘り下げたため，上部を削平してしまったためか，建物として結びつく柱穴は多くない。

暗茶褐色砂質土上面では，SD39，SD40，SX41，SD42を検出した。SX41は，SD40の埋土上面で検出した1.3×2.5mにわたって広がる焼土で，出土土器から奈良時代のものといえる。その性格は不明である。SD39とSD40は一部重複関係をもち，その層序からSD40を切ってSD39が掘られている。SD39の検出長は15.2m，幅0.7～3.4m，深さ0.2～0.7mで，傾斜は東下する。埋土の最下層中より，第7図8・9の土器が出土しているが，検出層位及び底面の達している層位の検討より，この溝の「存続」時期の一部をも示すものではない。SD40は検出長16.5m，幅4.0～9.0m，深さ0.3～1.8mである。検出した長さは短いが，この範囲内での傾斜は西流するものである。層位・出土土器より数回の掘り返しが考えられ，最も古い掘削は，最下層で集中的に出土した土器から弥生時代中期にあたるものと考えられる。土器は一個体にまとまるものがないことから，意図的に廃棄されたのではなく，流入物と考える。少量ながらも弥生時代前期・縄文時代後期のものが含まれている。最下層より，小玉・管玉各1点が出土した。SD42は67ライン近辺で検出した傾斜によってつくられる自然流路である。Oラインに沿ってサブトレンチを設定し，対応する肩部と底面の検出に努めたが，西側に肩部は今回の調査地内では検出できなかった。また底面の確認は，約1.5m掘り下げた時点で湧水による壁の崩落が夥しくなり，あきらめざるをえなかった。埋土は褐色系の砂層が基本でベースの粘質土系とは異なること，幅が45mをこえる規模をもつことなどから，かなりの流量がある自然河川跡と想定する。

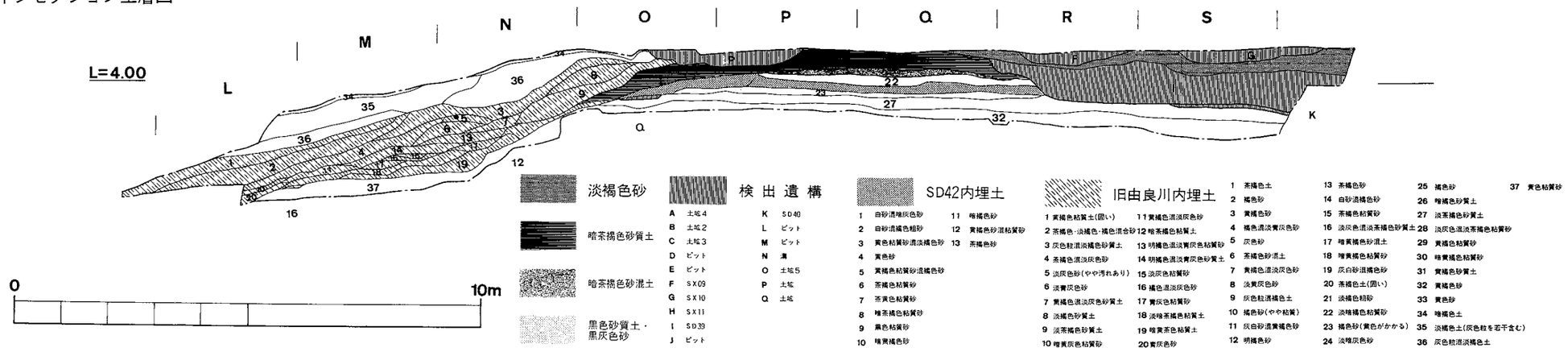
０ラインセクション土層図



Ｒラインセクション土層図

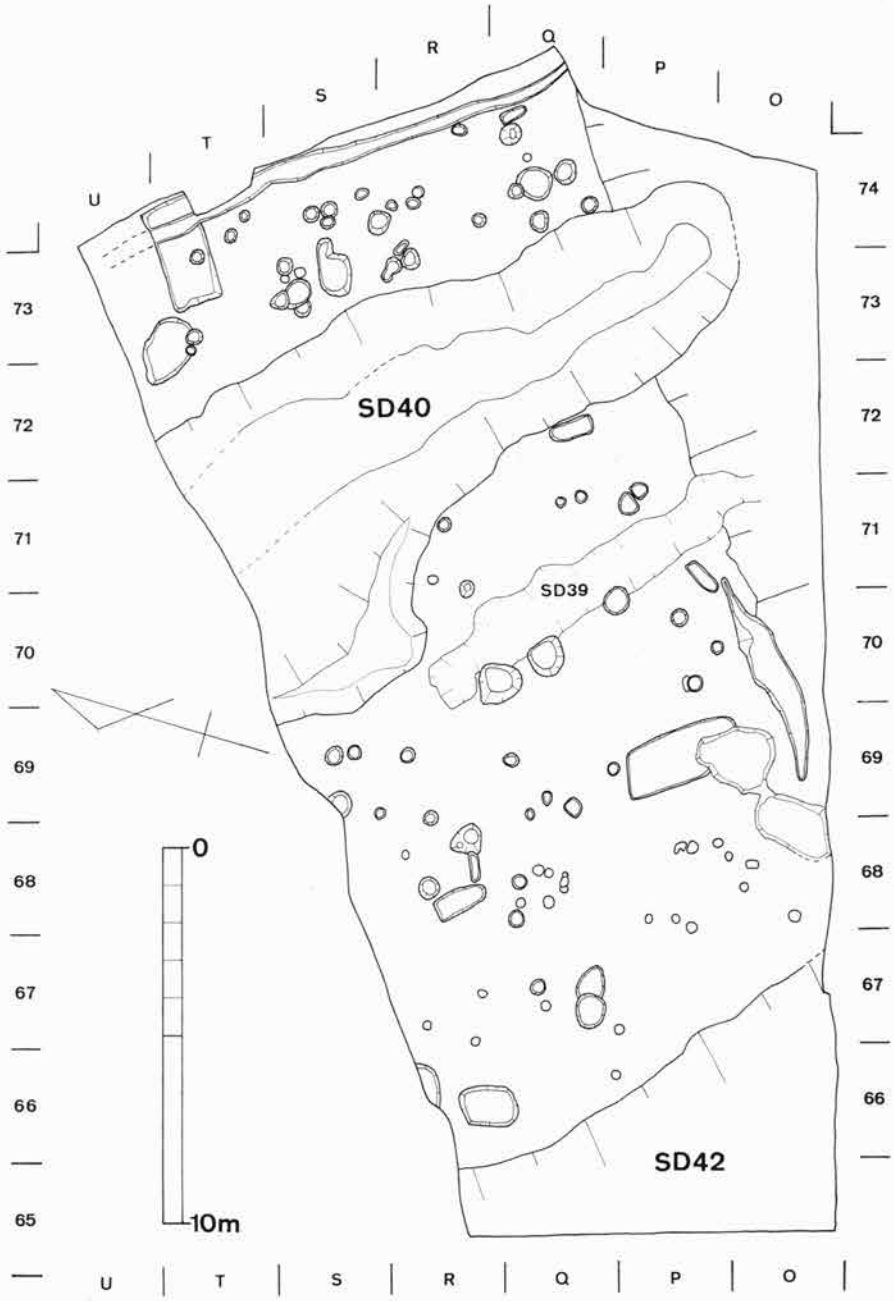


70ラインセクション土層図



第４図　土　　層　　実　　測　　図

由良川旧河岸は，現由良川に平行して検出した。調査地の幅のほぼ半分にわたる傾斜地で，①河道内埋土と推定する砂及び粘質層②上層堆積の土質とに大きく分けられる。①は砂・粘質砂が細かく堆積しており，時々によって流れが変わる由良川の河底で堆積した状況を呈す



第5図　検出遺構実測図（黒色砂質土下面）

る。②はほぼ同じ色調で，若干の土質の差が見てとれる程度である。土層観察用のアゼに柱穴の断面が見てとれたことから，この旧河道の上部にも，近世の柱穴が広がっていたものといえる。①と②の土質の差，堆積状況の異なりから，②は造成による土盛り層と考える。

SD42と旧由良川河道内の土層観察により，各遺構面・包含層が流路内に流入・堆積していることを確認した。

5. 出 土 土 器（第6～8図　付表1　図版6～8）

今回の調査の出土遺物は，縄文土器から近世の陶磁器類にわたる各時代の土器，石鏃，剥片等の石器類，装身具，木器等が出土している。出土土器は整理用コンテナ約60箱分に相当するが，大別すると，近世陶磁器と弥生土器に分けられ，それ以外の時代の土器は少ない。

近世陶磁器類[注17]は，肥前系陶磁器，備前焼，丹波焼等のものがあり，(60-64)—(J-K) 区の粘土層及び土坑1～5から多く出土した。粘土層は，生活廃水を由良川に流した水路内の堆積土である。器形は，椀・鉢・皿・瓶・甕・擂鉢等の日常雑器ばかりで，当時の民衆の生活がしのばれる。1はいわゆる広東椀で，2は口縁部をやや外反させる形のものである。4は蛇ノ目高台をもつ。1～4は，その実年代が18世紀後半以降で，それ以前の染付類は皆無である。5・6は共に唐津系皿で，6は内面4か所に砂目痕がある。7は唐津刷毛目大鉢で，約1/5残存している。5・6は16世紀後半～17世紀前半，7は17世紀後半～18世紀前半のものといえよう。

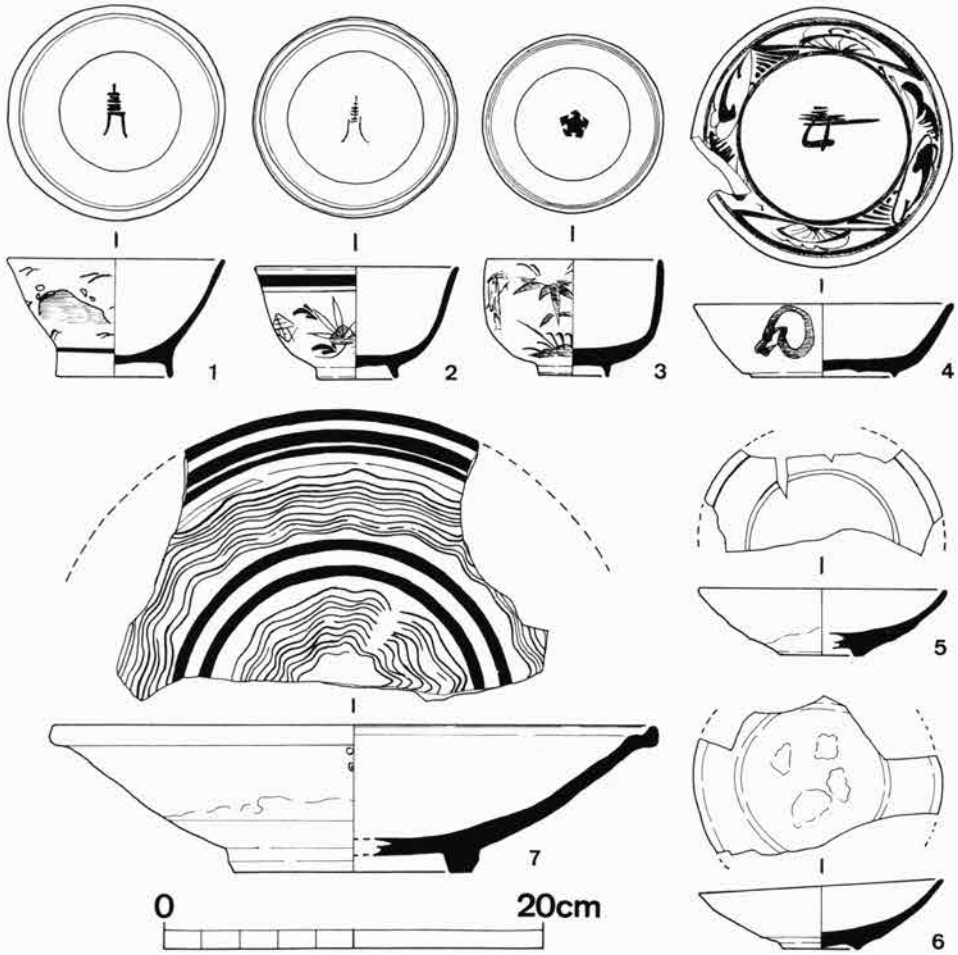
中世の遺物の出土量は少いが，瓦器・土師器等が出土している。また，16世紀代には瀬戸・美濃系の焼物が当地に運び込まれている。

19～21，23～31は淡褐色砂層から出土したものである。この層は奈良時代頃の堆積層であるが，実際には弥生土器が多く出土する。

19・20は須恵器杯で，19には高台がつく。21は土師器杯である。これらは，SX41の近辺で出土した。奈良時代。

8・9はSD39内より出土したものであるが，この遺構の年代を示すものではない。9の内面は調整痕をナデ消しており，口縁端部に面を有して1条の凹線文を巡らす。8は口縁部端に列点文をもち，頸部に指頭圧した貼り付け突帯を2帯有する。その下には沈線を巡らす。口縁内面には波状文と，2対1組の穿孔を8組(推定)を施文する。

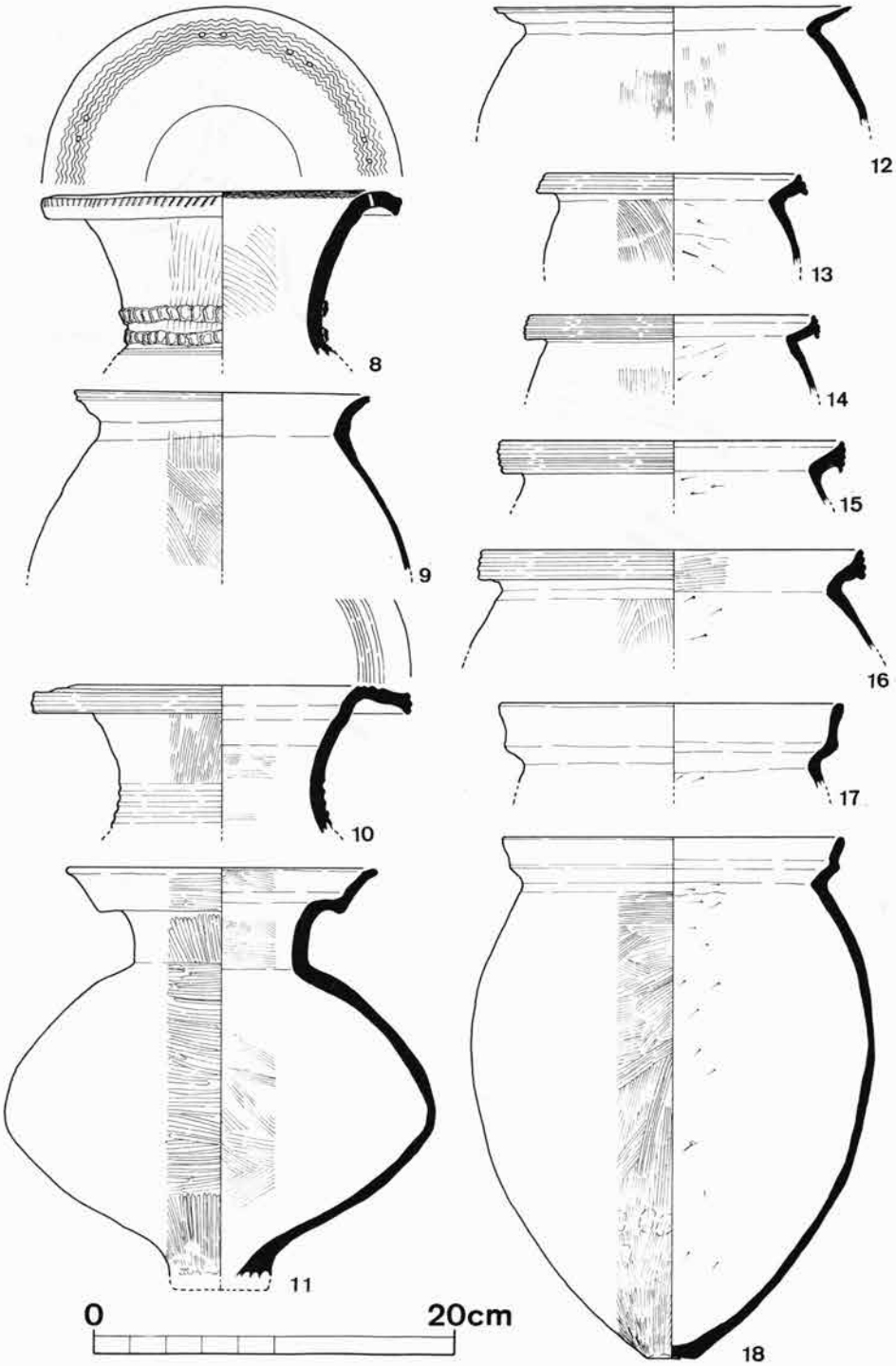
10～18はSD42内埋土のうち，白砂混褐色粗砂中より出土したものである。甕のうち，12のみが内面ハケメ調整で，13～18は頸部の屈曲部までをヘラ削りを行っている。13～16の甕は，ほぼ直角に屈曲する頸部をもち，口縁端部は外傾し上方と下方に伸びる面を有し，擬凹



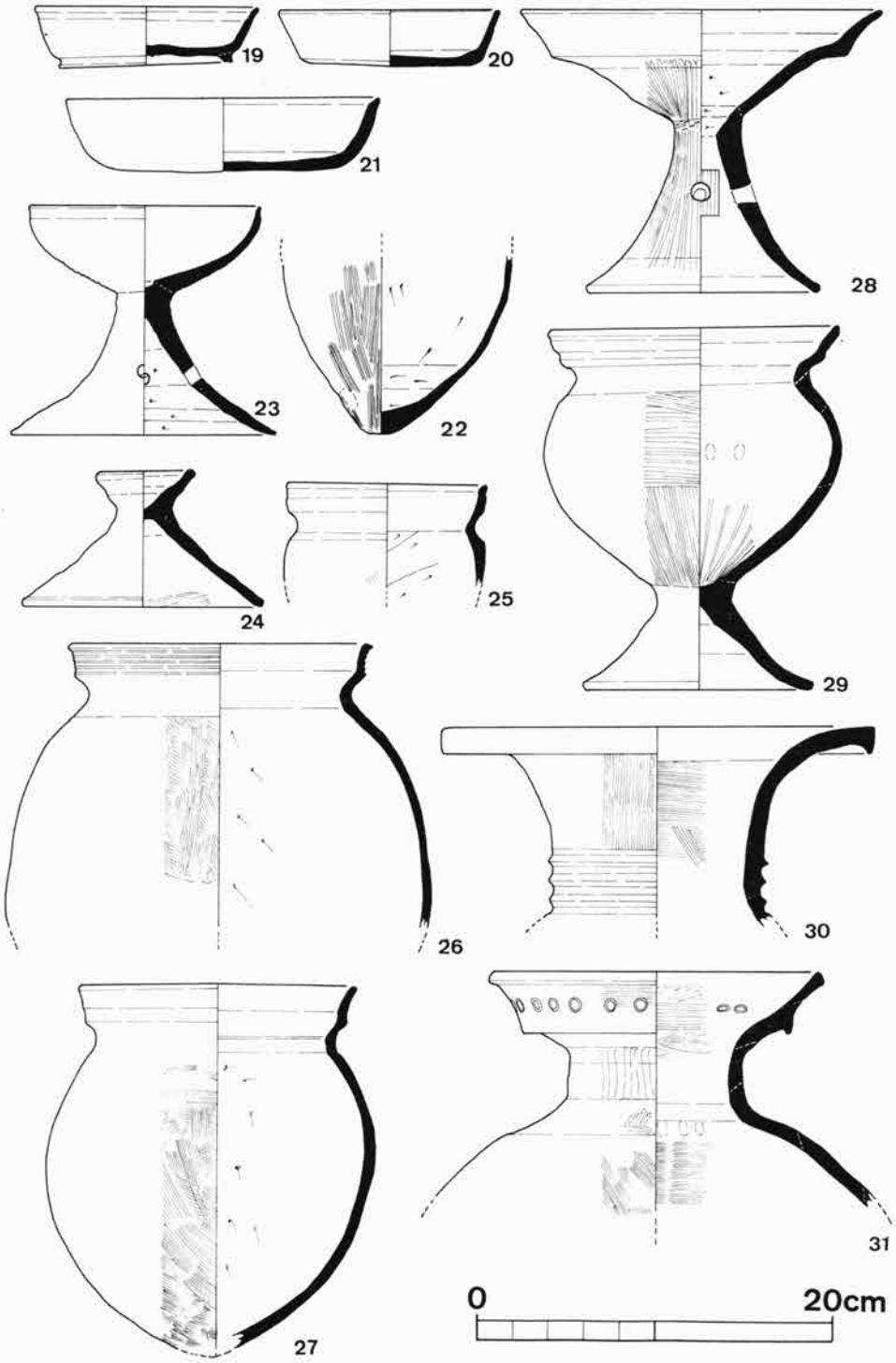
第6図　出 土 遺 物 実 測 図 (1)

線文数条を施文している。17・18は「く」の字形の頸部とやや開いて上方に伸びる二重口縁をもつもので，内・外面とも横ナデ調整で器壁を整えている。11の二重口縁を有する壺は口縁端部が丸く終り，二重口縁の屈曲部には突帯をもたない。体部は算盤珠の形をしている。底部は失われているが，平底を有するものと推定する。

23～31の弥生土器はすべて淡褐色砂中の出土である。30は中期の壺で，頸部に3条の凸帯をもつ。26の甕は二重口縁を有し，口縁部に擬凹線文を施文している。27の甕は底部を欠くが，復元すると尖頭の丸底を有するものである。体部は「卵」形をしており，上方に比較的長く伸びる口縁をもつ。31は二重口縁の壺で，内・外面の調整を丁寧に行っている。口縁端部の断面は四角く，二重口縁の屈曲部に突帯を有する。



第7図　出土遺物実測図 (2)



第8図　出 土 遺 物 実 測 図 (3)

22は，今回調査の最下の包含層である黒色砂質土より出土したものである。体部上半より上は欠損しているが，底部の形状及びその調整から18の甕と同形態になると思われる。庄内併行期のものといえよう。

6. ま　と　め

志高遺跡の調査が始まって5年が経過し，当遺跡の様相が徐々に明らかとなってきた。今年度の調査では，特に弥生・古墳時代に限って言えば，住居跡や埋葬施設などの遺構は確認できなかった。また，遺物はそのほどんどが後世の流れ込みと判断され，良好な一括資料を得るに至らなかった。しかし，自然流路の検出は，これからの遺跡を分析する上で重要な要素となってくるであろう。時代がかたよった遺物の出土は，その時々の様相を推定する資料となり得る。以下，項目を掲げ，調査成果をまとめておきたい。ただし，遺物整理が十分に済んでいないため，現段階での覚え書き程度であることを断っておく。詳細は，来年度以降の調査分を加えた調査報告書の中で検討を行いたい。

(1)　自然流路(SD42)と由良川について

今回検出したSD42及び由良川旧河岸については，検出遺構のところで触れた。ここでは両河川の関係についてまとめておきたい。

両河川内堆積層の中には，平坦面での包含層がその流れの中に流入して堆積したと考えられる層がある。70ライン土層図の黒色砂質土・黒灰色砂が暗茶褐色粘質土，暗茶褐色砂質土が淡茶褐色砂質土，Rライン土層図の黒色砂質土・黒灰色砂が茶褐色砂である。黄褐色・青灰色・灰色系の砂・粘質砂の中にあって異彩をはなち，それぞれの層と対応関係が見られる。また，黒色砂質土・黒灰色砂，暗茶褐色砂混土は，各々の河川の肩に沿って傾斜して堆積している。同一層が各々の流路内に流れ込んでいるのは，同時併存を示している。黒色砂質土・黒灰色砂の堆積時期から，少なくとも弥生時代後期以降のことといえる。

SD42は幅40m以上で，由良川に直交する形で検出できたが，現在周囲には河川はなく，また志高の山合いには際立った谷は見てとれない。由良川に注ぎ込む一支流ではなく，由良川本流から分かれた一分流と考えたい。SD42内埋土は底面まで検出できなかったが，その層はすべて砂層で，粘土層はない。これは，流れが極めて速く，粘土の堆積が妨げられたのか，もしくは常時には水が流れていなかったものと思われる。後者の場合は洪水で後背湿地に流れ込んだ水が本流へ合流する水路と考えられる。昭和56年度の花ノ木地区の調査で，60mにわたる自然堤防の土層観察により現在の由良川が別のところを流れていた可能性を指摘している[注18]が，今回の調査では本流の移動を裏づける資料は得られなかった。志高遺跡は現在では

由良川が東側に流れているだけだが，少なくとも弥生時代後期頃には随所に帯状の窪地があり，当集落はいわば「中洲」状の上に立地していたと推測する。

(2) 集落分布について

調査地内からは弥生時代中期及び後期の土器が大量に出土したが，そのほとんどが流入物と考えられる。これは，同時期の溝(SD40)や柱穴が検出された同地が集落の縁辺部と推測され，隣接地に中・後期の集落中心部が包蔵されているものと考える。先に述べたSD42とこの想定集落，現在までの調査で判明した集落中心部の分布を示したのが第9図である。1は自然流路，2は弥生時代中・後期の集落中心部，3は中期の集住地[注19]，4は前期のもの[注20]である。3と4の間には方形周溝墓をはじめとする「墓地」であったようだ。川上から川下への集落移動が見てとれるが，特に中期には，自然流路(1)を挟んで集落が対峙していたと考えられる。今後，周辺地の調査が進展することで一層明確に集落の分布が明らかとなるであろう。

(3) 弥生土器について

由良川下流域は，歴史的環境でみたように発掘調査例が少ない。特に弥生時代の集落跡の調査は皆無で，志高遺跡の他にはない。そういう意味において，由良川下流域の弥生時代研究は緒についたばかりである。志高遺跡は旧国名では丹後国に属するが，その糸口として，弥生時代研究の進んでいる丹後半島部との比較を行い，由良川下流域の土器相を明らかにしていく必要がある。ここでは，久美浜町の橋爪遺跡の土器分類を用いて干若の整理をしておきたい。[注21]

橋爪遺跡は熊野郡久美浜町にあり，昭和55年度の調査では溝内出土の土器を層位的に分類し，弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての編年的考察を行っている。その中で，甕

第9図 志高遺跡集落分布予想図

E・Fが今回出土の甕に相当する。甕Eは「く」の字形の頸部と拡張された端部に擬凹線文を施すものである。口縁部の形状により3タイプに分けられ，端部が内傾し上下に拡張されるEa，直立気味に立ち上がり端部が上方へ拡張するEb，端部が外反するEcに細分される。甕Fは，緩やかに外反する頸部から上方に拡張された口縁がつくもので，内外面をヨコナデで最終調整する。Eaが弥生時代後期前半，Ebが中葉，Fが後半～布留に相当する時期を考えている。Eaに属するものは，13～16，Ecは26，Fに相当する17・18・27である。この甕Fの17・18・27は，底部・体部の形状，頸部の屈曲や口縁の立ち上がりで差異が見てとれ，細分ができるかもしれない。又，由良川下流域の弥生墓である水無月山遺跡(注22)では，Ebのタイプの甕片が出土しており，基本的には丹後半島と同じ様相を示すものと思われる。しかし，細部の調整・手法でやや異なるものが見られ，将来的には「丹後系」の土器様式の中での由良川下流域の特色が抽出されるものと思われる。

(4) そ　の　他

出土遺物の項で述べたように，近世陶磁器の出土量は比較的多い。近世初期・中期には唐津焼が，後期には染付類が主体をなす。又，陶器の産地を同定することで，近世の交易が明らかとなるであろう。

奈良～中世の遺構が皆無であるのは，今回の調査だけでは，その理由はわからないが，周辺地の調査結果の中でとらえると，有機的な意味合いが出てくるものと思われる。

（岩松　保）

付表1　出土遺物観察表

各部実測値の※は復元，（　）は現存

実測番号	器種・器形	出土地点		各部長		色調		焼成	胎土	備考
		地区	層位・遺構	部位	実測値(cm)	部位	色名			
1	染付椀	62・63-J・K	淡明褐色土	口径	11.2	生地	乳白色	堅	精良	広東椀
				器高	6.15	模様	あい色			
				高台高	1.6					
				高台径	5.9					
2	染付椀	62・63-J・K	淡明褐色土	口径	10.4	生地	乳白色	堅	精良	
				器高	5.9	模様	明青色			
				高台高	0.7					
				高台径	4.0					
3	染付椀	62・63-J・K	淡明褐色土	口径	9.0	生地	乳白色	堅	精良	
				器高	6.1	模様	暗青色			
				高台高	0.6					
				高台径	3.6					

実測番号	器種・器形	出土地点		各部長		色調		焼成	胎土	備考
		地区	層位・遺構	部位	実測値(cm)	部位	色名			
4	染付皿	61-K・L	炭混暗灰色砂質土	口径 器高 高台高 高台径	13.6 3.8 0.3 7.6	生地 模様	淡褐色 暗青色	堅	精良	蛇ノ目高台
5	唐津系皿	72P		口径 器高 高台高 高台径	13.0※ 3.5 0.4 4.4※	生地 釉	茶褐色 緑灰色	堅	良	
6	唐津系皿	65N	土坑 2	口径 器高 高台高 高台径	12.8 3.2 0.4 4.1	生地 釉	淡赤褐色 緑	堅	良	内面に砂目痕
7	唐津刷毛目大鉢	62・63-J・K	淡暗青灰色粘土	口径 器高 高台高 高台径	31.6※ 7.8 1.2 12.4※	生地 釉	赤褐色 白色及び黄茶色	堅	良	
8	弥生土器壺		SD31	口径 器高	18.0 (9.1)	外面 内面	暗黄灰色 淡橙灰色	良	良	
9	弥生土器甕		SD39	口径 器高	16.3 (9.9)	外面 内面	淡橙褐色 淡褐色	良	良	
10	弥生土器壺		SD42 白砂混褐色粗砂	口径 器高	21.0※ (8.0)	内・外面	淡橙褐色	良	良	
11	弥生土器壺		SD42 白砂混褐色粗砂	口径 器高	17.2 (23.0)	外面 内面	橙褐色 灰色	良	良	底部にススが付着
12	弥生土器甕		SD42 白砂混褐色粗砂	口径 器高	19.8※ (7.0)	内・外面	淡黄褐色	良	良	外面にススが付着
13	弥生土器甕		SD42 白砂混褐色粗砂	口径 器高	14.0※ (5.0)	外面 内面	淡茶褐色 橙褐色	良	良	
14	弥生土器甕		SD42 白砂混褐色粗砂	口径 器高	15.8※ (4.5)	内・外面	淡橙褐色	良	良	
15	弥生土器甕		SD42 白砂混褐色粗砂	口径 器高	19.0※ (3.5)	外面 内面	暗茶褐色 淡茶褐色	良	良	
16	弥生土器甕		SD42 白砂混褐色粗砂	口径 器高	20.8※ (5.5)	内・外面	淡橙褐色	良	良	

実測番号	器種・器形	出土地点		各部長		色調		焼成	胎土	備考
		地区	層位・遺構	部位	実測値(cm)	部位	色名			
17	弥生土器甕		SD42 白砂混褐色粗砂	口径 器高	18.8※ (4.4)	内・外面	淡褐色	良	良	
18	弥生土器甕		SD42 白砂混褐色粗砂	口径 器高 底径	18.9※ 29.1 2.6	内・外面	淡橙褐色	良	良	外面にススが付着
19	須恵器杯	73-T・U	淡褐色砂	口径 器高 高台高 高台径	12.4 3.4 0.6 9.7	内・外面	灰白色～淡暗青灰色	堅	精良	
20	須恵器杯	73T	淡褐色砂	口径 器高 底径	12.2 3.2 9.0	内・外面	灰白色	堅	精良	
21	土師器杯	71-T・U	淡褐色砂	口径 器高	17.6 4.1	内・外面	赤褐色～淡赤褐色	良	良	
22	弥生土器甕	66～70-R～S	黒色砂質土	底径 器高	1.0 10.0	内・外面	淡赤褐色	良	良	内・外面にススが付着
23	弥生土器高杯	71-S・T・U	淡褐色砂	口径 器高 底径	13.0※ 14.9 12.9	内・外面	淡黄褐色	堅	良	スカシは竹管状のもので3方向に施文
24	弥生土器蓋	71S	淡褐色砂	上底径 下底径 器高	4.9 14.6※ 7.7※	内・外面	淡黄褐色	良	良	
25	弥生土器甕	67～R-T	淡褐色砂	口径 器高	11.0～12.0 (5.8)	内・外面	淡黄褐色	良	良	
26	弥生土器甕	72R	淡褐色砂	口径 器高	16.3※ (16.0)	内・外面	褐色	堅	良	外面にススが付着
27	弥生土器甕	66P	淡褐色砂	口径 器高	15.3 (20.5)	内・外面	黄灰色	堅	やや粗	外面約1/3にわたり黒斑
28	弥生土器器台	71S 72S	淡褐色砂 SX16	口径 器高	20.2 15.7～16.1	内・外面	淡黄褐色	良	良	3方向にスカシを有する
29	弥生土器脚付甕	66R	淡褐色砂	口径 器高 底径 脚高	15.9 20.4 12.5 5.0	内・外面	黄褐色	良	良	体部上半に黒斑を有する
30	弥生土器壺	68S	淡褐色砂	口径 器高	24.5 (6.2)	内・外面	淡黄褐色	良	良	
31	弥生土器壺	71R	淡褐色砂	口径 器高	18.4 (13.2)	内・外面	赤褐色	堅	良	内面の竹管文は，1対1単位で2単位を施文

注1　『京都府舞鶴市　志高遺跡調査概報』 舞鶴市教育委員会　1981
『京都府舞鶴市文化財調査報告第6集志高遺跡――昭和56年度花ノ木・スドロ藪下地区および久田美地区の調査概要――』 舞鶴市教育委員会　1982
『京都府舞鶴市文化財調査報告第4集　志高遺跡――昭和57年度カキ安地区の調査――』 舞鶴市教育委員会　1984
『京都府舞鶴市文化財調査報告第7集　志高遺跡――昭和58年度カキ安・舟戸地区の調査概要――』 舞鶴市教育委員会　1984

注2　作業員として調査に参加していただいた方は以下の通りである（敬称略・順不同）。
山崎源治・野間確也・今西ひさ江・今西アヤノ・今西タキ・今西和子・永野澄慧・永野久枝・永野千代野・碇　弥生・牧　鈴子・井上英子・森野石子・谷口節子・坂根あけみ・増茂なみ子（志高地区）
真下志津江・真下幸江・真下トメ子・真下朝野・真下チセノ・真下重子・真下ナヲ・水口和子・水口・洋子・梅原文子・梅原トシ江・多田よし子・瓜生初枝・村上千里・河崎和子（久田美地区）

注3　調査補助員，整理員として調査に参加していただいた方は以下の通りである（敬称略・順不同）。
須佐美康・河崎博之・真下隆全・谷口　太・永野和史・藤田公徳・真下祥孝・立川明浩・中井靖・大和田淳司（調査補助員）
竹原京子（整理員）

注4　その他の方々（敬称略・順不同）
濱口和宏・福富　仁・中井英策・城田正博・河本　英

注5　御指導・御助言を賜った諸先生方は以下の通りである（敬称略・順不同）。
釈　龍雄（京都府立山城郷土資料館長）・田中光浩（峰山町教育委員会）・林　和廣（網野町立橘小学校教諭）

注6　籠瀬良明「京都府由良川下流谷平野――地形・洪水・集落移転及び土地利用――」（『横浜市立大学紀要』 横浜市立大学）1962 によるところが多い。

注7　福知山平野を出て，宮津市由良の河口までを指すものとする。

注8　「舟戸の民家36戸は由良川左岸（現在の岡田下橋川べり，主として上側一帯）にあって集落をつくっていた。（中略）水害後，由良川改修の議が起こり一略一舟戸全戸は移転を命ぜられた。このため，大正元年から同二年秋までに全戸が志高の山際の各人家の合間や，薬師谷，間，尾ノ内などに移転した。」（『舞鶴市史』通史篇（中）p. 381）

注9　旧加佐郡は，宮津市，舞鶴市，大江町にまたがった由良川下流域を含むが，「歴史的環境」で扱っている由良川下流域よりもやや広い範囲を指す。

注10　渡辺　誠ほか『京都府舞鶴市　桑飼下遺跡発掘調査報告書』 舞鶴市教育委員会　1972

注11　昭和56年度調査の花ノ木地区は，志高遺跡とは別個の集落跡と判断されるため一つの遺跡と考えるのが妥当である。舞鶴市教育委員会・吉岡博之氏の御教示による。

注12　注9と同じ

注13　『水無月山遺跡発掘調査報告書』 京都府立丹後郷土資料館　1980

注14　『高川原遺跡発掘調査報告書』 大江町教育委員会　1975

注15　竹原一彦ほか「三河宮の下遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第2冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1982

注16　暗茶褐色砂混土下面でも遺構が検出される可能性があったが，時間的な制約で調査ができなかった。

注17　大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」（『国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館）

1984

注18　注１と同じ

注19　『志高遺跡Ⅲ　昭和58年度由良川改修工事に伴う発掘調査』（現地説明会資料）　舞鶴市教育委員会　1984.3

注20　注１と同じ

注21　石井清司・黒田恭正ほか「橋爪遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1981－2)』　京都府教育委員会）　1981

注22　注13と同じ

2. 国道９号バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要

はじめに

国道９号バイパス関係遺跡の発掘調査は，建設省近畿地方建設局の依頼を受け，京都市右京区大枝沓掛町から京都府船井郡丹波町須知に至る延長32kmの国道９号バイパス建設工事に伴う事前調査として実施している。その路線内に点在する埋蔵文化財(遺跡)は10遺跡を数える。現地調査は昭和50年度から継続して実施しており，その結果，弥生時代前期の環濠集落跡である太田遺跡，弥生時代後期から古墳時代・鎌倉時代へと連綿と集落跡が続く北金岐遺跡，古墳時代後期の拝田古墳群・小金岐古墳群，奈良時代中頃から平安時代後期にわたり延々と操業が続けられ長岡京や平安京に須恵器を供給していたと考えられる篠窯跡群などが検出されその成果は多大なものがある。

さて，今年度実施した調査は，千代川遺跡・北金岐遺跡・小金岐古墳群の３遺跡である。千代川遺跡は，千代川町一帯に広がる弥生時代から鎌倉時代にかけての周知の集落跡であり，今回の調査地が丹波国府跡推定地の西域や奈良時代の寺院跡と推定される桑寺廃寺に近接することから，今年度は延長約600mにわたって遺構の有無を確認するための試掘調査を実施した。小金岐古墳群は，昭和50年・51年度に既に12基の古墳が調査され，多大なる成果が挙げられている。今年度は道路設計変更に伴い３基(１号墳・３号墳・７号墳)の調査を実施することになった。また北金岐遺跡では，昭和58年度に調査を実施し，弥生時代後期の住居跡・溝や鎌倉時代の建物跡を検出し，特に弥生時代後期のほぼ完形に近い田舟や梯が出土するなど貴重な資料を得ているところである。今年度は約400m^{2}を対象として追加調査をした。

現地調査は，当調査研究センター調査課主任調査員水谷寿克，同調査員村尾政人，田代弘，森下　衛が担当して行い，調査補助員・整理員として同志社大学・京都学園大学考古学研究会の部員をはじめとする有志学生諸氏，また作業員として地元大井町・千代川町の方々に参加していただいた。(注1)

なお，報告書作成にあたっては，千代川遺跡の項を森下　衛が，小金岐古墳・北金岐遺跡の項を田代　弘がそれぞれ担当し，執筆・編集をおこなった。　(水谷寿克)

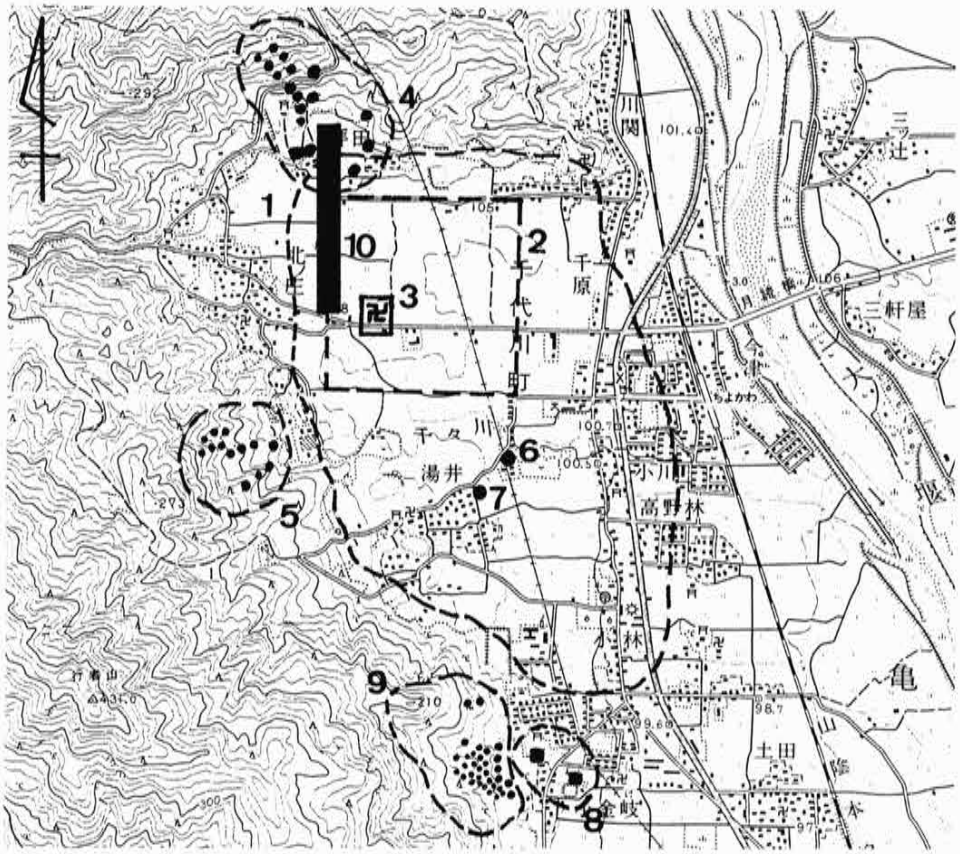
(1)　千代川遺跡第９次発掘調査概要

1.　位置と環境

千代川遺跡は，亀岡市千代川町一帯に広がり，弥生時代から中世にわたる長期的かつ広範囲な複合遺跡である。

遺跡は，亀岡盆地の北西，行者山の北東麓に形成された扇状地上に立地する。当扇状地は，中央に谷状地形部を含むが，全体としては広大な台地状をなし，そこに各時代の遺構群が散在している。

周辺の遺跡及び千代川遺跡内で確認された各時代の遺構群としては，第10・11図(注2)に示したように，弥生時代中期から古墳時代にわたる集落跡・丹波国府跡推定地(注3)・桑寺廃寺などがあ



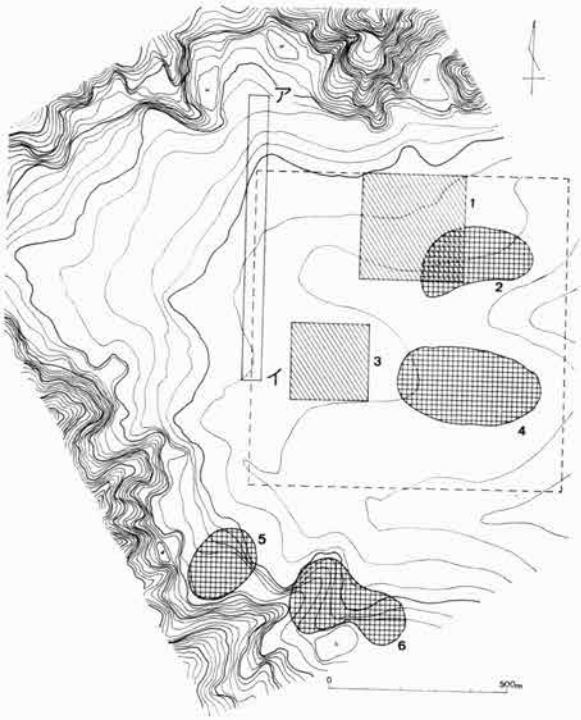
第10図　調　査　位　置　図

1. 千代川遺跡　2. 国府推定地　3. 桑寺廃寺　4. 拝田古墳群　5. 北ノ庄古墳群　6. 丸塚古墳
7. 丸塚西古墳　8. 馬場ケ崎１・２号墳　9. 北金岐古墳群　10. 調査地

る。また丘陵部には，拝田古墳群・北ノ庄古墳群・小金岐古墳群などもみられる。

しかしこれらも，現時点では，ごく一部の確認にとどまり，未確認のものもさらに多く存在するものと考えられる。

今回の調査は，対象地（40,000 m²）が推定国府域の西辺部に相当し（第11図），そこにはさらに未確認の集落跡等が存在するものと考えられることなどから，今後，本格的な調査を進める上での基礎資料を得る目的で，試掘調査としておこなった。



第11図　調査地周辺地形図

1. 国衙跡推定地（点線は国府推定域）　2. 弥生時代後期集落跡　3. 桑寺廃寺推定域　4. 弥生時代中期集落跡　5. 弥生時代末～古墳時代集落跡　6. 弥生時代～奈良時代集落跡　ア～イ．今回の調査地

2. 調査概要

調査は，対象地内に16か所のトレンチ（1,800m²）を入れ行った。

期間は昭和59年8月27日から同年12月12日まで，約3か月半を要した。

当初は，従来から千代川遺跡の範囲と考えられていた部分に限り，幅6m，長さ18～48mのトレンチを12か所設定した。その後の調査過程で，北方の拝田丘陵裾の谷部にも遺構・遺物の広がりが予想されたことから，幅3mのトレンチを，新たに4か所加えた（第12図，No.1～No.16トレンチ[注4]）。

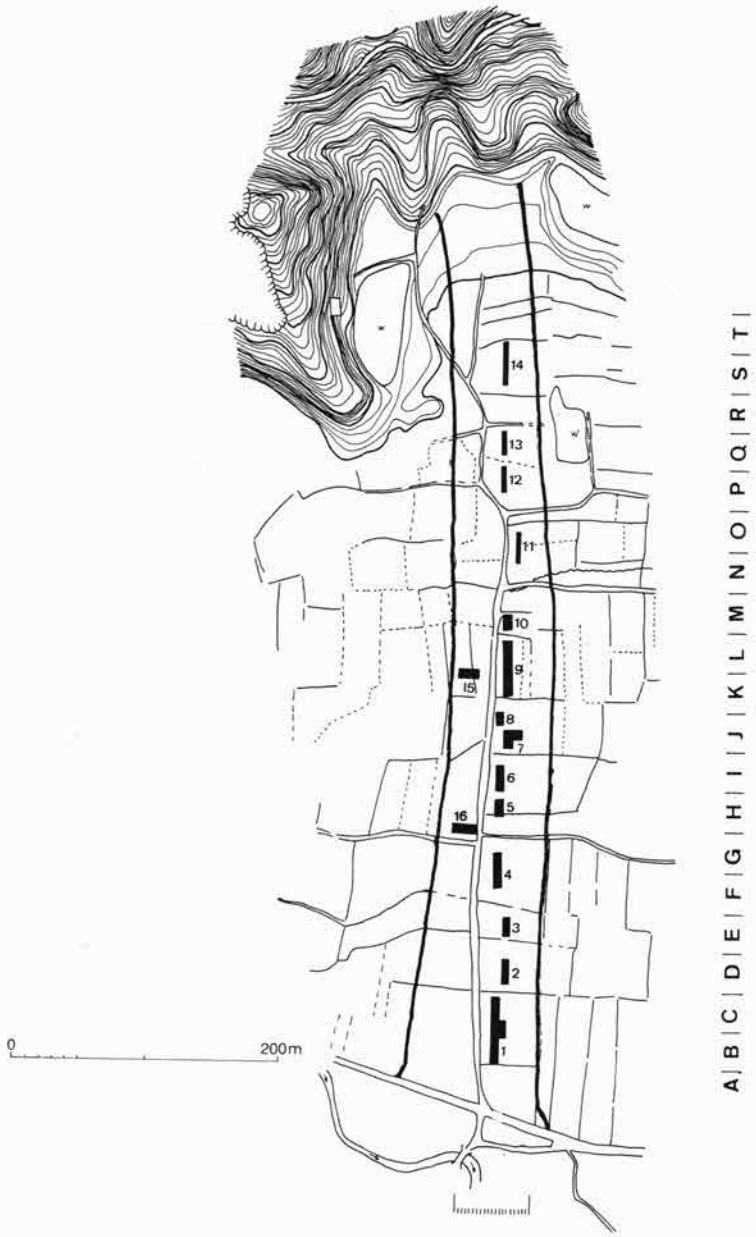
各トレンチは，地区割に沿って，現水田の大きさに合わせた形で設定した。ただ，北西から東南へ徐々に下る地形の中で比較的平坦部の続く部位には，No.1・No.9トレンチのようにやや大きいトレンチを設定した。

地区割は，道路予定地内に設定されている中心杭を利用し，東西，南北とも30mごとに大地区，3mごとに小地区を設定した。そして東西を数字，南北をアルファベットで表現し，各地区の名称は東南隅の杭の名称で示した（第12図）。

各トレンチとも重機によって表土（耕作土）及び床土を除去し，以下の遺物包含層を人力に

よって掘削した。

調査地全体をみわたすと，その地形的特色から4地区に分けることができる。まず，大きく扇状地部と拝田谷部に分けられる。そして，扇状地部は先に記したように，その中央部に谷状地形部があり，北側の平坦部，南側の平坦部，扇状地内の谷状地形状をなす部分に分け



第12図　トレンチ配置図

られる。

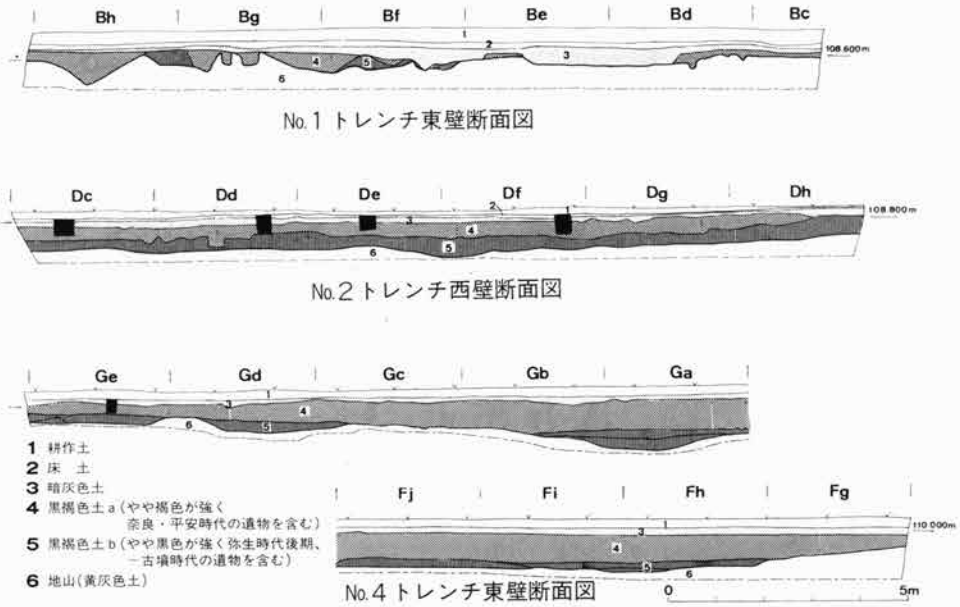
そこでこれらを以下，(1)扇状地南側平坦部，(2)扇状地内谷状地形部，(3)扇状地北側平坦部，(4)拝田谷部と呼び，4地区それぞれについて調査成果の概略を述べる。(注5) なお，検出遺構は一部を除き検出面で掘削を止め埋め戻した。

(1) 扇状地南側平坦部 (No.1～4，16トレンチ)

① 地形と土層 (第13図)

基本的な層序は，耕作土，床土，暗灰色土（鎌倉時代以降の遺物を含むが，旧耕作土であった可能性が高い），黒褐色土（明確に分層はできないが，上方がやや褐色が強く下方が黒色が強い。出土遺物もこれに対応し，上方に奈良・平安時代の遺物が，下方に弥生時代から古墳時代の遺物が出土する），黄灰色土(地山)の順にみられる。

現地形は，北西から南東に向かってなだらかに下がる。ただ旧地形は，さらに凹凸が著しかったようで，調査の結果では，耕作土直下に地山土のみられる部分(No.3トレンチ)や，黒褐色土が厚く堆積している部分(No.2・4トレンチ)がみられた。黒褐色の厚い部位では，この層の上方と下方で出土遺物に明確な差異が認められた。そこで，これを分層し遺構面を検出することに努めたが，明らかにすることはできなかった。そのため，最終的にはいずれのトレンチにおいても黄灰色土まで掘り下げた。



第13図　南側平坦部土層図

② 検出遺構 （第14図）

遺構は，完掘していないため，出土遺物からその年代を推察するのは困難である。ただ，埋土が先述の遺物包含層におよそ対応しており，おおまかに推察することは可能であった。

また，黒褐色土が後世の削平などによりわずかしかみられなかった部分では，弥生時代後期から近世に至る各遺構が検出できた。しかしそれが厚い部分では，黄灰色土上面まで掘り下げると弥生時代後期から古墳時代後期の遺構を検出し得たにとどまる。(注6)

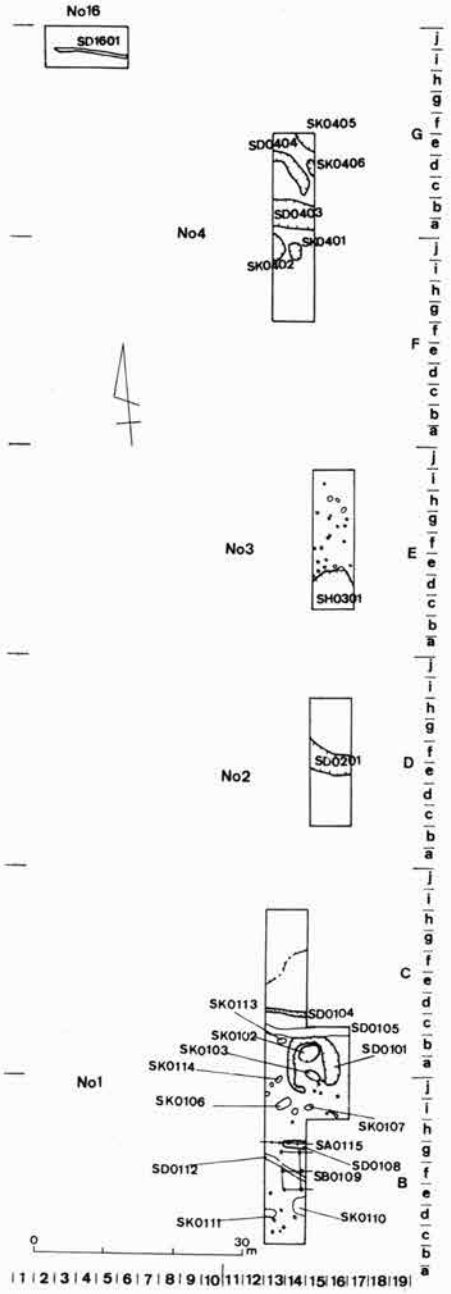
検出遺構には，溝，土坑，柱穴状ピット等がある。それらは付表に示したが，主なものをあげると溝(SD0101)や土坑(SK0401)，竪穴式住居跡(SH0301)がある。

溝(SD0101)は，東西・南北約8mの南に開くコの字状に，幅約1～2mの溝がめぐるものである。

周辺から弥生時代後期の土器片が出土しており，埋土は黒褐色である。弥生時代後期の方形周溝墓の可能性が非常に高い。

溝に囲まれた部分に土坑が2基(SK0102・0103)あるが，主体部かもしれない。

竪穴式住居跡(SH0301)は，No.3トレンチ南端で検出したもので，検出状況から方形の竪穴式住居跡がいくつか重なっているようである。検出面から遺物（第15図12・13・15～21）が出土しており，6世紀後半期に営まれたものと考えられる。(注7)



第14図　南側平坦部遺構配置図

土坑(SK0401)は，短径1.6m，長径2.1mを測る不整楕円を呈す。検出状況から井戸跡の可能性が高いと考えられる。埋土内からは，木製品とともに6世紀後半頃の土器も出土した。

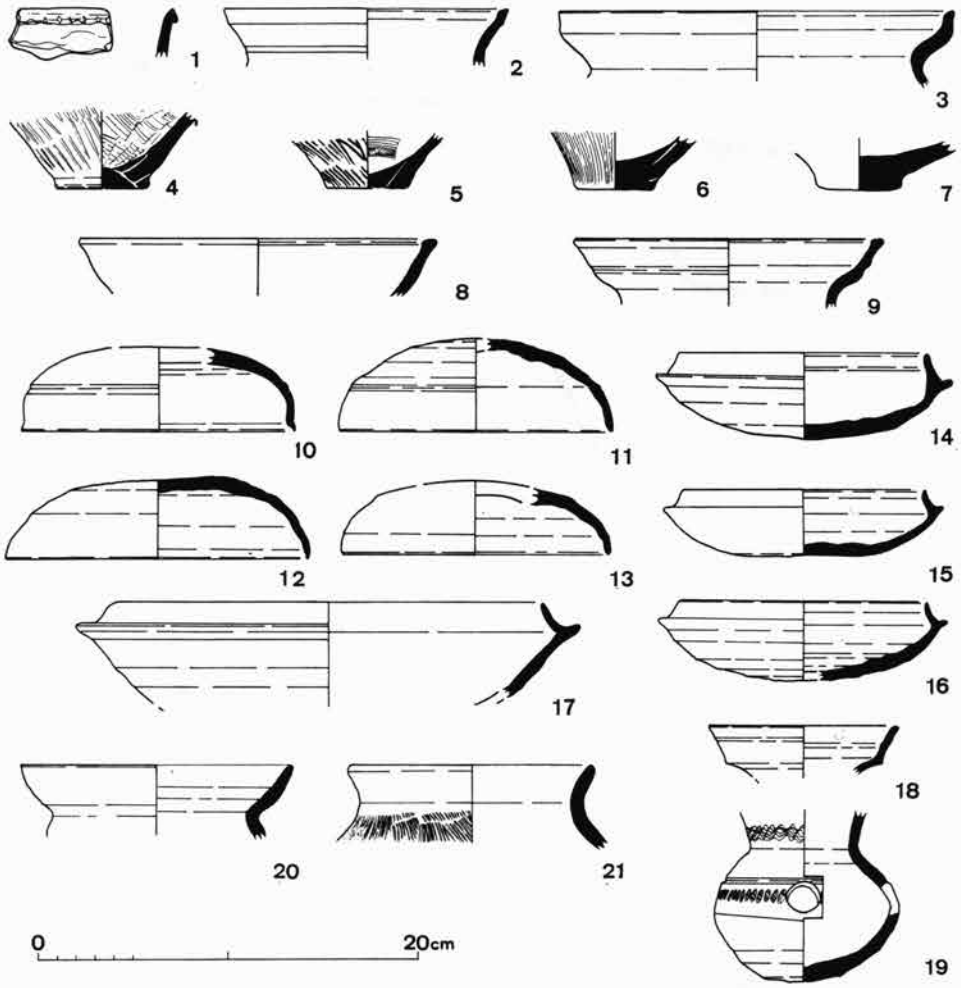
③　出土遺物　（第15・16図）

本地区出土遺物は，４地区の中では最も多く，内容も縄文時代晩期から奈良・平安時代にわたるものがある。量的には，奈良・平安時代の須恵器・土師器が最も多く，コンテナ約４箱，古墳時代前・後期の土師器・須恵器がコンテナ約３箱，弥生土器がコンテナ約２箱ある。

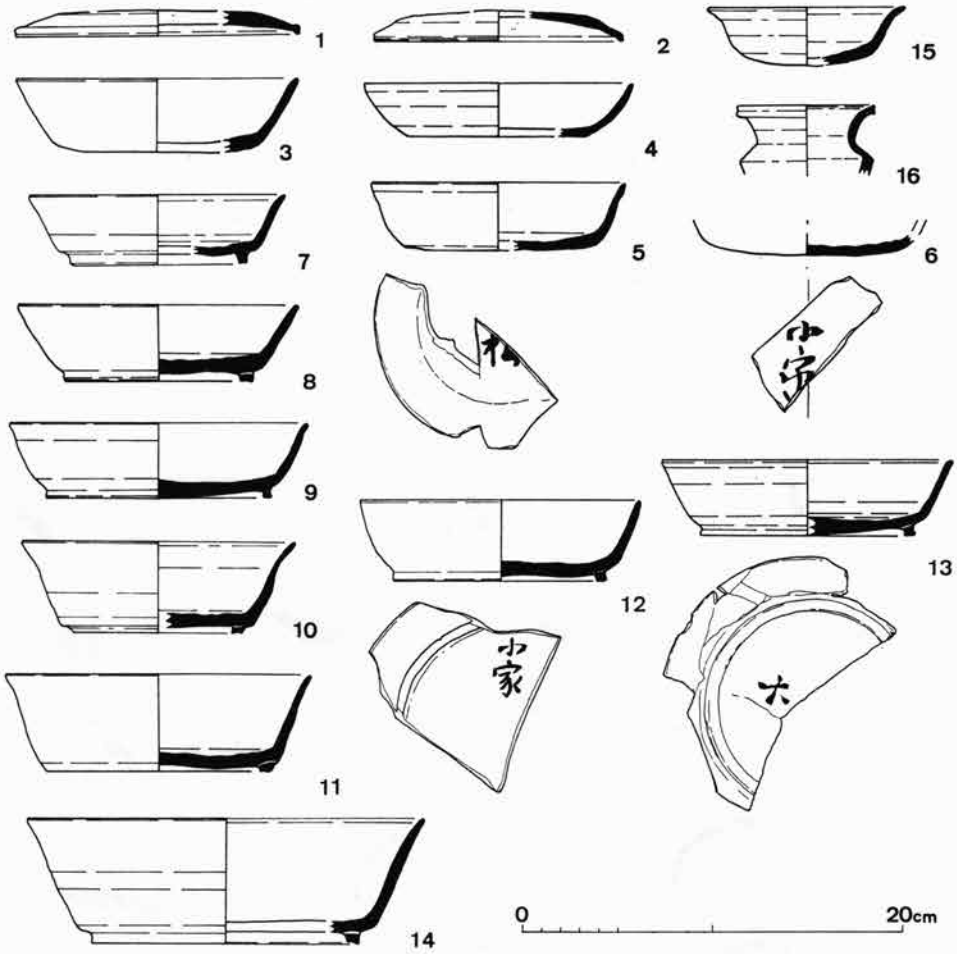
未だ整理作業が進んでおらず，詳細な点については述べられないが，図化し得たものを中心に概略について記す。

縄文時代の土器(第15図１）　１点のみ出土した。深鉢の口縁部の小片である。晩期。

弥生時代の土器(第15図２～７）　いずれも後期後半と考えられるものである。壺・甕とも受け口状の口縁形態のものが多い。底部片をみると，甕と考えられるものが多く（４～６），



第15図　南側平坦部出土遺物実測図 (1)



第16図　南側平坦部出土遺物実測図 (2)

外面を叩き，内面を刷毛目調整するものが大半を占める。これらはNo.2トレンチを中心に出土した。

古墳時代(第15図8～21)（8・9）は，口縁端部を内側に肥厚させる布留式並行期のものである。当地区全体から壺や甕の口縁部小片がわずかずつではあるが出土した。

古墳時代後期の須恵器・土師器(第15図10～21)　量も比較的多く，時期幅も認められる。(12・13・15～21)は竪穴式住居跡(SH0301)から出土した。(17)は，口径22cmを測る大型の杯身である。(注8) これらはNo.2～4トレンチを中心に出土した。

奈良・平安時代の須恵器(第16図1～14)　最も多く出土した。土師器類については皿類の細片が少量出土した他，あまりみられなかった。

杯身，杯蓋類が多く，他には(16)のように小型の壺などが少量みられるにすぎない。中に

は，杯身の底部外面に墨書されたもの4点を確認している。(5)は「福□」，(6)・(12)は「小家」，(13)は「大」と判読できる。

時期的には奈良時代後半(8世紀後半)のものが最も多く，(4)，(15)のようにやや下るものもある。これらは，当地区の全体から出土した。

④ 小 結

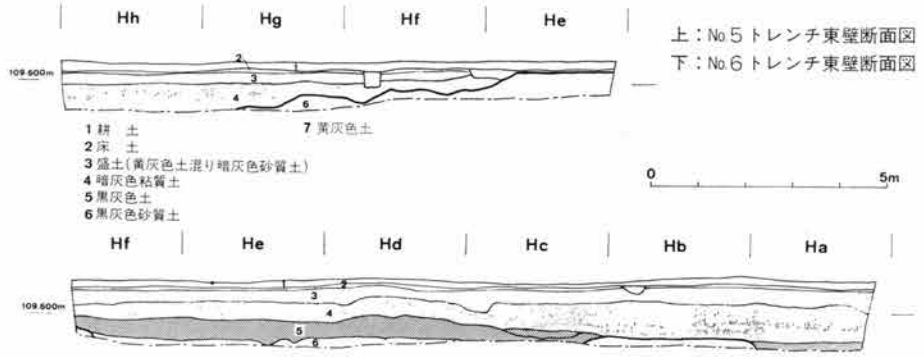
当地区では，弥生時代時代から古墳時代にわたる集落跡が近傍に存在することが確認できた。また，明確な遺構は検出できなかったものの，遺物の出土量から考えて奈良時代の建物跡等も付近に存在するであろうことが予想される結果を得た。中でも遺物中の墨書土器などから，奈良・平安時代の遺構は官衙的色彩の強いものと考えられる。ただ，旧地形は現在みられるほど，平坦なものではなく，かなり入り組んだものだったようで，それに対応して集落跡が展開しているものと思われる。

(2) 扇状地内凹状地形部 (No.5・6トレンチ)

① 地形と土層 (第17図)

当地区は，扇状地内の中央を東西に走る谷状地形部の一画にあたる。調査前の地表観察からもこの付近に谷状の凹状部が検出できるものと予想された部分である。No.5トレンチからNo.7トレンチの南端あたりまでが，周囲から一段下がった(掘削は途中で止めたが，少なくとも約1.5mは下がる)地形を呈している。

堆積土は，耕作土，床土，盛土(地山まじり暗灰色土)，暗灰色粘質土(13～14世紀の遺物を含む)，黒褐色土(途中で掘削を止めたため厚さ不明，奈良時代以前の遺物を含む)の順にみられた。また，黒褐色土中には部分的に灰色砂層の入り込んだ所があり，遺物はここに集中していた。この灰色砂層の部分は，断面観察でも明確に把握することはできなかったものの，黒褐色土中に存在する遺構面から切り込んだ溝状遺構の可能性もあり，帯状に広がっていた。

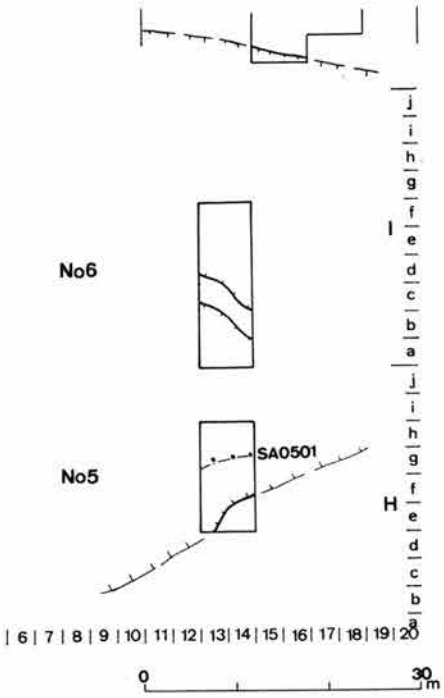


第17図 扇状地内谷状地形部土層断面図

また，この谷状の地形は，現在では周囲の水田とほぼ同じレベルとなっているが，これは，上記の盛土及び暗灰色土の堆積によっている。特に暗灰色土は約60～70cmみられ，ほぼこの土層が堆積した13～14世紀に谷状地形部が埋没したものと考えられる。

② 検出遺構（第18図）

この谷状地形部の南岸には，護岸施設の一部と考えられる杭列を検出した。杭材も遺存しており，約2mごとに東西に並んでいた。暗灰色土の堆積によって埋没していることから，13～14世紀頃のものと考えられる。



第18図　扇状地内谷状地形部遺構配置図

③ 出土遺物（第19図）

当地区出土遺物には，古墳時代から中世にわたる土器類と，多くの木製品がある。木製品にも奈良・平安時代と考えられるもの，中世と考えられるものなどがある。これらは，奈良・平安時代以前のものが黒褐色土中から，中世のものが暗灰色土中から出土した。

以下，図化し得たものを中心に概略を述べる。

古墳時代の土器(第19図1・2)　コンテナ約1箱出土した。ここに示したものは後期(6世紀後半)の須恵器杯身，杯蓋であるが，前期に属するものも数点みることができた。

奈良・平安時代の土器(第19図3～10)　コンテナ約2箱出土した。須恵器が大半で土師器はごくわずかであった。また杯身・杯蓋が多く認められた。

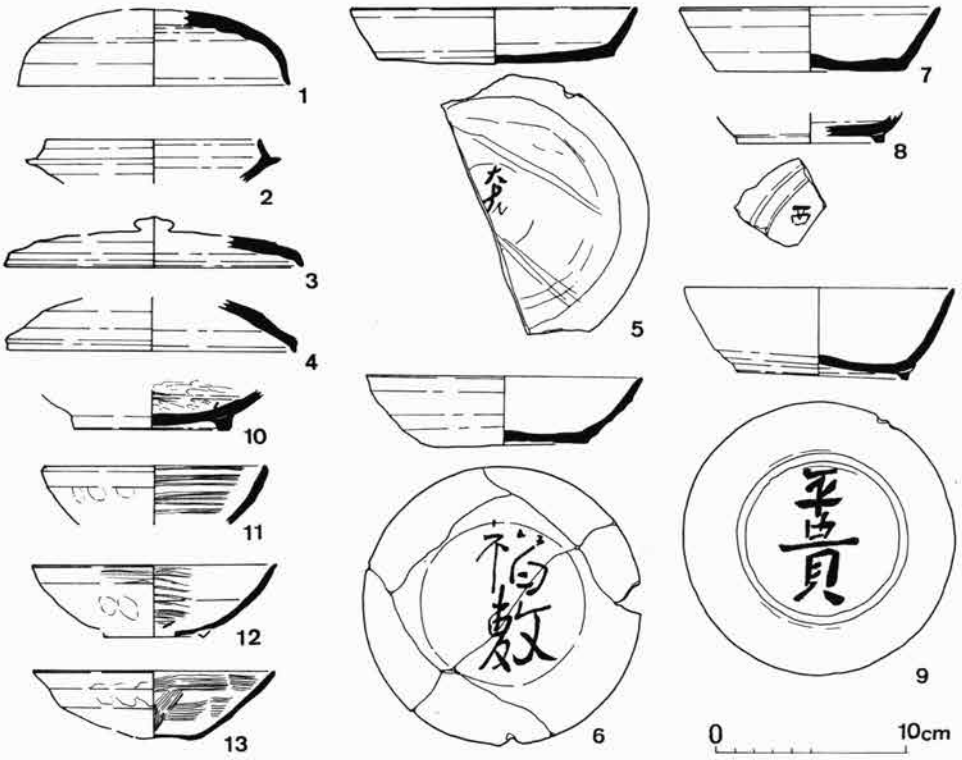
時期的には，杯蓋(3・4)が示すように口縁部がなだらかに下がる8世紀代と考えられるものから，(6・8・9)のように9～10世紀代の特徴を有するものまでがある。

中に，4点の墨書土器(5・6・8・9)を確認した。(5)は「大長」，(6)は「福敷」，(8)は「西」，(9)は「平貴」と判読できる。

(10)は緑釉陶器の椀底部である。暗緑色ともいうべき黒色の強い釉色を呈す。(注9)

図化し得てないが，この時期のものと考えられる木製品も多く出土した。中には，建築部材や杭材と考えられるものがあった。

中世(第19図11～13)　コンテナ約3箱出土した。大半を瓦器椀が占め，他には土師皿の小



第19図　扇状地内谷状地形部出土遺物実測図

片が少量みられる。瓦器椀は，形態からいずれも丹波型と称されるものと考えられ，13世紀後半のものが多い。ただ(13)のように高台がなく，内面は暗文を施さず刷毛目調整で仕上げるものが1点あり，丹波型瓦器椀の最終形態を思わせる。

④　小　結

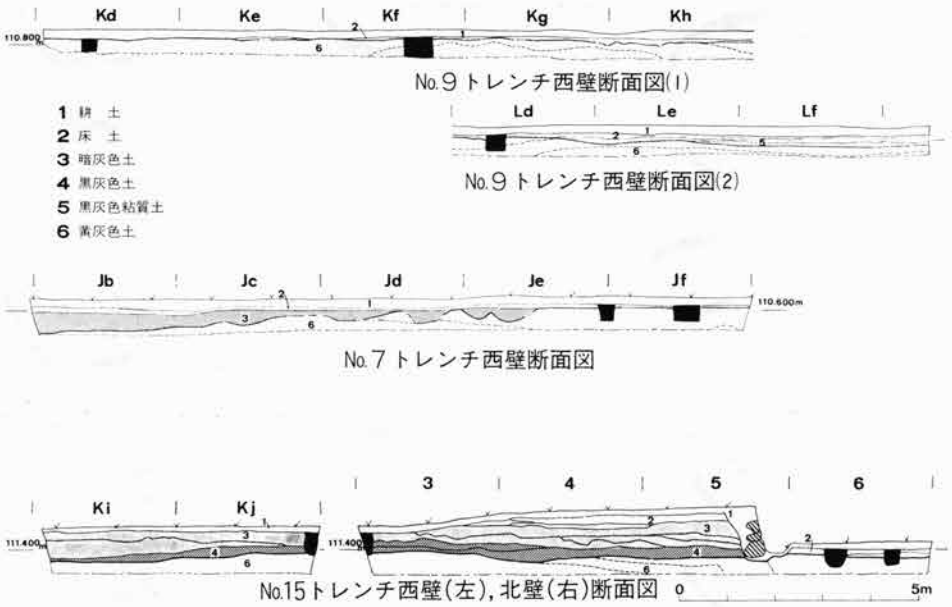
以上が当地区の調査成果である。当初予想されたように，扇状地内を東西に走る谷状地形の一画を検出することができた。そしてその堆積状況から，この谷状地形がすでに中世段階でほぼ埋没していたであろうと推測された。

また堆積土中からは，古墳時代から中世にわたる遺物が出土した。特に奈良・平安時代さらに中世の遺物中に，建築材などが含まれていたことは，周囲に建物跡が存在することを明らかにしたと言える。

(3)　扇状地北側平坦部地区　（第7～11・15トレンチ）

①　地形と土層　（第20図）

調査の結果，当地区一帯はかなりの削平をうけており，耕作土を除去するとすぐ黄灰色土のみられるトレンチが多かった。中でもNo.9トレンチは不安定な土層を呈し，耕作土の下



第20図　北　側　平　坦　部　土　層　図

に乳灰色砂質土，黒褐色粘質土，黄灰色土がみられたが，いずれの土層も遺物を含んでおらず，遺構を検出することもできなかった。

唯一削平をまぬがれていた。No. 15 トレンチをみると，耕作土・床土の下に暗灰色土・黒灰色土・黄灰色土の順にみられ南部地区とほぼ同様の土層がみられた。しかも黄灰色土は，北西方向から南東方向下がっており，当地区では拝田丘陵からなだらかに下がる旧地形をなしていたものが，後にかなり削平をうけたものと考えられた。

② 検出遺構 (第21図)

地区のほぼ全域に削平が及んでいことから，検出した遺構はごくわずかであった。

No. 7 トレンチでは，掘立柱建物跡や溝，土坑などを検出した。

掘立柱建物跡(SB0701)は，東西1間以上，南北2間以上の規模を有す。埋土の状況から，周囲の素掘り溝と切り合いはあるが，ほぼこれらと時期差のない中世頃のものと考えられる。ほかに土坑 (SK0702・0703) がある。出土遺物はないが，いずれも埋土は黒褐色を呈し，奈良・平安時代以前のものと考えられた。

No. 11 トレンチでは幅6mを測る溝(SD1101)を検出した。完掘していないため深さは不明である。埋土は黒褐色を呈し，一部を約30cm掘削したところ，奈良時代の須恵器片が出土したことから，この時期の溝と考えられた。なお，この溝は，従来から国府推定域の北限を示す堀状の落ち込みとされてきたものの延長上に位置している。(注10)

③　出土遺物

当地区では上記のように遺物包含層が著しい削平をうけていたため，出土遺物は耕作土中などから出土したわずかなものに限られる。

図示できたものも限られるが，以下その概略を記す。

弥生時代(第22図1)　No.15トレンチから後期後半と考えられるものが少量出土した。

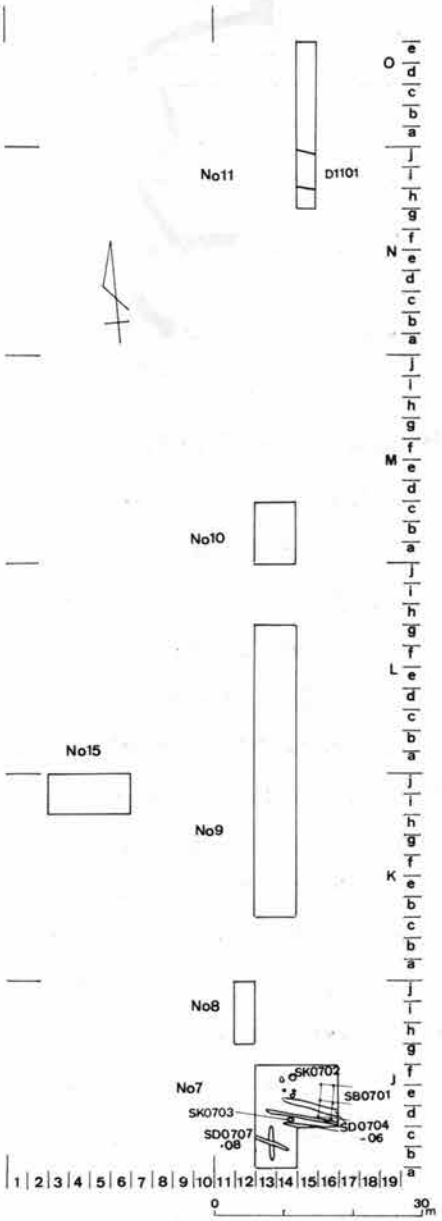
図示したのは甕底部片であるが，外面に叩き，内面に刷毛目の後なで調整が施される。

奈良・平安時代(2～5)　No.9トレンチ及びNo.11トレンチから出土した。須恵器杯身・杯蓋類の細片が多い。奈良時代のものが中心を占める。(4)は，No.11トレンチの溝(SD1101)埋土内から出土したものである。

中世の遺物(6～11)　No.7トレンチを中心に出土した。底部糸切りの椀底部片(6)が平安時代末ないしは鎌倉時代初頃のものと考えられるほか，土師皿(7～9)や瓦器椀(10・11)は13世紀後半頃のものと思われる。

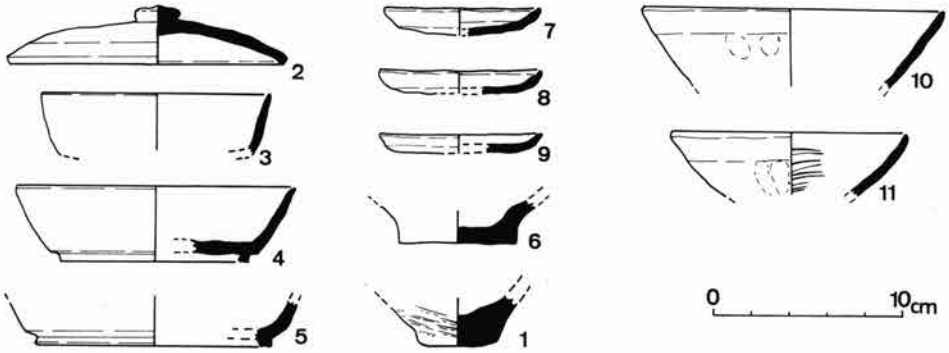
④　小　結

当地区は，扇状地内でも中央の谷状部をはさんで南北に広がる比較的安定した平坦部の北側にあたる。それだけに，多数の遺構・遺物が出土するものと考えていた。しかし調査の結果，旧地形にかなりの手が加えられており，ごくわずかな遺構・遺物が出土したにとどまった。



第21図　北側平坦部遺構配置図

ただ，No.11トレンチの溝(SD1101)は国府跡に関係する遺構である可能性が非常に高く，今後の調査でその広がりが検出できれば，国府跡の構造を解明する大きな手掛りとなろう。またNo.7トレンチから検出した掘立柱建物跡及びそれと切り合った素掘り溝から，中世以



第22図　北側平坦部出土遺物実測図

降一時居住区として利用された後，耕作地へと転化された様子をうかがうことができる。

(3)　拝田谷部　(No. 12～14 トレンチ)

①　地形と土層　(第23図)

拝田丘陵から派生する小支丘に囲まれた谷状をなす地区である。現在は等高線に平行するように，約30mごとに水田が区画されている。

土層は，耕作土・床土・暗灰色土(13世紀後半頃の遺物を含む)・灰褐色土(12世紀後半から13世紀前半頃の遺物を含む)・黒褐色土(奈良・平安時代以前の遺物を含む)・灰色砂混り黒灰色砂質土(これ以下遺物を含まず)・黄灰色土の順に堆積していた。

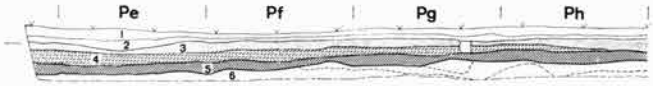
また，谷部の北から南への傾斜は，黒褐色土及び黒灰色砂質土上面ではある程度確認できるが，上層にいくにしたがい徐々にゆるやかとなっている。このことは，中世以降に至って大幅に人の手が加わり，当地区の地形が変化され，居住区もしくは耕作地として利用されはじめたことを示していると考えられた。

②　検出遺構　(第24図)

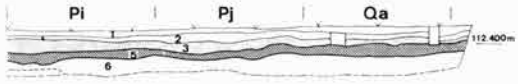
調査は，各トレンチとも暗灰色・灰褐色土中に多くの遺物が含まれていたことから，黒褐色土上面で掘削を止め精査を行った。またそのうち No. 14 トレンチでは，黒褐色土層中にも多くの遺物が含まれていたため，さらにこれを掘り下げ，黒灰色砂質土上面で精査を行った。

以下主なものについて記す。

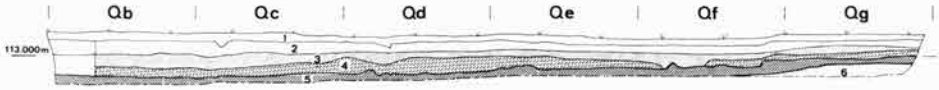
No. 12・13 トレンチでは，出土遺物の量に比して明確な遺構を検出することはできず，数条の素掘り溝，土坑を検出したにとどまる。素掘り溝(SD1201・SD1301～03)は，幅約30cm，深さ約10cm前後を測る。埋土が灰褐色土であることから12世紀後半から13世紀前半頃のものと考えられる。また土坑(SD1202)は，一部をトレンチ南端で検出したにとどまるが，その周囲に人頭大の石を円形に近い状態で並べ，その内側から瓦器椀1個体がうつぶせに置かれ



1 耕　土
2 床　土
3 暗灰色土
4 灰褐色土
5 黒灰色土
6 黒灰色砂質土(灰色砂混り)



No.12トレンチ西壁断面図



No.13トレンチ西壁断面図

0　5m

第23図　拝　田　谷　部　土　層　図

た状態で出土した。埋土は灰褐色土であり，やはり12世紀頃のものと考えられる。

また，灰褐色土上面から切り込んだ溝(SK1202)もある。埋土は暗灰色土を呈し，13世紀後半頃のものと考えられる。

No.14 トレンチでは，黒灰色砂質土上面で精査を行ったところ，この面が固くなっており，そこから溝(SD1405～08)や土坑(SK1401～04・1409～11)を検出した。

トレンチが狭く，いずれも規模，形態を明確にすることはできなかったが，古墳時代後期の土器が出土した土坑(SK1402)を除く他の遺構からは，平安時代頃の須恵器片が出土している。

③　出土遺物　(第25図)

当地区出土遺物には，弥生時代から中世にわたるものがある。量的には，中世（12世紀後半から13世紀後半のを含む）のものが大半を占め，コンテナ約3箱出土した。弥生土器や古墳時代から奈良・平安時代の須恵器，土師器はごくわずかで，包含層中に含まれていたもの，No.14トレンチの遺構埋土内から出土したものを合わせてコンテナ約1箱となる。

以下，図示し得たものについて概略を記す。

弥生土器，古墳時代の土器類については図示し得ていないが，弥生時代後期のものから古墳時代後期のものがわずかであるが出土している。

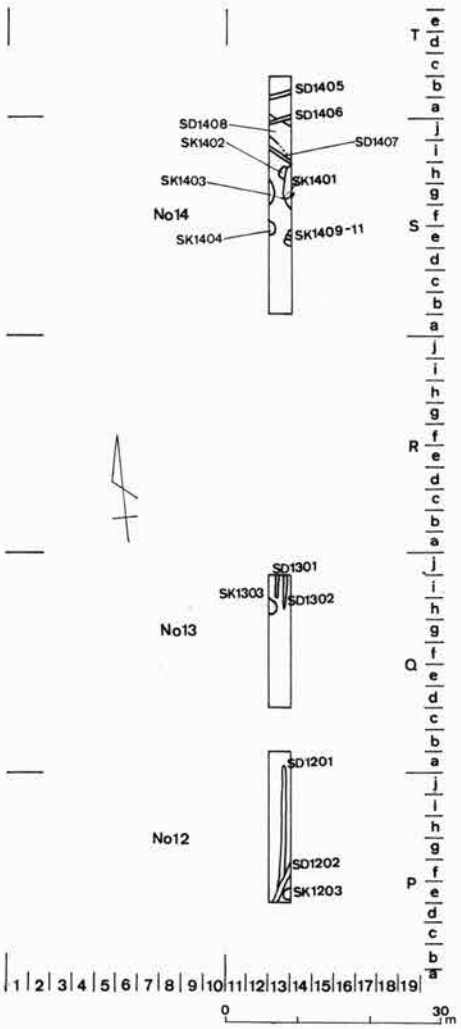
奈良・平安時代の遺物(第25図1～4・8・12)　主に黒褐色土から出土した。奈良から平安時代前半期を中心とするものである。(1～4)は須恵器，(8)は緑釉陶器椀高台部，(12)は灰釉陶器椀高台部である。(4)は須恵器杯身底部と考えられ，「平」と墨書されている。

平安時代末～鎌倉時代前半の遺物(5～7・9・10・15～17)　灰褐色土から主に出土した。(5・9・10)は，平安時代末と考えられるもので，(5)は東播系須恵器鉢口縁部片，(9)は須恵器椀，(10)は土師器椀の底部片である。また(15～17)は，鎌倉時代前半頃のものと考えられる瓦器椀である。(16)は断面三角形をなすしっかりとした高台を有し，外面にも暗文を施す。(16)のみは土坑(SK1201)出土である。

鎌倉時代後半(11・13・14)　暗灰色土から出土した。(11)は，龍泉窯系青磁椀の底部片で，蓮弁文の一部を遺存部にみることができる。(13・14)は瓦器椀である。この土層からの出土遺物は，瓦器椀が大半を占めるが，ほかに土師器皿や(11)のように輸入陶磁器が少量みられる。

④　小　結

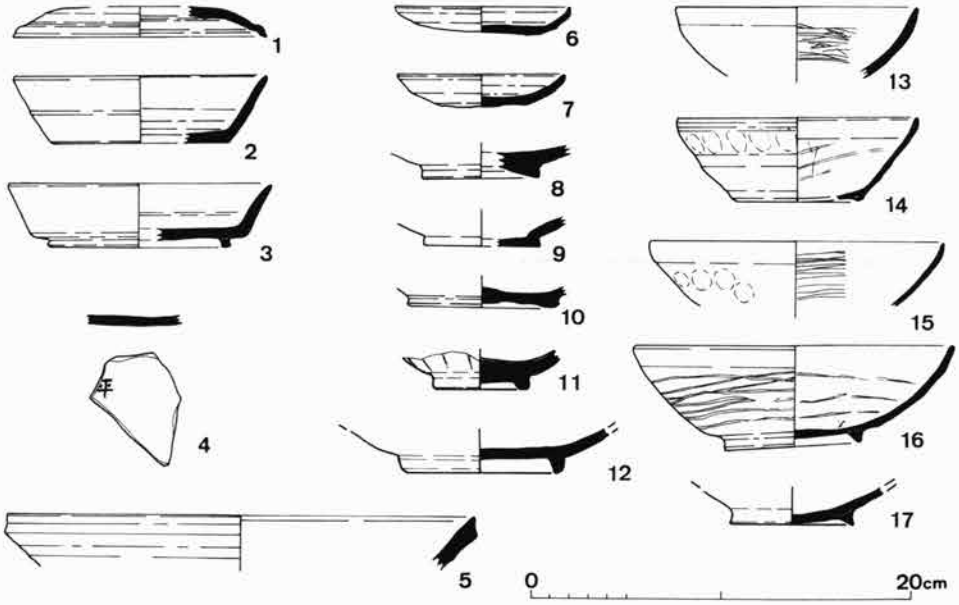
当地区は当初千代川遺跡の範囲外と考えられたが，暗灰色土(鎌倉時代後半)，灰褐色土(平安時代末～鎌倉時代初頭)，黒褐色土(奈良・平安時代以前)の3層の遺物包含層と，それぞれに対応する遺構面の存在することを確認することができた。また，出土遺物の中には，墨書土器や輸入陶磁器がみられた。しかし，先述のように当地区に入れたトレンチは，幅約3mと狭く，検出遺構それぞれについて規模，形態を明らかとし得たものはない。



第24図　拝田谷部遺構配置図

3. ま　と　め

今回の試掘調査の成果は，以上各地区毎に述べた通りである。内容的には重複するが，ここではこれらの成果をふまえ，今後本格的な調査を行う上での問題点及び課題について少しまとめておく。



第25図　拝田谷部出土遺物実測図

① 扇状地南側平坦部とした地区には，弥生時代後期から古墳時代後期にわたる集落跡の存在が推測された。当地区は，地形的に，扇状地内で最も安定した地勢を呈す部分の一つである。特に，古墳時代後期の集落は近くの拝田古墳群との関連が注目される。

② 奈良・平安時代の遺構は，出土遺物の量・内容に比べて，ごくわずかしか確認できない。これは，南側平坦部とした地区ではいくつかの部分でこの時期の遺物包含層を明確に分層し遺構面を把握できなかったことや，北側平坦部とした地区では全体にかなりの削平が及んでいたことなどが，原因の1つとしてあげられるだろう。

しかし，No.11トレンチから検出した溝(SD1101)は，国府域の北限を示すものである可能性が非常に高く，扇状地内谷状地形部から出土した建築部材などからみても，当該地が国府の西辺部に相当し，何らかの施設が存在したことが推測される。今後本格的な調査を行えば，千代川国府説を実証しうる資料を得ることができると考えられる。

③ 中世(特に13世紀後半頃を中心とする)の遺物も，調査地全体から出土しており，この時期の集落跡もかなり広範囲に広がるものと考えられる。今回の調査では，素掘り溝や柱穴をいくつか検出したにとどまるが，建物跡群として，さらに集落跡としてのまとまりを把握できるのは，今後広い面積を調査した後ということになろう。

④ またNo.7トレンチにみられたように，居住区から耕作地への変化という面から考えると，各地区でみられた暗灰色土がさらに細分できそうで，この土層中から黒褐色土面にか

けて中世期以降の畑地・水田跡の痕跡や集落跡を検出しうる可能性を有している。それらを充分検討しながら調査を進める必要もある。

以上，簡単ではあるが今回の調査結果のまとめとし，今後の調査によっておよそ調査地全域に広がるであろう諸々の遺構・遺物が明らかとなることを期したい。

付表2　トレンチ及び検出遺構一覧

トレンチ		検出遺構				
番号	規模	遺構名・番号	規模	埋土	出土遺物	時代
No. 1	6×35m 12×13m	方形周溝墓 (SD0101)	幅0.5～1.5mの溝，南北約8m，東西約8m	黒灰色土b		弥生時代後期
		土坑1(SK0102)	4.3×3m	〃	弥生土器片	〃
		土坑2(SK0103)	2.3×1.6m	〃		〃
		溝2(SD0104)	幅約0.5m	黒灰色土a		奈良・平安時代
		溝3(SD0105)	幅約1.2m	暗灰色砂		中世
		土坑3(SK0106)	2.3×1.1m	黒灰色土b		古墳時代以前
		土坑4(SK0107)	1.7×1.0m	〃		〃
		溝4(SD0108)	幅約1.0m	〃		〃
		掘立柱建物跡1 (SB0109)	南北2間(柱間2.4m)，東西1間以上(柱間2.7m)	暗灰色土		中世以降
		土坑5(SK0110)		〃		〃
		土坑6(SK0111)		〃		〃
		溝5(SD0112)	幅約0.7m	〃		〃
		土坑7(SK0113)	1.1×0.5m	黒灰色土b		古墳時代以前
		土坑8(SK0114)	1.1×0.7m	〃		〃
		柵列(SA0115)	約1.8m間隔	暗灰色土		中世以降
No. 2	6×18m	溝6(SD0201)	幅　約2.5～3.0m 深さ約0.3～0.4m	黒灰色土b	弥生土器片	弥生時代後期
No. 3	6×20m	竪穴式住居跡 (SH0301)		〃	古墳時代後期土器	古墳時代後期
No. 4	6×27m	土坑9(SK0401)	1.6×2.1m	〃	〃	〃
		土坑10(SK0402)		〃		古墳時代以前
		溝7(SD0403)	幅約5m	〃		〃
		溝8(SD0404)	幅1～2m	〃		〃
		土坑11(SK0405)		〃		〃
		土坑12(SK0406)		〃		〃
No. 5	6×12m	杭列(SA0501)	約2.0m間隔			中世
No. 6	6×18m					
No. 7	6×6m 12×9m	掘立柱建物跡2 (SB0701)	南北2間(柱間2.4m)，東西1間以上(柱間1.8m)	暗灰色土		中世
		土坑13(SK0702)	0.8×0.9m	黒灰色土		奈良・平安時代
		土坑14(SK0703)	0.8×0.9m	黒灰色土		〃
		溝9～13 (SD0704～0708)	幅約0.3～1.0m	暗灰色土		中世

トレンチ		検出遺構				
番号	規模	遺構名・番号	規構	埋土	出土遺物	時代
No. 8	4×12m					
No. 9	6×42m					
No.10	6× 9m					
No.11	3×24m	溝14(SD1101)	幅約6.0m	黒灰色土	奈良時代土器片	奈良時代
No.12	3×21m	溝15(SD1201)	幅 約0.3～0.4m 深さ約0.2～0.3m	灰褐色土	瓦器片	中世
		溝16(SD1202)	幅約0.3～0.4m 深さ0.2～0.3m	暗灰色土	〃	〃
		土坑15(SK1203)		灰褐色土	〃	〃
No.13	3×18m	溝17(SD1301)	幅 約0.3～0.4m 深さ約0.2～0.3m	暗灰色土		〃
		溝18(SD1302)	幅 約0.3～0.4m 深さ約0.2～0.3m	〃		〃
		土坑16(SK1303)		〃		〃
No.14	3×33m	土坑17(SK1401)		黒灰色土	奈良時代土器片	奈良時代
		土坑18(SK1402)	2.3×(1.5)m	〃	古墳時代土器片	古墳時代後期
		土坑19(SK1403)		〃		奈良・平安時代以前
		土坑20(SK1404)		〃		〃
		溝19(SD1405)	幅約0.6m	暗灰色砂質土		中世以降
		溝20(SD1406)	幅約0.4m，深さ約0.3m	〃		〃
		溝21(SD1407)	幅約0.5m，深さ約0.5m	黒灰色土	平安時代土器片	平安時代
		溝22(SD1408)	幅約2.5m	〃		奈良・平安時代以前
		土坑21～23 (SK1409～1411)		〃		〃
No.15	12× 6m					
No.16	12× 6m	溝23(SD1601)	幅約0.3m	暗灰色土	瓦器片	中世

(2)　北金岐遺跡昭和59年度発掘調査概要

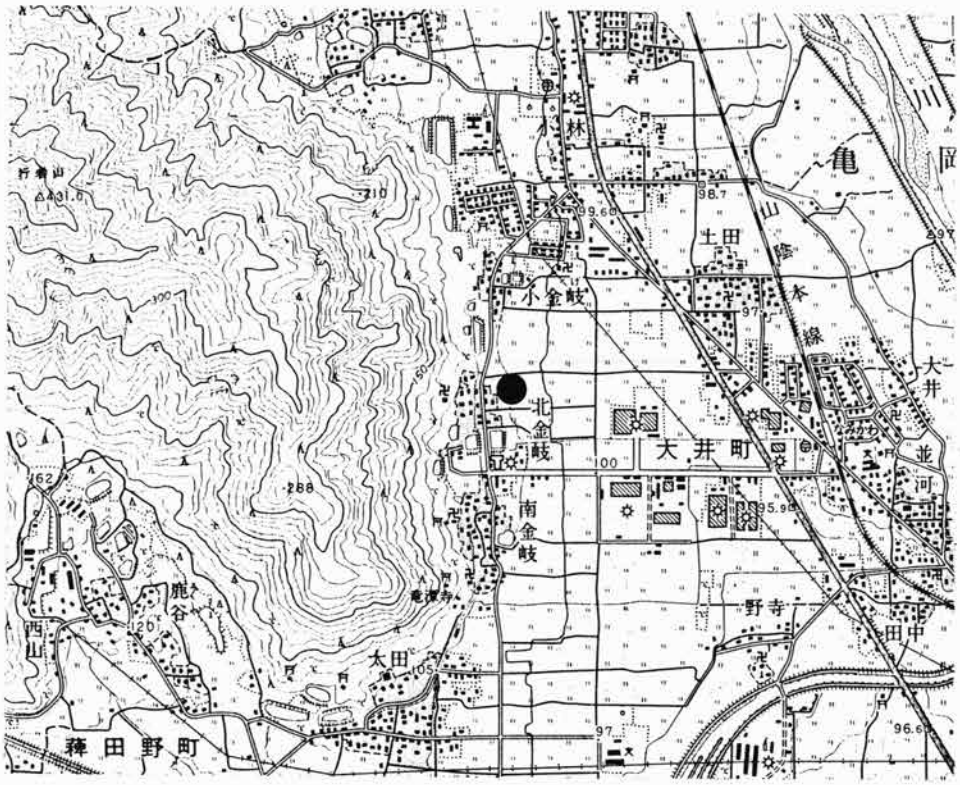
1. はじめに

北金岐遺跡は，標高431mを測る行者山から緩やかに派生する丘陵端を占め，亀岡盆地を一望する好所に立地する複合集落遺跡である。国道9号線バイパス敷設工事に先立つ桑田郡条里跡の調査によって，新たに確認された遺跡のひとつ(注11)である。今回の調査地点は，亀岡市大井町北金岐地内に所在する。調査対象地区内では北西端に位置している(第26図)。

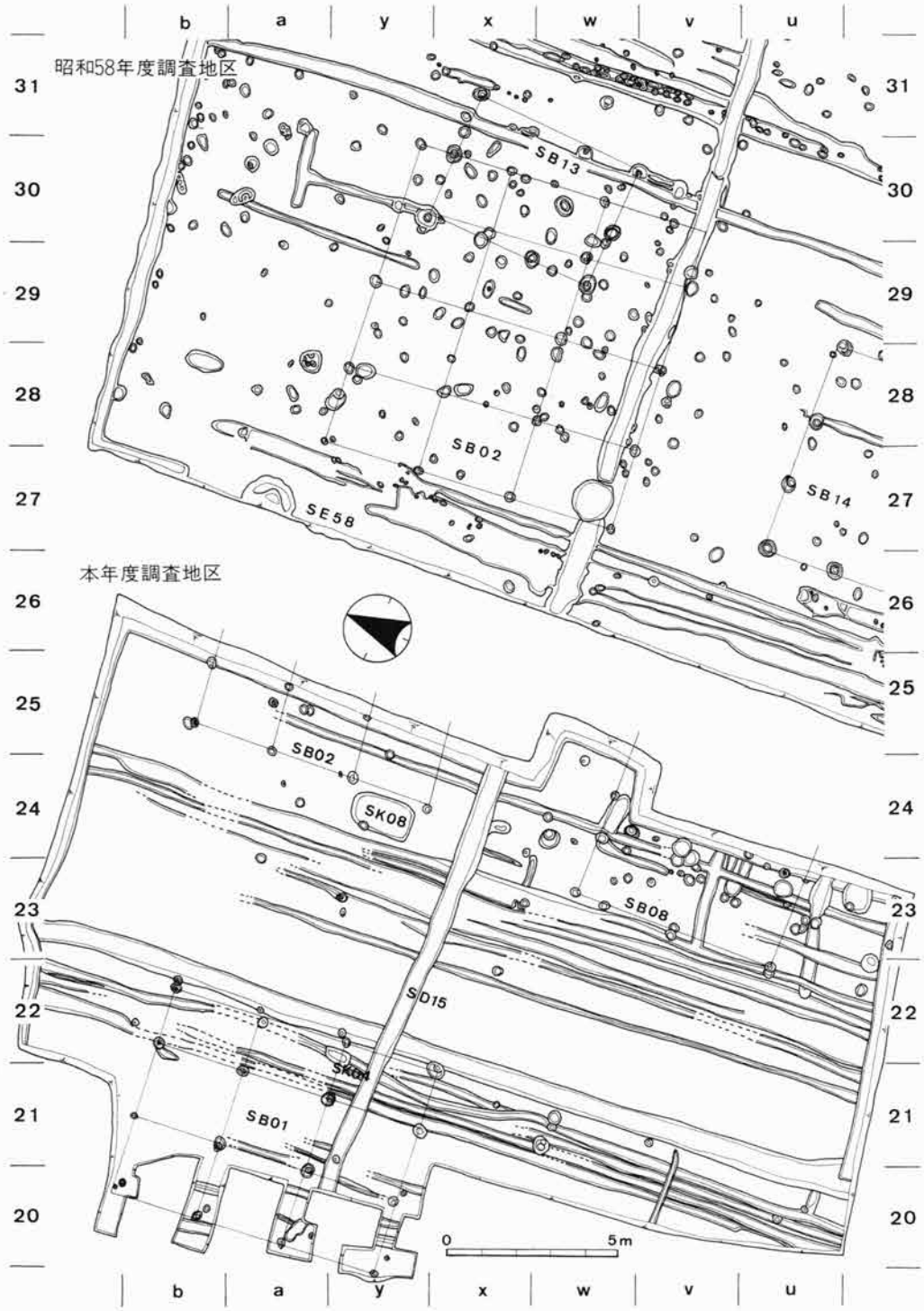
2. 調査の概要

調査は，昭和59年11月5日に着手し同年12月20日に終了した。

今回は，1982から1983年度にわたって実施した試掘および発掘調査成果にもとづき，北金岐遺跡C地点に隣接する未調査地区約400m²を対象として調査を実施した。前年度までに東西



第26図　調査地位置図（・印）


昭和58年度調査地区
本年度調査地区
SB13
SB02
SE58
SB14
SB02
SK08
SB08
SD15
SK04
SB01
0
5m
b
a
y
x
w
v
u
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20

第27図　調　査　地　平　面　図

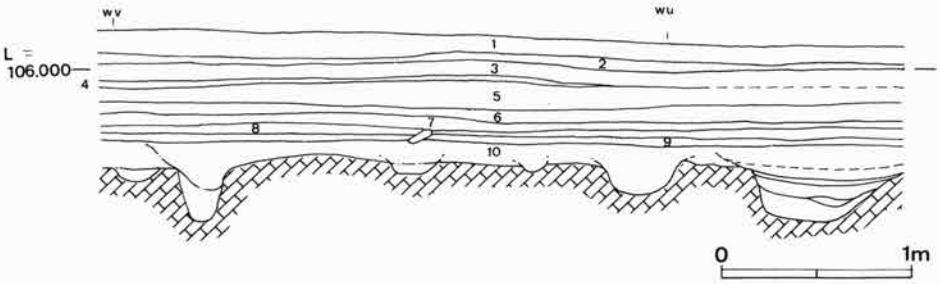
約70m，南北約480mの調査地のうち約6,500m²を対象として調査を実施し，縄文時代晩期から中世にわたる多量の遺物と弥生時代・奈良時代・中世の3時期を中心とする生活関連遺構を多数検出した。当該遺跡が長きにわたる複合集落遺跡であることが判明している。(注12) 今回の調査地点は，奈良時代から中世の掘立柱建物等の生活関連遺構を多数確認したC地点に西接する地点にあたることから，同遺構群と一連の遺構の存在が予想された。そのため，上層での条里制関連遺構の検出とあわせ，下層遺構の検出に主眼を置いた。

調査にあたっては前年度の調査に際して設定した地区割りを用いた。すなわち，道路予定区の中軸線を基準に75m四方の大地区を設け，その中を3m四方の小地区に分割した。地区の表示については，東西方向は予定路線センター杭を30ラインと仮定してアラビア数字で表わし，小地区を小文字のアルファベットで表し，両者を組みあわせて地区を呼称した。各地区・グリッド等の名称は西南隅の杭によって代表させた。次いで，試掘グリッドを任意に設定し，土層観察にもとづいて表土から包含層上面までを重機によって除去後，以下遺構面・地山面までを人力によって掘削を行い，最終的に約300m²の掘削を行った。

調査地は丘陵裾部の緩傾斜地にあたり，現状は水田である。耕作地造作にあたって傾斜地基端側を削平し，末端側へ押し出しつつ水平面を確保するため棚田状を呈している。従って，基端側ではわずか20cmの掘削によって地山面が現れ遺構が検出されたのに対して，末端側では約1mの掘削を必要とし，多数の土層を観察することとなった(第28図)。調査の結果，遺構の大半は地山直上で検出し，部分的にその上層の漸移層(黒色粘質土下層)において確認することができた。検出した遺構は上層において南北方向に平行して走る多数の溝・ピット等，下層においては東西方向を基調とする溝・住居跡(掘立柱建物)・土拡・ピットなどがある。

3. 土層の観察

土層は東壁断面図を一部図示することとし，説明を行いたい。



第28図　東　壁　土　層　実　測　図

1. 耕　土　2. 灰色土　3. 灰褐色土　4. 暗茶褐色土　5. 明灰褐色土　6. 暗灰褐色土
7. 明褐色粘質土　8. 暗褐色粘質土　9. 黒褐色粘質土　10. 黒色粘質土

当該地点の土層は，表土層・地山を含め基本的には11層より成り，自然堆積による層形成(第10層・第11層)と人為的活動の過程で生じたと考えられる層(第1～10層)の2種類がある。前者は黄褐色砂質土層の地山とその上層に堆積する黒色粘質土である。後者は，数センチ～十数センチの厚みをもって順よく水平に堆積しており，それぞれに土器細片・炭をわずかずつ含んでいた。粘性を帯びる層が多いが，全体に砂質で赤褐色を呈する傾向がみられ，水田造作にあたって整えられたものと考えられる。

4. 検 出 遺 構

上層遺構　上層遺構は下層遺構とほぼ同一の面で検出したが，切り合い及び埋土によって明瞭に弁別された。上層の溝状遺構は，暗茶褐色～暗灰褐色のやや砂質の埋土をもち，後者の粘性の強い真黒色の埋土とは対照的である。細片化した瓦器，土師器を含むほかは顕著な遺物を含むものはない。中世段階の遺物を中心として出土するところから帰属時期上限が示唆されよう。

性格については，溝が集中して重複関係を有し一定方向にむかう点，集落関係の付属施設を伴わない点などから耕作地に関する遺構と考えられる。いわゆる「中世素掘り溝」であるが，各々が独立し連続するところから水路・暗渠排水のための素掘りなど水田に付属するものと考えることができる。(注13) 遺構は，埋土からみると更に複数にわかれるようだが，詳細については明らかでない。ここでは，当地点がこののち居住地として利用されることなく現在にいたる点を強調しておきたい。

下層遺構　下層からは，掘立柱建物・溝・土坑・ピット等の集落関連遺構が集中して検出された。大きく奈良時代後半と中世の二時期に分けることができる。

以下，主な遺構についての概要を記していく。

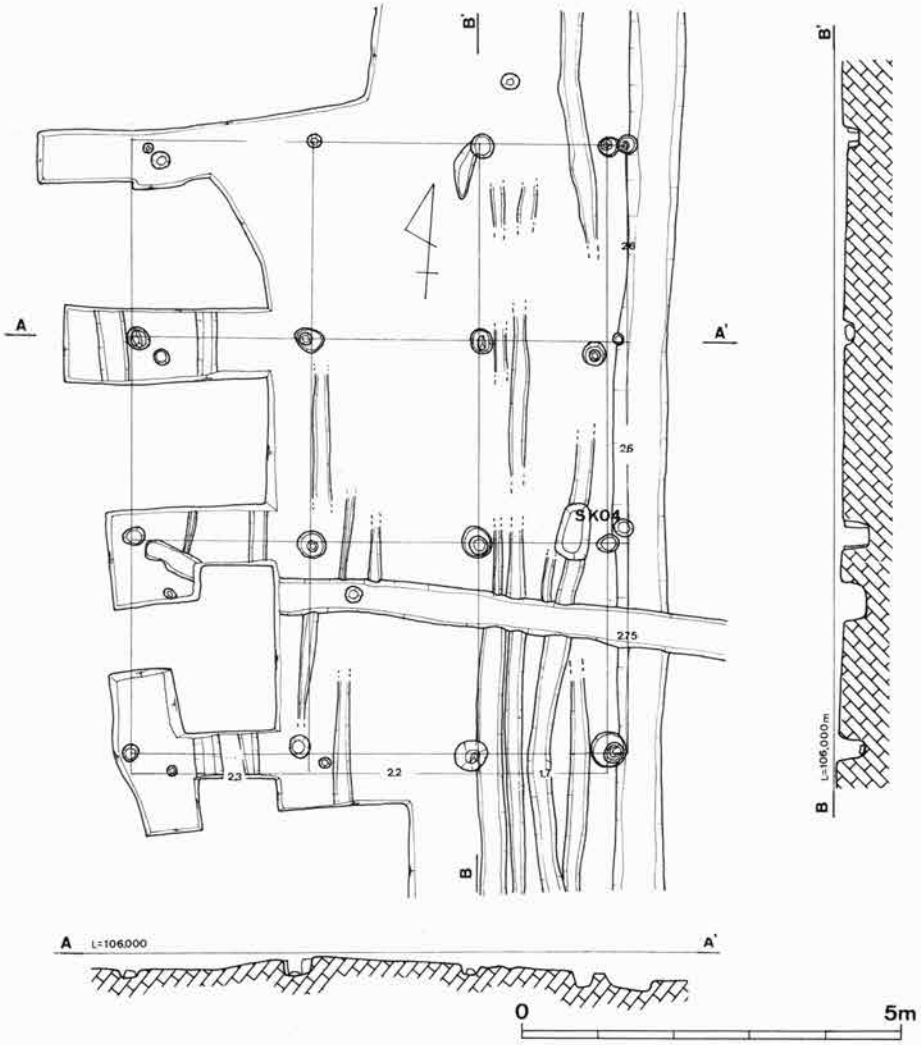
下層遺構のうち主なものには，SD-15・SB-01・SB-02・SB-08・SK-03・SK-04などがある。

SD-15　奈良時代後半に属するもので，C地点前年度調査地区において検出されたSD-04に対応する。幅約60cm，深さ約50cmを測る。黒色粘質土を埋土とし，中層以下に水流の痕跡を示す砂層の堆積がみられた。調査地区南端において中層より須恵器・土師器を一括して検出している(第27図)。

SB-01(第29図)　3間×3間の掘立柱建物。東一例の柱間が他より狭く，庇状をなす。柱穴は，素掘りで径30cm程度のものが多い。根石をもつものともたないものとがある。柱間は南北に長く，東西に短い南北棟の総柱建物である。

SB-02(第30図)　調査地北東端にあたり，２間×２間以上の南北棟の掘立柱建物である。柱穴はSB-01に比べて小さく，掘方も浅い。柱間は南北で2.4m，東西で1.8mを測る。主軸はSB-01にほぼ等しい。柱穴は，根石を持つものと持たないものとがある。瓦器・土師器細片の出土をみた。

SB-08(第30図)　２間×１間以上の掘立柱建物である。南北棟である。SB-02とほぼ同規模を有するものであろう。時期を比定する事のできる遺物の出土はなかったが，上記２棟と主軸をほぼ同じくする点から，SB-01・SB-02と共存して集落を構成していたものと考えられる。



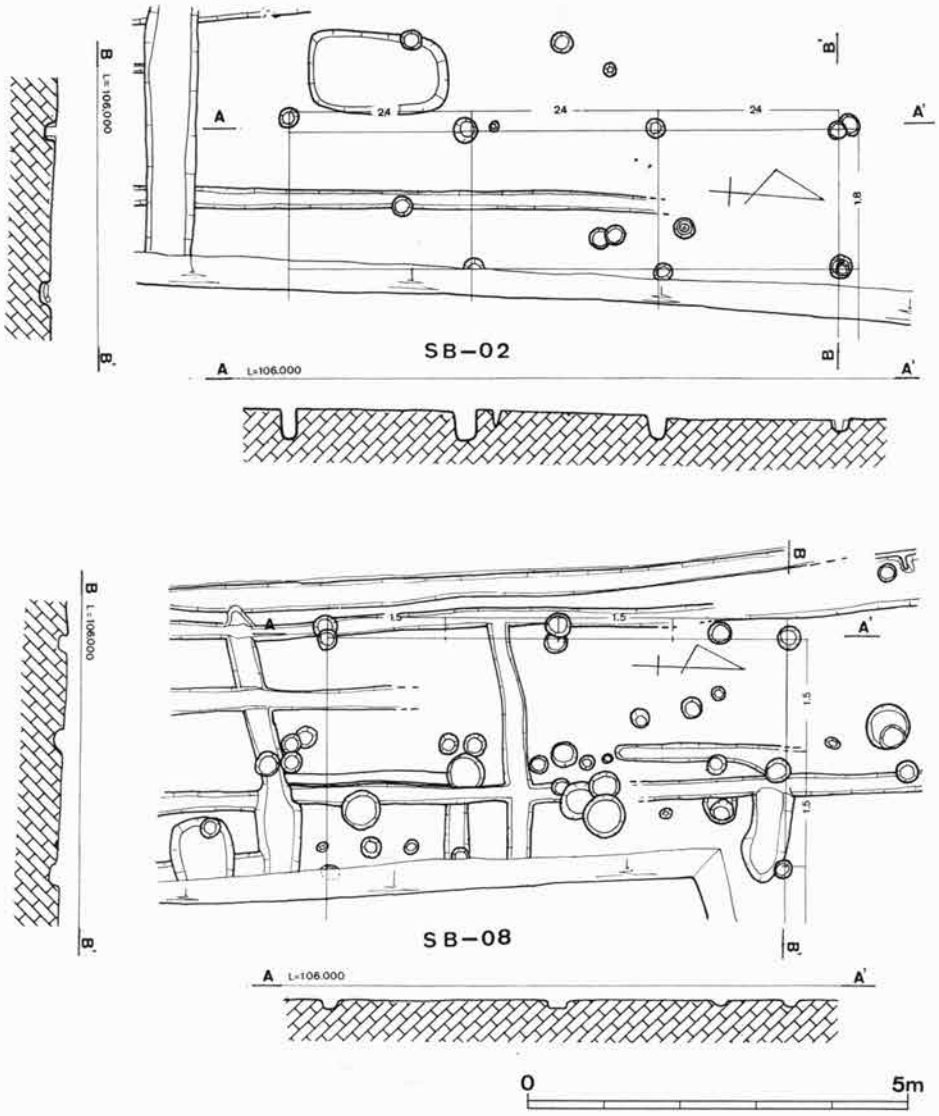
第29図　SB-01　平　面　図

SK-03　隅丸方形を呈する素掘りの土坑である。最大長1.9m，最大幅1.1m，深さは検出面から最深部で約10cmである。瓦器・土師器細片を検出している。

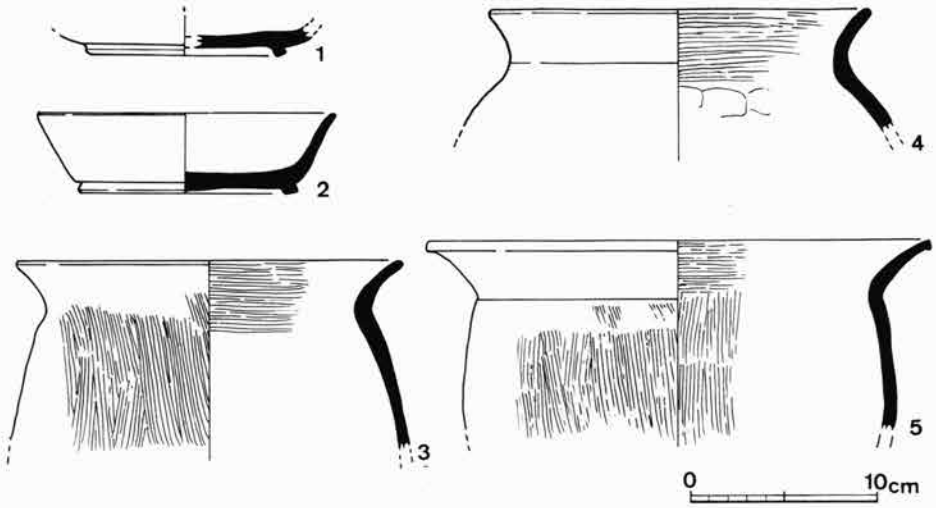
SK-04　片方のせばまった隅丸方形を呈する土坑である。最大～最小幅0.5～0.2m，長さは0.9m，深さは検出面から最深部で0.5mある。瓦器・土師器を検出した(第29図)。

5. 出 土 遺 物

出土遺物については，今回は簡単に触れ，主に住居跡，土坑等から検出された遺物につい



第30図　SB-02・SB-08　平　面　図

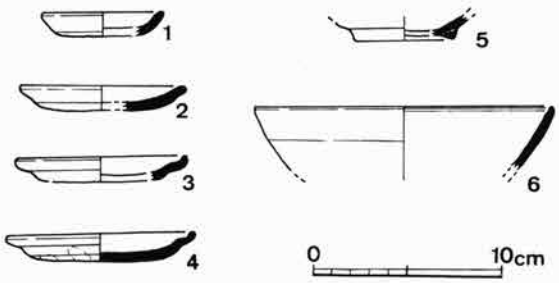


第31図　SD-15 出土遺物実測図

て記すことにしたい。

SD-15 出土遺物(第31図)　須恵器(1～2)と土師器(3～5)がある。(1)・(2)は須恵器杯身。(1)は底部のみ残存，高台や断面方形を呈しやや外方へ張り出す。(2)はほぼ完形。体部と底部の境目には稜を持ち，外方へ直線的に立ち上がる。端部はややとがりぎみに終わる。高台は屈曲部に接して付けられ，外側へふんばる。篠窯跡群の編年的試案によれば，ほぼ西長尾一号窯に該当する時期のものであろう。(注14)(3)～(5)はいずれも甕形土器。(3)・(5)は，最大腹径が胴部中央に求められ，口縁部はややゆるく「く」の字形に屈曲する。外面を浅く細かいハケ調整，内面は，(3)については口縁部を外面よりやや粗いハケ，肩部以下はケズリののちナデ。(5)は縦位のハケ調整による。(4)は最大径が肩部に求められ，口縁は外方へとゆるやかに立ち上がる。調整は器壁が荒れ明瞭でない。内面は頸部までをハケ，それ以下をヘラケズリののちナデ。胎土は，いずれも石英・長石粒を多く含み，赤色酸化粒がみられる。焼成は良好，色調は淡赤褐色を呈する。

SK-04出土遺物(第32図)　土師器(2)～(4)と瓦器(1)・(5)～(6)がある。(1)は瓦器皿。直線的に外反する口縁をもち，内面を丁寧にヘラミガキ。灰白色の密な胎土をもち，焼成は良好。内外面とも銀灰色を呈

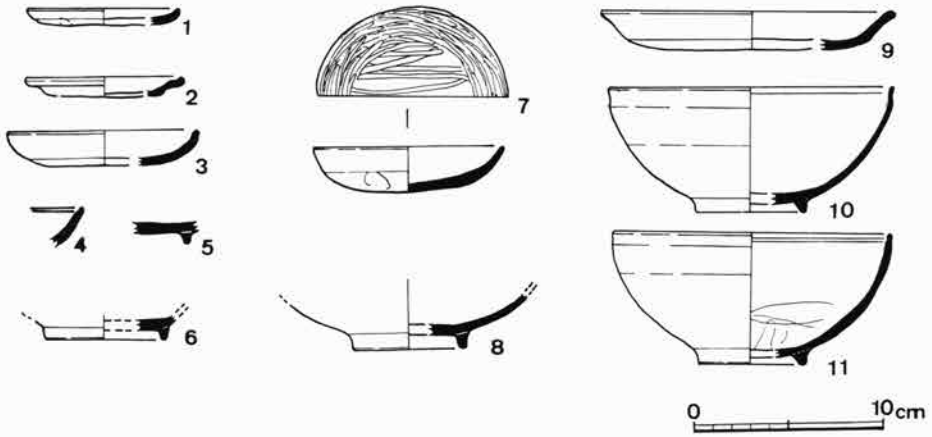


第32図　SK-04出土遺物実測図

する。(2)～(4)は土師器皿。(3)・(4)は口縁部が二段に屈曲するいわゆる「て」の字形口縁である。底部に指頭圧痕が著しい。胎土は精良，淡褐色を呈する。(5)・(6)は瓦器椀。(5)は底部のみが残存。高台が断面三角形を呈する。(6)は口縁部破片。内湾ぎみに立ち上がり，端部内面に沈線をもつ。端部外面を横方向に強くナデ。

SB-01 出土遺物(第33図)　図に掲げた遺物は，いずれも柱穴より出土したものである。土師器(1)～(2)・(9)と瓦器(3)～(8)・(10)～(11)とがある。(9)～(11)は，SB-01 の柱痕に近接して検出した Pit-101 出土の遺物であるが，これは建て替えないし柱の付け替えによって生じたものと考え，SB-01住居跡出土遺物と一括して報告する。

(2)は，口縁部が強く外反して端部が内側に肥厚する「て」の字形口縁。SK-04 出土遺物より小形で，屈曲度が強い。(3)・(7)は瓦器皿である。体部が内湾して立ち上がり，口縁部は横ナデによって外反する。(7)は，ほぼ完形で，底部は丸みをもち，薄手の口縁部が斜め上方に直線的にのびる。内面には太目の暗文がみられる。口径は約5cm を測る。(4)～(6)・(8)・(10)～(11)は瓦器椀。(4)は口縁部，内面にしっかりした沈線を1条有す。(5)・(6)・(8)は断面形が方形にちかいしっかりとした高台を貼付する。器表が荒れているため，内底面に暗文は観察できない。(10)・(11)は図上復元によってほぼ全形が知り得た。ただし上述の瓦器同様，器表面が荒れており，暗文についての詳細は知り得なかった。いずれもしっかりとした厚みある高台をもち，口径に対して器高のある器体をもつ。(11)については不明瞭だが，(12)の口縁部内面には沈線を施す。口縁外面を強く横方向にナデ。端部が角度を変え上方に立ち上がる。



第33図　SB-01，ピット101　出土遺物実測図

6. ま　と　め

以上，遺構および遺物の概要について記した。最後に上述内容をまとめ，結びとしたい。

当地点の包含層遺物には，最も古いものとして弥生土器壺形土器の底部とみられる土器が1点あった。また，新しいものとしては近世の陶磁破片を少量検出した。いずれも現耕作土中に含まれていたものであって，遺構には共伴しない。当地点が遺構の上から遺跡として認められるのは，奈良時代に入ってからのことである。ただし，昨年度の調査では，古墳時代後期初頭の住居跡が1基検出されているので，関連遺構が及んでいた可能性も考えておく必要はあろう。

遺構からみた当調査地の歴史的変遷は次のようである。上述のように，奈良時代後半には溝が設けられ，鎌倉時代を前後する時期に掘立柱建物3棟以上が南北を主軸として建てられ居住区として設定(継続)される。その後，南北方向に走る多数の溝をもつ耕作地によって居住区は否定され，主に水田としての土地利用が行われ，現代に至っている。

以上より，当地点を覆う条里地割は，鎌倉期を前後する居住区の否定時期以降のものであることは明白となる。これは，昨年度のC地点の調査結果とも一致し，水田は奈良時代の古条里の施行以降，時代が下るに従って段階的に丘陵部へと波及し，居住区を押しあげつつ拡大していく様をうかがうことができる。　　(田代　弘)

(3) 小 金 岐 古 墳 群

1. 位置と環境

大堰川は丹波山地の東側に源を発し，園部町・八木町・亀岡市を経て山城に入り，桂川・淀川と名称を変え大阪湾に注いでいる。亀岡盆地は，この大堰川の中流域を中心として東西に広がる小盆地である。

小金岐古墳群は，盆地の西を限る標高431mの行者山東麓に位置する。調査地は古墳群の南東端を占め，ゆるやかな傾斜面上にあたる。

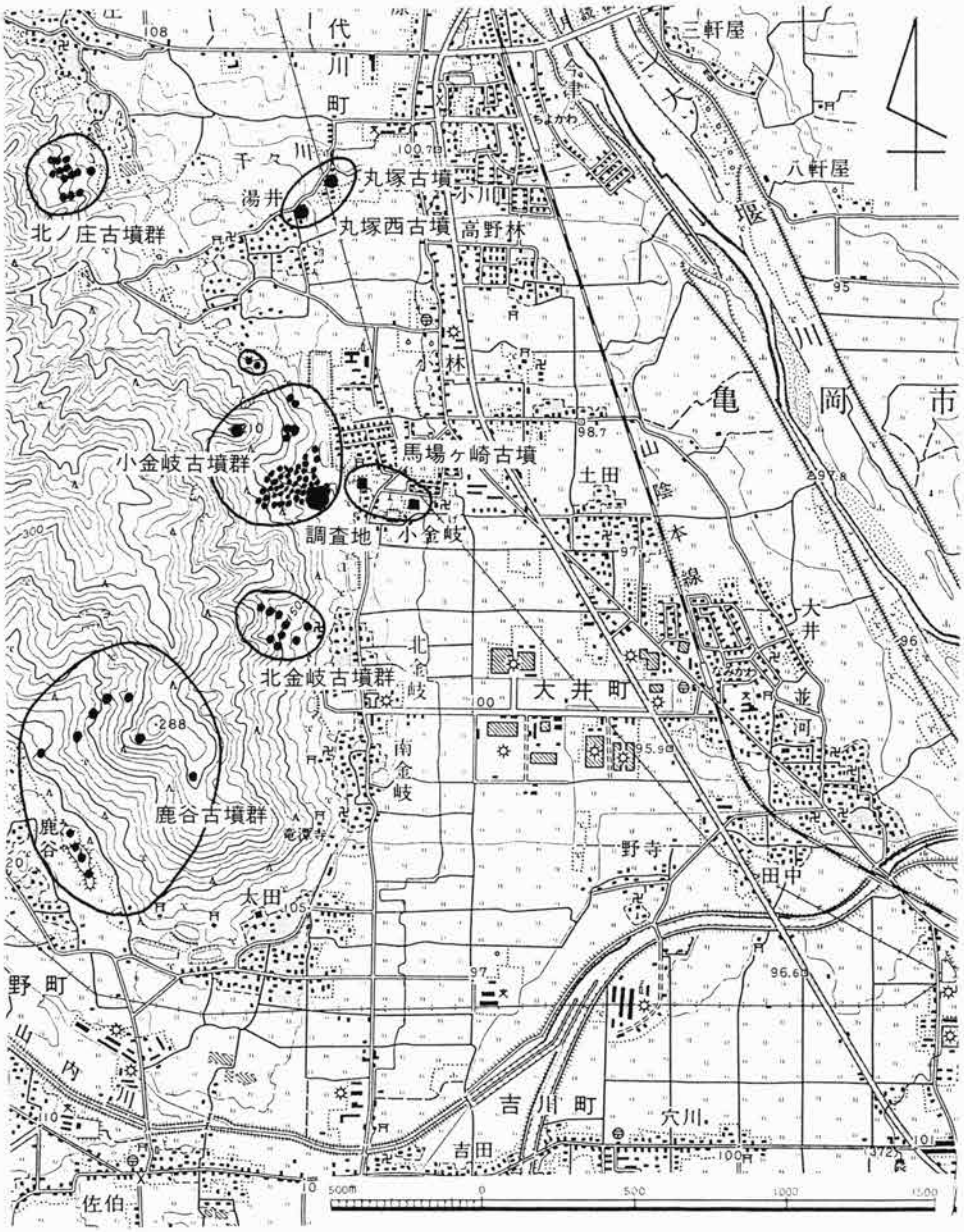
亀岡市には，縄文時代から，中・近世に至る遺跡が数多く知られている。口丹波では，縄文時代に遡る明確な遺構はまだ確認されていないが，京都学園大学構内遺跡において早期，三日市・千代川遺跡において晩期に属すると思われる土器細片が確認されている。近年，太田遺跡，北金岐遺跡，小金岐・拝田古墳群下層において資料は増加しているが，なお散発的である。弥生時代には発掘調査件数の増加により，行者山東麓の微高地上に前期から後期にかけての集落・墓地・水田等が連綿と営まれることが判明し，口丹波の弥生時代の様相は漸く解明の端緒についた。これらのうち主なものを挙げると，太田遺跡，南金岐遺跡，北金岐遺跡，馬場ケ崎遺跡，千代川・桑寺遺跡などである。(注15)

さて，口丹波地方の古墳は，亀岡市篠町王子に所在する三ツ塚2号墳(大塚)により築造が開始されると考えられている。三ツ塚は3基の円墳からなる古墳群で，2号墳は径27mと規模が大きく盟主的位置を占める。内部主体は栗石積みの竪穴式石室と伝えられ，銅鏡1面をはじめ，鉄刀・玉類が出土している。(注16) 従来，当古墳が口丹波最古の例とみなされてきたが，滑石製玉の存在が確認されているなど，築造時期は従来より下げて考えるのが妥当であろう。

園部町上木崎には中畷古墳がある。埋葬施設等は明らかでないが，測量の結果，復元全長77mの前方後方墳と推定されている。(注17) 直刀・筒形銅器等の出土が伝えられており，後述の園部垣内古墳より遡る時期の築造が考えられよう。(注18)

口丹波最初の前方後円墳は園部垣内古墳である。現在は，その大半が消滅したが，復元全長84mの前方後円墳と推定され，割竹形木棺を被覆する粘土槨を内部主体とし，6面の銅鏡・石製腕飾類をはじめとする豊富な遺物が副葬されていた。築造時期は4世紀末から5世紀初頭と考えられている。(注19) 亀岡では，4世紀代に遡る前方後円墳は知られておらず，千歳車塚の築造まで待たねばならない。千歳車塚古墳は，大堰川左岸の段丘上に立地し，全長80mの規模をもつもので，楯形周濠・葺石・埴輪・段築などの外表施設を備えている。(注20) 内部主体は

明らかでないが，埴輪・墳形による編年観では，５世紀末の築造が考えられる。亀岡市域の中期古墳は，ほぼ同規模の２基の方墳がならんで築造される傾向が知られている。大堰川左岸では坊主塚・天神塚，滝ノ花塚古墳・桝塚古墳，右岸では馬場ケ崎１・２号墳などがある。これらの先後関係については，鏡及び主体部の編年研究によれば，桝塚→滝ノ花塚→坊主塚



第34図　調査地周辺古墳分布図

と推定されている。(注21)

このように，亀岡盆地の前・中期古墳は盆地の各所に拠点的に築かれるが，後期に至り広い範囲にわたって古墳が築造されるようになる。右岸では上川関古墳群，拝田古墳群，北ノ庄古墳群，北金岐古墳群，鹿谷古墳群，犬飼古墳群，法貴古墳群などがある。左岸では平野古墳群，稲葉山古墳群，出雲古墳群などがある。その他，木棺直葬系の埋葬施設を持つと推察され，低平な墳丘をもち丘陵上に位置するものとして，左岸に池尻・小口古墳群，右岸に穴太古墳群などがあり，横穴式石室を内部主体とする上述の群集墳に先行する可能性がある。後期古墳は右岸，なかでも行者山東麓に集中する傾向があり，今回調査した小金岐古墳群は最大級のものである。(注22)

ところで，当地域での横穴式石室の受容は拝田16号墳，医王谷3号墳においてはじまる。拝田16号墳は全長35mの前方後円墳で，石棚をもつ横穴式石室を内部主体としている。(注23) 医王谷3号墳は径10mの円墳であるが独立墳であり，両袖式の横穴式石室を内部主体とする。(注24) これら2石室は，直方体状割石を擬似小口積みし，左右非対称の両袖部に短い羨道を付設するという構造上の共通点を有する。医王谷3号墳は副葬された須恵器の型式から6世紀中葉の築造と考えられ，拝田16号墳はそれより遡る6世紀前半の築造と推定されている。これらに続く石室として，6世紀後半に至り拝田8号墳・76号墳などにおいて当地域の石室形態は定形化される。また，最終末型式の横穴式石室は小金岐6・9号墳などの狭長な無袖式であり，7世紀には廃絶するようである。(注25)

さて，古墳の廃絶と前後して，奈良時代前期には，亀岡盆地にも仏教文化が受容されるが，まず最初に口丹波の入口，篠町に観音芝廃寺が建立される。次いで曽我部町に与能廃寺，千代川町桑寺廃寺が知られるが，いずれも，伽藍配置，規模等の詳細は不明である。

また奈良時代後期に至り，丹波国にも国分寺・国分尼寺が建立される。僧寺については，亀岡市千歳町国分に塔跡が遺存し，近年の数次にわたる調査で，伽藍配置を考える上で良好な資料が提出されている。一方，尼寺については，6次の調査の結果，現在では僧寺の西約450mの亀岡市河原林町河原尻所在の御上人林廃寺がその推定地として有力視されている。(注26)

（細川康晴）

2. 調査の経過と概要

今回は，亀岡市大井町土田及び千代川町小林に所在する小金岐古墳群の調査を実施した（第34・35図）。古墳群は，亀岡盆地の西北方，標高431mの行者山から東へ延びる丘陵の麓にあたり，標高210m付近から急傾斜をもって東へ張り出す小支丘の尾根稜上から谷間に群集し

て築かれている。互いに裾を接するものも多く，分布は密である。現状は山林である。京都府教育委員会が昭和45年に分布調査を行い，78基にのぼる円墳を確認している。墳頂部に落ち込みがあるものが散見されるが，これらはすべて横穴式石室を内部主体とするものであろうと考えられている。昭和50・51両年には12地点８基が発掘調査され，多くの成果があげられた。

今回調査を実施した古墳は，府教委の分布調査時に１・３・７号墳と名付けられた３基の円形墳である。これらは古墳群南端に位置し，現集落に最も近接している。標高は１号墳墳丘裾部で約115mを測る。１号墳は平坦な尾根上に立地し，事前踏査時には檜林・雑木林に覆われていたものの，マウンドは明瞭に看取された。墳丘は天井石・側壁などが後代の石材採取に伴って中央部が大きく抉られてダブルマウンド状に変形しているほか，南西側は林道によって著しい削平を受けるなど改変が激しい。そのため形状・規模については明確な判断を下し難かったが，裾部の形状などから，直径18mの円墳と考えた。墳丘高は墳丘北西側から約1.6mを測った。南東裾は現在，墓地として利用されている。

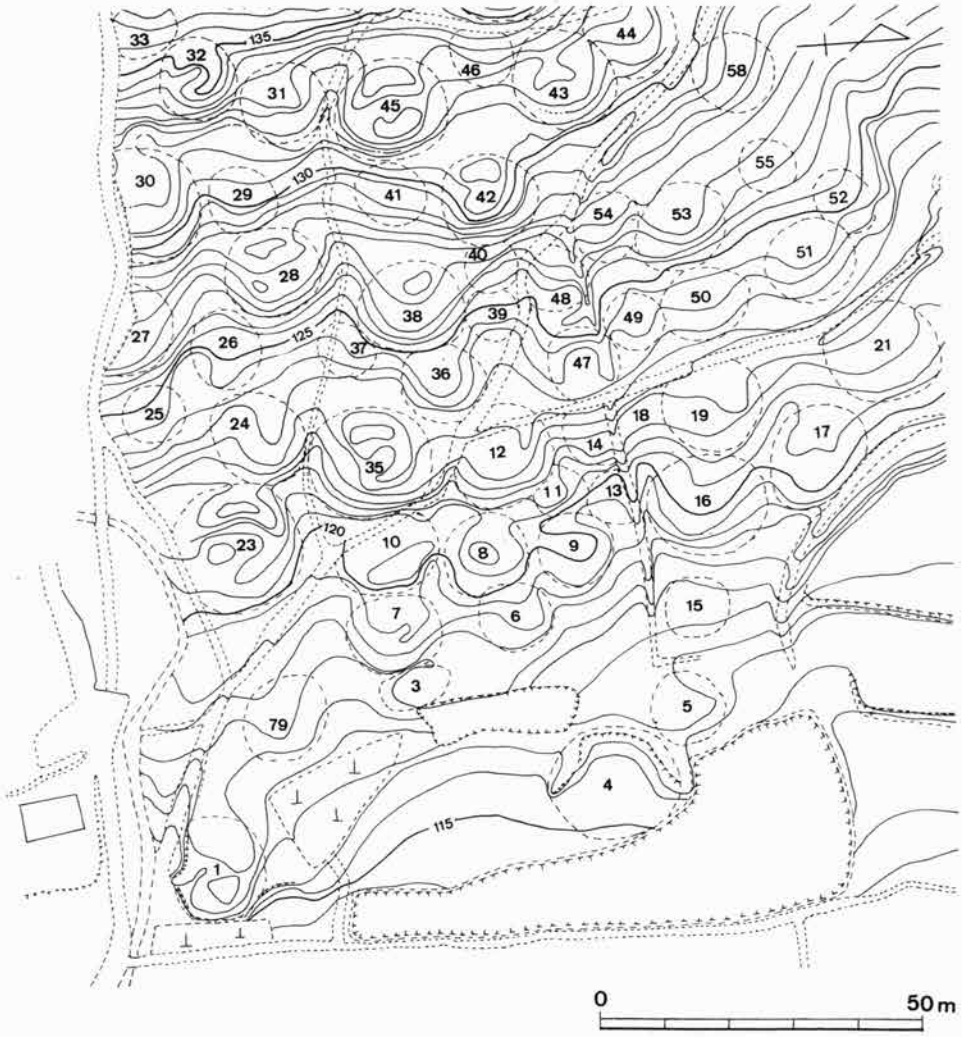
３・７号墳は，山麓から東方へ向って延びる小尾根の先端部に立地し，35号墳・10号墳などとともに１つの支群をなす。両古墳は裾を共有して造作され，いずれも低平な墳丘をもつ。３号墳は土取りのため大きく抉られ，墳丘と横穴式石室のほぼ半分を失った状態であった。直径11m，墳丘高は約１mを測る。７号墳は墳頂部が凹状を呈し，石材抜き取り痕が見られたが，墳丘はほぼ完存しており，尾根稜上に立地する古墳の特徴をよくとどめていた。35号墳に接する尾根基部側には，３・７号墳間にみられるものと同様の尾根切断痕を残している。

調査は１号墳についてはほぼ全体について実施し，３・７号墳は調査範囲の関係から一部について行った。以下，経過と概要を順に記して行くことにする。

昭和59年12月３日より樹木の伐採及び下草刈りにかかった。同60年１月11日，地鎮祭を行った後，樹木の整理作業と地形の測量等の調査に着手した。

１号墳は主体部・墳丘裾部の破壊が著しい割に，調査前の墳丘部には石材の露出はなく，主体部の状況については明らかでなかった。ボーリングステッキによる探査を行ったところ，墳丘中央部落ち込み部分にコの字状に石材の配置があることが確認され，石室を内部主体とすることが想定されるに至った。そこで，これに併せて墳丘を四分するＬ字状トレンチを２本，墳丘南裾に２本のトレンチと拡張区を設定し，墳丘の規模・形態・石室の残存状態・正確な主軸等の確認を行うこととした。

石室は天井部が全て抜き取られており，壁を構築していたと見られる花崗岩石材が散乱していた。これらを除去しながら，まず玄室部分の確認を急いだところ，床面に扁平な割石を



第35図　小金岐古墳群地形図

丁寧に敷いていること，その上に長大な割石をT字型に配列し，玄室空間を3分する施設を持つことなどを確認した。玄門部は石材抜き取りによって完全に破壊されていたが，抜き取り痕の精査によって両袖の横穴式石室であることが明らかとなった。また，羨道部については側壁は大半が残存せず，床面についても充分明らかにし得なかったが，整然として計画性を持つ暗渠廃水施設を検出することができた。石室主軸はほぼN-12°-Wであった。

墳丘についてはトレンチ調査を行った。調査前の観察では，群集墳のものとしては規模の大きいものであるが，単純な墳丘築成を行うものと思われた。しかし，墳丘断面を観察した結果，墳丘築成前に整地して礫を基底に置いた上で石室を架構し，それに伴って第1次盛土

を，墳丘整形に従い第２次・第３次の盛土を行うという複雑な状況が看取された。つまり，墳丘形成にあたって，旧地形を墳丘として取り込まず，すべてを盛土によって築成するもので，墳丘堆積は近接する３・７号墳などに比べてはるかに大きなものと思われる。

遺物については，玄室・羨道が後代の攪乱によって大きく荒されていたこともあって大半が細片であり，現位置を保つものはごくわずかであった。須恵器・杯身・蓋などの土器類・銀環・漆塗土玉・ガラス小玉などの装身具・鉄鏃・鉄刀等の鉄製品・その他滑石製紡錘車などが検出されている。３個体の瓦器が完形で出土しているが，再利用の遺物と考えられる。

３号墳は半壊状態にあり，墳頂部に石室の一部が露出していたため，石室の主軸は地表の観察によって容易に知ることができた。まず，主軸に沿ってトレンチを設定し，主体部の調査を実施した。続いて裾部に計５本のトレンチを設け，墳頂部の様子を観察することにした。このうち，１本のトレンチは，７号墳丘裾部の調査を兼ね，３号墳との関係を知るために設けたものである。

石室は主軸をほぼN-10°-Wに置く。左側壁・天井部が完全に抜き取られており，かろうじて右側壁と奥壁が残存している状態にあった。石室の平面プランは，左側壁羨道部に残る２石とその延長上に側石根石と考えられる小石材の配列があることから右片袖であろうと考えられた。床面は地山を整形し，置土による若干の整地を行っただけのものである。棺台状の遺構を伴っていた。墳丘は尾根の末端側を削平し，基部側を墳丘の一部として用いる山寄せの古墳に特徴的な造作をもっており，低平で盛土も限られている。

トレンチ調査によって７号墳間に墳丘区画溝が巡ることが確認された。これは７号墳墳丘裾部との切り合いから３号墳に伴うと考えられるが，墳丘区画を意図すると同時に溝形成の際の排土を盛土の一部として用いたものであろう。遺物は１号墳同様，後代の攪乱によって破片化していた。須恵器杯身・蓋・提瓶・高杯・甕などの土器類が主に出土し，金環，ガラス小玉などの装身具も見られた。奈良時代の製塩土器のほか，黒色土器・土師器・瓦器など多時期にわたる遺物が散発的ながら検出されている。再利用に伴うものであろう。

７号墳については裾部の調査のみであり，主体部・墳丘築成などの点については明らかでない。３号墳墳丘区画溝での切り合いから，これに先行して営まれた可能性が考えられる。

これらの古墳の調査を並行して，１号墳と３・７号墳間に見られた小隆起と平坦地についてトレンチによる試掘調査を行った。平坦地については見るべき遺溝は検出されなかったが，小隆起についてはやや弧を描く溝の一部を確認した。これは３・７号墳の間に巡る墳丘区画溝と同様の規模・形態を有しており，古墳の可能性が強いものと推定される。この小隆起を新たに79号墳と名付けた。

最後に１号墳について，石室を取り外す作業を行い，敷石基底の状態を記録した。

その後，実測・写真撮影等の記録を行い，排土処理・機材の撤去を経て，昭和60年３月27日に現地調査を終了した。　（田代　弘）

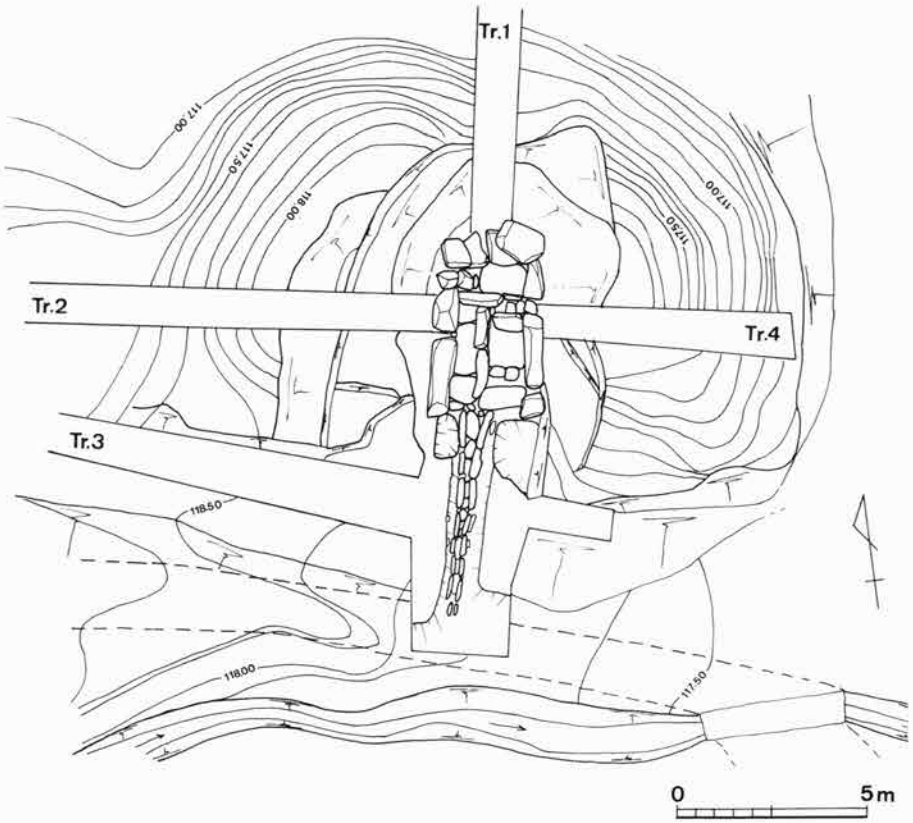
3. 調 査 内 容

I. 1 号 墳 （図版第18～23）

(1) 墳　　丘

① 調査前の状況と立地

小金岐１号墳は，行者山東麓から南～北東に派生する小尾根のほぼ先端部に位置している。小金岐古墳群中にあっては最も南にあたるものの１つで，古墳の立地する尾根は低平で稜線がゆるやかな傾斜面をなし平坦な地形を呈している。当古墳群の古墳は，尾根稜上に占地して裾を接し合い，連珠状に連なって造営される傾向が見られるが，１号墳は隣接する古墳と



第36図　１ 号 墳 発 掘 調 査 図

の間に一定の距離を置き，単独墳的立地をとる点が特徴的である。古墳の南側は谷状地形をなし，小河川が東流して扇状地へ流れ込んでいる。

墳丘は後代の石材採取に伴う破壊・封土流出にあって，中央部が大きく落ち込んでおり，ダブルマウンド状に変形しているほか，南西側は林道によって著しい削平を受けるなど改変が著しい。南東裾は現在，墓地として利用されている。墳丘の調査は，主軸に直交するL字状トレンチ２本と，墳丘裾付近で羨道部に直交するトレンチ１本を設定して行った。

② 墳丘の規模と形状 （第36図）

墳丘が築造当時の規模と大きく変容しているため，高さについては明らかでない。現存する墳丘部の標高は118.1mで，裾部からの比高差は約1.5mと低い。発掘調査の結果，玄室床面から3.0m以上の墳丘を持つことが明らかになった。墳形は円墳と推定され，主軸は約18mを測る。墳丘裾部の削平部分を勘案すれば，20mを超える規模を持つものと思われる。

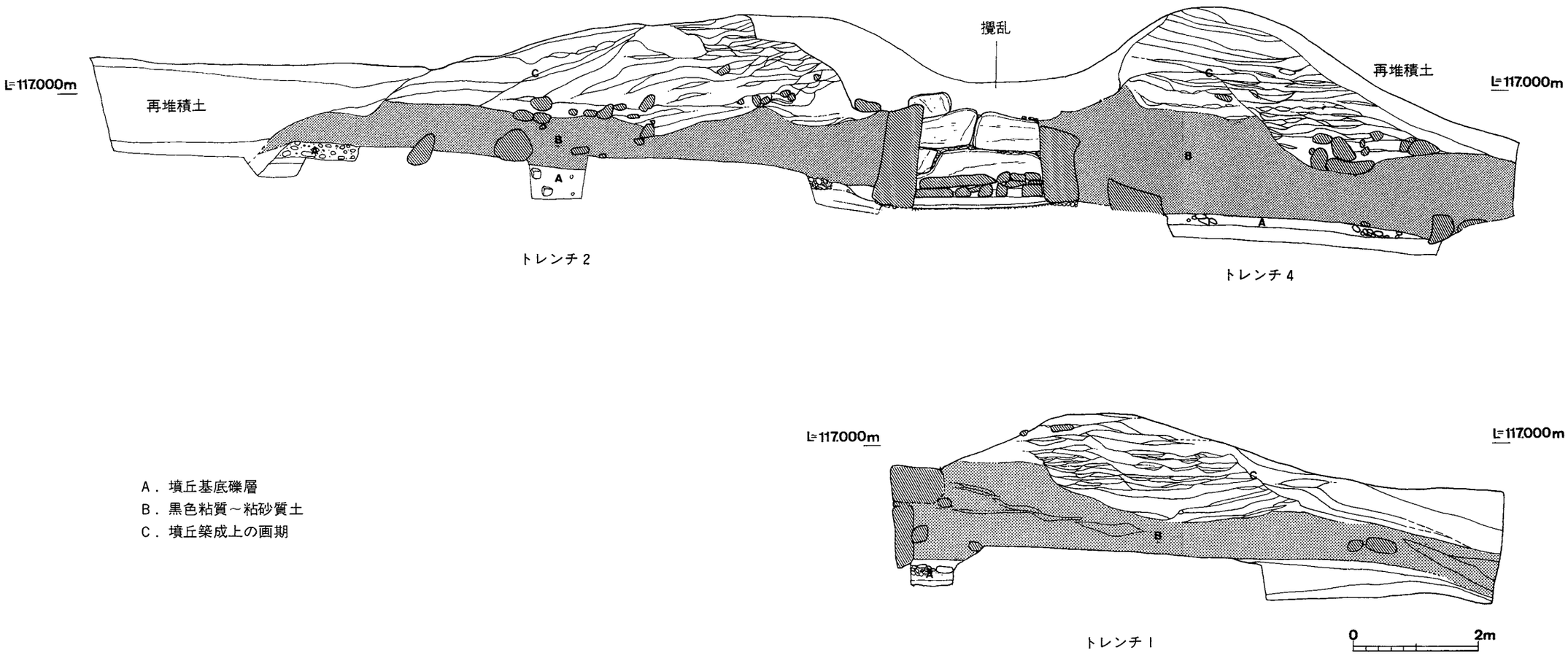
③ 墳丘築成 （第37図）

当古墳の主体部は横穴式石室である。古墳築成に際しては，尾根稜を掘削し，旧地形を墳丘に取り込む手法は一切取らず，すべて盛土によっている。後述する３号墳は尾根主軸に直交して掘り方を設け，尾根基部側の自然地形を墳丘として用いているが，このような在り方とは対照的である。

墳丘の築成は，基底となる地山の整形から計画的に行われている。まず，古墳の立地する尾根の緩斜面をほぼ水平近く削平・整地し，次いで20cm以上の厚さで礫を敷く。礫は花崗岩の風化の進んだ円礫～亜円礫が主体で，尾根基部側で厚く，末端部でやや薄く敷く傾向が見られ，墳丘・羨道部分では確認できなかった。礫層は玄室床面・側壁基底にも及んでおり，石室の架構は，この礫層上面から行われていることが知られた。

盛土は石室側壁構築と同時に築き始め，側壁を支えるようにして砂質混じりの黒色土層を墳丘裾付近まで厚く盛っている。黒色土層は，黒色粘質～粘砂質土による凸レンズ状の互層からなる。層相互の区別が困難なため，ほぼ単一土層と考えた。築成時に一定の場所から連続的に運び込まれたものらしい。密に締まっており，構築した石室を保護すると同時に，墳丘下部を強化する役割があると考えられる。この土層は石室天井部付近にまで延びていたものとみられ，側壁に沿って隆起しており，小マウンド状を呈する。この時点で石室の構築作業を終了し，上部封土に作業が移るものと思われる。ここではこれを第１次墳丘と呼ぶことにする。

第１次墳丘築成に続いて，墳丘形成のための土盛りが行われる。この作業によって当古墳の墳丘は体裁を整えることになるが，ここでも築成が大きく２段階に分けて行われるようで



A．墳丘基底礫層
B．黒色粘質～粘砂質土
C．墳丘築成上の画期

第37図　1　号　墳　墳　丘　断　面　図

ある。ただし，土層の観察からはこれ以降の段階的な築成過程の画期を明瞭に弁別することができないため，第1次墳丘以降を一括して第2次墳丘と呼び，説明することにする。

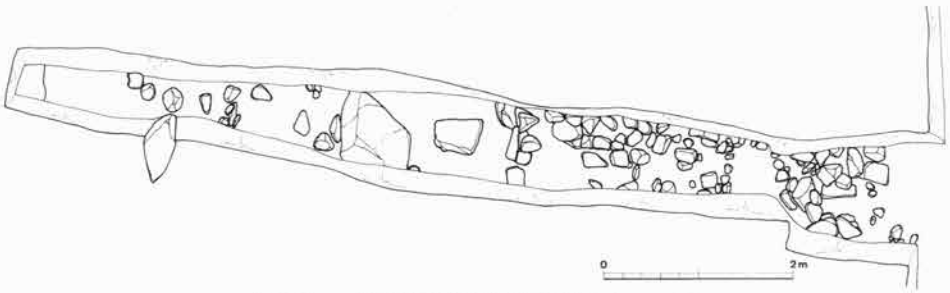
第2次墳丘は，有機質土を含む暗茶褐色土層と地山客土を主とする砂質土層の互層よりなる。墳丘中央付近から盛り始め，順に周縁へと積んで行くため，土層は中心に向かって内傾するように堆積する。ブロック状に段階的に積まれており，同質の客土を集中して積むものと，幾種類もの土を区別無く積むものとがある。これは築成にあたって各所から断続的に土が運び込まれたことを示すのであろう。最小のブロックは運搬の際の単位を表すものと考えられる。土質は全体に砂質であって，層相互は明瞭に区別できる。第1次墳丘に見られる緻密さはなく，水はけがよいのが特徴である。墳丘は最終的に裾部を整え築成作業を終了する。

④　墳丘内の礫の集積について　(第38図)

墳丘断面図に示したように，封土内には多数の礫がみられた。これは墳丘築成過程で混入したもので，築成作業にもかかわると思われる。ここでは主に，第4トレンチにおいて確認された集石について記しておくことにする。

第4トレンチは，主軸に直交して，羨道部と墳丘の関係を見るために設定した。第38図は，墳丘基底～盛土中において検出された礫の集積状態を示している。羨道付近において基底となる礫層土を覆う封土中より，拳から人頭大の集石が面的に検出されている。集積は羨道部付近で密な分布を示すが，北西へ移るにつれて希薄となり，かわって大型の石が列をなすように不規則に堆積する傾向がみられた。これを断面において観察すると，羨道付近検出部分は面的に連続し，規則的に並んで上方へ傾斜する傾向が看取される。この部分の石列はすべて，第1次墳丘中に埋っており，第2次墳丘には及ばない。後者については不規則に配列し，この一部は第2次墳丘中に埋っている。

集石は第1次墳丘中に埋まる傾向がある。前述のように第1次墳丘は石室架構と同時に行われた封土で，墳丘築成においては土台たるべきものと言える。集石は，基底部付近のものは明らかに墳丘基底を意識したものであろうから，地固め・強化を意図したものに相違なか



第38図　　墳丘内礫集積状況図（第3トレンチ）

ろう。それより上位に不規則に見られるものは，石室構築のそれぞれの段階で生じた礫を廃棄したり，足場として用いたものがそのまま埋ったものと考えることができるだろう。

(2) 内部構造

当古墳の内部主体は横穴式石室である。主軸をN-12°30′-Wにとり，ほぼ南東方向に開口する。使用石材はすべて，古墳の立地する行者山周辺に産する黒雲母花崗岩である。石室は，調査前に石材採取等によって大きく破壊を受けており，完全に土砂が堆積した状態であった。石材は総じて大型のものを用いており，修羅などの運搬具を必要としたと思われる。

① 石室の形状と規模 (第39図)

石室は，長方形の玄室と羨道部からなる。玄門・羨道部壁の大半が失われているため，明らかでない。玄門の抜き取り穴の痕跡から，両袖をもつ横穴式石室と考えられる。右袖抜き取り痕が左袖ほどではないが，1石分のみ突出しており，羨道部が右に偏している。

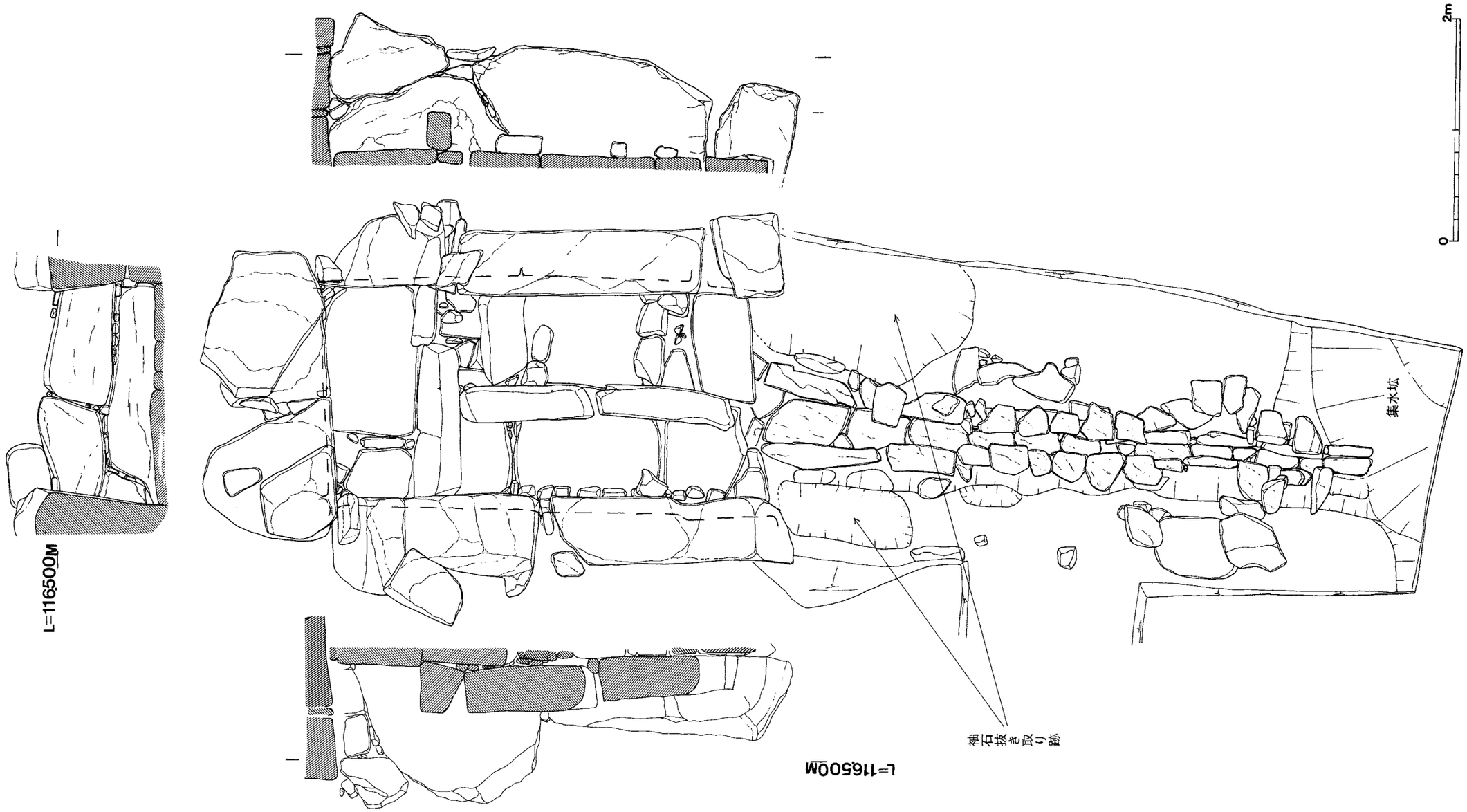
石室の全長は，奥壁から推定羨道側壁最前端までが約9m，玄室長4m，玄室幅は奥壁部で1.9m，袖部で1.9m，推定羨道長約5mを測る。玄門幅は左右の抜き取り痕から約1.2mと考えることができよう。現存する側壁は最も高い部分で床面から1.3mを測る。

② 石室の構造

石室は玄室の天井部・羨道の大半が破壊を受けている。石室の各壁を構成する石材の一部が玄室内に転落するものを除けば，その他の石材は持ち運ばれたものと思われる。調査前には石室墳であることは予想されていたが，墳頂部盗掘坑においてさえも石材は見いだせなかったため，破壊が著しいことがうかがわれた。調査の結果，羨道部は大半が破壊を受けていたが，玄室下部は予想以上に遺存が良好で，玄室敷石・棺障状遺構・排水施設などについて旧状を保った状態で検出した。

当石室は，墳丘築成作業と併行して構築されていくため，石室架構のための墓坑はない。構築にあたっては，まず，墳丘基底整地作業の際に敷かれた礫層上に側石の安定を図るための浅い掘り方が設けられる。その後，側石基底裏込めとなる礫を充塡しながら第1段目を据え，続いて順序よく積み上げる。床面の形成はどの段階で行われるか明らかにし難いが，玄室については，羨道部排水溝へ連接する集水施設を設けた後，扁平な板石を用いて敷石床面を造ると思われる。羨道部排水溝へこの段階に併行ないし先行して構築されたものであろう。天井部は残存しないため明らかでない。

玄室　基底面はすべて大型の石材を用い，極めて安定した構造を持つ。側壁はやや内傾するが，ほぼ垂直に立ち上がる。奥壁は下段に幅1.8m，高さ0.9mの扁平な横長の1枚石を立て，隙間に小さな石を埋め込んでいる。2段目以上は複数の石材を用いる。上段の石は失わ



第39図　1　号　墳　石　室　実　測　図

れているが，最上段に部分的に残る石材からすると，比較的小ぶりの石材が用いられていたものと思われる。

奥壁から羨道に向かって右側の玄室側壁(右側壁)は，奥壁寄りに大型の石材を1個縦積みし，羨道寄りでは横積みする。側壁の内では残度が最も悪かった。

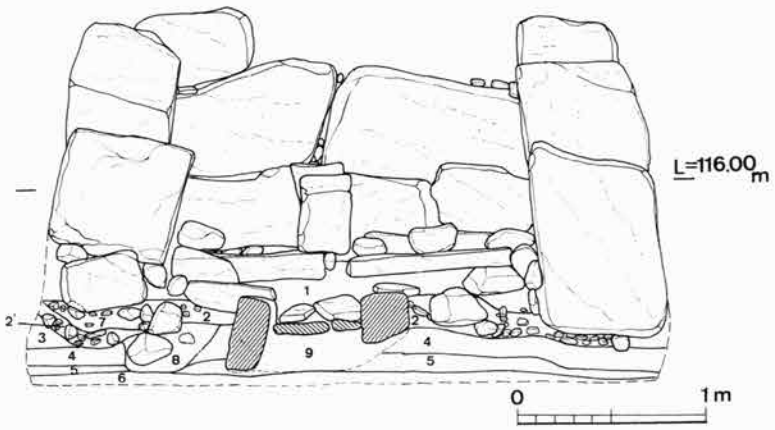
左側壁は，右側壁に増して大きな石材を用い，奥壁寄りに2石と玄門寄りに1石，計3石を縦積みしている。これらは高さが比較的揃っており，規則的である。奥壁寄りでは更に上方へと積み上げられた石材が見られた。

以上の3壁によって形成された玄室の平面形は，側壁の長さが奥壁の2倍となる長方形状を呈する。歪みのない長方形として玄室床面積を計算すると，約8 m²という価が得られる。

玄室の床面は，整地層である礫層を平坦に整えた後，やや粘性を帯びる黒褐色土を置き，更にその上を暗褐色砂質土のブロックの混じる黄褐色土層(地山客土)によって覆う。これは敷石床面を支えると同時に，玄室部の集水機能を果たし，羨道部排水溝と有機的な関係を持つ。敷石はこの割石を基底として整然と配置され，小金岐古墳群中において傑出する敷石床面が形作られる。次に，敷石と床面の状況について少し詳しく記すことにしたい。

a）床面の状況(第39・40図)　当古墳の最も大きな特徴のひとつは，玄室床面上に長大な石材がT字形に配置されることである。玄室はこれによって3つの空間に分割され，石室の空間利用が限定される。この施設をここでは棺障状遺構と称し，3分割された空間を奥壁から反時計回りにそれぞれ第1・2・3区と呼称して説明することにする。

棺障状遺構は奥壁部で主軸に直交するものが大小2石，中軸線上に設定されるほぼ同等の大きさのものが2石，計4石を直列し，形作る。主軸直交の石は，後者に比べ大型で，断面は台形を呈す。最大幅を持つ面を奥壁に向けて敷石側面に接して垂直になるように配置し底面



第40図　玄室見通し図

1. 黒灰色粘砂質土　2. 黄褐色砂礫土　3. 暗灰色粘砂質土　4. 暗灰色砂土
5. 暗黄灰色粘砂質土　6. 黄色粘砂質土　7. 黒色粘土　8. 黒灰色粘砂土
9. 暗黄灰色砂土

に小円礫を込め，安定を図っている。中軸線上の石はほぼ直方体を呈するので，裏込めなどの工夫は見られない。上面幅で20～25cmを測る。上面の高さはいずれもほぼ揃っており，約50cmである。

敷石上面の施設には，顕著なものとしてこのほかに小割石による列石と，棺台状遺構が認められている。

列石は第2区において検出した。拳大程度の扁平な割石を奥壁に沿って配列し，側面は棺障側を直線的に揃える傾向が見られる。全長約2m，高さは5～10cmを測る。木棺基底側を支えたものであろうか。

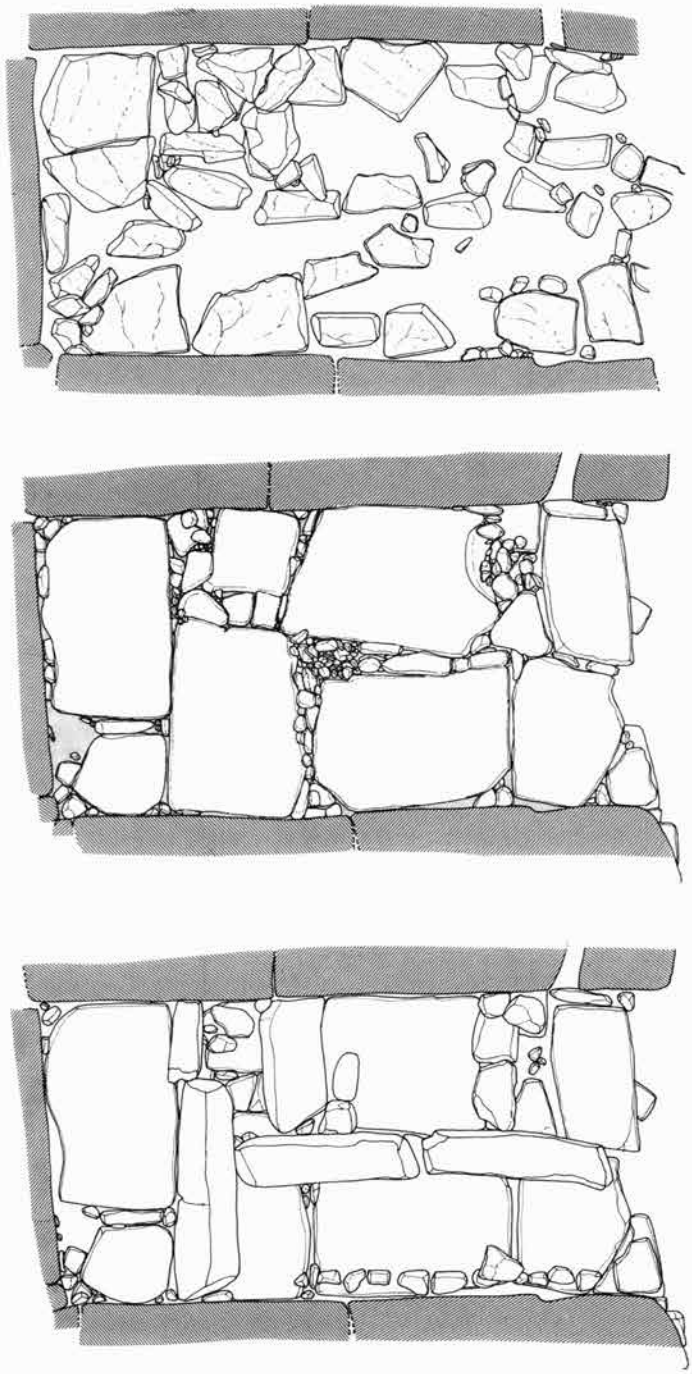
棺台状遺構は，第3区においてのみ検出されている。奥壁寄りと羨道部に近い場所が設けられ，上面の高さをほぼ等しくしていた。石材は扁平で，小口面は棺障と側壁に接する。奥壁寄りのものは1石，玄面寄りのものは2石を用い，棺障・側壁間に生じる隙間には小礫を埋め込んでいた。棺台の幅は約90cm，厚さは約20cmである。

b）敷石　第41図は，上述の諸施設を取り除いた床面の状態である。全面を石敷きし，丁寧に構築する。敷石は，幅90cm，長さ130cm程度に大きさを整えた4枚の板石を主要な石材として用い，石材間に生じた隙間は大小の扁平な石材で埋め込んでいる。奥壁寄りでは主軸に直行する方向に長軸を合わせ，玄門部寄りでは平行して側面を揃えてこしらえており，構築の際の企画性がうかがえた。石材の厚さはそれぞれ違うが，平均して約20cm程度である。

床面は概して水平で，奥壁部敷石が側面と棺障状遺構に接するように作られているため，他よりわずかに高くなるように工夫されていた。奥壁部が高く，羨門部がやや低くなる状況が看取された。

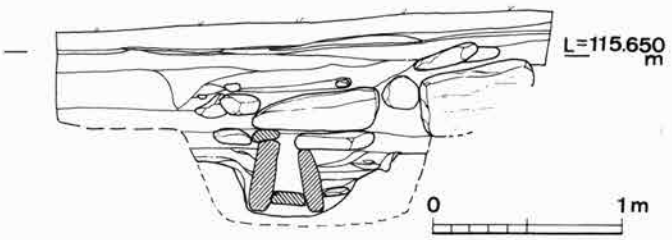
c）床面下の状況　敷石を取り除くと，敷石とほぼ同じ厚さを持つ扁平な割石が多数現れた。割石は玄室基底面の黄褐色土上に置かれており，半ば暗褐色砂質土層に埋もれた状態で検出された。これらは規則的な配列を持ち，壁寄りと玄室中央部分では計画性に相違が見られた。壁寄りのものは比較的大型で，面積の広い石材を用いて3壁に沿うように配列する。敷石床面の支えとしての役割を主に担うものとみられる。最大の石は奥壁部に使われ，石材間の隙間は小礫を埋め込んでいる。

玄室中央部は石材がまばらで，縦長の石材を向かい合わせた施設を造るのみである。敷石をつたって床面下に流れ込んだ水は，基底面の粘土層との間に帯水する。よって，この施設はこの水を室外へと導き出す機能を持つものと考えられる。主軸に斜行して玄門部に向かい，末端は羨門部排水溝に連接する。底石は待たず，簡単な造りであった。床面下は敷石施設の下部構造であると同時に集水・排水機能が計画された施設であるということができよう。



第41図　玄室床面の構築状況

羨道部　羨道部は当古墳中，最も破壊の著しい部分である。側壁・天井部ともに大半が持ち去られているため，構造を明らかにすることはできなかった。この部分で遺構として確認できたのは排水溝のみであった。わずかに残存する遺構から推定し得た２・３の事項について記すことにする。



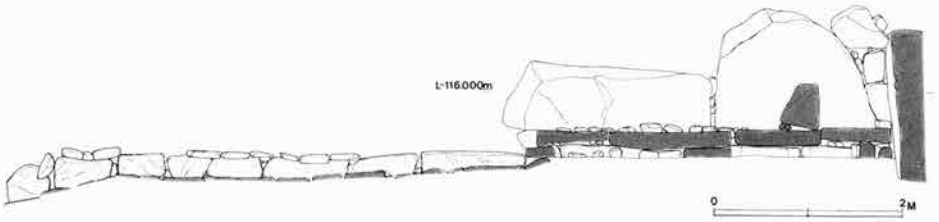
第42図　排水溝断面図

平面規模は，玄門部袖石の抜き取り痕・排水溝の状態などから，辛うじて推定できた。左右の抜き取りの痕の幅は95cm，玄門から排水溝の末端までは約５mを測る。玄門の幅が羨道部に，排水溝末端が羨門に対応すると仮定すれば，この値がほぼ平面規模を示すものと考えられる。

側壁の基底にあたる部分では，袖石部分で検出されたような抜き取り痕は検出されなかった。比較的小ぶりの石材を平積みしたものと思われる。両側壁は玄室主軸とほぼ平行に構築され，直線的に開口部に至ると考えられる。

床面は攪乱が深く及んでいたため，不明である。排水溝上面の検出レベル・上面の状態から，玄室同様，敷石を施していた可能性がある。小金岐古墳群中には，玄室床面に敷石をもつ古墳として17号墳・71号墳・76号墳があり，いずれも敷石は羨道部に及んでいる。当古墳の羨道も同様の施設をもっていたものと考えてよいであろう。

排水溝（第42・43・44図）　蓋を欠くほかはほぼ完存しており，約5.5m にわたって検出された。右側石を主軸に平行させ，玄門部でハの字状に開き，羨門部に向かって細く狭く造られている。内法最大幅約50cm，最小幅約10cmを測る。底石は玄門部では玄室集水施設と一部共有しており，ほぼ同一水準である。末端に行くに従って低くなり，レベル差は約40cmである。

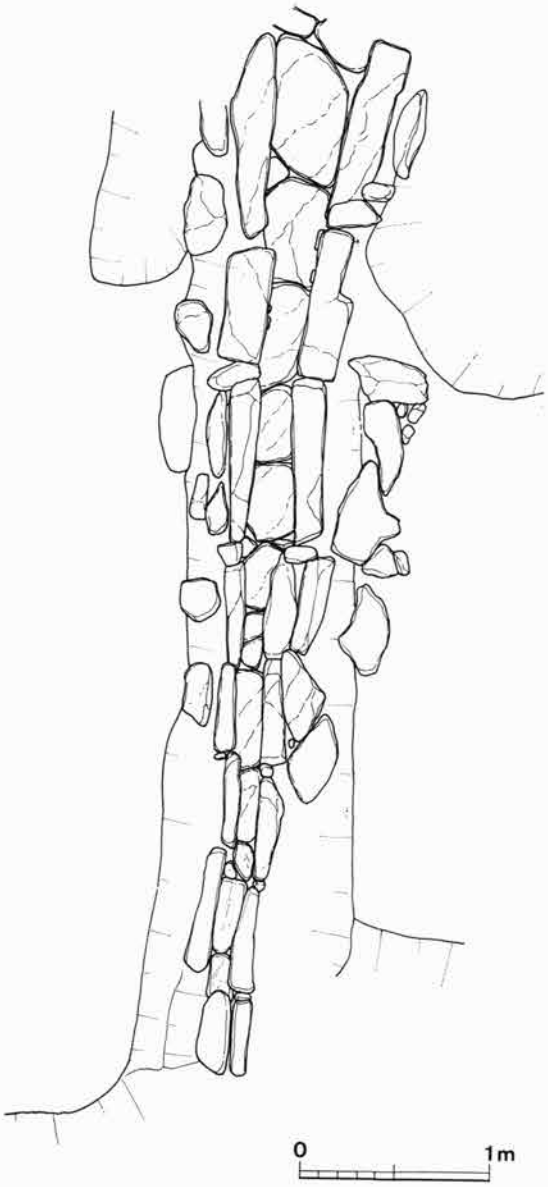


第43図　排水施設の状況

排水溝は，石室の基底にあたる黄色砂質土層に断面U字状の溝を掘り込み，板状に加工した花崗岩を用いて構築する。縦長の石材を溝の長辺に沿って側石として並べたのち，砂質土によって床面の安定を測る。

続いて底石を順序よく配置するため，底石小口面は側石に接することになる。側石も底石も，玄門部側で大きなものを用い，半ばから羨門にかけてはほぼ同等の大きさのものを用いている。側石は直立するがやや内傾して立ち上がり，断面は凹形を呈する。

側石の上面には，長軸に１辺を合わせて規則的に配列される割石が見られる。これらはほぼ同じ厚さ・大きさを持ち，わずかに溝の上面にせり出すように配置され，上面を水平に揃えている。蓋石を置くため，側石上面の凹凸を揃える必要から置かれていたものと考えることができよう。蓋石は残存していないため，明らかにすることはできないが，羨道部床面に敷石をもつとすれば，玄室床面同様排水溝のために蓋を設ける必要はなく，床石を蓋として用いた可能性が考えられる。とすれば，側石上の割石は，羨道部床面の下部構造も兼ねていたことになる。



第44図　排水溝平面図

溝中には砂層の堆積が見られたが，これは２次的な堆積物であって，本来は導水のための空間が設けられていたと考えられる。

当古墳の排水溝は，玄室集水・導水施設と有機的な関係を持ち，石室内に流れ込んだ水流

を効率よく室外へ排除する導水施設と言うことができよう。

(3) 出土遺物

① 遺物の出土状況 (第45図)

石室内の出土遺物には，古墳時代の埋葬に伴うものと石室再利用に伴うものとがある。

鎌倉時代の遺物は瓦器椀で，現位置を保った状態で出土している。遺物出土状況図では便宜上古墳時代のものと同じように示したが，玄室床面から約20cmのところで確認しており，この段階ではまだ石室は開口していたようである。遺物は棺床状遺構を意識して置かれ，第2区で2個体，第3区で1個体計3個体を確認した。これらの遺物を覆うように埋土が堆積していることから，これ以降の再利用はなかったと思われる。

古墳時代の遺物は，主に玄室床面で出土した。中世の再利用面下に約20cm程度の腐植土層があり，多くはこの中から細片となって出土している。埋葬後，再利用の時期までに大半が持ち出されたものと考えられる。遺物には須恵器の他，銀環・鉄製品・土玉・ガラス小玉・紡錘車などがあり，須恵器は第3区のみで確認され，また玉類は第2区に集中していた。第1区は鉄製品若干が出土しただけで概して遺物が少ない。なお，3区からはI6付近で朱の痕跡を確認している。

このほかに封土から弥生土器・土師器を多数確認している。

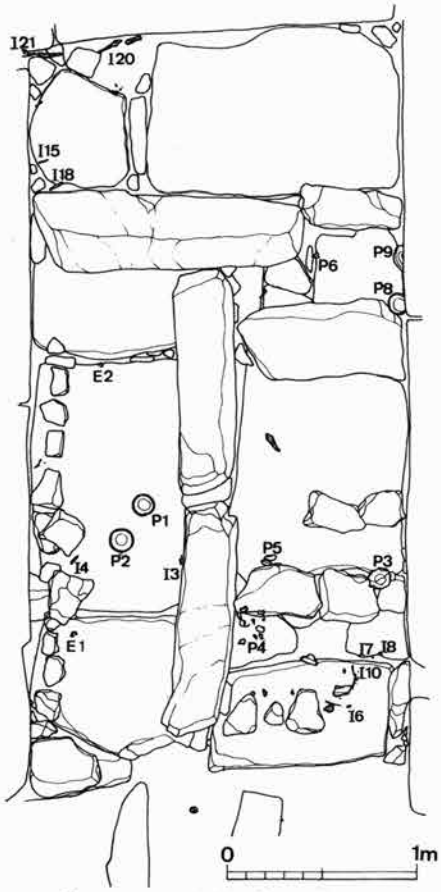
② 遺物の概要

a) 石室内出土遺物 (第46・47・48図)

ア) 土器(第13図1～9) 土器類には須恵器と瓦器がある。土師器類は出土していない。

須恵器は杯身(1)・杯蓋(2・3・4・5・6)とつまみを持つ蓋(6)がある。

(1)は杯身である。立ち上がりは短く内傾し端部は鋭かり気味であるが，内面は特に面はつくらない。受部はやや上方に伸びるが，狭く小さい。底部はヘラ切りの後軽くナデて仕上げる。口径12.6cm，器高は4.4cmを測る。



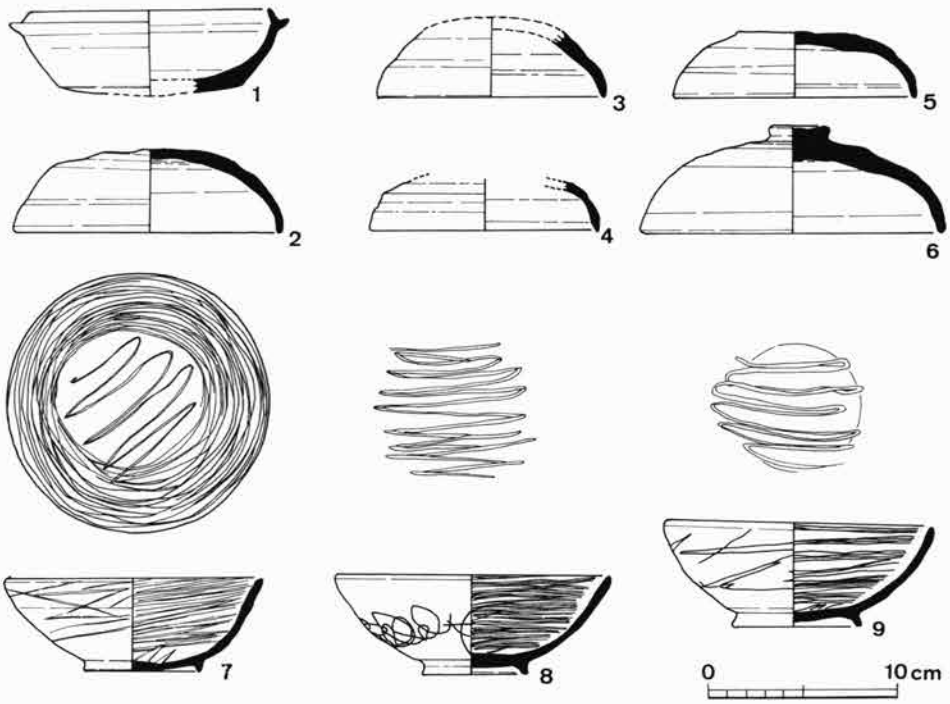
第45図　1号墳遺物出土状況図

杯蓋は，いずれも口縁部と天井部とを分ける稜を明瞭にはつくらず，全くもたない(2・5)か，わずかに浅い凹みをもつ(3・4)かのいずれかである。ケズリの範囲は狭く天井部の3分の1を越えない。端部を丸くおさめ，やや内傾する痕跡をもつもの(4)もあるが段ないし稜をつくるものはない。口径は(2)が13.6cmを測るほかは12cm前後で，小形化の傾向が看取される。

(6)はつまみを持つ蓋である。口縁部と天井部の境界は全くなく，全体に丸味を帯びる。端部を丸くおさめ，天井部を約4分の1へラケズリ。つまみは中央が凹んだ扁平な形状を呈する。口径約15.8cm，器高5.7cm。有蓋の壺形土器に伴うものと思われる。

瓦器は3個体ある。いずれも椀で，完形品である(7・8・9)。体部はやや内湾ぎみに立ち上がり，口縁部に強くナデ調整を施すいわゆる丹波型である。いずれも内・外面に密な暗文がみられ，第Ⅱ段階に属するものだろう。(注27)

(7)は，体部外面に間隔の広いやや粗い暗分を施し，内面には密な螺旋状文ののち見込にジグザク状の暗文を施す。高台は鋭りぎみであるが，しっかりと作る。(8)は，高台が外方にふんばるようにして設けられ，断面三角形に近く，やや安定性を欠く。体部外面に連結輪状の暗文を施し，内面には密な暗文を施す。内底面には間隔の狭いジグザグ状文を描く(図版



第46図　出土遺物実測図(1)

第31-13)。(9)は，端部にやや鈍い面をもち，器壁は厚い。高台は断面逆台形状で，安定がよい。暗文の施文方法は(7)にちかい。口径は14cm前後である(図版第31-12)。

イ）銀環(第47図1・2)　2点出土している。いずれも銅地銀張りのいわゆる銀環である。地金の銅は中実。2点とも棺障状遺構によって区画された第2地区から出土したもので，法量，銀の残度からみて一対をなすものと考えられる。

(1)は両端を丸く仕上げた径9mm前後の断面楕円形の銅地金を長径3.4cmの「C」字形に曲げ，表面に銀の薄板を貼り付けたものである。銀箔は内部からの銅の錆の影響によって各所に亀裂を生じている(図版第32(1)-4)。(2)は長径3.5cm，短径3.2cmの法量をもち，(1)とほぼ同巧同大である。残度は良好だが，(1)同様，器表に亀裂を生じ緑青が吹き出している(図版32(1)-5)。

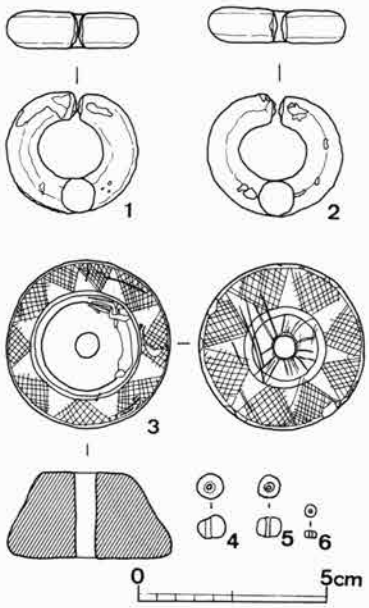
ウ）玉類(第47図4～6)　玉類は，現地調査時には土玉を数個確認したにすぎなかったが，石室床面直上に堆積していた黒色土層を取り上げ，洗浄・選別を行ったところ，漆塗土玉57個以上・ガラス小玉2個を確認した。玉類は第2区南半に集中して見られ，第1区・第3区では全く検出できなかった。玄門部排水溝内から滑石製紡錘車とともに見いだされた漆塗土玉は5点あったが，これらは攪乱層中にあり，第2区から転出したものと考えられる。玉類については現在整理中であるため，詳細については後日報告することとし，主なものについて図示した。

(4・5)は漆塗土玉である。径6mmの球形を呈し，中央に径1mm前後の貫通孔を穿つ。表面は丁寧な調整ののち，黒漆が薄く塗布されているため光沢をもつ。全部で57個と細片数個を確認している。ほぼ同巧同大であった。

(6)はガラス小玉である。径3mm，中央孔は約1mm。色調はコバルトブルー。図示し得なかった1点はこれよりやや大きいが同様の作りであった。

このほかに玄門部埋土中から滑石製臼玉1個を確認している。臼玉は径5mm，中央孔は1.5mmを測る。厚さは3mm弱で，滑石は灰白色を呈し蠟状で軟らかい。

ウ）紡錘車(第47図3)　排水溝から検出されており，転入したものと思われる。台形で中央に径

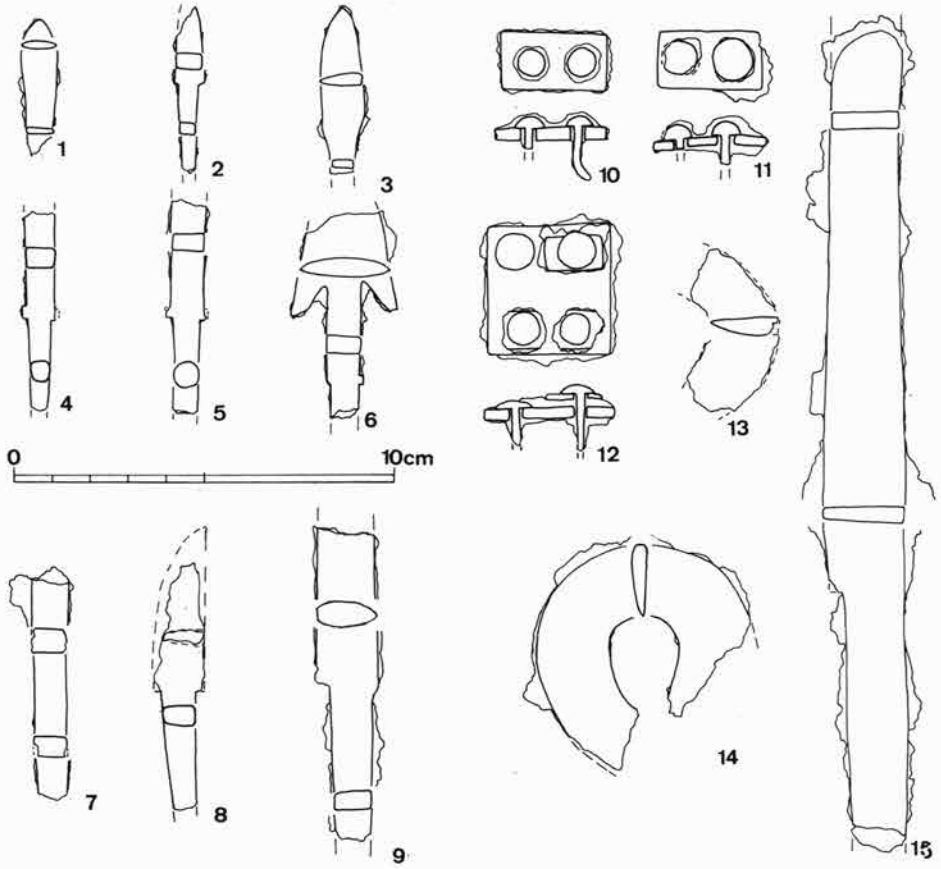


第47図　出土遺物実測図 (2)

0.5cmの孔を穿つ。頂部約2.6cm，底部4.3cm，高さ2.2cmを測る。側縁は器体下端を面取りし，上端の稜線と面取りによって生じた稜線間に二重の圏線とそれに接する鋸歯状文を施す。底面には，二重の同心円文を鋸歯状文がみられる。鋸歯状文は斜行文で埋める。器表は赤褐色を呈し，朱の痕跡が認められた。底面側面に擦痕があることから，ある程度使用されたものが埋納されたようである(図版第32(1)-6)。

エ）鉄器(第48図・図版第32(2))　鉄器は，出土状況が散発的で現位置を保つものはなかった。武器類として鏃・刀があり，その他に留金具・刀子等を検出している。細片化したものが多く完形のもの・一括のものは確認していない。図示し得たものについて説明する。

直刀(15)　1点のみ確認した。錆が著しく遺存状態が悪い。基端部・先端を欠くため全形は明らかでない。残存長22cm，幅は関部で約3cmを測る。(13)・(14)はこれに近接して出土しており，直刀の鐔(14)と鐔止め(13)になるものと思われる。



第48図　出土遺物実測図(3)

刀子(7・8・9)　(9)は刃部上半を欠失。残存長8.3cm，関の部分で幅約1.7cmを測る。関から茎にかけて木質が付着しており，関まで木柄に挿入されていたことを示している。目釘は認められない。(7)は茎部だけが残ったもの。(9)同様，茎の両面には木質が付着していた。断面は四角形で，末端ではやや丸みを帯びる。細身である。

鉄鏃(1・2・4・5・6)　完存するものはなく，刃部の形状を知ることができたものも(1)・(6)の2例だけであった。長頸鏃・柳葉形鏃の2種類を確認した。

(1)は長頸鏃。刃部の両側に刃を持つタイプである。関はつくらず，頸部はなだらかなカーブを描く。切先付近の断面はレンズ状を呈する。(6)は柳葉式で逆刺を持つものである。頸部は2.6cmと短く，茎との境に棘状の小突起がある。頸部断面は四角形，茎断面は円形である。

(2・4・5)は茎部，(2)は木質をとどめ繊維を巻いた痕跡がある。(4・5)は頸部と茎の境に棘状突起がみられた。

留金具(10・11・12)　3点を確認した。方形または長方形の薄板に円頭鋲を穿つものである。(10)・(11)は同形同大で2個の鋲をもつが，(12)は1辺3.5cmを測り，これらのほぼ2倍の法量をもち4個の鋲を穿っていた。

b）墳丘出土の遺物　(第49図)

第16図に掲げた遺物は(22)を除き，すべて1号墳墳丘盛土内から出土したものである。主に奥壁背後に設けたトレンチで確認され，当概要報告中で第1次墳丘と呼んだ黒色土中に集中してみられた。(22)は羨道部埋土より出土したものである。

盛土内出土遺物には，弥生時代に属するものと古墳時代に属するものとがある。以下，個々に器種ごとに記すことにする。

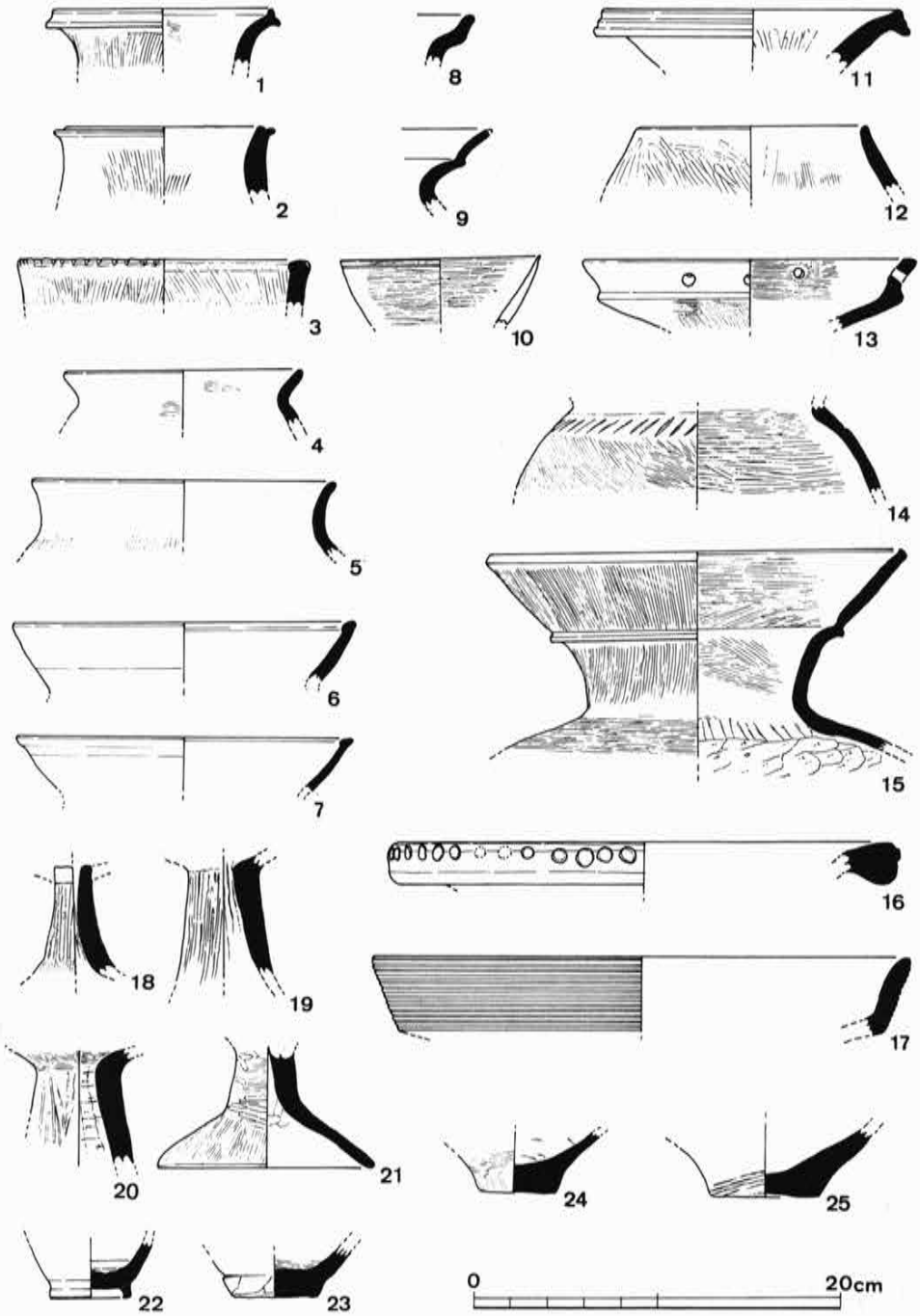
壺形土器(1・2・3・9・11・15・16・17)

(1)～(3)は円筒状の頸部をもつもの。(1)は口縁部に至って外反し，端面を強いナデによって凹線状に仕上げる。(2)はやや外反しつつ立ち上がり，(1)同様の端面をなす。(3)は口縁部がわずかに外反するが，ほぼ直立して立ち上がる。背面は内傾し，口唇部に刻み目を施す。内外面にハケ。口径15.8cmを測る。

(11)は，口縁部が直線的に外方へ伸び，内傾する端面をつくる。端面に2条の擬凹線。内面を丁寧にヘラミガキ。口径は16.4cmである。

(16)は広口壺。口径27.2cmを測り大型である。口縁は大きく外反し，口唇部下端に粘土を貼付し，端面に円形浮文による装飾をもつ。

(9・15・17)は二重口縁をもつもの。(15)は筒状の頸部から口縁部が大きく外反する。端



第49図　墳丘内出土遺物実測図

面は内側へつまみあげるようにして成形し内傾する面をもつ。口縁部～頭部の屈曲部に凹線状の強いナデ。外面を粗いハケ，内面は肩部以下に不規則なヘラミガキ。(17)は二重口縁を持つ大型の土器。口縁端面を上方へ拡張し，13条の擬凹線文の施文帯とする。胎土に粗い砂粒の混入が目立つ。口径は29.2cmを測る。

甕形土器(4・5・6・7・8・14・23・24・25)

甕形土器には口縁部がゆるく外反し端部に至るもの(4・5)，受口状のもの(8)，やや内湾して立ち上がり，端部内面が肥厚するもの(6・7)等がある。

(7)は布留式土器。(6)は(7)に比して肉厚で口縁が短く，肥厚部上端を丸くおさめる。(7)は端部外面に強いナデ，端部上端に内傾する面をもつ。口径18.2cm。(14)は肩部のみ残存。外面を縦位，内面を横位のやや粗いハケ調整。頸胴間に板状小口面による刺突状文。受口状の口縁を持つ土器であろう。(22～25)は底部。平底のもの(23)と底部中央にわずかな凹みをもち，ドーナツ状を呈するもの(24・25)とがある。(25)は外底面にタタキ痕がある。

高杯・器台形土器(13・18～21)

(13)は口縁部が受け部から斜上方に立ち上がる。器壁が厚く端部上端に面をつくる。口縁部に2つ以上の孔を穿つ。器面に丁寧なハケ調整，赤褐色を呈し，胎土は密である。口径は18.2cmを測る。(18)～(21)は脚柱部である。(18)は脚部上端に剝離痕を明瞭に残す。小形の高杯であろう。(20)は器台であろう。いずれもハケののち外面を丁寧にヘラ磨き，内面に絞り痕をとどめる。(20)は内面に横位のヘラ削りがみられる。

鉢形土器(10・12)

(10)は口縁部がやや内湾しながら立ち上がる。端部外面に1条の擬凹線文。器表は内外面ともに精細なヘラミガキにより仕上げている。胎土は，砂粒は含まず精緻である。赤褐色。坩状の形態をとるものであろう。(12)は最大腹径を体部下半に持つ。口縁は内傾して立ち上がり，端部に至って直立。器表外面をヘラミガキ，内面はハケ調整。暗褐色を呈する。口径12.6cmを測る。

その他の遺物に(22)がある。羨道部攪乱層中より検出されたもので，石室再利用に伴う遺物である可能性がある。須恵器瓶底部。外方にふんばる貼付高台をもち，底径4.4cm。平安時代に属するものであろう。　(田代　弘)

II.　3・7号墳

調査は，道路敷設範囲内にあたる3・7号墳の残存部と7号墳墳丘裾部について行った。以下両古墳の調査概要を記していくが，7号墳はごく限定された調査であった関係上，記述

は３号墳を中心に行いその中で適宜触れていくことにしたい。

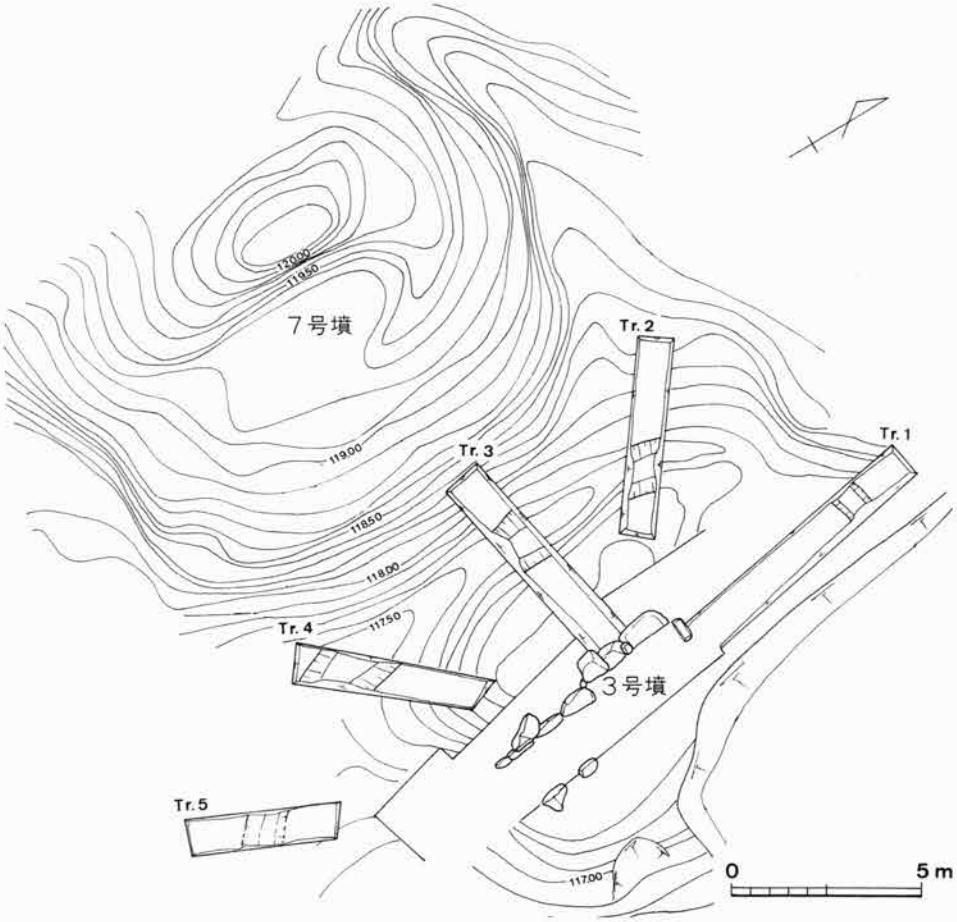
(1)　３号墳墳丘について

墳丘は，土取り・石材利用等による破壊のため封土の大半が失われ，半壊状態にあった。しかし，尾根基部側は若干の削平は受けていたものの墳丘裾部の残存状態は良好であると判断されたため，計５か所にトレンチを設け調査を進めた(第50図)。各トレンチの調査概要は次のとおりである。

第１トレンチ　(第51図１)

奥壁の背後に設定した幅1.0m，長さ7.2mの東西トレンチで，トレンチの西壁は石室の主軸と一致する。調査の結果，石室構築に先立つ掘方と古墳の外周を巡る周溝を検出した。

掘り方は検出面で奥壁背面から0.7m，深さ0.8mを計り，黄色粘土のブロックを多量に含



第50図　３・７号墳墳丘実測図

む腐植土(旧表土層)によって充塡されている。土層は大別して7層を数えることができるが，各土層は縞状をなして堆積していた。

周溝は上肩幅1.3m，底幅0.6m，深さ0.9mを測り，逆台形状を呈する。奥壁から約5.5m離れて検出した。周溝は次項で説明する第2・3・4・5トレンチにおいても見い出され，尾根主軸にあたる第3トレンチでは特に入念に形成されていることから，丘陵基部側にあたる墳丘西側を半周するものと考えられる。埋土は，5層にわかれ，主に黒色の粘質土が充塡する。砂層のブロックが中層に見られる他は土層に極端な変化は見られず，堆積が漸移的であったことがわかる。

また，溝底では扁平な花崗岩礫が密着した状態で検出された。墳丘の外表施設の一部が転入したものであろうと思われる。周溝底面レベルは標高116.7m前後である。

第3トレンチ　(第51図2)

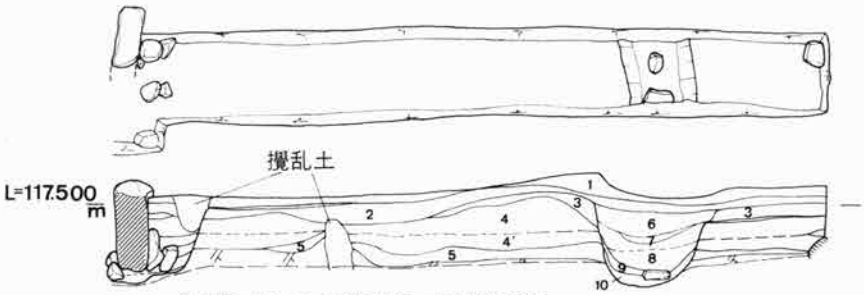
第1トレンチの調査によって，当古墳は周溝を持つことが判明した。しかし，墳形・墳丘・周溝の規模は確定できなかったため，石室主軸の西側に第2・3・4・5と，4本のトレンチを設定した。第3トレンチは主軸に直交し，古墳に立地する尾根主軸にほぼ平行するよう設けたもので，幅1m，長さ6mの平面規模を持つ。このトレンチでは周溝の延長部と側石の掘り方が追確認された。

周溝は，上肩幅1.5m～2m，底幅0.7m，現表土層からの深さ1.2mを測る。溝の断面形は逆台形状を呈しており，下底より0.5m程のところで肩を持って外側へとゆるやかな傾斜をみせている。2段の肩部を持つ溝状遺構である。土層の中位の肩部を境に堆積状況に相違が見られた。上層は黒色粘質土が見られた。下層は砂質のブロックを多く含む多数の層よりなり，水流による堆積を伴いながらゆっくりと埋没していったものとみられる。

この溝は，墓坑を斬る形で掘り込んでおり，石室架構後，墳丘築成作業の段階で掘削されたものと思われる。また，7号墳墳丘裾部ないし流出封土の一部を切っていることから，3号墳が7号墳造営に遅れて築造されたことを物語っている。

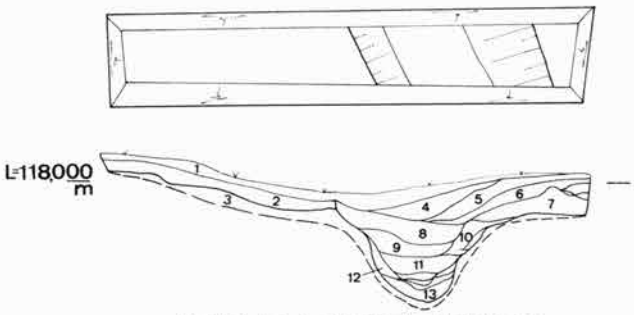
墓坑は，石室の構築段階に応じて最低2度にわたって掘られるようである。まず，石室の平面プランに応じて掘削し，その後，一部埋め戻し作業を経て，側石架構のために掘方を設ける。側石を配置する際には，杭を用いたらしく，断面に約1mの距離を置いて2本の杭の痕跡を残していた。埋土は奥壁部掘り方同様，地山を主体とするブロックを密に充塡する。

周溝の肩部には人頭大の列石が見られた。遺構から遊離した状態にあったが，墳丘斜位に外護列石と境界列石を兼ねて配列されていたものが転落したものと推察される。第1トレンチで確認された石材も従来は同様の機能を持っていたものであろう。第4トレンチの溝中で



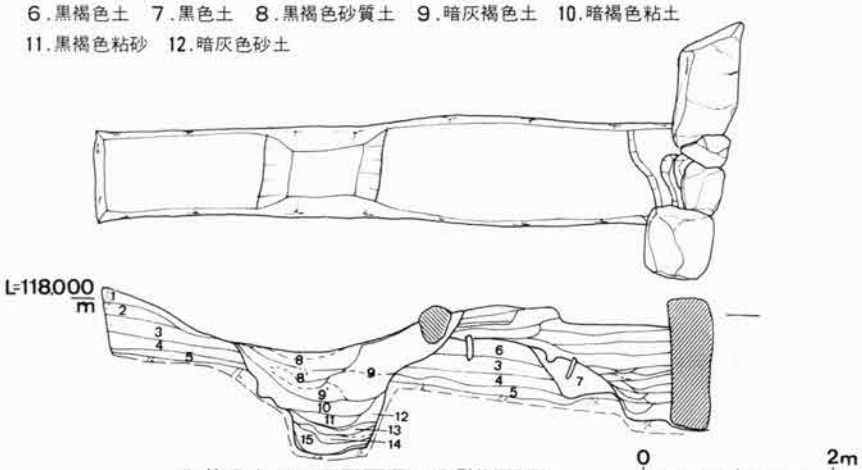
1.第1トレンチ平面図・東壁断面図

1.表土　2.黒褐色土(旧表土)　3.黒褐色粘質土　4.茶褐色粘質土　5.茶褐色粘質土
6.黒色粘砂質土　7.暗褐色粘質土　8.黒色粘質土 9.暗褐色粘質土　10.黒色粘質土(地山ブロックまじり)



2.第2トレンチ平面図・北壁断面図

1.表土　2.黒褐色土(旧表土)　3.黒褐色粘質土　4.暗茶褐色粘質土　5.黒灰色砂質土
6.黒褐色土　7.黒色土　8.黒褐色砂質土　9.暗灰褐色土　10.暗褐色粘土
11.黒褐色粘砂　12.暗灰色砂土



3.第3トレンチ平面図・北壁断面図

1.表土　2.黒褐色土(旧表土)　3.黒褐色粘質土　4.茶褐色粘砂質土　5.茶褐色粘質土　6.黒色土
7.黒褐色黄色ブロックまじり　8.褐色粘土　9.黒褐色粘砂質土　10.黒色粘砂質土　11.漆黒色粘土
12.黒灰色砂質土　13.灰色粘砂質土　14.黄色粘砂質土　15.黒色粘砂質土地山ブロックまじり

第51図　各トレンチ実測図(1)

も列石が検出されている。

封土は当トレンチにおいても検出できなかった。裾部は地山整形によっており，封土は全て削平・流出したものと考えられる。

墳丘の規模・周溝の形状を明らかにするために更に第2・4・5トレンチを設定した。

その他のトレンチ　(第52図1・2)

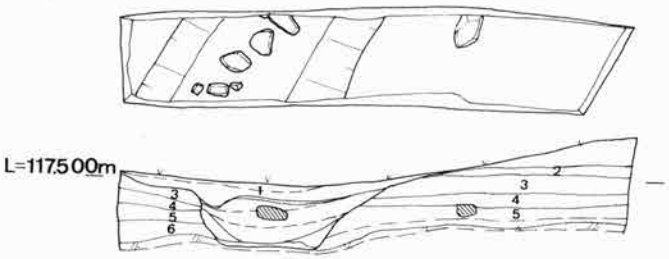
第2トレンチでは第3トレンチと同規模の溝が検出され，第1トレンチと一連のものであることが確認された。また，第4・5トレンチでも延長部を検出することができ，周溝は，尾根を切断するようにして弧状に巡ることが判明した。周溝は墳丘主軸にそって長軸を持つ楕円形になるものと思われ，尾根基部側では直線状を呈する部分もあると考えられる。基端側は，古墳の破壊・調査範囲の関係から未調査に終わったため，不明である。

各トレンチの状況は図示し，説明に替えたい。

(2)　内部構造

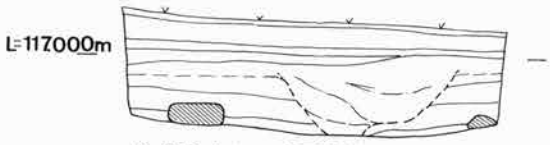
当古墳の内部主体は，横穴式石室で，主軸をN-10°30′-Wにとり，南南東に開口する。石室は，1号墳同様，行者山山麓に産出する黒雲母花崗岩を用いて造られている。墳丘の破壊に伴って主体部も大きな被害を受けており，天井石・左側壁・奥壁の一部が失われていた。

①　石室の形状と規模　(第53図)



1.第4トレンチ平面図・北西壁断面図

1.表土　**2**.黄ブロックまじり褐色土　**3**.黒色粘質土
4.茶褐色粘砂質土　**5**.茶褐色土　**6**.茶褐色粘質土



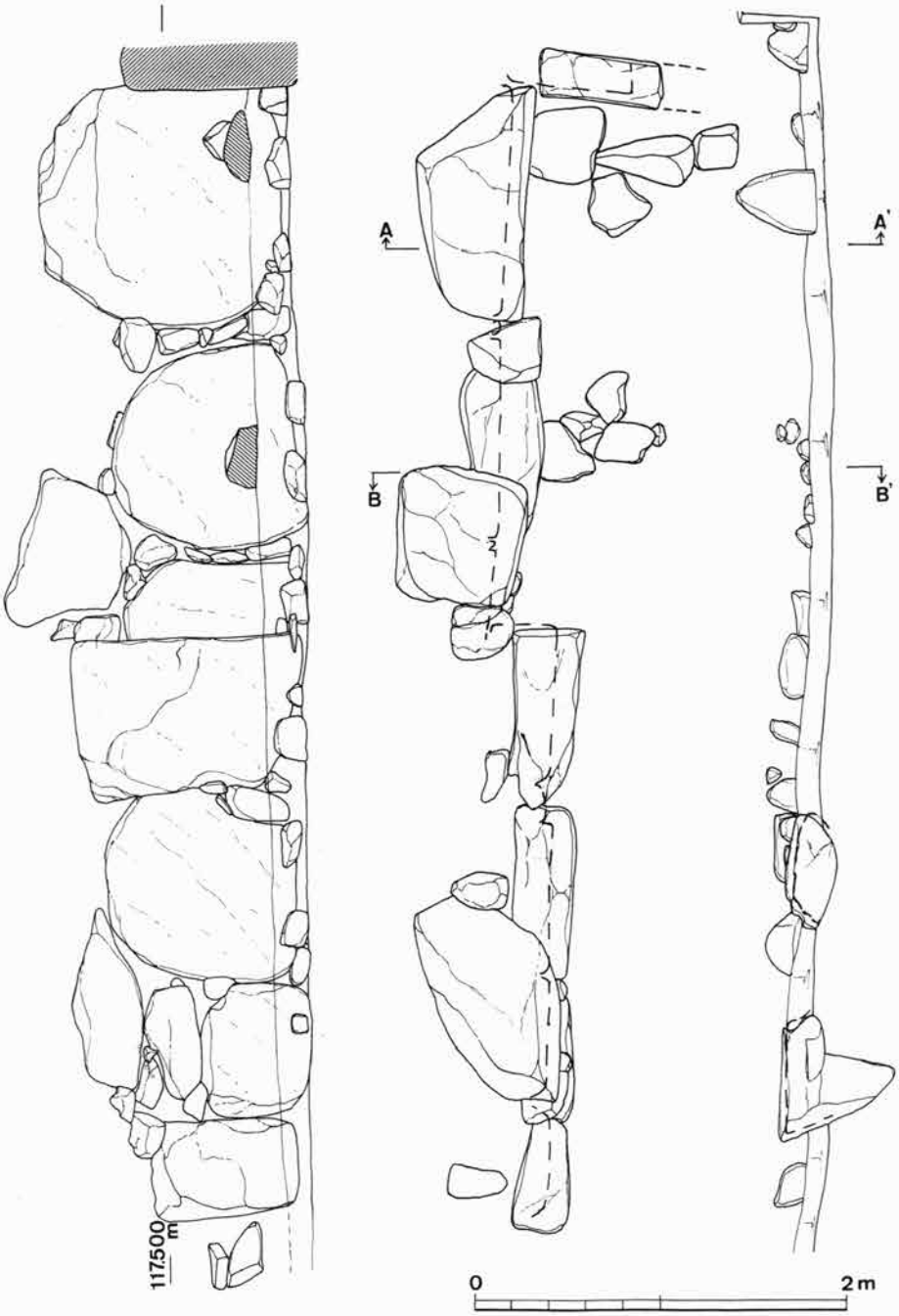
2.第5トレンチ西壁断面図

1.黄色砂土　**2**.黄褐色粘土　**3**.黄色粘質土　**4**.暗褐色粘砂質土
5.漆黒色粘質土　**6**.黄褐色砂礫土

0　2m

第52図　各トレンチ実測図(2)

石室は，側壁の破壊，調査範囲の関係などから左側壁の確認を十分に行い得たとは言い難いが，羨道側壁の内面延長線上において左側壁基底にわずかに抜き取り痕・根石と推定される



第53図　3 号 墳 石 室 実 測 図

小角礫の列状痕跡が確認されたことから，右片袖の平面プランを持つ横穴式石室であろうことが推察された。

石室の全長は，奥壁から羨門までが6.3m，玄室長2.9m。玄室幅は奥壁部で推定1.5m，玄門部で1.6m，羨道長3.43mを測る。

② 石室の構造

石室は，右側壁の状態について記すと，地山を削り出したテラス状の面に深さ15cm程の溝を掘り，基底石を据えている。奥壁は1枚，玄室・羨道部は各3枚の石材を用い，全て小口面を下にする縦積みである。それぞれの石材間には小自然礫が挿入され，石材相互の安定や高さの調節を行っている。玄室基底石は，ほぼ同じ高さの石材を用い，上面のレベルを揃えている。また羨道部は玄門の石の上面に高さを合わせ，目路を通す意図がうかがわれる。袖石は，高さ約1.2m，幅0.9mの長方形の石材1石を用いる。

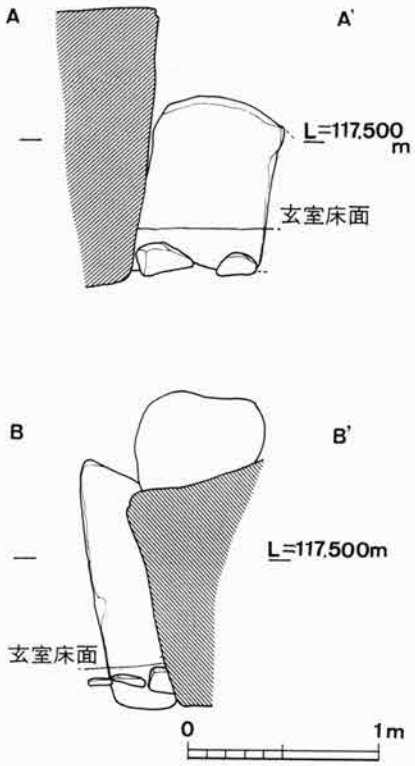
左側壁は失われていたが，羨道部で2石が，玄室では基底列石状の小石列が残存していた。羨道部列石と玄室列石は，ほぼ一直線に並んでおり，玄門部に右壁にみる突出部がみられないことなどから，袖の存在は考えられない。右袖式の石室である。

第54図は奥壁と玄門部を見通した状態を示したものである。

③ 床面の状況

当古墳では，石室架構に際して，造作したテラス状の削平面を埋葬時の床面として用いており，敷石などの特別の施設は設けていない。削平面は側壁基底部をやや掘り下げるほかは，平坦面のまま残し，この平坦面を若干整地した後に地山ブロックまじりの黒色粘砂質土を5～10cm敷いて死床とする。

床面には排水に関する溝などの施設を持たないため，検出時に水がしみこんで，雨水などの流入が著しく，調査時には浸水に悩まされた。しかしながら，玄室部では玄門～羨門の地表に比べまだしもであったのは，死床を形成するブロック混じりの土層が地山面との間に透水層をつくっていたこと，床面が羨道に向かって低く傾きをもってい



第54図　3号墳石室見通し図

たことと無関係ではないようである。石舞台古墳の調査において，死床の排水問題について幾つか考察があるが，その中に床面の計画性として傾斜をもたせるということがあった。当古墳についても同様，計画性が指摘できるものと思われる。

④　棺台状遺構

床面上には，右側石に沿って棺台状の遺構が検出された。下面の平らな自然礫３～４個を石室主軸に直交して２列配してある。幅約1.1m，各配石間は約2.0mを測る。高さは約20cmで上面をほぼ揃えていた。石材は岩崗岩で，側石と同一石材である。

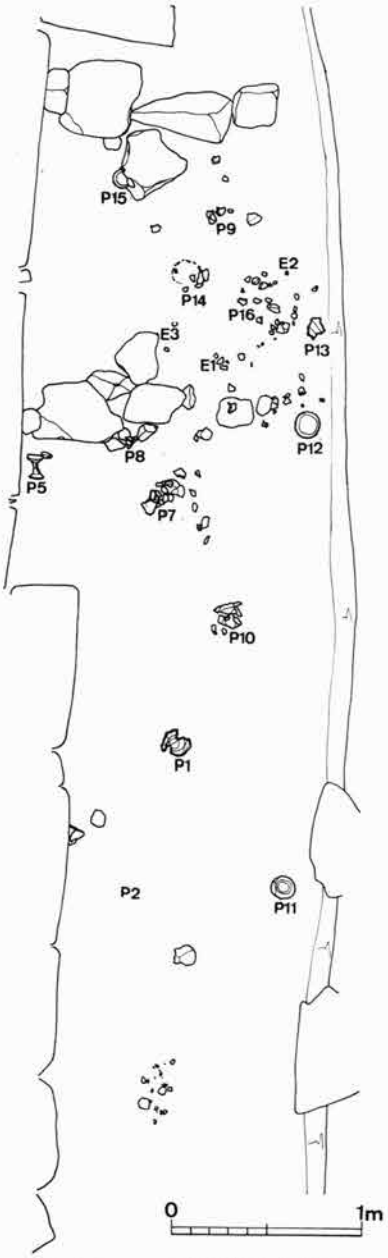
(3)　出土遺物

①　遺物出土状況　（第55図）

石室内出土の遺物には，古墳時代の埋葬に伴うものと再利用時に持ち込まれたものとがある。

古墳時代の遺物には，須恵器杯身・高杯・鐙・提瓶・盌・土師器甕・ガラス小玉があり，羨道から玄室内にかけて分布している。玄室中央に分布の中心があり，遺存状態が比較的良好であった。左側壁・天井部の抜き取りなどによって大半の遺物は破砕・移動したものとみられるが，棺台状遺構に伴う遺物や羨道部のものは一部現位置を保っていると思われる。

再利用は奈良時代以降断続的に行われたらしく，奈良・平安・室町各時代の遺物が出土している。奈良時代の遺物としては須恵器壺・製塩土器・土師器杯・平安時代のものは須恵器杯・黒色土器，室町時代のものとしては瓦器椀があった。奈良～平安時代の遺物は，玄門から玄室内に分布したが，瓦器は羨道部中央に１点のみ据えられていた。中世に至り当石室は玄室内に一定土砂が充塡していた可能性があり，羨道部の利用のみにとどまったことがうかがえる。



第55図　　３号墳遺物出土状況図

②　遺物の概要

ア）土器(第56図)　土器類には，上述したように古墳時代のもの(1～9・11～12・16)とそれ以降の遺物(10・13～15・17～18)とがある。古墳時代のものから順に記していこう。

(1)は須恵器杯身。立ち上がりは内傾し，低い。全体に浅く，扁平で，受部はやや上向きに外方へのびる。底部のヘラ削りはやや粗雑で，範囲も2分の1以下とせまい。底部にヘラによる「×」印がある。口径10.5cm。(2)～(5)は杯蓋。器高が低く，天井部と口縁部との境界が鈍い稜によって区別できるもの(2・4)と全く区別できないもの(3・5)とがある。後者は口径が11cmと小さく，それに対して器高が高い。(2)は天井部にヘラ切り離しの痕跡をとどめる。(3)～(5)はヘラ切り後，狭い範囲を粗くヘラ削り，端部はいずれも丸くおさめる。

(6)は器種が明らかでない。「盌」と考えた。不安定な底部，口縁はやや内傾して立ち上がる。底部と立ち上がりの区別は浅い凹線状のナデによって行われ，稜はもたない。口縁外面に2条の凹線。底部は大半をヘラ削りによる成形。口径14cm，器高は5.6cmを測る(図版第30-9)。

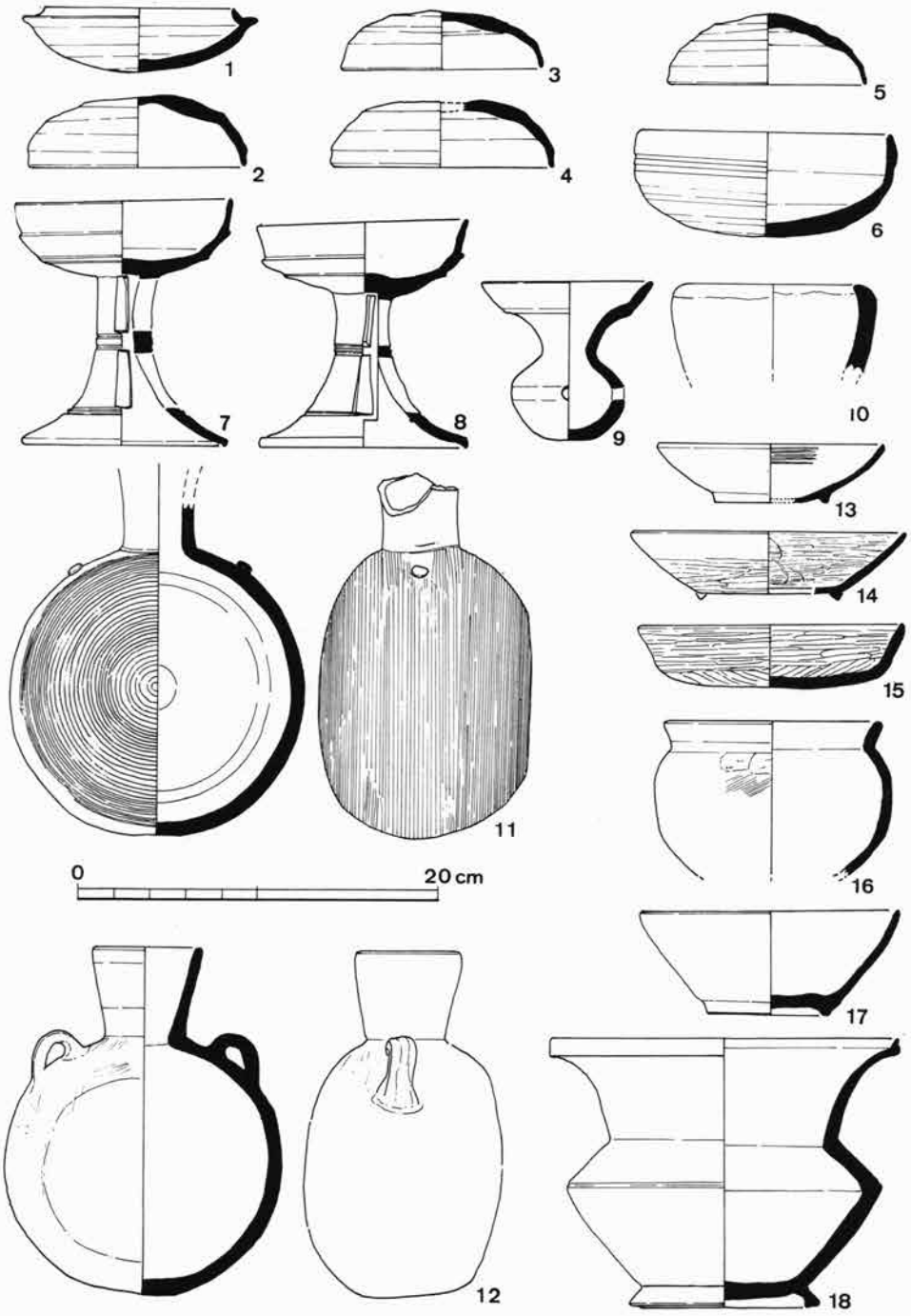
(7・8)は無蓋高杯。(7)は杯部が浅く，口縁はやや内湾しつつ外上方へ開く。立ち上がりと受部と，受部と底部との境界には段がつく。脚部は円筒部を細長く絞り，裾部は外方へ大きく広がる長脚2段透しである。透しは2方向に行い，透しの上段，下段の2条凹線を巡らす。また，大きく広がった裾部の脚端近くにも同様の凹線を2条巡らす。(8)は口縁が外方へ立ち上がる点，脚端の凹線が1条であることを除いて(7)の特徴と近似している(図版第31-17)。

(9)は小形の甕。頸部は体部からゆるやかに立ち上がって口縁部に至る。口縁は屈曲しラッパ状を呈する。体部は無文で肩部にかすかな稜をみるのみである。底部はナデ，削り痕はとどめない(図版第31-16)。

(11)・(12)は提瓶。(11)は口縁部を欠く。口頸部は直立して円筒状を呈する。体部は全面が丸く膨れ，背面は平らである。体部の前・背面ともカキ目。体部側には円形浮文状に退化した耳がつく(図版第31-14)。(12)は口縁部が直線的に外方へ立ち上がる。体部の膨らみは少なく，背面も全面同様丸みを帯びる。体部側には環状の耳がつく。

(16)は土師器甕である。球形の体部に短く外反する口縁部をもつ。体部背面はハケのちナデによる調整を行うが，肩部に部分的にヘラ削り痕をのこす。内面はナデ。外面にススの付着があり，器体に二次的焼成痕が認められる。口径は12.4cmを測る。

(10)は製塩土器である。細片化しているため全形は明らかでない。口縁部はやや内湾するもので，砲弾形を呈するものであろう。橙褐色の軟質の胎土をもち，径1mm程度の砂粒を



第56図　出土遺物実測図(1)

多く含む。器面は荒れが著しく，調整・２次焼成痕の有無等については明らかでない。復元口径約11cm，器厚は1.0cmの奈良時代に属するものであろう。

(18)は広口壺。須恵器である。強く屈曲する体部に大きく外反する口縁部。口縁端部をつまみあげ，直立する面をつくる。高台は外方へふんばった形状で，体部～底部間の屈曲部に接して取りつけられる。奈良時代に属するものとみられ，(11)と共伴関係にある可能性がある。

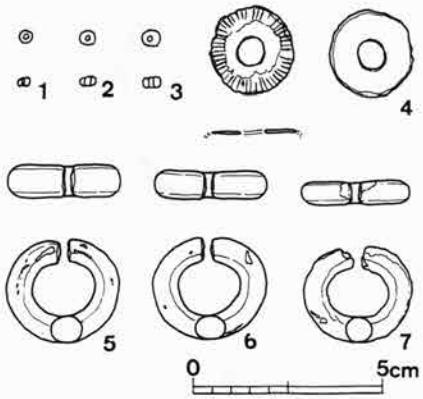
(15)は土師器皿である。口縁がやや外反しながら立ちあがる。外面を部分的に削りを施したのち，器体内・外面を丁寧にヘラミガキ。橙褐色を呈し，砂粒の混入が著しい。口径15cmを測る(図版第31-11)。

(14)は黒色土器である。口径に比して器高の低い椀。内面にのみ炭素を付着させる内黒の土器である。内面を精細なヘラミガキ，外面は口縁外面についてはナデ，体部下半をヘラミガキする。高台は剝落しているため形状は明らかでないが，断面三角形の小さなものだろう。

(17)は須恵器杯である。器体は内湾しつつ立ち上がり，口縁部に至る。体部・底部屈曲部に接して貼り付け高台がつく。口径14.6cm，器高は5.6cmを測る。篠窯跡群の編年案に照らせば，西長尾３号窯前後に位置づけられるものと考えられる(図版第30-10)。

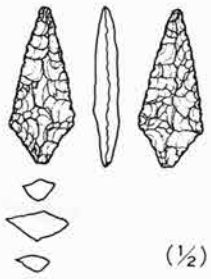
(13)は瓦器椀である。低平な器体をもち，小形である。高台は簡略化され，成形も粗雑である。内面の暗文は間隔が広く雑に施されている。

イ）金環(第57図５・６・７)　３点検出した。いずれも銅地金張りである。地金の銅は中実。１号墳の出土例に比して小さい。法量・金の残度からみて(５)・(６)が一対をなしていたようである。



第57図　出土遺物実測図 (2)

(５)は両端を丸く仕上げた径７mm前後の断面楕円形の銅地形を長径約３cmの「C」字形に曲げ，表面に金の薄板を貼り付けたものである。金箔の残度は良好である(図版第32(1)-2)。(６)は長径３cm，短径2.6cmの法量をもち，(５)とほぼ同巧同大である(図版32(1)-3)。(７)は(５)・(６)に比しひとまわり小さい。断面形はほぼ正円で，径は約６mm。長径2.8cm，短径2.6cmを測る。金箔は内部からの錆の影響で各所に亀裂を生じている(図版第32(1)-1)。



第58図　墳丘内出土遺物

ウ）ガラス小玉(第57図1・2・3)　合計4点を検出した。いずれも棺台状遺構の北側の石列付近から出土したものであり，被葬者の頭蓋方位を示唆するものである。

(1)は径3mm，中央孔は約1mm。コバルトブルーを呈し，透明度が高い。(2)も同質同大のガラス小玉である。(3)は直径4mm，中央孔1mm。黄緑色を呈し不透明，若干気泡を含んでいた。

エ）その他の遺物　上述の遺物のほかに金銅装の金具の一部とみられるもの(第57図4)と打製石製品(第58図)がある。

金具は，金箔の部分が残っており，裏面には緑青が付着していた。表面には毛彫りによる細線が施されている。周縁が欠出しているほか，地金の形状が明らかでないこともあって全形を知り得ないが，中央の円孔，縁辺が垂下する傾向がみられる点などから，座金具の可能性がある。この遺物は羨道部埋土除去作業中に検出したものである。

打製石製品はチャート製で，茎を有する尖頭器形を呈している。墳丘表土除去作業の際に確認した。全長4.3cm，幅1.7cm，最大厚0.7cmを測る。器表全面を丁寧な調整剝離が覆う。断面は菱形である。　(田代　弘・細川康晴)

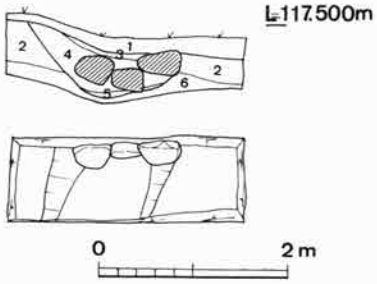
III. 79 号 墳

今回調査を実施した1号墳と3・7号墳間に小規模なマウンドがある。これは，京都府教育委員会による分布調査・測量調査時においては注目を浴びることなく，古墳と認識されずに今日に至っている。調査に際してこのマウンドを詳細に観察したところ，3・7号墳と同様，底平な盛土を持つ古墳であることが予想された。そのため，これを新たに79号墳と名付け，調査範囲にかかる墳丘裾部にトレンチを設け，確認のための試掘を行った。

掘削の結果，3・7号墳で検出した溝状遺構同様の規模・形態を持つ溝1条を確認し，これによって79号墳が古墳である可能性が高いものとなった。調査の経緯・結果は以下のようである。

79号墳は，墳高約30cm～50cm，径については林道による削平のため明らかでない。末端での残存部分から推定すれば，直径10m程度の円墳になるものと思われる。

調査は，1×2.5mの長方形トレンチを墳丘主軸にあたると推定される位置に任意設定し



第59図　79号墳トレンチ実測図

1. 黄褐色土　2. 暗灰褐色土　3. 暗茶褐色土
4. 黒褐色土　5. 黄褐色土　6. 黒褐色土

て行った。人力で徐々に掘削し，遺構面最上面で検出すべく努力したが，最終的には地山上面でわずかに底面を検出するにとどまった。溝はゆるやかな弧を呈するようである。断面観察から溝の規模を復元すると幅1.5m・深さ0.6mとなり，断面は逆台形を呈する。暗灰褐色の自然堆積土層から穿たれ，地山面に及んでいた。溝内には黒色の粘質土が充塡し，底面付近には0.4〜0.6mの最大幅を持つ花崗岩礫が転入していた(第59図)。遺物は全く含んでおらず，年代を明らかにすることはできなかった。

この溝状遺構は，弧状を呈する点，溝底に人頭大の転礫があったことなど3号墳墳丘区画溝の検出状況と酷似する点が特徴として挙げられる。部分的な試掘結果をもって断ずることはできないが，この遺構も同様の機能があったのであろう。ここでは上述の試掘結果をもって，79号墳が墳丘区画溝を持つ円墳である可能性を指摘しておく。　　(田代　弘)

4. ま　と　め

小金岐古墳群は総数78基以上を数える亀岡盆地有数の古墳群である。各古墳が裾を接し限られた範囲に築かれ，いわゆる「密集型群集墳」の特徴を備えている。(注28) 今回調査を実施した1・3・7・79号墳は，この古墳群の南端に位置する円墳で，1号墳を除くとこれらは当古墳群中では一般的な規模をもつものであった。ここでは，前節で記した調査成果について，主に1号墳についてまとめ，若干の問題点を指摘して結びとしたい。

1号墳は，古墳群中にありながら独立墳的な立地をとるという特徴がみられる。同様の傾向は17号墳・71号墳においてもみられ，これらは石室・墳丘規模が近接する古墳から卓越する点で共通している。墳形は円形で，直径は20mを越える。高さについては封土の破壊・流出などもあって充分明らかにできなかったが，石室基底からの残存高で約3.5mあり，墳丘築成当時は更に高かったものと思われる。築造年代は，第3区出土須恵器が陶色古窯址群の編年案(注29)のTK209型式に相当するところから6世紀末葉頃と考えることができる。当古墳は墳丘築成・石室に著しい特徴を有していた。

墳丘は，築成に先立って丘陵緩傾斜面を整地し，礫層を敷いて基底部強化を図った後に大きく分けて第1次・第2次の2段階の過程を経て築成される。第1次墳丘は石室の構築と併行して行われ，墳丘下部の強化と構築した石室の保護を目的とするらしく，堅く密に締まった土層を形成する。また，基底付近には礫層とは別に多数の花崗岩割石がばらまかれたような状態で検出されている。これも基底部強化の一役を担っていたようである。同様の遺構は拝田8号墳(注30)・小金岐71号墳(注31)などでも認められており，これについて石室基底石を築いた後，第1次の墳丘盛土にあたって盛土範囲を示すために置かれたとの考えがあるが，(注32) ここでは盛

土範囲を示すためのみの配列ではなく，墳丘基底の強化を意図したため結果的にもたらされたものと考えておきたい。

第2次墳丘は石室構築後におこなわれ，もっぱら封土としての役割を持ち，旧表土や砂質などをブロックとして多く含む土層からなる。緻密さに欠ける反面，水はけが良好であった。

石室は玄室側壁に巨石を用いており，玄室床面には敷石が施されT字形の棺障状遺構によって玄室空間が3分割されていた。敷石は花崗岩の板石を床全面に敷くもので，丁寧な造りものである。

この種の敷石は，当古墳の位置する行者山東麓に類例が多く，南から鹿谷2号墳(注33)・小金岐8・17・71・76号墳(注34)・拝田8・9号墳(注35)などを挙げることができる。これらは石材の明らかでない鹿谷2号墳を除くと，節理面の発達した花崗岩の板状石材を用いる点で共通し，行者山周辺が当地域で唯一の花崗岩産出地であることと無関係ではないようである。近接地で類例を探すと，医王谷3号墳(注36)・天神山3・4号墳(注37)なども玄室床面全面に敷石を持つことが知られているが，いずれも礫敷であり，医王谷例ではホルンフェルス・チャートなどの各種石材，天神山例ではチャートなど節理面の発達しない，角・亜角礫が主に使用されている。石室石材は古墳の立地する周辺に産出されるものにおのずと限定されるのであろうが，久美浜町湯舟坂2号墳(注38)・野田川町高浪古墳(注39)などを例にとると，同じ花崗岩産出地であっても敷石に板状石材を用いず亜角礫で床面を形成しているので，単に石材の供給関係のみで性格を限定することはできないようである。床面を板石で形成する古墳が当古墳群周辺に集中するという事実は，次に触れる棺障状遺構や石棚を有する古墳が当地域に集中することなどとあわせ，造営主体の担う技術や出自など様々の要因を考慮していく必要があるだろう。

棺障遺構は亀岡盆地では拝田9号墳・鹿谷2号墳と並んで3例目である。拝田9号墳の例は扁平な板石を用い，右側壁を1辺とした箱式石棺状を呈している。右側壁寄りに中心主体を設けるための施設とみられ，この部分にのみ敷石が施されていた。鹿谷2号墳は石棚を持つ古墳で，石棚に対応する床面に扁平な石材を用いた石室主軸に直交する方向に設けられている。遺物の出土状態からいずれも中心主体を安置するための施設と考えることができるものである。これに対し，当該古墳では大型の柱状石材を用い，玄室を均等に3分割する意図がうかがわれ，上記2者とは若干性格を異にしている。遺物は出土状況が散発的であったので，埋葬者数，追葬の有無など石室空間利用の実状はいまひとつ明らかではないが，この施設は玄室床面の敷石の配置を充分に考慮して配置していることなどから，石室構築に際して設けられたもので，後代の付加はなかったものと考えられる。第2区で玉類・銀環が，第3区で棺台状遺構・須恵器がそれぞれ検出されていることから複数の埋葬がおこなわれたこと

は明らかである。玄室空間の計画的利用の一典型例ということができるだろう。(注40)

玄室床面敷石の下には配石遺構が認められたが，これは羨道部で確認した排水溝と一連のものであり，玄室部の集水・排水の役割をもつものである。排水溝は，玄室から羨門部までほぼ直線的に走り，扁平な加工板材を用いて側石を立て，底部にやや小ぶりの板石を貼りつけていた。排水溝を有する例は小金岐17号墳(注41)が知られており，2例目となった。17号墳の排水溝は素掘りによるもので，石材等による構築物は伴わない。羨道部での部分確認であるため，玄室内での状態は明らかでない。

当石室では羨道床面が攪乱を受けていたこともあって，羨道床面と排水施設の関係を詳しく知るに至らなかったが，17号墳では羨道部にも敷石が及んでおり，これを参考にすると，ここでも同様の石敷を持っていた可能性が高いと考えられる。側石に1辺を接し添えるようにして配例していた扁平な列石は，床面との間を埋るものであろう。

上述のように，1号墳は構造上多くの特徴を持ち，当地域の後期後半の古墳を把えるうえで重要な古墳と言える。

3号墳は丘尾切断により墳丘形成を行う古墳で，尾根上立地を特徴とする小金岐古墳群中では一般的なものである。丘尾切断は背後の古墳との区画を目的として行い，同時に排土を墳丘盛土の一部として活用している。ここには墳丘築成上の労力を極少まで省こうとする意図をうかがうことができ，1号墳にみる築成方法との間に著しい相違性を指摘することができる。

小金岐古墳群は6世紀後半代に築造が開始され，7世紀前半に小規模な無袖の石室が築造されるに至り群形成が終焉にむかうことが知られている。群形成のピークがどこにあるのかはこれまでの発掘調査結果からのみでは限定できないが，およそ6世紀後葉にあることを推すことができる。このような群の消長の中で，6世紀末～7世紀初頭の時点に17・71号墳などの大形の石室墳がほぼ同時に現れる事実は重要である。これらは古墳群を形成する各支群に近接しつつも立地上単独墳的な様相をしめしており，各支群の等質的なあり方とは隔絶した内容を備えている。ここでは，大型の石室・墳丘を持つ少数の古墳が各支群の築造契機になるという可視的なあり方とは反対に，先行する支群を否定する形がみられ，この段階で群形成の流れに一つの画期があったと考えることができる。(注42)　（田代　弘）

付表3　1号墳出土土器観察表

挿図番号	土器番号	器種	法量(現存) 口径(cm)	法量(現存) 器高(cm)	形態の特徴	手法上の特徴	備考
第46-1	第12-P.5	須恵器杯身	12.6	4.4	たちあがりは短くやや内傾する。端部は尖がり気味であるが面はもたない。受部はやや上方に伸び端部は尖がり気味である。体部と底部とを分ける境界は明瞭である。	底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。不定方向のナデにより仕上げ，ヘラ削りは施されていない。内・外面ともにナデ。	胎土は密。砂粒を極少量含む。焼成は良好。暗青灰色を呈する。
2	P.9	須恵器杯蓋	13.9	4.3	口縁部と天井部を分ける稜は全くなく，全体に丸みを帯びる。口縁端部はわずかに肥厚し丸くおさめる。	底部に切り離し痕をとどめる。内・外面ともにナデ調整。	胎土は密であり，砂粒の混入は希薄である。焼成良好。暗青灰色を呈する。
3	P.6	須恵器杯蓋	12	(3.4)	口縁部はやや開く。端部はやや尖がり気味におさめる。口縁と天井部を分ける稜はなく，かわって浅い凹みをなす。	内・外面ともナデ。	胎土は密。堅緻。色調は濃灰色。
4		須恵器杯蓋	12	2.6	口縁部と天井部の稜は比較的明瞭。口縁端部には内傾する面をもつ。	天井部をヘラ削り。内面はナデ。	胎土は密。砂粒を極少量含んでいる。堅緻。色調は濃灰色。
5	P.8	須恵器杯蓋	12.8	3.4	口縁端部は丸く，面をつくる。口縁部と天井部をわける稜は無く扁平である。	天井部にヘラ切り痕をとどめる。ナデにより仕上げ削りは施さない。内面はナデ。	胎土は密。砂粒を若干含む。焼成堅緻。色調は濃灰色。
6	P.4	須恵器杯蓋	15.8	5.7	天井部中央に扁平なつまみを付す。天井部と口縁部の稜はなく丸みを帯びる。	天井部上半4分の1をヘラ削り。外面下半，内面はナデ。	胎土は良好。焼成あまく灰白色を呈す。
7	P.2	瓦器椀	13.8	5.2	体部はやや内湾気味にたちあがり，端部は丸くおさめる。	内面に間隔の密な幅の狭い螺旋状暗文を施し，見込みにはジグザク状暗文を施す。外面には上半に粗く幅広い暗文。	胎土は精良。焼成良好。色調は内・外面黒灰色，断面は灰白色。
8	P.1	瓦器椀	14.4	5.4	内湾気味にたちあがり，口縁端部はやや尖がる。高台は断面三角形に近い。	口縁部を強く横ナデ。体部中位に連結輪状の暗文を施し，内面には間隔の非常に密な暗文を施す。見込みにはジグザグ状文。	焼成良。色調は内外面黒灰色，断面灰白色。
9	P.3	瓦器椀	14	5.8	端部にやや鈍い面をもち，器壁は厚い。高台は断面台形状を呈し外方へ張り出す。	内・外面に暗文。器体の調整は丁寧に行われ，平滑である。	胎土は精良。焼成良。色調は黒灰色を呈する。

付表4　3号墳出土土器観察表

挿図番号	土器番号	器種	法量(現存) 口径(cm)	法量(現存) 器高(cm)	形態の特徴	手法上の特徴	備考
第56-1	P.12	須恵器杯身	10.3	3.6	たちあがりは短く内傾し端部は丸くおさめる。受部は水平に伸びる。体部と底部の境界は不明瞭で全体に扁平である。	底部外面ヘラ削り。内面はナデ。	胎土は良好であるがやや砂粒の混入が多い。堅緻であり，色調は紫がかった灰色を呈す。
2		須恵器杯蓋	11.8	3.8	口縁と天井部をわかつ稜線がなく，丸みを帯びる。	ヘラ切り痕をとどめる。ナデによって最終調整とし，削りは省略する。	胎土は良。砂粒の混入が目立つ。焼成は堅緻。暗赤褐色を呈す。
3	P.15	須恵器蓋	11	3.2	口縁部は開き気味におさめ端部は丸い。稜はわずかに残存。	天井部にヘラ切り痕をとどめる。	胎土は良好。焼成堅緻。淡青灰色を呈す。
4		須恵器杯蓋	12	3.6	口縁端部は強くナデ，やや尖がり気味におさめる。口縁部と天井部を分ける稜の痕跡はない。	天井部にヘラ切り痕をとどめる。内・外面ともナデ調整。	胎土は密。砂粒を含む。焼成はあまく暗赤褐色を呈す。
5	P.11	須恵器杯蓋	10.8	3.9	口縁部と天井部の稜の痕跡は完全に消滅しており，著しく丸みを帯びる。口縁部は開き端部は丸い。	天井部はヘラ切り，わずかにナデにより仕上げる。調整は内外面ともにナデ。	胎土は良。焼成あまく内・外面とも灰白色を呈する。
6	P.14	須恵器盌	12.7	5.7	口縁はわずかに内湾し端部は丸く終る。口縁部と底部の境界には，3条の沈線がめぐる。	口縁部は内外面ともナデ。底部外面はヘラ削りの後ナデ。	胎土は密。焼成は良好で青灰色を呈する。
7	P.16	須恵器高杯（無蓋）	11.7	13.6	内湾ぎみに立ちあがる口縁。脚柱部には長方形透しを2段配す。透しは3方向で各孔の直下に2条の沈線を巡らす。	杯部内面底部は不定方向のナデ。他は回転ナデにより仕上げる。	胎土は密。焼成は良好，色調は暗灰色。
8	P.5	須恵器高杯（無蓋）	11.6	12.5	口縁と身部の境界に鋭い稜が走る。脚部には2方向の透しを施す。上段透し孔下部に2条，下段透し孔下部に1条の浅い沈線を施す。脚端は上下に拡張し明瞭な端面を持つ。	回転ナデ。	胎土は密。焼成は良好で，淡紫灰色を呈する。
9	P.8	須恵器甕	9.3	8.7	小形である。口縁と頸部の境界及び体部最大腹径部に浅い沈線をめぐらす。		胎土は密である。焼成は堅緻。青灰色を呈する。
10		製塩土器			砲弾形の器形を有するものと思われる。	ユビオサエ，ナデにより成形。内面を丁寧に調整する。	砂粒をわずかに含むが精良である。淡橙色。

挿図番号	土器番号	器種	法量(現存) 口径(cm)	器高(cm)	形態の特徴	手法上の特徴	備考
11	P.2	須恵器提瓶	4.4	18	直立する口縁。体部は球形を呈し，肩部に一対の粘土粒を貼付する。	体部全面にカキ目。頸部はナデ。	胎土は密。砂粒の混入がめだつ。焼成良好で暗青灰色を呈す。
12	P.7	須恵器提瓶	5.8	19.2	口縁部はほぼ直線的に外方へ立ち上がる。体部は球形を呈し，肩部に各1個，環状把手をつくる。	体部正面にカキ目。背面はヘラ削りの後，ナデ。	砂粒の混入がめだつ。焼成は良好で，暗青灰色を呈す。
13		瓦器椀	14	3.2	体部は外湾気味にたち上がる。端部は面取りされ，器壁は厚い。高台は断面三角形を呈し弱く低い。	口縁内面に間隔の粗な暗文を施す。	内・外面とも器壁の荒れが著しい。砂粒を含むが良好な胎土。焼成はあまくもろい。
14		黒色土器	14.8	3.5	直線的に外方に立ち上がる。底部い高台を貼付。	内面を黒色化。体部外面下半・内面をヘラミガキ。	胎土は精良。焼成良好で橙色を呈す。
15		土師器皿	15	3.2	口縁はやや外反して立ち上がり，端部を丸くおさめる。	内・外面を丁寧にヘラミガキ。底部には削り痕をとどめる。	砂粒の混入がめだつ。焼成は良く橙色を呈す。
16		土師器甕	12.4	8	器高に比して口径が大きい。短く外反する口縁をもつ。球形の体部。	肩部に削り痕をとどめる。ユビオサエによる成形を主体としナデにより仕上げ。	砂粒の混入多い。暗茶褐色を呈す。
17	P.9	須恵器杯	14.1	6.6	わずかに外湾して立ち上がる口縁。高台は体部と底部の屈曲部に接する。	底部ヘラ切り痕。ナデにより最終調整を行う。	胎土は良好。堅緻で晴青灰色を呈する。
18	P.13	須恵器壺	19	15	大きく外反する口縁を有し，端部を上方に拡張する。胴部は体部最大径部分で屈曲する。外方に張り出すしっかりした高台をもつ。	最大腹径部に沈線を1条施す。	胎土は良好。焼成堅緻。青灰色を呈す。

注1　調査補助員・整理員・作業員として調査に参加して戴いた方々は以下の通りである。

（以下，順不同・敬称略）

千代川遺跡第9次　青井　敏・榎　康史・菅沼和行・富田　宏・内藤正裕・西村健司・山口文吾(調査補助員)，田中智子・並河智実・石原俊子(整理員)，八木初次・美馬幸大・川勝　修・俣野ふじを・俣野利江・山内きくの・八木まさ子・八木美重子・八木よし子・山内タカ子・原田敦子・松山晃子・野々村礼子・八木淑子・八木千代江（作業員）

北金岐遺跡　細川康晴・村山一弥・甲田陽亮・久保雅彦・内藤正裕・牧野淳司・山本雄二(調査補助員)，豊岡卓之・村山一弥・細川康晴・西原俊子・田中俊子・並河智実・田代美穂子・広瀬順子・浅田芳子・堀井幸子・河原恵子

・久保雅彦（整理員）

小金岐古墳群　甲田陽亮・木村明央・内藤正裕・牧野淳司・山本雄三・青井　敏・中坪央暁・加藤隆也・西村健司・富田　宏(調査補助員)，細川康晴・村山一弥(整理員)，八木初次・田中格一・真継千代江・八木まさ子・八木美重子・山内タカ子・原田敦子・山木美代子・野々村美さを・野々村礼子・松山晃子・八木淑子・松山菊栄・八木よし子（作業員）

注２　第11図作成及び各々の遺構群は以下の文献に拠った。
京都府教育委員会編『京都府遺跡地図』 1972
村尾政人ほか「国道９号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』京都府教育委員会） 1977
村尾政人ほか「国道９号バイパス関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第７冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1982

注３　木下　良「丹波国府址」(『古代文化』16-2） 1966.2

注４　本年度の調査は，対象地の東半部，つまり中央の道路の東側を主な対象地としたが，補足的にNo.15•16トレンチを西半部へ入れた。
また拝田丘陵裾の谷部について，地元の古老の話によると，かって拝田峠へ通ずる道を拡幅した際，多数の遺物（瓦器片等）が出土したとのことであった。

注５　調査成果からみると，細かな地形の凹凸がかなりみられたため，今後調査がすすめばかなり細かな地域毎に区分しうるかも知れない。

注６　このことは，黒褐色土の堆積後，つまり中世期以降に当地域の開発（耕作地化及び居住地化）が急速に進行したことを示していると考えられる。その結果，多くの部分で黒褐色土に手が加えられ，削平等による整地が行われたようである。

注７　住居跡がいくつか重複しているとすれば，その切り合いを明確にし各々に遺構番号を付すべきであるが，検出部分ではそれらを明確に把握できなかったため，ここでは，ＳＨ0301と一括して報告する。

注８　大型杯身については，集落内で使用された祭祀的な器であるという論もある。
（山崎秀二「大型蓋坏の１・２の問題について」(『滋賀文化財だより』90　(財)滋賀県文化財保護協会） 1984.7

注９　釉の色は異なるが，篠窯跡群中の黒岩１号窯跡出土品の特徴の１つとして高台部内側の底部外面に刷毛状工具によって一部分釉が塗られているとのことであるが，これにも，その特徴がみられる。

注10　注３と同じ
ここで堀状の落ち込みとされる部分は，周囲の水田より約0.5～1m程低い幅約10m前後の水田となり，帯状に東西に連なっている。
機能としては，拝田丘陵より流出する地下水をここで止める役割をもつと考えられる。

注11　石井清司・森下　衛「北金岐遺跡Ｂ地点出土の大溝について」(『京都府埋蔵文化財情報』第11号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1984.3

注12　注１と同じ

注13　村尾政人ほか「国道９号バイパス関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第７冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1983

注14　石井清司「篠窯跡群出土の須恵器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第７号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1983.3

注15　村尾政人ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第7冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1983
注16　『亀岡市史』上巻　亀岡市史編纂委員会編　1960
注17　『すいじがい』14　同志社大学考古学実習室　1976
注18　注17と同じ
注19　森　浩一編『園部垣内古墳調査概報』　園部町教育委員会　1973
注20　小池　寛「府下遺跡紹介　9.千歳車塚古墳」(『京都府埋蔵文化財情報』第6号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982
注21　注16と同じ
安井良三「口丹波方墳出土の古鏡に対する一考察」(『古代文化』1-4)　1957
注22　『京都府遺跡地図』京都府教育委員会編　1972
注23　堤圭三郎「昭和50年度国道9号バイパス関係遺跡調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1976)』　京都府教育委員会)　1976
注24　引原茂治ほか「医王谷3号墳・医王谷焼窯跡」(『京都府遺跡調査概報』第7冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1983
注25　堤圭三郎ほか「昭和51年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』　京都府教育委員会)　1977
注26　注16と同じ
『亀岡市文化財調査報告書』第13集　亀岡市教育委員会　1984
注27　『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会　1980
注28　辰巳和弘「密集型群集墳の特質とその背景一後期古墳論(1)一」(『古代学研究』100号　古代学研究会)1983.7
注29　田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(平安学園考古学クラブ)　1966
注30　安藤信策「国道9号バイパス関係遺跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』　京都府教育委員会)　1979
注31　注25と同じ
注32　注30と同じ
注33　『南桑田郡誌』　京都府教育委員会南桑田郡部会　1924
注34　注25と同じ
注35　注30と同じ
注36　注24と同じ
注37　『京都府船井郡園部町天神山古墳群現地説明会資料』　園部町教育委員会　1985.3
注38　『湯舟坂2号墳』　久美浜町教育委員会　1983
注39　『高浪古墳発掘調査概報』　野田川町教育委員会　1985
注40　森岡秀人「追葬と棺体配置一後半期横穴式石室の空間利用原理をめぐる二・三の考察」(『関西大学考古学研究室開設30周年記念　考古学論叢』関西大学)　1983
注41　注25と同じ
注42　田代　弘「府下遺跡紹介29.坊田古墳群」(『京都府埋蔵文化財情報』第16号　財団法人埋蔵文化財調査研究センター)　1985

3. 木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要

1. はじめに

京都府相楽郡木津町の東部に広がる丘陵地域は，十数年前から住宅・都市整備公団による開発事業が計画されていたが，昨今，関西学術研究都市構想が持ち上がり，その関連事業の一部が実施されることになった。

ところで，この東部丘陵上に数多くの貴重な埋蔵文化財が存在することは，付表6のように，すでに昭和57年度の京都府教育委員会の分布調査でも明らかにされている。(注1) この調査結果に基づき，開発事業と遺跡保存の調和をはかるための覚書が京都府教育委員会と住宅・都市整備公団との間で締結され，現地の発掘調査については，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが担当することになった。初年度に当る昭和59年度は散布地として登録されている3か所の遺跡の試掘調査と，すでに半壊状態にある古墳などの発掘調査をすべく，現地調査事務所建設をも含めて，昭和59年7月16日から現地調査に着手した。調査は，調査課主任調査員松井忠春・同調査員小山雅人・戸原和人・黒坪一樹が担当した。(注2)

2. 位置と環境

遺跡が分布する木津町東部丘陵は京都府相楽郡木津町に所在し，その対象地域は木津町の総面積の約1/2を占める膨大な面積である。すなわち，北側は蕩々と流れる木津川に面し，東側は同郡加茂町に接し，南側は奈良県境となり，西側は沖積平野の広がる木津町の町並に続き，南側に横たわる奈良山丘陵には急速度で都市化が進む平城ニュータウンが控える，緑の多い丘陵地である。

この丘陵地周辺には著名な遺跡が多い。その様子を概観してみよう。木津川の北岸，相楽郡山城町には三角縁神獣鏡32面が発掘された古代史上著名な椿井大塚山古墳や法起寺式伽藍配置をもつ高麗寺跡，加茂町には恭仁宮跡や山城国分寺跡，南方の奈良山丘陵には官窯である歌姫瓦窯跡や音如ケ谷瓦窯跡などがあり，越えて佐紀盾列古墳群から奈良時代の都平城京跡を抱き，西方丘陵には扁平鈕式袈裟襷文銅鐸が出土した相楽山遺跡，中央部の沖積平野には奈良時代の外港としての上津遺跡等の諸遺跡が分布する，歴史上極めて重要な地を占めている。

(松井忠春)

大里
高麗寺跡
山城町
伊賀街道
奈良水道水源池
上狛
奈良線
泉大橋
上津
和泉式部墓
木津
畑
燈籠寺
木津町
城戸
岡田神社
市坂
下梅谷
美加原
梅谷
磐羅坂
奈良街道
0
1.5km

第60図　遺　跡　分　布　図

3. 調査の方法

木津地区東部丘陵地域における発掘調査は，住宅・都市整備公団の宅地開発事業に伴う事前調査である。開発対象地域は，木津町東部丘陵の木津川以南から奈良県境までの南北約6 km，木津町市坂の上人ケ平から加茂町境までの東西約3. 0kmで，総面積は約869haに及ぶ。この地域内に所在する遺跡は，昭和57年度に行われた京都府教育委員会の分布調査によって56遺跡が確認されている。その内13か所については今回の開発対象外に当るため除外されるが，それでも合計43か所にのぼる遺跡が開発対象地内に所在することになる。これらの調査は多年度にわたって継続されるため，調査を始めるにあたって，資料の統一的な表示，記録の方法を採用しなければ，将来，資料の活用に混乱が生ずることが予想された。これらのことを解決するためいろいろ検討を加えた結果，以下の調査と記録の方法を採用することとした。

1. 調査対象地内の地区割を大字・小字によって分ける。大字をアルファベット1文字で示し，小字をアルファベット2文字で示すこととする。同一大字区内で同音の小字が生じた場合は混乱をさけるため緯度が南のものを別記号で示す。

2. 1で示した散布地における字表示のさらに小さい単位として一筆ごとの地番を数字と「番地」の略号bt.で示すこととする(釜ケ谷遺跡18番地をKKN18bt. と示す)。

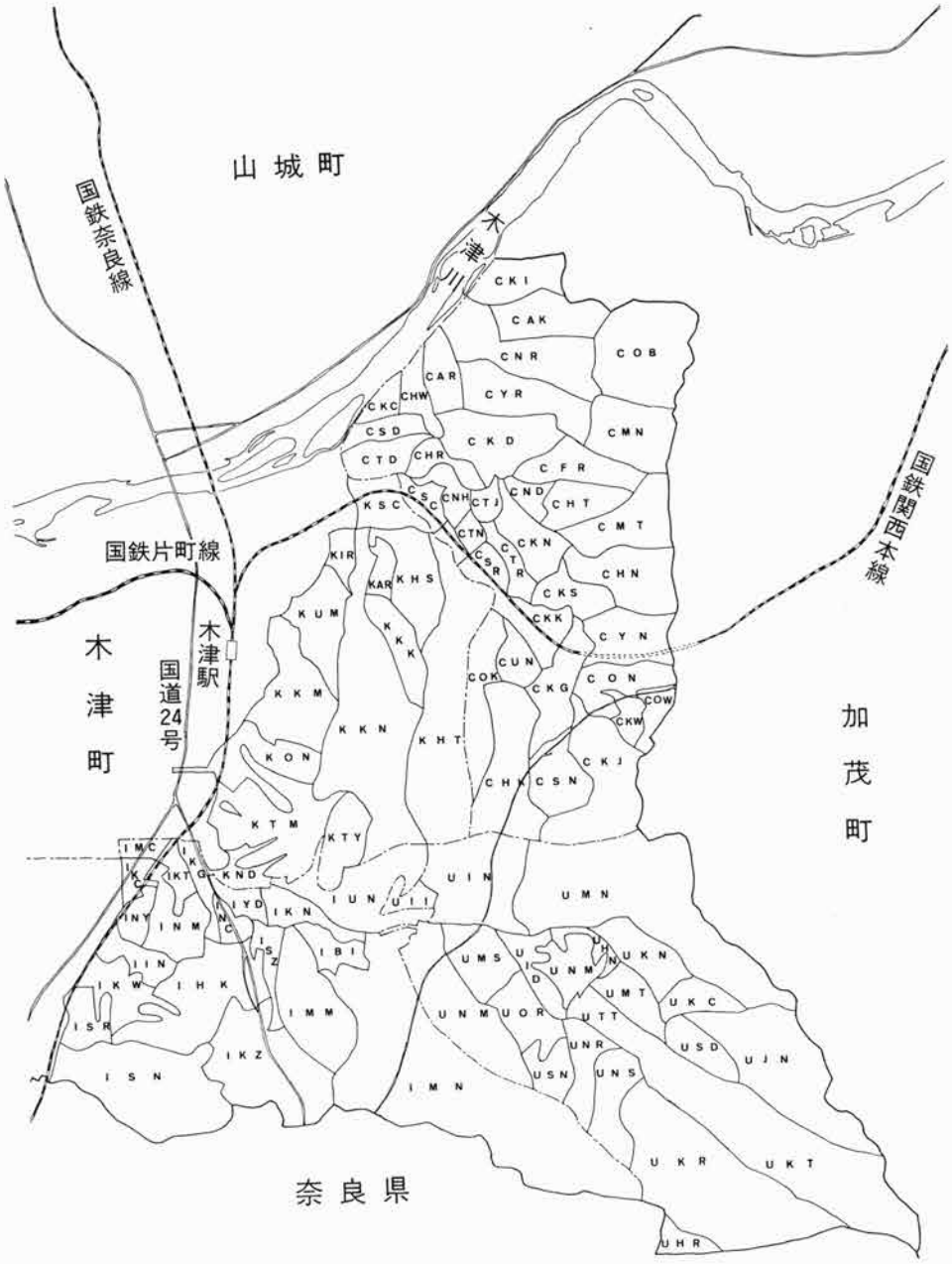
3. 遺跡の性格の明らかな古墳・窯跡・城跡については1とは別に個有の記号をあてる。すなわち，アルファベットの第1文字で遺跡の所在する大字，第2文字で遺跡の種類(古墳—X・窯跡—P・城跡—C)を示し，第3文字で遺跡名の頭文字を表わす。古墳等複数に及ぶものについては，アルファベットの後に号数をアラビア数字で示すこととする(第6表)。

4. 各調査区での小地区割は，基本的には3 m方眼割りとし，調査地の西から東へ数字，北から南へアルファベットを打ち，西北隅の杭をその地区名とする。また，試掘調査の小トレンチを設ける場合，地区内での任意の割付けを行った場合でも，後で国土座標に換算できるようにする。

5. 遺構の表示は，奈良国立文化財研究所の表示方法に従うが，遺構番号は随時調査の進行によって変えることがある。

6. 測量は，住宅・都市整備公団がX＝−145,000・Y＝−18,000を基本として設けた3級測量点及び4級測量点の国土座標を，標高は，同点に設置されたものを使用するものとする。以上の調査と記録の方針に従って試掘・発掘調査を進めていくこととするが，今後の調査によって新たに発見された遺跡については，随時登録していくことにする。

(戸原和人)



第61図　木津町東部の小字地図（1/30,000）

(1) 赤 ケ 平 遺 跡

1. は じ め に

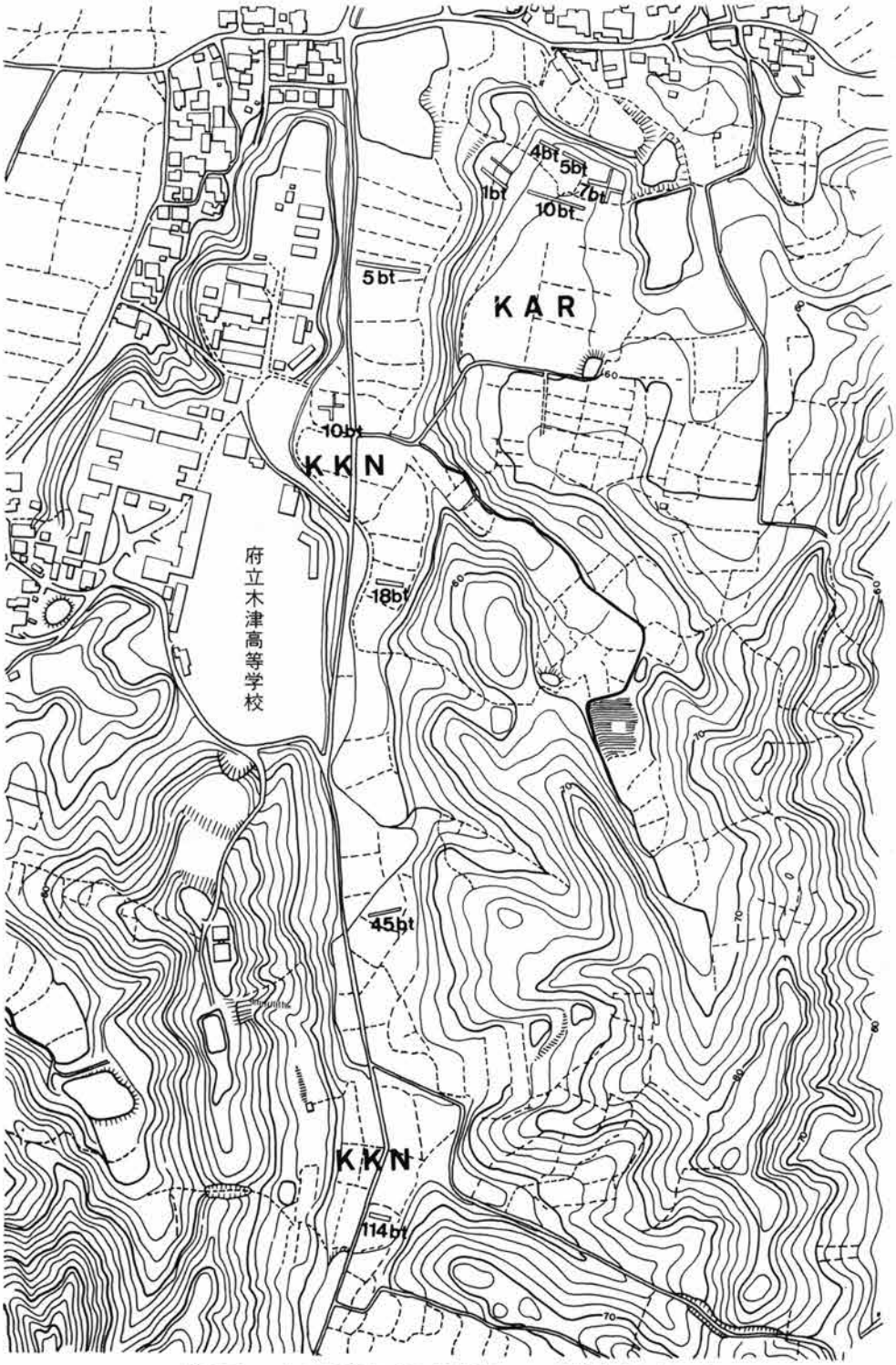
本遺跡は，北西から南東方向に深く続く谷(釜ケ谷)を南西に見下ろす丘陵上の縁辺部に立地する。この谷と並行して，燈籠寺遺跡や木津城などの遺跡を有する内田山丘陵がのび，本遺跡の丘陵と面している。京都府教育委員会の分布調査ではサヌカイトの剝片類などが採取され，丘陵上に広がる遺跡の存在が予想されていた。今回の調査区は，丘陵斜面地と，斜面が丘陵上平坦地に移行していく地点に当っている。標高は最も高い所で約57mである。調査(掘削)面積は，細長いトレンチの合計で366m²となった。

2. 調 査 経 過

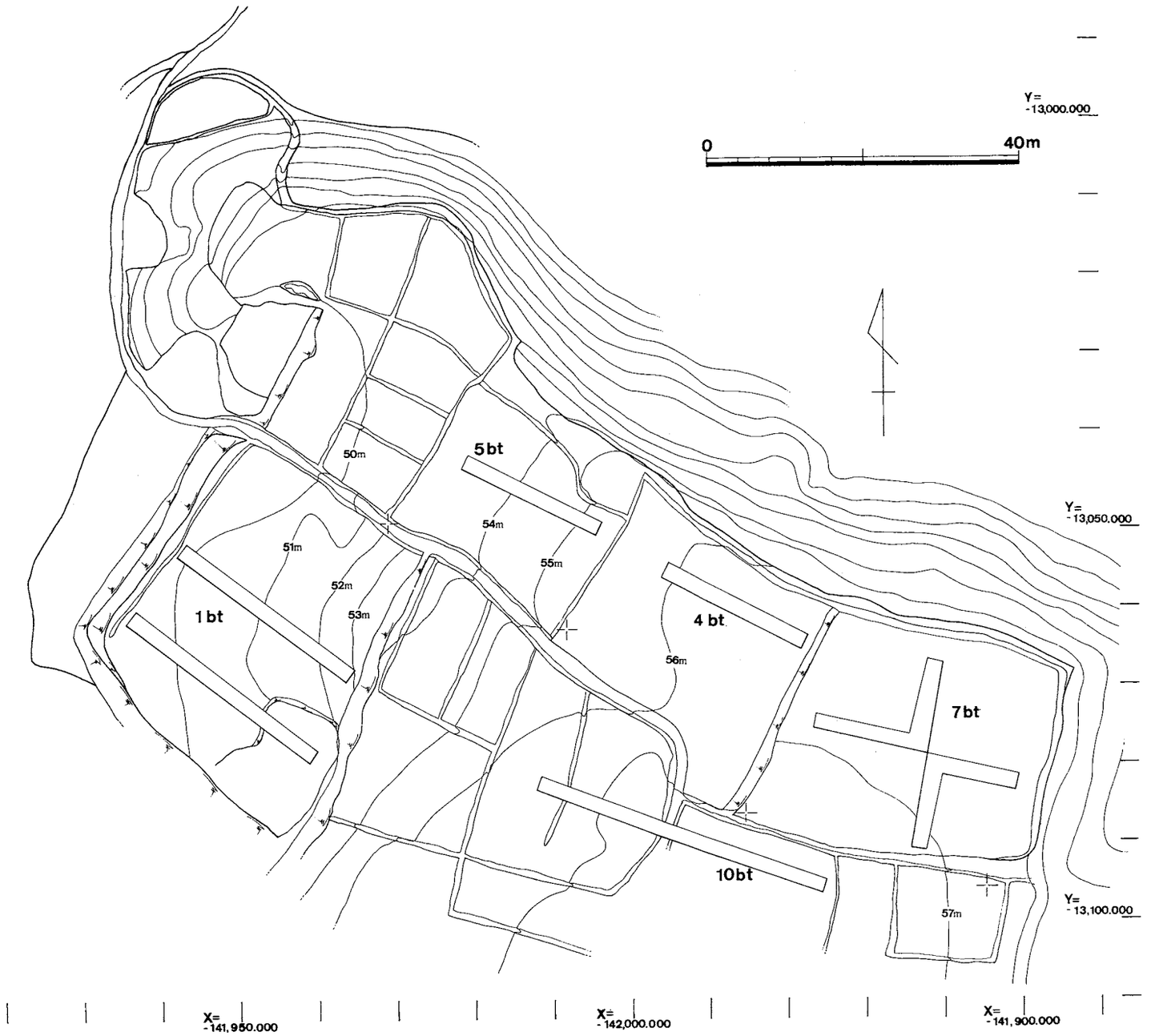
各トレンチの掘削は，丘陵裾部に未買収地が入り込み，重機の搬入がかなわなかったことや，耕作地や竹林による土取りなどで地形に起伏がみられるものの，地山面（岩盤）までの深度が浅かったことなどからすべて人力で行った。しかしながら，とりわけ竹林伐採後の掘削は大変に手間取り，地山面にまで深々と達してしまった根起こし穴に閉口するのも度々であった。表土および第2層に当る灰褐色土を除去すると，黄褐色系の粘質土があらわれる。この黄褐色粘質土(第3層)と同層中に局部的に存在するやや赤味を帯びた粘質土塊から，弥生土器片や石器類が出土した。トレンチは全部で7本入れ，各々の名称は地番をそのまま付して呼称している。遺物の大部分は7番地に集中しているが，10番地の東部(丘陵斜面上位)からも若干出土している(第69図)。遺構としては明確なものを確認していないが，柱穴状の掘り込み群を10番地にて検出している。丘陵裾部に近い1番地からは，表土層に包含されていた棧瓦片・伏見人形・陶磁器片などが出土した。これらは近・現代の瓦礫と混在し，当時の層位学的な関係を追求し得る資料ではない。丘陵斜面地の4・5番地では，表土層中のものを除き，遺物の出土をみていない。なお，地山面までの掘削深度は，いずれのトレンチも40cm足らずである。

出土した弥生土器と石器類については，原位置がわかるように，1点ごとの出土地点をトレンチ北壁および西壁から測定・記録し，後にカード化した。排土中からも，もれた石器砕片類を可能な限り採取した。

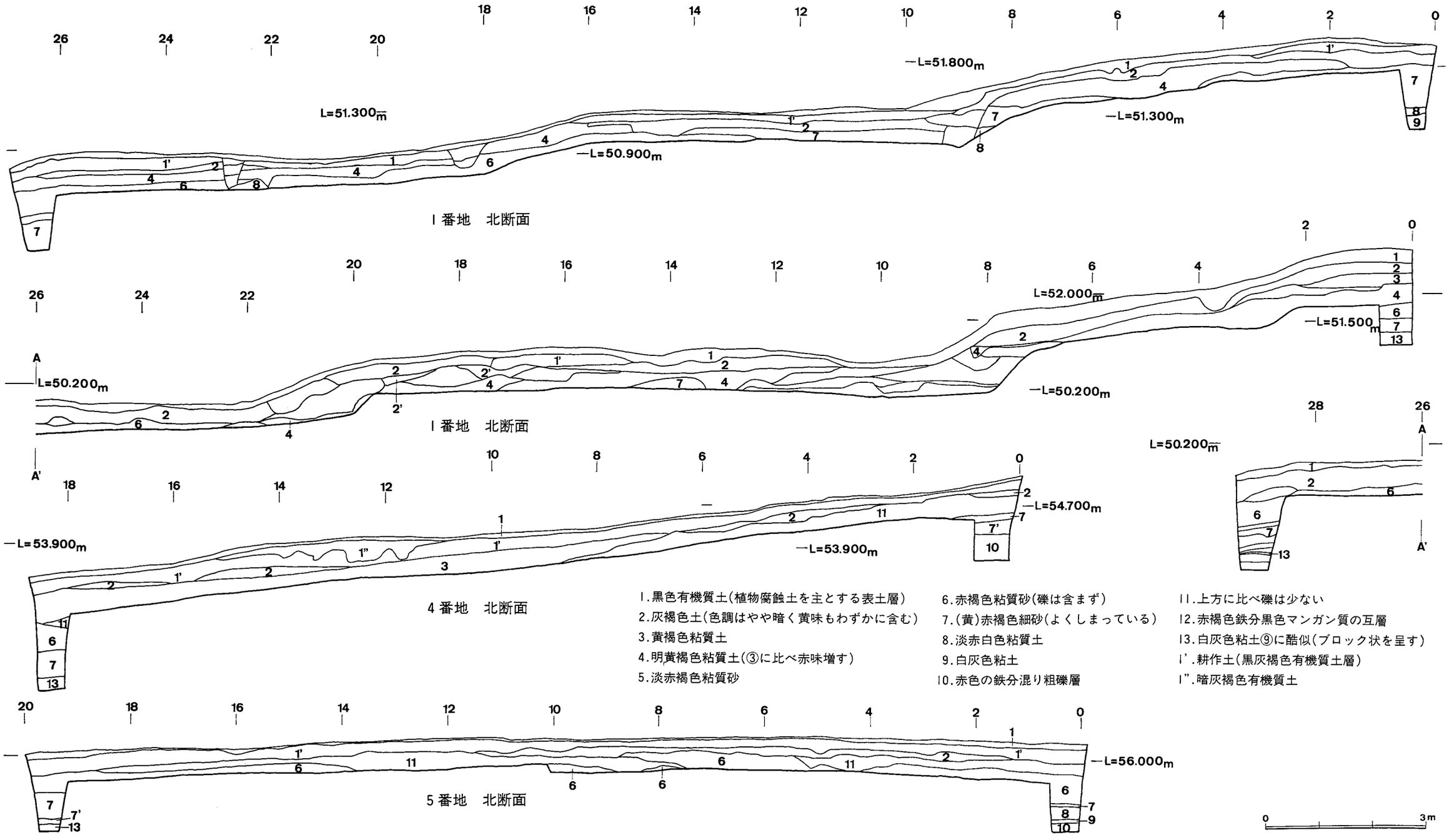
トレンチ周辺部の地形測量，写真撮影，遺物のとり上げ作業を行い，最終的な断ち割り溝を各トレンチの壁面直下に長く入れた。下層における遺構・遺物の有無を調べ，土層の断面実測と写真撮影をし，2月20日に調査を終了した。



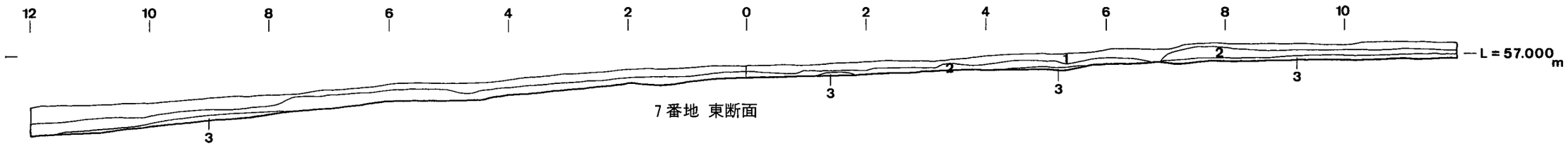
第62図　赤ケ平遺跡・釜ケ谷遺跡トレンチ配置図（1/5,000）



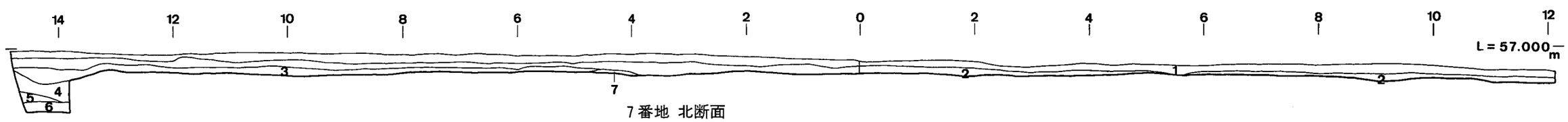
第63図　赤ケ平遺跡トレンチ配置図



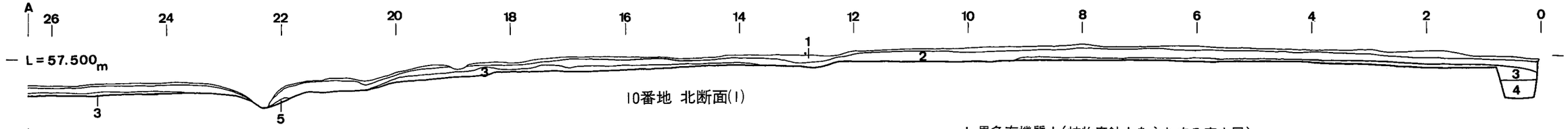
第64図　赤ケ平遺跡 1・4・5 番地断面実測図



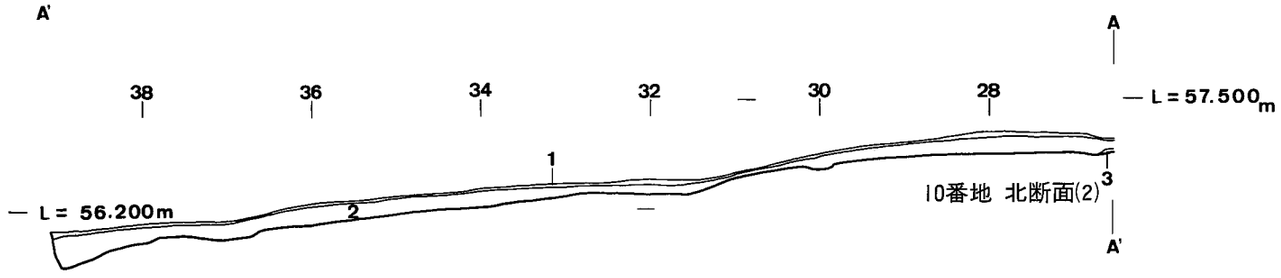
7番地 東断面



7番地 北断面



10番地 北断面(1)



10番地 北断面(2)

1.黒色有機質土(植物腐蝕土を主とする表土層)
2.灰褐色土(色調はやや暗く黄味もわずかに含む)
3.黄褐色粘質土
4.明黄褐色粘質土(③に比べ赤味増す)
5.淡赤褐色粘質砂
6.赤褐色粘質砂(礫は含まず)

第65図　赤ケ平遺跡 7・10番地断面実測図

0 3m

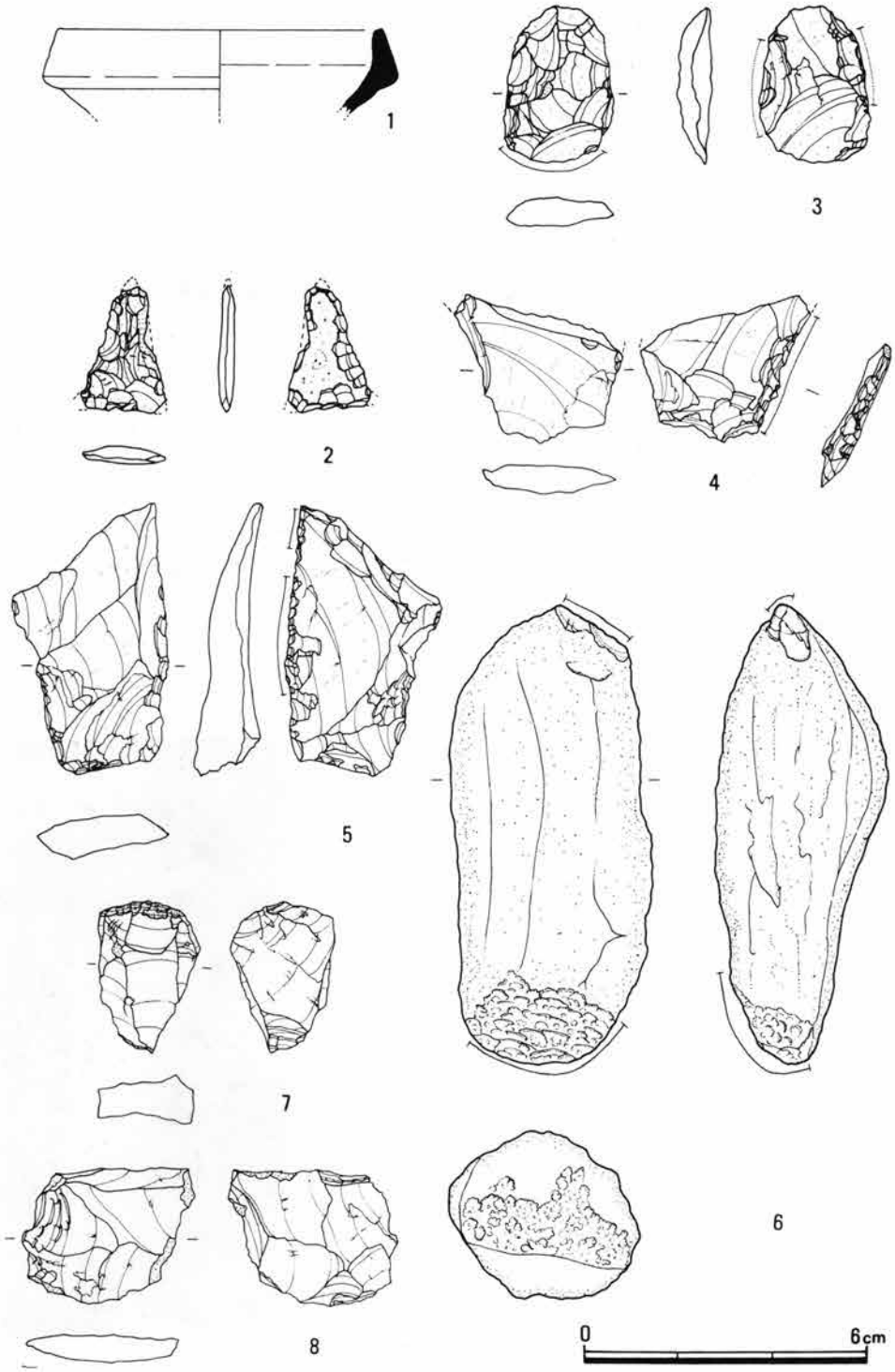
3. 層　　位

各トレンチの土層の堆積状況を観察し，最も出土点数の多い石器類がどの層に多く含まれているか，明確にしておきたい。すべてのトレンチにおける土層堆積状況は，第64・65図に示した通りである。(注3) 基本的な層序は，大きく11に分層して説明することができる。上層から順に列記すると，1. 黒色有機質土(表土)，2. 灰褐色土，3. 黄褐色粘質土，4. 明黄褐色粘質土，5. 淡赤褐色粘質砂，6. 赤褐色粘質砂，7. (黄)赤褐色細砂，8. 淡赤白色粘質土，9. 白灰色粘土，10. 暗赤褐色粗礫，11. 赤褐色粗礫である。第1・2層は腐植土および畑地耕作土である。第3層からは弥生土器および石器類が出土しており，遺物包含層として重視される。粘性を帯びた黄褐色土で厚さは15～25cmを測る。下位にいくほど遺物は多くなり，若干の炭化物も含んでいる。この層中には，やや赤味を帯びた粘質土塊が含まれる。7番地トレンチでのみ観察され，粘性は第3層よりも強い。この層中からも石器類の出土がみられる。第4層は，赤味がかった明るい色調で，第3層と同様に砂礫を含まない粘質土である。遺物の出土はみられない。厚さは約30cmを測る。第5層は堅くしまった細砂層である。約45cmの厚さで堆積し，遺物の出土はない。次の第6層から下層は地山を形成している層で，礫の堆積層や鉄分の沈澱層が続いていく。

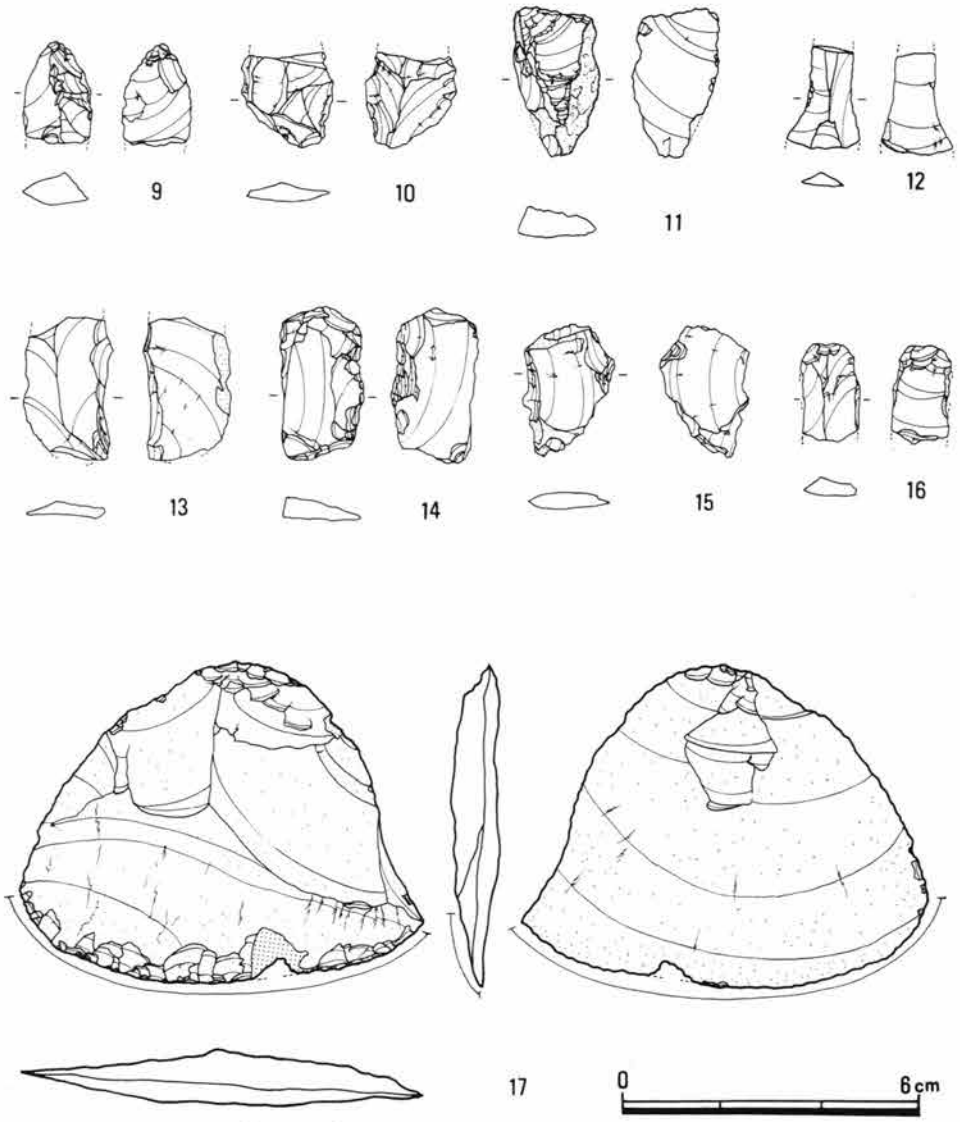
4. 検 出 遺 構

10番地東端部は，丘陵斜面から丘陵上平坦地に移り変わる所で，標高約57mを測る。柱穴状遺構群はここに存在する(第66図)。第3層上面から穿たれたもので，直径は10～30cmまでのものがあるが，大部分は15cm程度である。深さは削平を受けたらしく，20cmに満たない浅いものが多い。埋め土は暗黄褐色粘質土である。不規則な存在状況を示すこと，掘り込み内からの遺物が皆無であること，さらに周辺の遺物分布状況がはなはだ稀薄であることなどから，建物としては確認できず，時期についても明らかにできない。第3層は7番地にみられるように，弥生土器片と石器類を共伴する層であり，この10番地からも微量ながらサヌカイト剝片が分布する。互いに近い時期のものとみられるが，こうした使途不明な遺構の時期の決定については，周辺部を含めた本格的な調査を待って慎重に判断すべきであろう。

第66図　柱穴状遺構検出状況(10番地)



第67図　赤ケ平遺跡出土遺物実測図 (1)　縮尺 2/3（1のみ1/3）



第68図　赤ケ平遺跡出土遺物実測図(2)
17.横形削器（釜ケ谷遺跡出土）

5. 出土遺物(第67・68図，図版第35-2)

出土遺物は，弥生土器片・石器類・土師質皿片・陶磁器片などである。これらのうち弥生土器片と石器類以外のものは主に1～4番地内で，丘陵斜面地からの出土である。なお，斜面を西側に下った裾部から須恵器の甕片(古墳時代)を採取している。しかしながら，これらの焼かれた窯跡の痕跡等については確認できなかった。今回は，層位学的な関係が把握された弥生土器片と石器類についてのみ，報告するにとどめたい。

弥生土器片(第67図１)は,壺形で口縁部推定径は約14cmを測る。口縁部はその中間から直に近いたち上りをみせて，内面は滑らかなナデ調整が施される。外面の調整はミガキのようであるが，器壁の剝落が激しく不明瞭である。胎土は比較的良好である。なお，色調は暗赤褐色を呈している。時期は中期に属するものであろう。このほかには，破片が２点のみ出土しているにすぎない。

石器類(第67・68図)は，合計53点出土している。これらの器種ごとの内訳は，石鏃１点，スクレイパー１点，加工痕ある剝片２点，槌石１点，剝片・砕片48点である。

２は凹基式の石鏃である。残存長2.7cm，残存幅1.8cm，厚さ4mmを測る。裏面は自然面を大きく残し，縁辺部からの剝離痕が若干見られる。基部の抉りは極めて浅い。基部の両末端部と先端部は若干欠損している。サヌカイト製で重量は0.8ｇである。

３はスクレイパーで，長さ3.2cm，幅2.3cm，厚さ7mmである。背面側は，剝離面がほぼ全周に及び，念入りに加工されている。主要剝離面側は，長軸方向に沿う両側縁部に打撃による階段状剝離痕が認められる。加工痕的な性格が強いものと言える。鋭い縁辺部となった一先端部を刃として用いたものであろう。サヌカイトを用いる。重量は6.0ｇである。

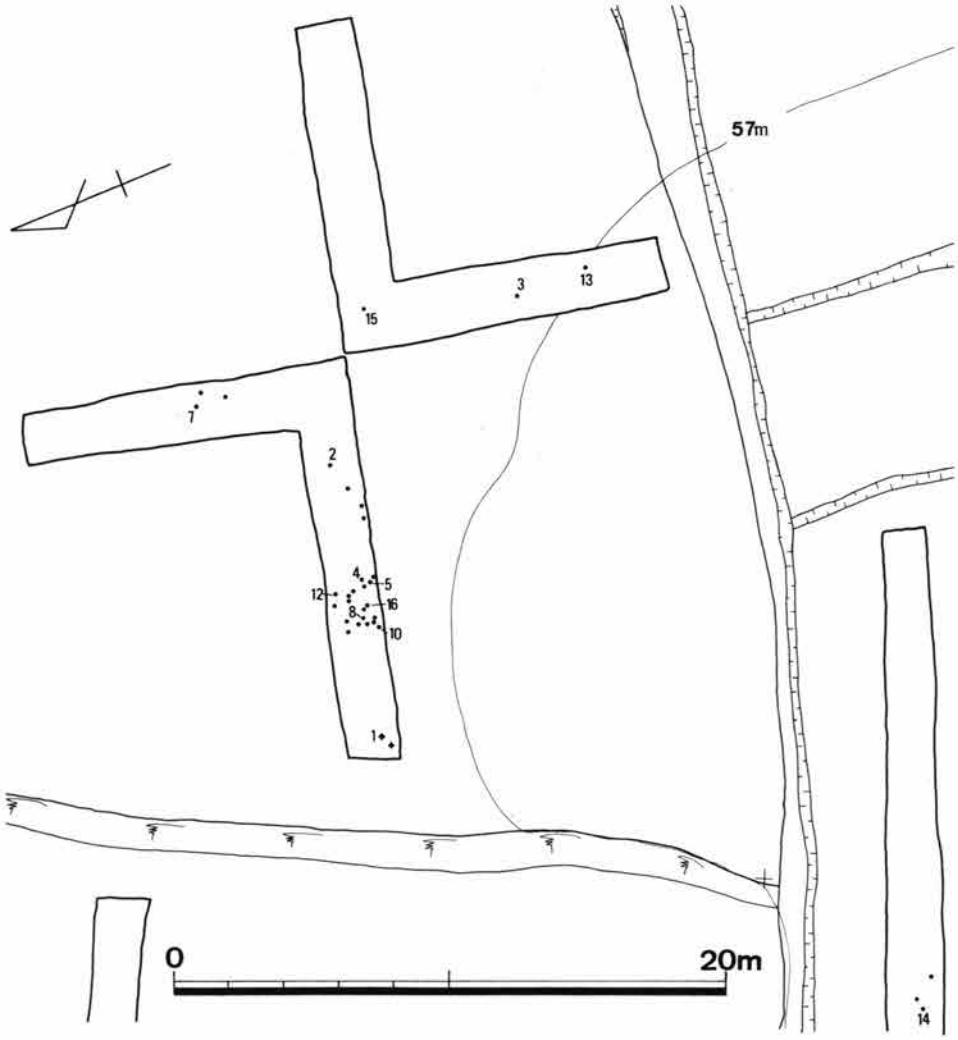
４は加工痕のある剝片である。残存長3.9cm，残存幅2.8cm，厚さ５mmの大きさである。ほぼ半折の状態で大きく欠損している。一側縁部に細かな剝離による加工痕を明瞭に留めてる。この部分を刃部とする削器と言える。石材はサヌカイトを使用し，重量は5.8ｇを測る。

５も加工痕のある剝片である。長さ5.7cm，幅3.2cm，厚さ９mmである。全体形は両側縁部から大きく取られた剝離面により形成され，長い方の側縁部に細かな加工痕を留める。斜めに尖った先端部を刃として使用したものであろう。サヌカイトを素材とする。重さは14.0ｇである。

６は槌石である。長さ9.6cm，幅4.1cm，厚さ3.7cmを測る。自然石を用い，一先端部にあばた状の使用痕が観察される。もう一方の先端部には，打撃による剝離痕を留めている。石器製作用の工具として用いられたものであろう。石材については不明である。重さは155ｇである。

７～16は剝片類である。小さなものが多く，長さ・幅とも4cmを超えるものはない。石材はすべてサヌカイトである。

17は大型の不定形削器である。(注4) 長さ6.4cm，幅8.0cm，厚さ1.0cmの大きさである。上方の打点から打ち剝がされた薄い剝片を素材とする。上端は比較的念入りな調整が施されている。下端は細かな浅い剝離痕により，刃部が明瞭につけられている。主要剝離面側の刃部には剝離面がまわらない。これも石材はサヌカイトで，重量は40ｇを測る。



第69図　赤ケ平遺跡７・10番地遺物分布図（数字は第67・68図に対応）

6. ま　と　め

今回の調査における最も重要な成果は，標高55～60mという小高い丘陵上に営まれた遺跡(弥生時代中期)の存在を予想し得た事である。遺構は明確なものではないが，遺物として弥生土器と石器類の出土をみた。しかも，主に黄褐色粘質土(第３層)中に共伴することを明らかにし得た点で意義があろう。弥生土器は壺の口縁片，石器群は石鏃・削器・槌石などを主な内容とする。点数は少ないが，生活跡の広がりを考えるに十分なものと言える。今後の調査に当っては，当該期の遺構・遺物の検出に意を注ぐ必要がある。

弥生土器および石器類の分布状況を地形的にみると，先述の如く出土トレンチは７番地と

付表5　石器（剥片・砕片）計測表

	長さ(残存長)	幅(残存幅)	厚さ(残存厚)	重さ・g	出土トレンチ	挿図番号
1	3.1	1.7	0.7	8.0	7bt	第67図-7
2	2.3	0.8	0.3	0.9	〃	
3	(2.8)	(3.5)	(1.5)	6.5	〃	
4	1.1	1.8)	0.3	0.9	〃	
5	(2.4)	(4.1)	(0.6)	0.6	〃	
6	3.7	(3.0)	(0.8)	7.2	〃	第67図-8
7	1.2	0.7	0.2	0.4	〃	
8	3.2	1.6	0.7	5.0	〃	
9	2.1	1.5	0.3	1.1	〃	
10	2.6	1.4	0.5	1.0	〃	
11	(2.0)	(0.6)	(0.6)	1.7	〃	第68図-9
12	1.4	0.5	0.6	0.6	〃	
13	0.9	0.8	0.1	0.2	〃	
14	2.5	1.2	0.3	1.5	〃	
15	1.7	1.4	0.4	1.0	〃	
16	1.2	1.6	0.4	1.1	〃	第68図-10
17	3.0	1.8	0.7	3.5	〃	第68図-11
18	0.9	0.5	0.1	0.5	〃	
19	1.4	0.5	0.2	0.6	〃	
20	0.7	0.6	0.1	0.2	〃	
21	1.1	0.8	0.2	2~3	〃	
22	3.2	1.6	0.5	3.0	〃	
23	1.6	1.0	0.2	0.7	〃	
24	2.0	1.5	0.3	0.6	7bt	第68図-12
25	1.5	1.2	0.2	0.9	〃	
26	1.0	0.9	0.2	0.3	〃	
27	1.8	1.4	0.4	1.2	〃	
28	2.9	2.0	0.3	1.5	〃	第68図-13
29	1.3	0.9	0.1	0.5	〃	
30	1.7	1.1	0.3	0.8	〃	
31	1.5	1.0	0.2	0.8	〃	
32	1.6	2.1	0.3	0.9	〃	
33	2.0	1.6	0.5	1.5	〃	
34	3.0	1.6	0.4	4.0	10bt	第68図-14
35	(4.1)	(2.4)	(0.7)	2.2	7bt	第68図-15
36	1.3	0.8	0.1	0.4	〃	
37	3.7	1.7	0.8	3.5	〃	
38	0.5	1.7	0.2	1.6	〃	
39	1.2	0.9	0.1	0.4	〃	
40	1.1	1.7	0.2	0.5		
41	1.7	1.3	0.2	0.8	〃	
42	2.9	4.9	6.5	4.5	10bt	
43	2.5	1.7	0.4	1.6	7bt	
44	1.7	1.2	0.3	0.9	〃	第68図-16
45	1.4	1.7	0.2	0.9	〃	
46	2.7	2.3	0.6	4.1	10bt	
石材はすべてサヌカイト。長さはすべてcm。						

10番地に限られている。このうち10番地トレンチでの出土地点は，より標高の高い東半分からである。一方，最も遺物量の多い地点は，7番地トレンチの中心から西方向にのびた所で，ここに全体の50%近い資料が集中する。若干のサンプリング・エラーはあるものの，遺物分布密度はこの集中部から離れるに従って稀薄になる傾向がある。この付近は標高約57mを測り，丘陵縁辺部に当っている。標高56m以下では斜面に移行してしまうために遺物の出土はみられない。

なお，分布状況からみた弥生土器と石器類の関係は，調査面積が狭く，出土点数が少ないために言及し得ない。弥生土器は石器分布範囲からやや離れて出土したが，周辺部を広く調査しないと分布域の相関はわからない。

赤ケ平遺跡周辺地域では，木津城跡の下層から弥生土器片が採集されたのを始め(注5)，木津高校地内からも前期・後期の遺物の出土が報告されている(注6)。このように弥生時代の長い期間にわたって遺跡の存在する環境が，当地域には形成されていると言える。南山城全域に広く点在する丘陵上の集落遺跡の一つとして，赤ケ平遺跡は重要な遺跡となろう。（黒坪一樹）

(2) 釜 ケ 谷 遺 跡

1. は じ め に

本遺跡は，木津町東部丘陵の北寄りに位置し，府立木津高等学校の所在する内田山の南北にのびる丘陵と，通称峠地区から南北にのびる丘陵とにはさまれた，幅100m，長さ900mの南北に細長い谷水田地帯に所在する。西の府立木津高等学校敷地内には，弥生時代前期から江戸時代まで断続的に営まれた燈籠寺遺跡が知られ，同時に同丘陵上で5世紀前半から6世紀にかけて営まれた内田山古墳群が確認されている。[注7] また，東側の丘陵では，土師器・須恵器・サヌカイト剥片などが散布する白口遺跡・赤ケ平遺跡が知られている。釜ケ谷遺跡では，土師器・須恵器の散布が知られ，周囲の丘陵上に営まれた遺跡との関わりの中で何らかの遺構(例えば水田遺構など)の存在が予想された。また，周囲は花崗岩の風化によって形成された低位段丘であるため，釜ケ谷川によるかなりの堆積が予想された。

2. 調 査 経 過

今回の調査は，遺構・遺物の分布の状況を確認するための試掘調査である。調査地区はなるべく広範囲に広げる必要から，土地所有者の承諾のとれた水田のうち，第62図で示した合計5か所についてトレンチを設定した。調査地域は現在も水田が営まれており，調査終了後も再び水田として使用するということである。そのため各調査地区では耕作土，床土以下すべての土を塩化ビニールシートの上に分けて盛り，調査終了後は塡圧機によって随時叩き締めながら復旧作業を行った。掘削及び埋め戻しはすべて人力によった。

調査は，昭和59年12月24日，5番地の水田より開始し，翌昭和60年1月9日までに114番地の水田まで，合計5か所の調査区を設け，昭和61年3月25日に現地埋め戻しを終了した。

(1) 5番地　本遺跡調査区中最も北に位置し，南から北に向かって流れる釜ケ谷川によって形成された谷の中位にあたる。トレンチは2×45mを東西に配し，深さ1.6mに及んだ。調査地西端の断ち割りは2.2mまで行った(第70図)。土層を概観すると，第1層は現耕作土層，第2層が床土で，以下第6層までが青灰色系のシルト質である。第6層上面では1度洪水にみまわれており，人の足跡や牛の蹄跡に砂が流れ込んでおり明瞭に判別される。また，第6層中からは天目茶碗片(第72図9・10)が出土している。第7層以下は砂質が強くなり，第15層で砂礫層となる。第8層で灰白磁片(第72図6)，第11層で須恵器杯片(第71図2)，ミニチュア壺(第72図3)などが出土している。

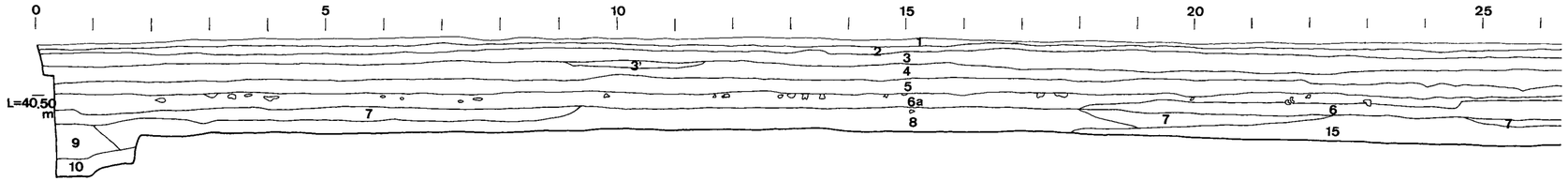
(2) 10番地　当地より南東方向には通称「地獄谷」と呼ばれる谷が深く切り込み，かつて

この地で戦が行われ多くの人が死んだという言い伝えがある。また，２枚北の水田脇には，釜ケ谷川の改修を行った折に発見された石造仏が祀られている。さらに西側では南北にのびる丘陵の斜面部が大きく西に入り込んでおり，現釜ケ谷川もこれに平行して大きく西へ張り出す(第63図)。南から北流してきた釜ケ谷川の流れが地獄谷からの流出によって大きく西へ曲げられ，攻撃面となったこの地が幾年にもわたって削られたためであろう。調査は２m幅のトレンチを逆L字状に配し十字に切った断面を観察することとした。調査面積は88m²で深さ1.6mまで調査した。当調査区は今回の調査トレンチ中最も多くの土層を確認した地区である。これは釜ケ谷川旧河道の堆積層を断ち割った事に大きく起因しており，合計113の土層番号を付すことになった。土層を観察すると，第１層から第６層までが比較的安定した堆積を示しており，以下は縦横に流れた出水により押し出された(ウォッシュアウト)砂・礫の堆積層である。調査トレンチ南端から西端にかけての流路を確認した。旧河道底から現地表面までは1.7m～1.9mを測り，調査トレンチの西側を流れる現河道はさらに水田面より約１m上位にある。調査トレンチ北端では，最下層にあたる第24層から瓦器碗・土師器鉢(第72図４・５）を出土した。

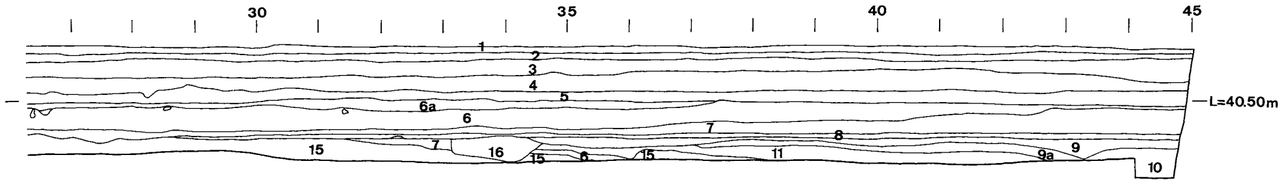
(3)　18番地　10番地より南へ約160mの所で，谷の幅が最も狭くなる(第62図)。これは木津高等学校のグラウンドが整備された際，南側の丘陵を削り東側に開口する谷を埋めたことによる。この事から18番地の地点はかつてはもう少し広い谷幅を有していたことがわかる。調査は，3×22mのトレンチを東西に設定し，深さ1.2mまで及んだ。断面を観察すると，第１層の現耕土から第４層までがシルト質の粘土層である。第５層から第７層にかけては砂質土層で第８・９層では礫が混じってくる。本調査区で注目したいのは第９層出土の土馬(第72図１)や布目瓦など，奈良時代の遺物が多いことである。西側丘陵上の燈籠寺遺跡においても同様の遺物が多く出土しており(注8)，その関わり合いが問題となるところである。

(4)　45番地　18番地よりさらに南へ240m入った所で，本調査地の２枚北の水田で大きく段差をもって高くなっている。また，周辺では，１枚北の畑地で古墳時代の須恵器甕口縁部を採取している。西側丘陵斜面では古墳などの遺跡が予想されたが現在までに確認されていない。45番地の水田は釜ケ谷川の蛇行による影響で菱形状を呈している。調査トレンチは2×26mを東西に設定し，深さ1.1mまで及んだ。断面を観察すると，第１層の現耕作土層から第３層までは幾分砂質を多く含む土層である。第３層の一部を含め第10層までは全体として粘性のシルト質が強い。第11層から第14層は褐色の砂及び礫の互層である。ある時期の釜ケ谷川の流れによる堆積であろう。出土遺物は少なく陶磁器類が出土した。

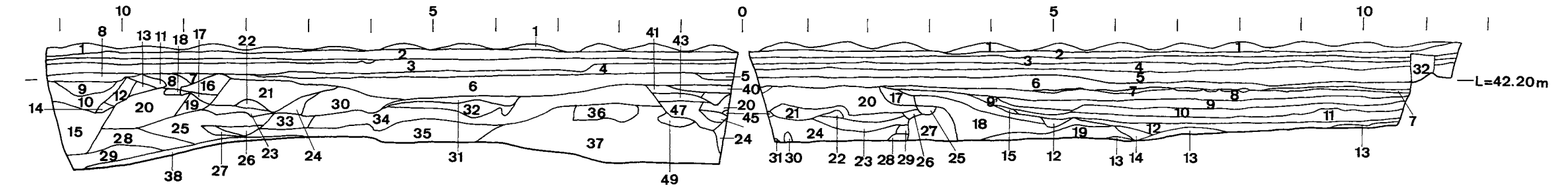
(5)　114番地　本調査地中最も谷奥の調査地である。谷の入口から750m入った地点にあた



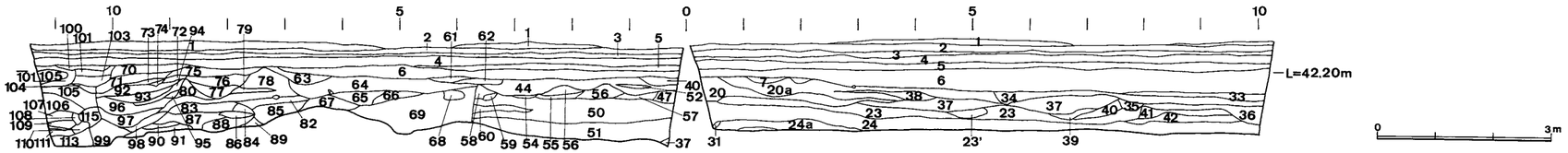
5番地　北断面



10番地　北断面

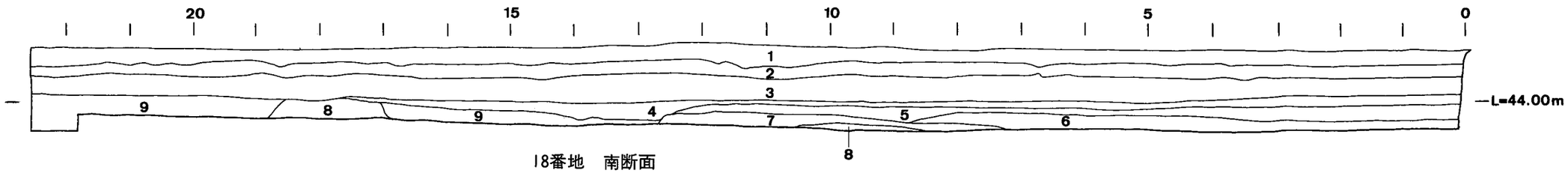


10番地　西断面

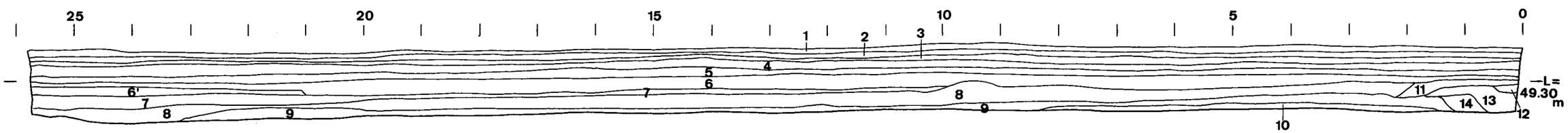


1.暗灰褐色粘性砂質土 } 耕作土
2.青灰褐色粘性砂質土 } 耕作土
3.黄褐色混り青灰褐色粘性砂質土
4.黄褐色粘質土
5.淡青灰褐色粘性砂質土(砂細)
6.淡青灰褐色粘性砂質土(砂粗)
7.紫灰褐色粘性砂質土
8.淡灰褐色粘性砂質土
9.灰色砂質土(砂粗)
10.黄褐混粘性砂質土(砂細)
11.紫灰褐色粘質土
12.淡灰褐色粘土
13.淡緑灰色砂質土
14.淡灰褐色粘土混り淡緑灰色砂質土
15.紫灰褐色粘質土混り橙灰色粗砂
16.淡紫灰色砂質土
17.橙混り灰色砂層(砂粗)
18.灰白色砂質土
19.灰色砂礫層(礫最大径3cm)
20.灰褐色砂礫(礫最大径6cm)
21.橙色砂礫層(礫最大径4cm)
22.紫灰色礫質土
23.灰混橙色砂層(砂粗)
24 青灰色砂礫混り粘性砂質土
25.暗灰色砂質土
26.灰色砂質土
27.灰色砂質土
28.緑灰色砂土
29.灰色細砂
30.緑灰色砂土
31.淡灰色細砂
32.攪乱(水道管掘形)
33.橙色砂礫層
34.淡灰砂質土
35.淡青灰色砂土
36.濁灰褐色砂質土
37.濁灰褐色礫混り砂質土
38.灰褐色砂層
39.黄褐色粘質土
40.橙混灰色礫混砂質土
41.橙混灰色砂質土
42.橙混灰色粘性砂質土
43.淡橙灰色砂質土
44.淡橙灰色砂質土
45.橙灰褐色砂質土
46.橙色砂質土
47.灰白色砂質土
48.淡橙褐色砂質土
49.橙灰褐色砂土
50.橙色混灰色砂土
51.灰色砂層
52.橙色砂層(粗)
53.橙色砂礫層
54.淡紫灰色粘性砂質土
55.淡褐色砂質土(粗)
56.淡橙灰色砂土
57.礫混り淡橙灰色砂土
58.橙灰色砂質土
59.灰白色粘質土
60.灰色砂層
61.暗灰色礫混砂質土
62.淡灰色砂質土
63.灰色砂質土
64.淡灰色砂質土(径5～10cmの礫含む)
65.淡灰色砂質土(径4cmの礫含む)
66.淡灰色砂土
67.橙粘質混り灰色砂土
68.灰色砂
69.灰色砂礫層
70.灰色砂粘性砂質土
71.暗灰色砂質土
72.灰色粘性砂質土
73.灰白色砂質土
74.淡灰色砂質土
75.淡灰白色砂質土
76.暗灰色砂質土
77.灰色粘性砂質土
78.淡灰色砂質土
79.淡灰色砂土
80.淡灰色砂土
81.淡紫灰色砂土
82.灰色粘質土
83.灰色砂土(粗)
84.橙色砂土(粗)
85.灰色粘質土
86.暗灰色粘質土
87.灰色砂
88.灰色砂礫(礫径3～4cm)
89.暗灰色粘土(シルト)
90.橙色酸化層
91.黄褐色粘質土
92.淡褐色砂質土(細)
93.淡灰色砂質土(細)
94.灰白色砂質土(細)
95.灰色粘性砂質土
96.灰色粘性砂質土
97.淡緑灰色粘質土
98.淡緑灰色粘土
99.灰色砂礫(礫最大径15cm)
100.灰色砂土
101.橙混白色砂土
102.暗灰色粘質土
103.灰白色砂
104.灰白色砂
105.灰色と橙色の薄い数層の堆積
106.橙色混灰色粘質土
107.灰色砂礫層
108.青灰色粘土
109.淡灰色砂層
110.青灰色砂層
111.青灰色粘土
112.礫層(径5～7cm)
113.礫層(径20～15cm)

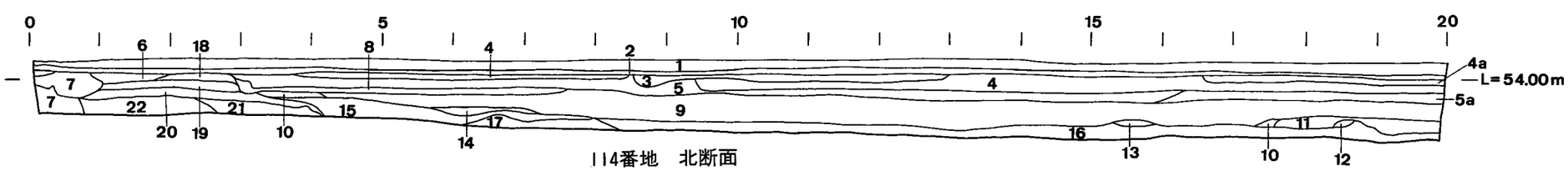
第70図　釜ケ谷遺跡 5・10番地断面実測図



18番地　南断面



45番地　南断面



114番地　北断面

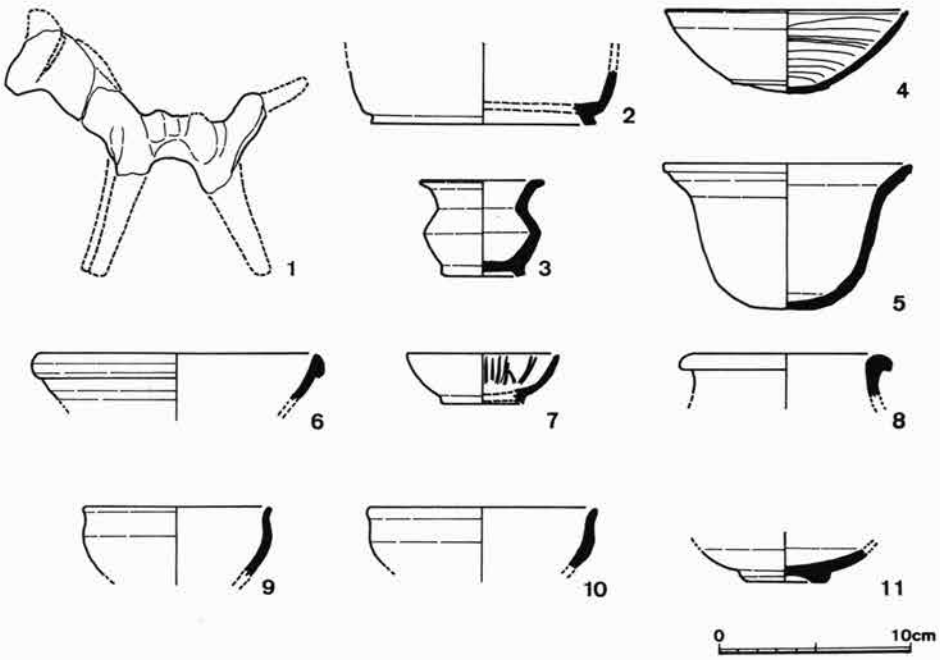
1.橙混暗青灰暗茶褐色砂質土(耕土)
2.暗青灰色粘性砂質土(床土)
3.淡青灰褐色粘性砂質土(橙混)
4.青灰色粘性砂質土
5.白青灰色粘性砂質土
6.白青灰色粘性砂質土
7.攪乱層
8.白紫灰褐色粘性砂質土
9.淡紫灰褐色粘性砂質土
10.紫灰褐色粘性砂質土
11.淡緑灰白色砂土
12.紫灰褐色粘性砂質土淡緑灰白色砂土混り
13.淡緑灰白色砂土
14.11.に似るが淡灰白色砂土
15.淡緑灰白色細砂
16.淡緑灰白色細砂
17.灰色砂礫層(礫φ3cm含む)
18.灰白色砂質土
19.灰白色砂礫(φ5cm含む)
20.乳白色砂層(細)
21.淡灰色砂(粗)ややカナケ
22.橙色砂層(カナケ色、かなり粗)
5a.5とほぼ同じ、やや細かい
4a.4とほぼ同じ、やや白っぽい淡い

第71図　釜ケ谷遺跡 18・45・114 番地断面図

る。調査地の西から丘陵に登る山道を入り南下すると木津城の北側の土橋に至る。(注9) 調査トレンチは2×20 mを東西に設定し，深さ0.8 mまで及んだ。断面を観察すると，第1層の現耕土及び第2層までが全体に水平堆積しているものの以下は幾種類かの土によって整地されている。トレンチ西寄りの第18層以下は西側の丘陵の埋没状況を示している。出土遺物は少なく陶磁器類のみであった。

3. 出 土 遺 物（第72図・図版第38）

今回の調査によって出土した遺物は，弥生時代(石器)，奈良時代(須恵器・土師器・瓦等)，鎌倉時代(瓦器・土師器・羽釜等)，室町時代から以降(陶器・磁器)の各時代のものが各種出土している。以下主なものを示すと，土馬(1)は18番地出土で調査区最下層より出土し，背中に鞍を表現した奈良時代でも古いタイプのものである。須恵器杯(2)・ミニチュア壺(3)は5番地の第11層と下層から出土した。瓦器碗(4)と土師器鉢(5)は10番地北端の最下層から出土した。(4)は外面の暗文が無くなり，高台がほとんど機能しない所まで退化している。中国製灰白磁(6)は5番地から出土した。瀬戸系小皿(7)・同壺(8)は10番地から出土した。瀬戸・美濃系天目茶碗(9・10)は5番地第6層から出土した唐津系皿(11)は同じく5番地か



第72図　釜 ケ 谷 遺 跡 出 土 遺 物

ら出土した。以上により奈良時代から鎌倉時代の遺物は18番地以北に集中する傾向を示し，奈良時代のものが18番地に集中することがわかった。以上のほか，5・10番地では堆積層が厚いために今回の調査では地山は確認できておらず，さらに下層により古い時代の遺物が包含されていることを予測させる結果を得た。今後の調査が期待されるところである。

（戸原和人）

4. ま　と　め

今回の試掘調査で出土した陶磁器は大部分が破片であり，完形品や準完形品はない。これらの陶磁器は，中国製と日本製に大きく二分されるがその過半数以上が日本製であり，時代幅も13世紀から19世紀までと大きく，生産地や器種にあっても多岐にわたっている。以下，二大別に沿って概観してみることにする。

中国製の輸入陶磁器は青磁片が主であるが灰白磁片（第72図６，図版第38-下１）も１点認められる。器形は青磁の小壺片１点以外は全て碗形である。青磁は宋代に始まり明代までを含み，龍泉窯系に属するもの(図版38-下３)である。退化した蓮弁を体部表面に描出された破片や，同安窯系の猫掻き文を有した珠光青磁片も存する。これらの中国製陶磁器の出土状況を観察してみると，45番地以外の調査地４か所で発掘されている。しかし後述する日本製陶磁器片から推しても，その中心が18～19世紀代にあって近世時での新田等の開発や土砂流入時での混入品と解される18番地及び114番地の青磁片を除けば，すべて５番地に集中する。

次に日本製の陶磁器についてである。陶磁器はほとんどが破片で完形品はない。器種別に列挙すれば，碗，灯明皿，甕，壺，花瓶，擂鉢，向付，蓋，燭台，天目茶碗と多岐にわたる。一方，生産地別に分類すると，肥前系，瀬戸・美濃系，信楽系，丹波系，備前系，唐津系，志野系，中世東播系となる。すなわち，13～14世紀の東播系の揑鉢以降２～３世紀間は途絶するが，16世紀～17世紀になると瀬戸・美濃地方から志野系の菊皿(第72図７)や天目茶碗類(第72図９・10，図版第38-下９～11)がもたらされるとともに九州からも唐津系の皿・碗(図版第38-下４～６)が移入された。18世紀以降になると，肥前系の染付類(図版第38-下13・14)が主流を占めつつも丹波(図版第38-下15)・備前・信楽(図版第38-下16)・京焼などの各窯系の器種が含まれその量も増加する。それはまた，日常什器の各種を満足させるかの如き様相を示す。出土地点別にみると，東播系の揑鉢が18番地にのみ存し，近世時の陶磁器類は全調査地に広がってはいるが，谷奥に向かって，17世紀前半の唐津系碗１点を除外した45番地や最奥部の114番地では18～19世紀の肥前系・京焼系などが包含されるにすぎない。一方，谷入口の５番地では16世紀から遺物を含み，調査トレンチの深さに従って時期が遡る傾向があ

る。これは10番地でも同様である。

以上の諸傾向から類推すれば以下の如くになる。調査地である谷水田部は，谷入口ではかなり早い段階から生活空間として利用され18番地周辺まで及んでいたようである。その後，江戸時代中頃にはさらに谷奥に向かって開発が実施され，今日の姿を現出せしめたものであろう。なお，個々の説明に関しては今後の調査結果を踏まえ検討し再述したい。（松井忠春）

(3) 上 人 ケ 平 遺 跡

1. は じ め に

この遺跡は，木津東部丘陵の南西隅に位置し，北西方向にのびる市坂地区の数本の尾根のひとつの端部に立地する。遺跡がある畑地は，ほぼ平坦で海抜55mを測り，北西の水田との比高差は約11mである。丘陵の端部には市坂１～３号墳（４号墳は，今年度の調査で古墳ではないと判明した）があるが，いずれも国鉄関西本線によって半分近くが削り取られている。また，この遺跡の南端には上人ケ平古墳が存在し，周辺には埴輪片が散布している。上人ケ平遺跡の南の小さな谷にはおびただしい布目瓦片が散布しており，京都府教育委員会等の踏査によって軒瓦も採集され，平城宮大膳職等所用瓦を生産していた窯と考えられる市坂瓦窯跡とされている。(注10) 一方，遺跡の北には広大な瓦谷遺跡が広がっている。

2. 調 査 の 経 過

今回の上人ケ平遺跡の調査は，17,000 m²に及ぶこの遺跡の範囲のうち，７分筆に試掘溝を入れた試掘調査である。これらのトレンチ名は，地番を以って呼称とする。

(1) 11番地（第74図，図版第41-1）

長方形のこの畑に幅3 mのトレンチを設定し，耕作土を10数cm掘り下げると，すぐに地山面が出た。遺構は，この畑の南端近くを東西に走る溝 SD 05 だけである。

(2) 12番地（第74図，図版第39-2）

ほぼ方形のこの畑には，幅３mの２つのL字形を組み合わせた十字トレンチを設定し，更に北と南では一部面掘を試みた。20 cm程度の厚さの耕作土を除去すると地山面が検出された。ここは，今回７か所で入れたトレンチのうち，最も遺構が集中していたところである。

北のトレンチでは，現在の地割とほぼ同じ方向を持つ溝 SD 06・SD 07 と東西方向の SD 05(11番地)の延長と思われる溝を検出した。切り合い関係から前者が新しい。南のトレンチでは，柱穴が20個ばかり検出され，これらは２本の柵列(SA 01・02)と１棟の建物(SB01)が想定できる。また，東の隅では，瓦片を多く含む落ち込み(SX 01)，トレンチの東寄りのと

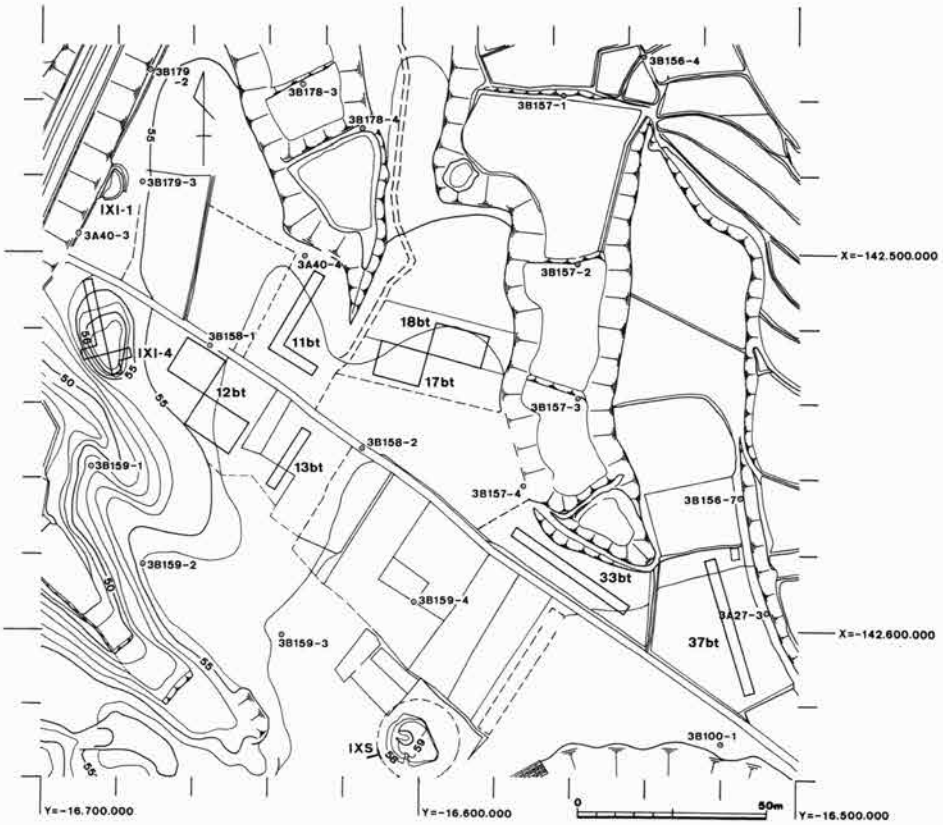
ころで，南北に逆S字形にやや屈曲する溝(SD 08)を検出した。これらの遺構の各所から奈良時代の瓦片がかなり出土している。南トレンチの南端あたりには，土色の変化が見られ，奈良時代よりもやや古いと考えられる土師器片が出土したが，今回の試掘調査では，期日の関係から，そのまま埋め戻した。

(3)　13番地（第75図，図版第43）

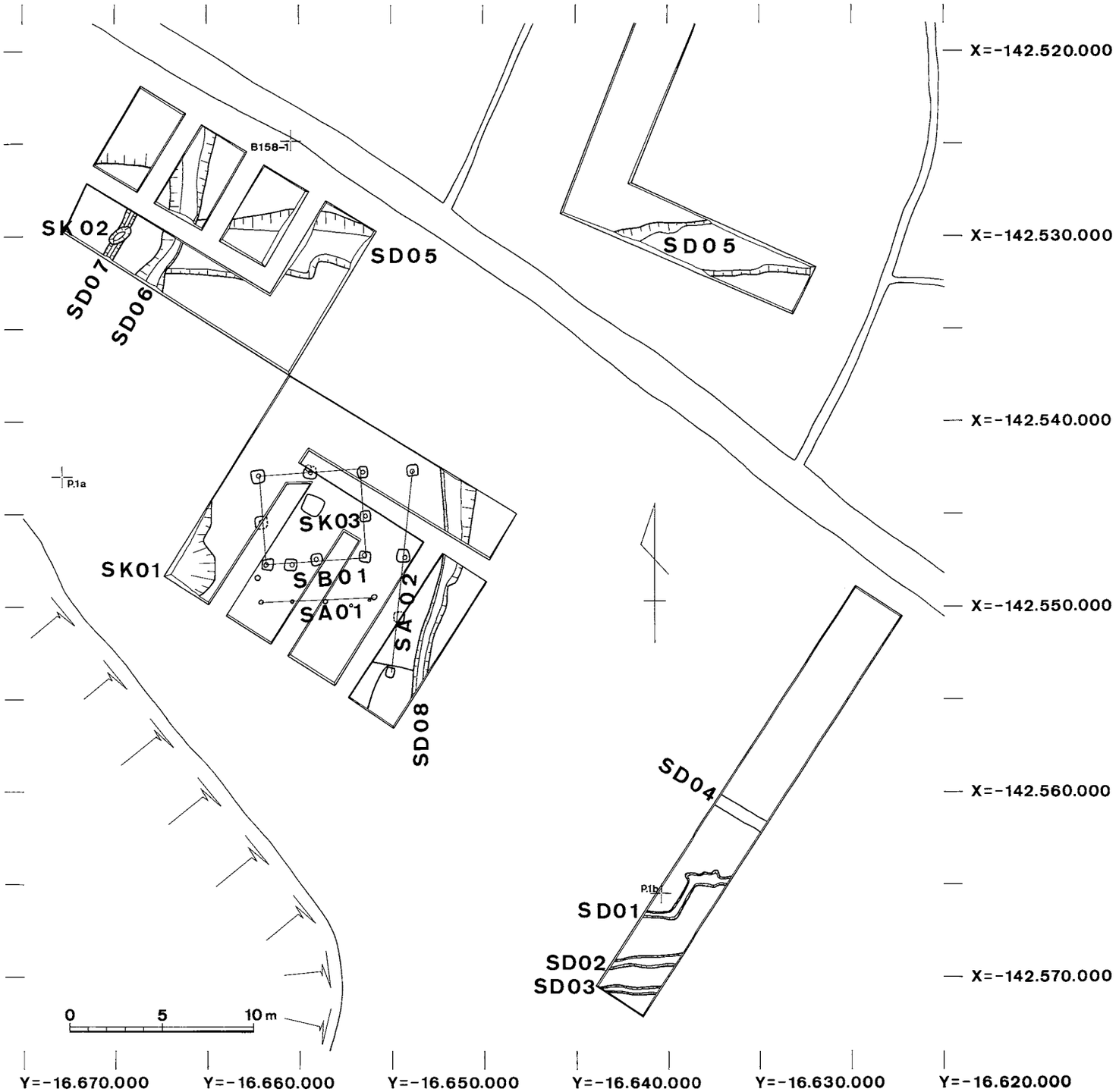
この畑では，中央に地割方向の幅3m，長さ18mのトレンチを設定した。浅い耕作土層の下に地山面が現われ，新しい時期の字切り溝SD 04の外に3条の東西方向の溝を検出した。クランク状に屈曲する溝SD 01からはおびただしい瓦片が出土し，ここにも西隣の12番地の奈良時代遺構群が及んでいる。

(4)　17番地（第73図，図版第42）

13番地の北西に位置するこの畑には南北9m，東西13mのトレンチを設定した。12・11番地で検出したSD 05は，このトレンチの西端には及んでいるが，トレンチ中央ではその延



第73図　　上人ケ平遺跡・市坂4号墳トレンチ配置図



第74図　上人ケ平遺跡 11・12・13 番地遺構平面図

長は検出されなかった。トレンチ内各所に焼土・瓦片を含むピット状遺構が検出された。

(5) 18番地（第73図，図版第42）

17番地の北にあるこの畑には，東西15m，南北9mのトレンチを設定した。地山面まで掘り下げたが，顕著な遺構は認められなかった。

(6) 33番地（第73図，図版第44-2）

幅3m，長さ35mのトレンチを地割の方向に設定したが，顕著な遺構・遺物は検出されなかった。

(7) 37番地（第73図，図版第44-1）

幅3m，長さ37mのトレンチを設定した。地山面まで掘り下げたが顕著な遺構は検出されなかった。出土遺物は中・近世以降のものがほとんどである。

3. 検出遺構

今回の試掘調査において検出した遺構のうち，顕著な遺構が集中していた12・13番地の遺構を中心に報告する。

(1) 掘立柱建物跡 SB 01（第74図，図版第39-2）

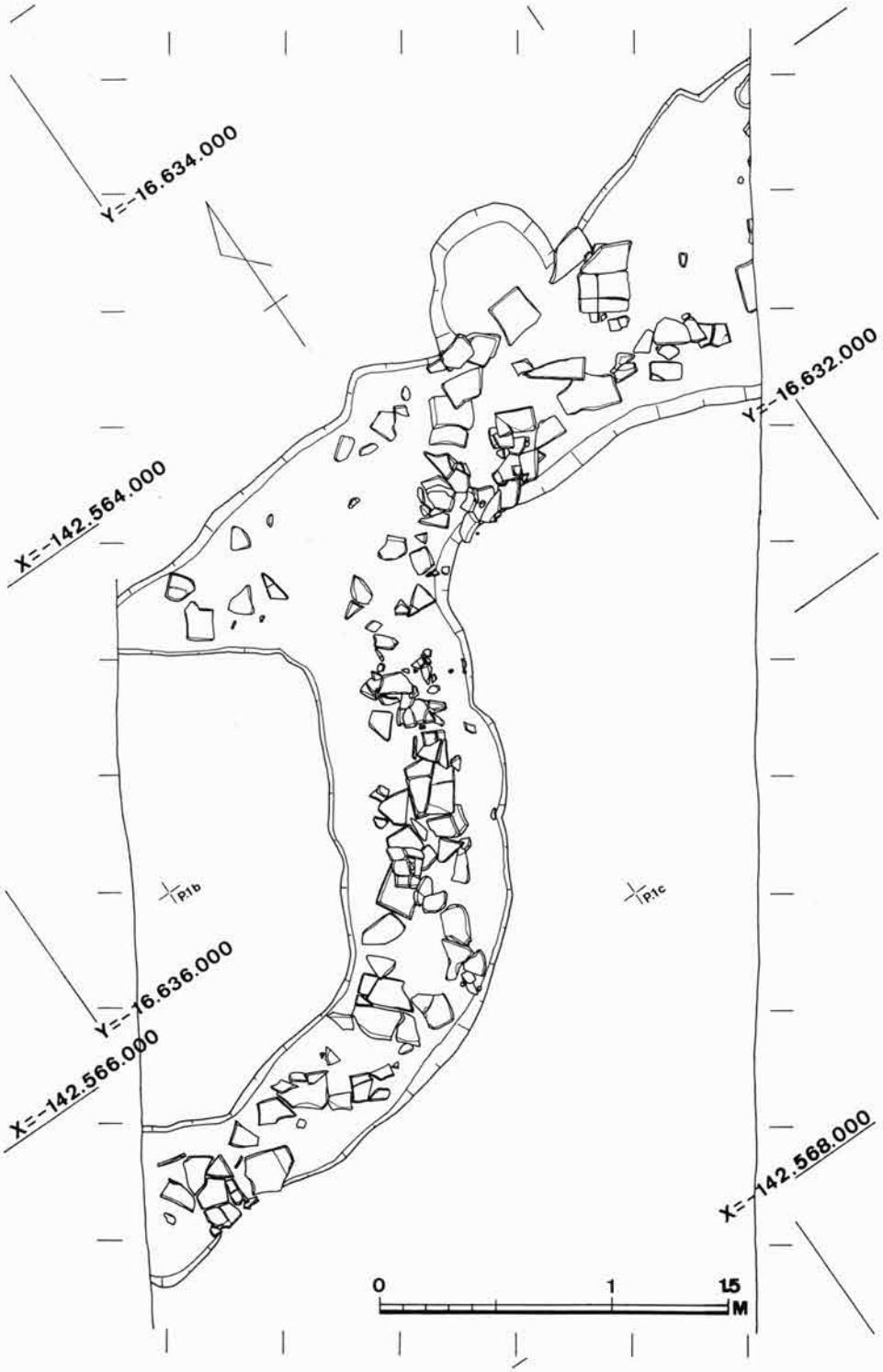
12番地のほぼ中央で検出した2×2間の建物である。東西5.5m，南北4.8mを測り，東西方向の柱間距離は約9尺，南北方向では約8尺となる。方位は国土座標に対してN3°30′Wの振れを示すが，ほぼ真北方向と言える。柱穴は直径20～25cmで，掘形は一辺60～70cmの隅丸方形である。掘形内には，東辺の3個及び北西隅の1個において，瓦片が入っており，特に北西隅の柱穴からは平瓦・丸瓦片と共に軒丸瓦が2点(図版第40)出土した。

(2) 柱列SA 01(第74図，図版第39-2)

SB 01の南辺に平行する柱列である。SB 01の南辺との間隔は約2.1m(7尺)を測る。SB 01の庇に関係する柱穴，あるいは南面を隠す塀と考えられる。柱穴の直径は15cm前後であり，掘形は検出されなかった。

(3) 柵列 SA 02(第74図，図版第39-2)

SB 01の東において検出された一本柱列である。北から1個目及び3個目の柱穴がそれぞれSB 01の北辺と南辺の延長線上に位置するところから，当初この建物の一部と見たが，その後，南への延長線上に2個の柱穴を検出し，合計5個の柱穴が一直線に並ぶことから，建物とは別の柵列と判断した。方位は国土座標に対して，N6°Eの振れを示し，建物SB 01とは，約10°の差がある。柱間寸法は，北から2.1m・2.6m・3.3m・2.9mで，今回検出した4間分の長さは10.9mを測る。



第75図　上人ケ平遺跡13番地ＳＤ01実測図

(4) 溝SD 08(第74図，図版第39-2)

柵列SA 02の東にこれに沿うように走る南北方向の構で，12.5mにわたって検出したが，南北両方向に更に延びているものと考えられる。溝の幅は，北では約2mを測るが，南半では70cm前後となる。深さは検出面から10cm前後である。溝内には，多くの瓦片が散乱していたが，後述するSD 01程ではない。

(5) 溝 SD 01(第75図，図版第43)

13番地の南半部で検出した東西溝である。トレンチの中央でクランク状に屈曲するが，方位は国土座標に対してE0°30′N前後を示し，真東西である。幅は検出面で40～50cmを測る。溝はほとんど瓦片で埋まっていると言ってもよい程であったが，溝は更に東西に延びているので，今回の試掘調査においては，上・中層の瓦片をコンテナ8箱分取り上げたにとどめ，下層に散乱した瓦片については，将来の本調査での写真効果を考え，そのまま埋め戻すことにした。従って，溝の深さは未確認ながら，検出面から10数cm程度と考えられる。

(6) 溝SD 05(第74図，図版第41)

12番地の北から11番地にかけ，35mにわたって検出した東西溝である。幅は約3mを測り，最大深さ32cm前後のゆるやかなU字溝である。

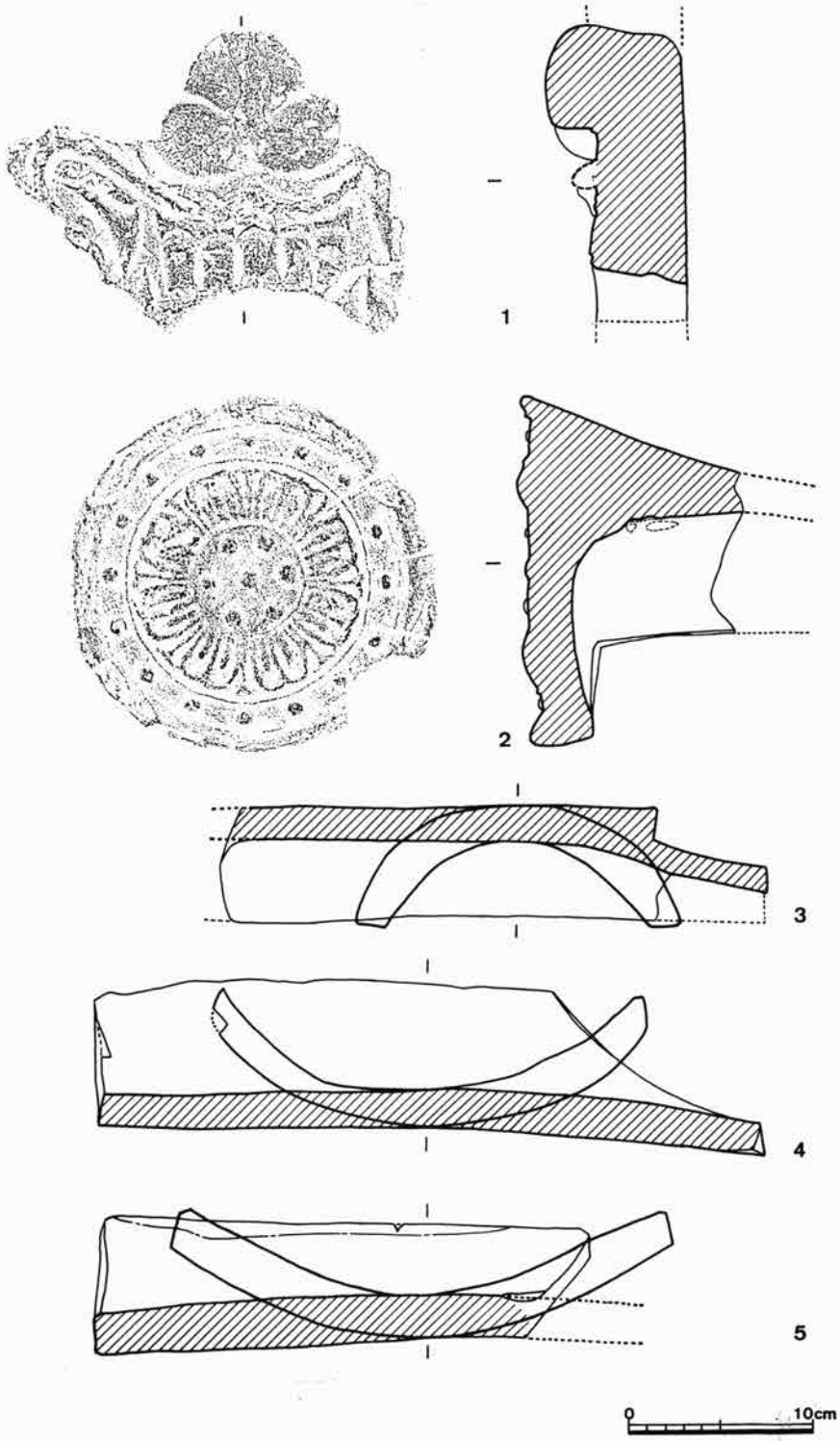
4. 出 土 遺 物

上人ケ平遺跡の今回の試掘調査で出土した遺物は，コンテナに31箱で，その大半が12・13番地から出土した瓦片である。他に若干の須恵器・土師器片と中・近世の土器・陶磁器・瓦片がある。また，数点であるがサヌキトイドの小剝片も出土している。ここでは，主体的な遺物である瓦類を中心に簡単に報告するにとどめる。

(1) 鬼瓦――SD 01から出土した鬼瓦片(第76図1)は，鬼面の鼻と口の部分のみを残す破片である。毛利光氏分類の平城宮Ⅳ式B[注11]であり，平城宮第1次大極殿地域の楼風建物SB 7802の柱抜き取り穴から，「天平勝宝五年」の紀年銘木簡とともに出土した個体[注12]と同笵の可能性がある。淡褐色を呈し，焼成軟質で，当遺跡の出土瓦の大多数と同様の特徴をもつ。

(2) 軒丸瓦――5点確認した。その内訳は平城宮6133A 2点と6235A 1点で，残り2点は小片で確認は出来ないが，6133系と思われる。6133Aは，小石を少量含むが精良な胎土を用い，焼成は軟質である。表面黒灰色，内部淡灰褐色を呈する。補強粘土はかなり多い。6235A(第76図2)は，いわゆる東大寺式である。胎土は前者よりやや粗で，表面黒灰色，内部淡橙褐色を呈する。

(3) 軒平瓦――小片が1片出土しただけで，その型式も不明である。



第76図　上人ケ平遺跡出土遺物実測図

(4) 丸瓦――今回の調査で出土した丸瓦は数点に過ぎない。SB 01 北西隅柱穴から出土した例(第76図 3)は，表面灰褐色，内部淡橙褐色を呈し，焼成はやや軟質である。凹面に布目痕を残し，凸面は全面ナデ消しているが，一部に縄目叩き痕が残っている。玉縁式である。

(5) 平瓦――出土した瓦片のほとんどが平瓦片である。出土量も限られ，大型の破片も少ないので，今回は型式分類は試みなかったが，次の諸点が指摘できる。

イ．平瓦の大多数を占めるのは，表面黒灰色ないし灰色，内部淡褐色を呈し，焼成軟質の平瓦で，凸面に縄叩き目，凹面に粗い布目痕を残すグループである。

ロ．イと同様の色調・焼成を示す平瓦の中には，凸面の叩き目を一部ナデ消し，凹面の布目が細かいものも含むグループがある。全体を復原できる例(第76図 4)で，全長は36.2cmを測る。

ハ．SB 01 北西隅の柱穴から出土した平瓦(第76図 5)は，広端部側の約 3 分の 2 が残る大片であるが，青灰色を呈し，須恵質に近い堅緻な焼成である点，また布目及び縄叩き目が比較的細かく，造りも丁寧な点で，当遺跡の平瓦の中では異質である。

(6) 須恵器――数点のみ出土した。いずれも奈良時代に通有のものである。

(7) 土師器――奈良時代に属するものは細片のみである。12番地の南端で出土した高杯片等は，古墳時代のものである。

5. ま　と　め

今回の試掘調査によって，上人ケ平遺跡には，特にその東半部において，掘立柱建物SB 01を始めとして，柱列・柵列・溝の真北方向を基準とする顕著な遺構群が検出され，共伴する瓦や土器から奈良時代中頃に比定される。これら同一プランによる整然とした遺構は，更に未掘部分にも広がっていようし，おびただしい瓦の存在と隣接する市坂瓦窯群とは，これら遺構群のやや特殊な性格を示唆しているようである。

出土遺物の大部分を占める瓦類は，この台地で使用されたとは考えにくく，2 種の軒丸瓦の内，ひとつがこのすぐ南の小さな谷に確認されている市坂瓦窯跡群の表採資料と一致する(6133 A) ところから，この瓦窯の製品と考えるべきであろう。その供給先は，平城宮大膳職であり，鬼瓦も時期的に矛盾しない(平城宮第Ⅲ期)。一方，今回出土した6235 Aは，東大寺所用瓦であるが，市坂瓦窯では報告されていない型式である。一時期東大寺にも供給していた可能性もあるが，唯一点の出土でもあり，今後の資料の増加と，市坂瓦窯及び上人ケ平遺跡の平瓦・丸瓦の検討をまつべきであろう。

いずれにせよ，上人ケ平遺跡の調査は，市坂瓦窯跡群との関連を念頭において進めるべき

であろうが，建物・柵列・溝などの遺構の性格付けについては，今のところ工房跡，あるいは，倉庫等の瓦窯に関係した何らかの施設である可能性が高いことを指摘するにとどめたい。

更に，当遺跡に散布しているサヌキトイド片や，16番地(17番地の南)辺りで表採された埴輪片の存在は，この台地に弥生時代や古墳時代にさかのぼる遺構を想定させるものであり，13番地南端の古墳時代土師器を伴う土坑(未掘)は，これを裏づけているようである。

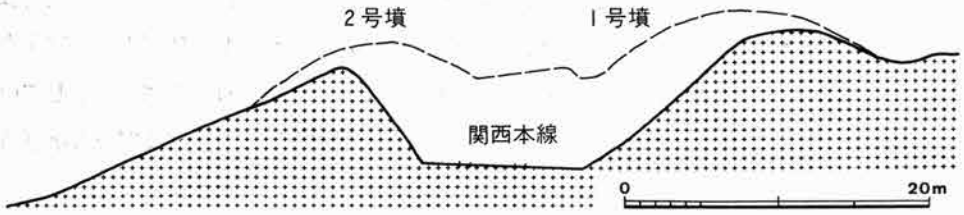
（小山　雅人）

(4) 市坂1号墳・第23地点（4号墳）

1. はじめに

市坂1号墳と，調査地区23地点の4号墳(調査により古墳以外のマウンドと判明)は，計5基からなる古墳群の内の2基である。(注13) 当古墳群は，木津町の南端，奈良県境に接し，木津町東部丘陵では最も西に突出した台地上に立地する。上人ケ平はその名の示す通り，平らな面をなす台地状の地形で，現在は畑として土地利用されている。当地は前項で述べた上人ケ平遺跡として周知されており，古墳群はその台地の縁辺部に位置する。

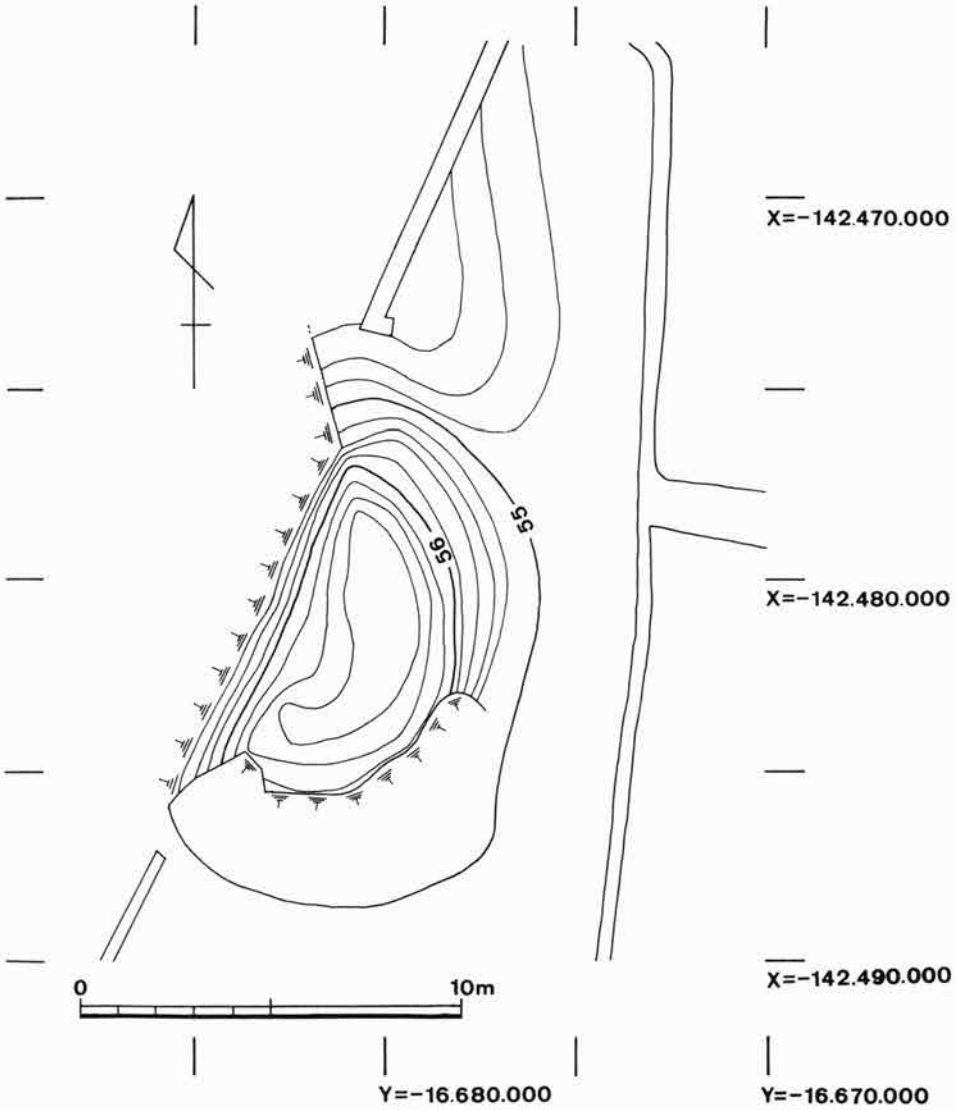
当古墳が初めて紹介されたのは梅原末治氏によって市坂古墳(上人ケ平5号墳)の報告がなされた折，その文末で注により，「…右の墳から西々北に当る同じ台地の突端に近い所であって，南北に二個並び，其の一は鉄道関西線の掘割に依って半ば削られてある。」とされている。(注14) この内，半ば削られているとされたものが1号墳と考えられ，この1号墳の南20mに第23地点調査区（4号墳）が所在する。(注15) 1号墳は現在，径13m，高さ1.6mを残し，西半部は国鉄関西本線によって大きく削り取られている。8km当地の北方にある椿井大塚山古墳同様，丘陵先端に立地する当古墳が開発の影響をうけた訳である。発掘調査と並行して行った地形測量によると，北側で周溝を思わせる凹みが認められた(第78図)。また，第23地点(4号墳)は，調査の結果，地表下1.2mの盛土最下層で伊万里系碗が出土し，古墳と認められる遺構等は検出しなかった。この盛土は，江戸中期以降のものと考えられる。



第77図　市坂1・2号墳推定復元断面図

2. 調 査 経 過

調査は，昭和60年２月４日23地点（４号墳）に対して幅２ｍで，南北31ｍ，東西14ｍを逆Ｌ字状に設定し，トレンチ内の根起しから開始した。１号墳は同２月27日に１～３トレンチ（第80図）をまず設定し，３月６日には４・５トレンチを追加した。以下１号墳の調査経過を述べると，３月１日より掘削を開始，耕作土中より布目瓦・埴輪片を出土した。第３トレンチ南寄りでは，第１層の耕作土を掘り切った段階で古墳周溝のプランを検出した（第80図）。３月

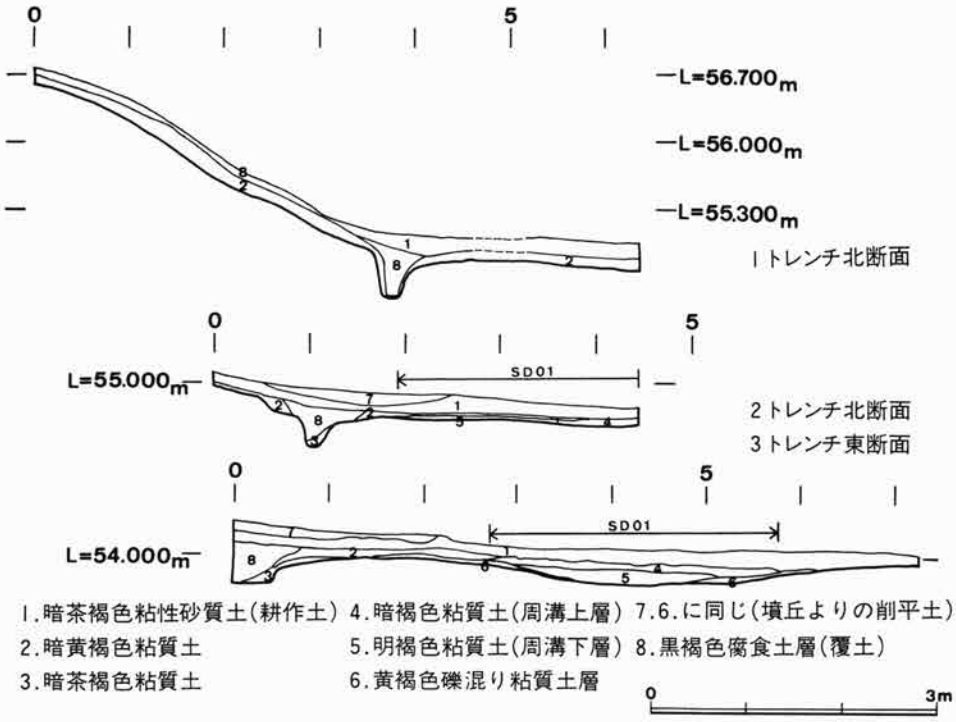


第78図　市 坂 1 号 墳 地 形 図

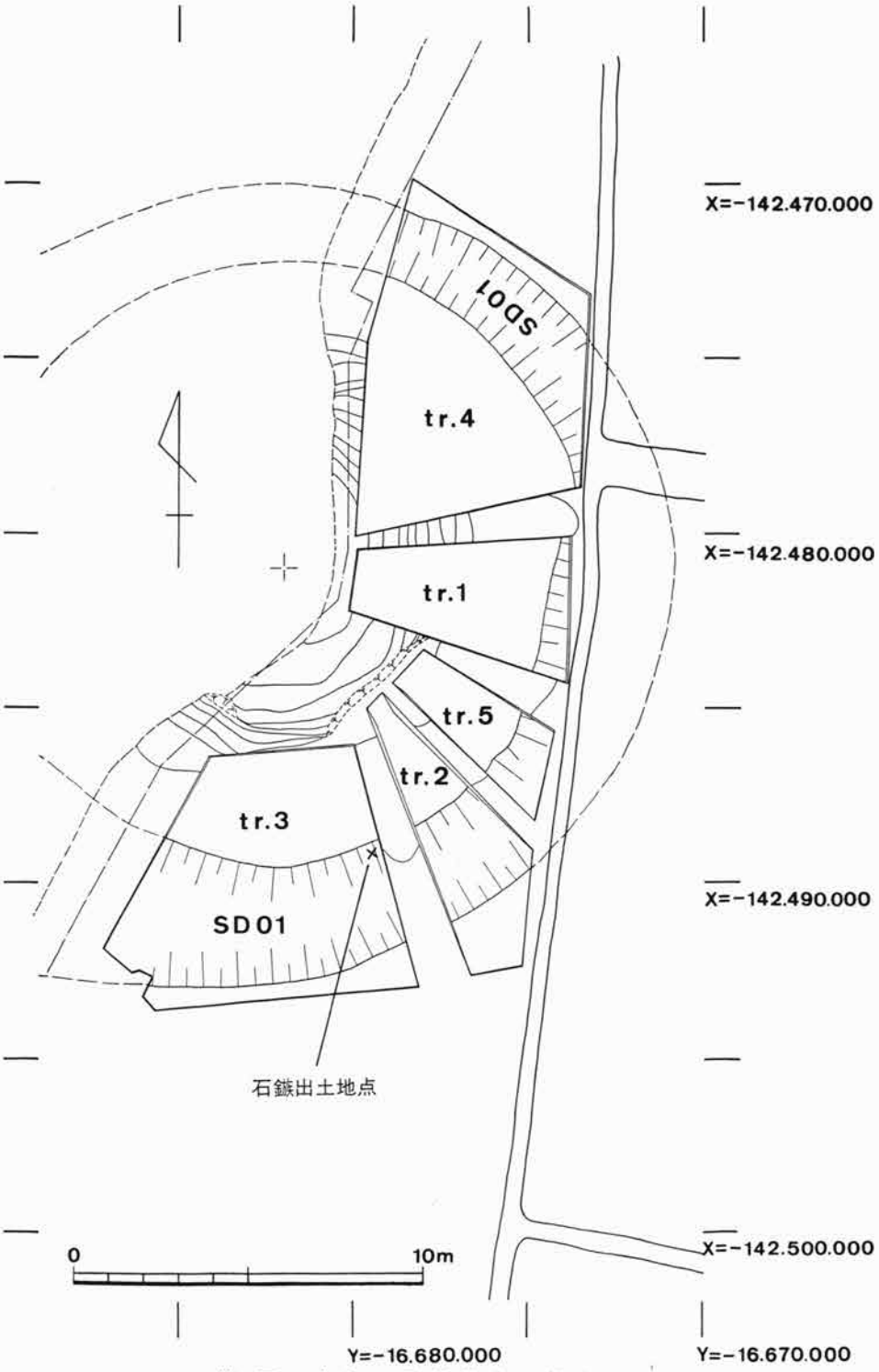
15日までには合計5か所のトレンチで周溝を検出し，第4層(周溝上層)で埴輪片を出土した。23地点も含め平板測量，写真撮影を3月26日までに終了し，埋め戻し作業も含めて3月29日に現地作業を終了した。調査面積は2基合せて180m²に及んだ。

3. 層　　位　(第79図，図版第45-2)

1号墳の土層は第1～3トレンチの壁面で観察し，墳丘部の下層については第3トレンチ北側の削平面で観察した。墳丘全体の断ち割りは，墳頂部側(西側)が国鉄敷地境ということもあって，安全対策上果す事ができなかった。土層を観察すると，墳丘部では第8層とした黒褐色腐植土層が表面を被い，第2層暗黄褐色粘質土が第1層につづく。第2層以下は黄褐色小礫混り粘土層(第6層)で基盤層である。大阪層群と考えられ，地山を削り出して墳丘を成形した事がわかるが，上部での盛土等については現段階に至っては解明することはできない。裾部の層位については，主に第2・3トレンチ壁面で観察をおこなった。第1層暗茶褐色粘性砂質土(耕作土)，第2層暗黄褐色粘質土となり，墳丘裾部では畑との境を巡るように溝が掘られ，第3層暗茶褐色粘質土と第8層黒褐色腐植土とによって埋まっている。古墳周



第79図　市坂1号墳断面実測図



第80図　市坂1号墳検出遺構実測図

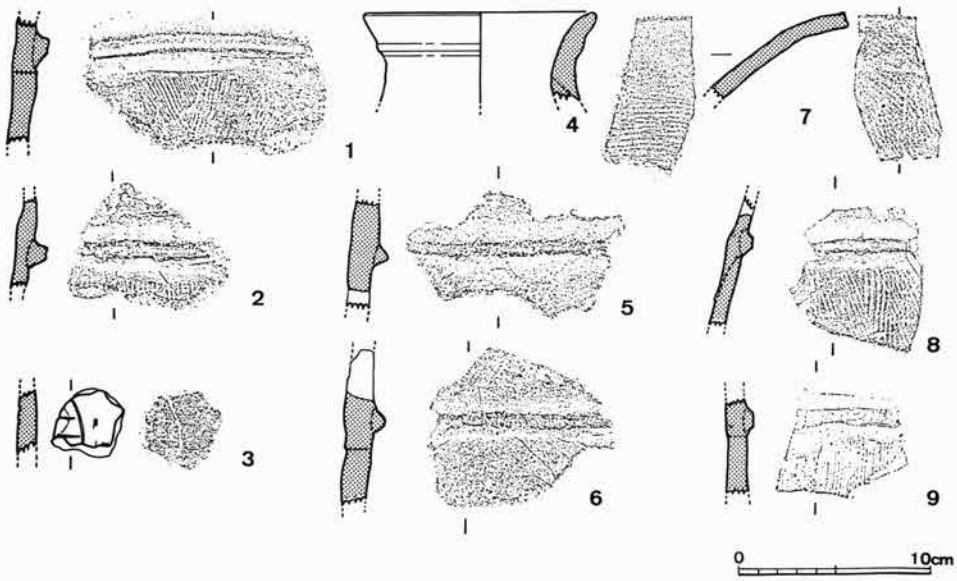
溝SD 01は，第4層暗褐色粘質土(上層)と第5層明褐色粘質土(下層)とに分かれ，上層からは埴輪が出土した。

4. 検 出 遺 構（第80図，図版第45）

1号墳の調査で検出した遺構は，墳丘部の残欠と周溝(SD 01)である。墳丘は，3で述べたように地山と第2層のみで，人工的な盛土と考えられるような顕著な遺構は検出し得なかった。周溝(SD 01)は，調査トレンチ全域で検出したが，その規模が分かるのは第2・3・4トレンチである。周溝は，第4トレンチでは幅2.0mを測るが，第3トレンチでは4.0mとなり，丘陵裾部に向って広がる傾向がある。検出した深さは10～20 cm程度であったが，畑作等により削平をうけているものと考えられ，本来はもう少し深かったであろう。

5. 出 土 遺 物（第81図，図版第47-2）

1号墳の調査で出土した遺物には布目瓦・埴輪・石鏃などがある。埴輪には円筒埴輪のほかに朝顔形埴輪(7～9)・壺形埴輪(4)・不明形象埴輪(3)がある。円筒埴輪には，タガの断面が整った台形を呈し，外面に縦ハケや斜めハケを施し，タガ貼付けの後横ナデ調整をするもの(1・2)と，タガが退化し断面三角形状になり，内外面の調整が不明なもの(5・6)とがある。不明形象埴輪(3)は，4×4cm程度の小片である。表面にヘラ描による弧線と，弧の



第81図　市 坂 1 号 墳 出 土 遺 物 実 測 図

内側に2本の平行するヘラ描の線を施す。壺形埴輪(4)は，口径12cm，高さ4cm程度を残すが全体の形状をうかがうことはできない。朝顔形埴輪(7)は小片のため口径を出すことは困難である。

6. ま　と　め

1号墳出土埴輪は概ね川西編年V期(5c末～6c初)に属するものである。特筆すべき遺物としては，3の形象埴輪がある。小片であるがこれと近い文様を持つ埴輪としては，5号墳出土の蓋形埴輪があげられる。1号墳と同期に造営された古墳としては当町西部に所在する土師七ツ塚5号墳があげられる。また上人ケ平古墳群の中においては，5号墳が5世紀前半に比定され(注16)，両古墳の間の時期を埋める古墳が上人ケ平の台地にかつて存在していた可能性がある。今後の調査結果を踏まえ検討を行い再述したい。　(戸原和人)

注1　長谷川　達「日本住宅公団木津東部地区遺跡分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』京都府教育委員会) 1982

注2　現地調査に参加していただいた方々は以下の通りである(敬称略)。
(補助員)　石原　順・岩前良幸・木下年史・木村和彦・滋井邦明・滋井雅章・武田一郎・田中康夫・中塚　等・前田　寛・宮本純二・村田和茂・村田和弘。
(整理員)　新谷二三代・野村道江・林　恵子・柳沢洋子。

注3　土層断面図は，標高の高い方から順にメートル数字が付してあるが，これは先に調査方法の4で記した方法とは異っている。すなわち，「調査地の西から東へ数字」を付して地区割を行う訳であるが，当遺跡では逆になっている。これは実際の掘削作業が高位から下位にすすめられるため，実測作業も自然と高い所のトレンチ端を0とするのがやり易い。したがって，当遺跡に限定して，実測時のまま東から西に数字が刻まれている。

注4　17は本遺跡からの出土例ではなく，本丘陵から南西に下った谷部の遺跡(釜ケ谷遺跡)の10番地トレンチにおける包含層中から出土したものである。釜ケ谷遺跡では他に石器類の出土がみられないことや，小河川の流れによって運ばれた様子で原位置を留めていないことなどから，丘陵の上と下とで問題はあるものの，本遺物を赤ケ平遺跡との関連で捉えたいと考えた。したがって，ここに併せて報告した次第である。しかしあくまでも，釜ケ谷遺跡出土の資料であることをここに銘記しておく。

注5　当センター調査員戸原和人採取。

注6　平良泰久「燈籠寺遺跡」(『木津町史　史料篇Ⅰ』木津町) 1984

注7　注6及び，松井忠春・小山雅人・戸原和人「燈籠寺遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第14冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

注8　注7と同じ

注9　中井　均「木津城について」(『広報きづ』180　木津町) 1980
中井　均「南山城地方の中世城郭跡」(『城』113　関西城郭研究会) 1982

注10　平良泰久「市坂瓦窯跡」(『木津町史　史料篇Ⅰ』木津町) 1984，198～201頁。

注11　毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦――8世紀を中心として――」(『研究論集Ⅵ，奈良国立文化財研究所）1981，36頁

注12　奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 Ⅺ』(奈良国立文化財研究所三十周年記念学報第四十冊）1982，図版，PL.115，注11文献，39～40頁参照。

注13　平良泰久「上人ケ平古墳群」(『木津町史　史料篇Ⅰ』木津町）1984により従来上人ケ平古墳と呼ばれていたものを含め5基からなる古墳群とされた。5号墳は第73図中 IXS としたものである。以後この呼び名に従うこととする。

注14　梅原末治「木津市坂の一古墳」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査会報告』第20冊 京都府）1940

注15　京都府教育委員会編「京都府遺跡地図」(昭和47年10月発行)によると1号墳の西側，国鉄関西本線を挟んだ丘陵端部上に2号墳とされており，注12文献ではこれにより3，4号墳を新に発見された古墳としている。しかし，注14文献の文章によると梅原氏が紹介された古墳は現在の1・4号墳ではないかと考えられる。

注16　注13と同じ

付表6　木津東部地区所在遺跡一覧

No.	遺跡名称	符号	種類	大字	小字	遺跡の概要		採取遺物
1	荒堀古墳	CXA	円墳	鹿背山	荒堀	丘陵端	径15m 高1.5m	
2	内田山古墳	KXU	〃	木津	内田山	〃	径20m 高0.5m	埴輪片 （南側水田）
3	片山古墳	KXK	〃	〃	片山	〃	径10m 高1.5m	
4	天神山1号墳	KXT-1	〃	〃	天神山	丘陵稜	径10m 高1.5m	
5	〃 2号墳	KXT-2	〃	〃	〃	〃	径15m 高1m	
6	〃 3号墳	KXT-3	前方 後円墳か	〃	〃	〃	全長25m 高3m	
15	西山塚古墳	IXN	円墳	市坂	西山	丘陵稜	径24m 高3m	
16	瓦谷古墳	IXK	〃	〃	瓦谷	丘陵端	径20m 高2m	埴輪片
17	幣羅坂1号墳	IXH-1	〃	〃	幣羅坂	丘陵頂	径15m 高2m	
18	〃 2号墳	IXH-2	〃	〃	〃	丘陵端	径10m 高1m	埴輪片 （南側水田）
19	上人ケ平古墳	IXS	前方 後円墳	〃	上人ケ平	台地上	径17m 高2m	埴輪片
20	市坂1号墳	IXI-1	円墳	〃	〃	台地端	径20m 高2m	
21	〃 2号墳	IXI-2	〃	〃	〃	〃	径15m 高1.5m	
22	〃 3号墳	IXI-3	〃	〃	〃	〃	径10m 高1m	
23	〃 4号墳	IXI-4	〃	〃	〃	〃	径18m 高1m	
24	北中ノ谷古墳	UXK	〃	梅谷	北中ノ谷	丘陵端	径10m 高1.5m	
25	中山古墳	UXN	〃	〃	髯谷 中山	〃	径12m 高1m	
26	中ノ平古墳	UXR	〃	〃	中ノ島 中ノ平	丘陵稜	径15m 高2m	
27	菩提1号墳	IXB-1	〃	市坂	菩提	山腹	径10m 高2m	
28	〃 2号墳	IXB-2	〃	〃	〃	〃	径10m 高2m	

No.	遺跡名称	符号	種類	大字	小字	遺跡の概要	採取遺物
29	釜ケ谷遺跡	KKN	散布地	木津	釜ケ谷 東小林	谷間	土師器 須恵器
31	赤ケ平遺跡	KAR	〃	〃	赤ケ平	台地	土師器，須恵器，サヌカイト剝片
32	内田山遺跡	KUM	〃	〃	内田山	台地	土師器 須恵器
34	馬場南遺跡	KND	〃	〃	糖田	平地	土師器 須恵器
35	西山遺跡	INM	〃	市坂	西山	丘陵上	土師器，須恵器，サヌカイト剝片
36	瓦谷遺跡	IKW	〃	〃	瓦谷	平地	土師器 須恵器
37	上人ケ平遺跡	ISR	〃	〃	上人ケ平	台地	土師器，須恵器，埴輪，瓦
38	瀬後谷遺跡	ISN	〃	〃	瀬後谷	平地および丘陵斜面	土師器，須恵器，瓦
39	菩提遺跡	IBI	〃	〃	菩提 松谷	平地(河岸段丘)	土師器 須恵器
40	柳谷遺跡	CYN	〃	鹿背山	柳谷	平地	須恵器
41	巾ケ谷遺跡	CHN	〃	〃	巾ケ谷 南谷		土師器
43	薮ノ浦遺跡	CYR	〃	〃	薮ノ浦	丘陵	土師器
44	奥ノ平遺跡	UOR	〃	梅谷	奥ノ平	丘陵端	須恵器
45	中ノ島遺跡	UNS	〃	〃	中ノ島	平地	土師器，須恵器，瓦
46	中ノ平遺跡	UNR	〃	〃	中ノ平	丘陵端	須恵器，石鏃
48	市坂窯跡	IPI	瓦窯跡	市坂	上人ケ平	〃	平瓦，軒平瓦
49	梅谷窯跡	UPU	〃	梅谷	中ノ島	〃	平・丸瓦，軒丸瓦，軒平瓦
50	鹿背山焼窯跡	CPK	陶磁器窯	鹿背山	巾ケ谷	丘陵稜	陶器 (皿，壺，鉢)
51	巾ケ谷窯跡	CPH	須恵器窯	〃	〃	〃	須恵器 (杯，甕)
55	木津城跡	KCK	城跡	木津	片山	丘陵頂	

付表7　木津町東部の小字符号一覧

大字	小字	符号	大字	小字	符号	大字	小字	符号	大字	小字	符号
鹿背山	川向	CKU	鹿背山	須原	CSR	木津	片山	KKM	市坂	松谷	IMN
	赤坂	CAK		頓登路里	CTR		大谷	KON	梅谷	今井谷	UII
	中切	CNR		切通	CKS		天神山	KTM		池ノ谷	UIN
	大久保	COB		巾ケ谷	CHN		寺山	KTY		宮ノ谷	UMN
	宮ノ谷	CMN		柳谷	CYN		糠田	KND		小谷口	UKC
	薮ノ浦	CYR		大木谷	CON	市坂	久保川	IKG		北中ノ谷	UKN
	荒堀	CAR		大沢	COW		北畑	IKK		南中ノ谷	UMD
	細川	CHW		小沢	CWW		西山	INM		髯谷	UHN
	垣ノ内	CKC		梶ケ谷	CKJ		中山	INY		中山	UNM
	塩田	CSD		清水谷	CSN		鰯谷	IIN		荊谷	UID
	当田	CTD		鎌研	CKG		瓦谷	IKW		身増	UMS
	東大平	CHR		熊ケ崎	CKK		上人ケ平	ISR		長城谷	UNN
	西大平	CNH		魚ケ谷	CUN		瀬後谷	ISN		奥ケ平	UOR
	鹿曲田	CKD		東大池	CHK		高座	ITZ		清水谷	USN
	古寺	CFR		大池	COK		幣羅坂	IHK		中ノ平	UNR
	南谷	CMD	木津	初田	KHD		奈良道	INC		中ノ島	UNS
	細谷	CHT		東小林	KHS		宮ノ内	IMC		上ノ平	UUR
	二反田	CND		白口	KSC		湯屋田	IUD		平野	UHR
	車谷	CKN		赤ケ平	KAR		清水	ISZ		寺ノ下	UTT
	立ケ尻	CTS		菰池	KKK		寒谷	IKN		北ノ谷	UKT
	狸谷	CTN		釜ケ谷	KKN		梅谷	IUN		砂子谷	USD
	青渕	CAC		今城	KIR		向山	IMM		地蔵谷	UJN
	鹿口	CSC		内田山	KUM		菩提	IBI			

図　　版

図版第1　志高遺跡

(1) 淡褐色砂上面検出遺構（西から）

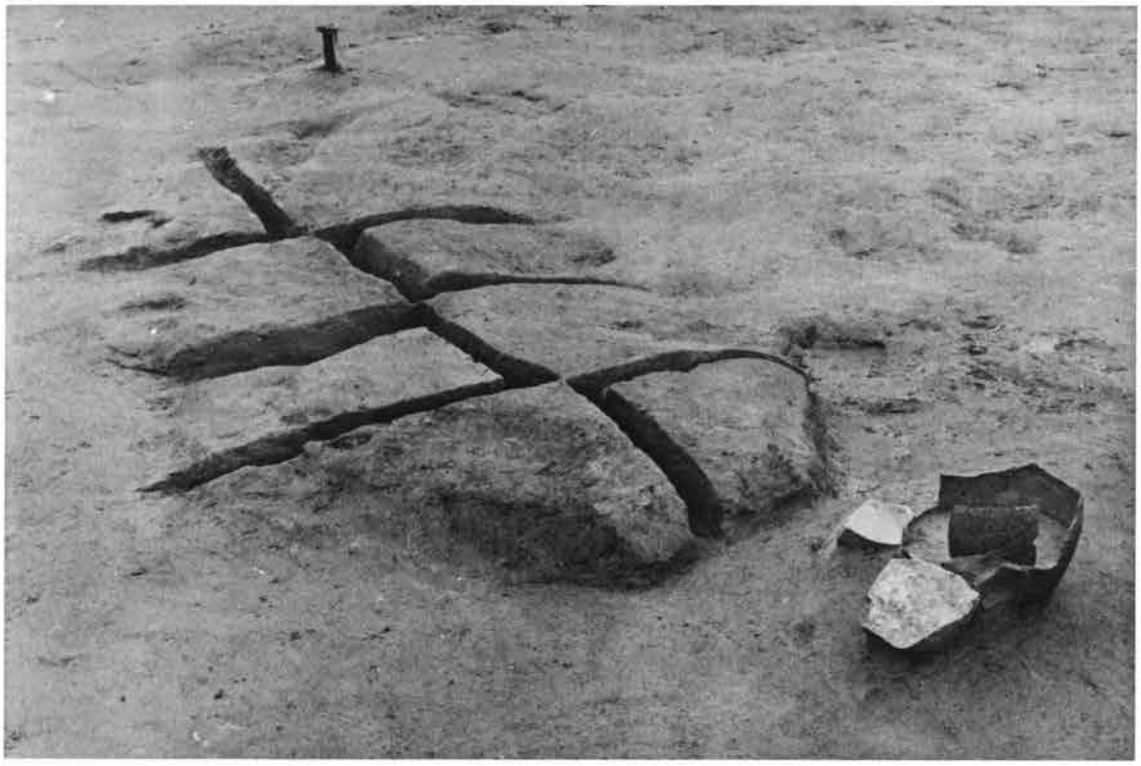
(2) 淡褐色砂上面検出遺構（東から）

図版第2　志高遺跡

(1) 暗茶褐色粘質土下面検出遺構（北から）

(2) 黒灰色砂質土下面検出遺構（西から）

図版第3　志高遺跡



(1)　SX41（北から）

(2)　SD39とSD40（西北から）

図版第4　志高遺跡

(1)　ＳＤ39土層断面（東から）

(2)　ＳＤ40土層断面（東から）

図版第5　志高遺跡

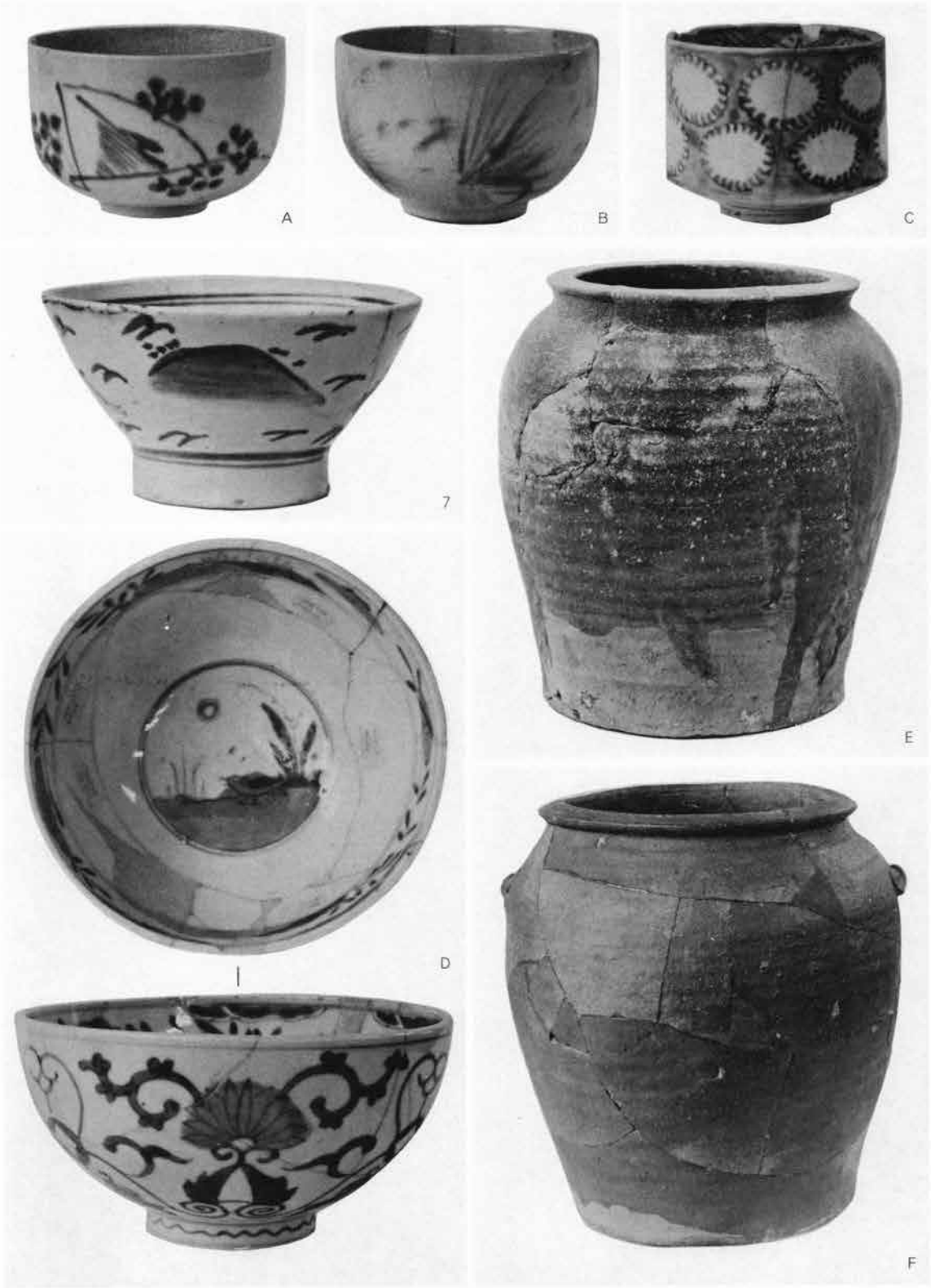
(1) B－2トレンチ（南から）

(2) B－3トレンチ（東から）

志高遺跡出土土器(1)（数字は実測図と一致）
G：縄文土器

志高遺跡出土土器(2)（数字は実測図と一致）

図版第8　志高遺跡



志高遺跡出土土器(3)（数字は実測図と一致）
（A～D：染付　E・F：陶器甕）

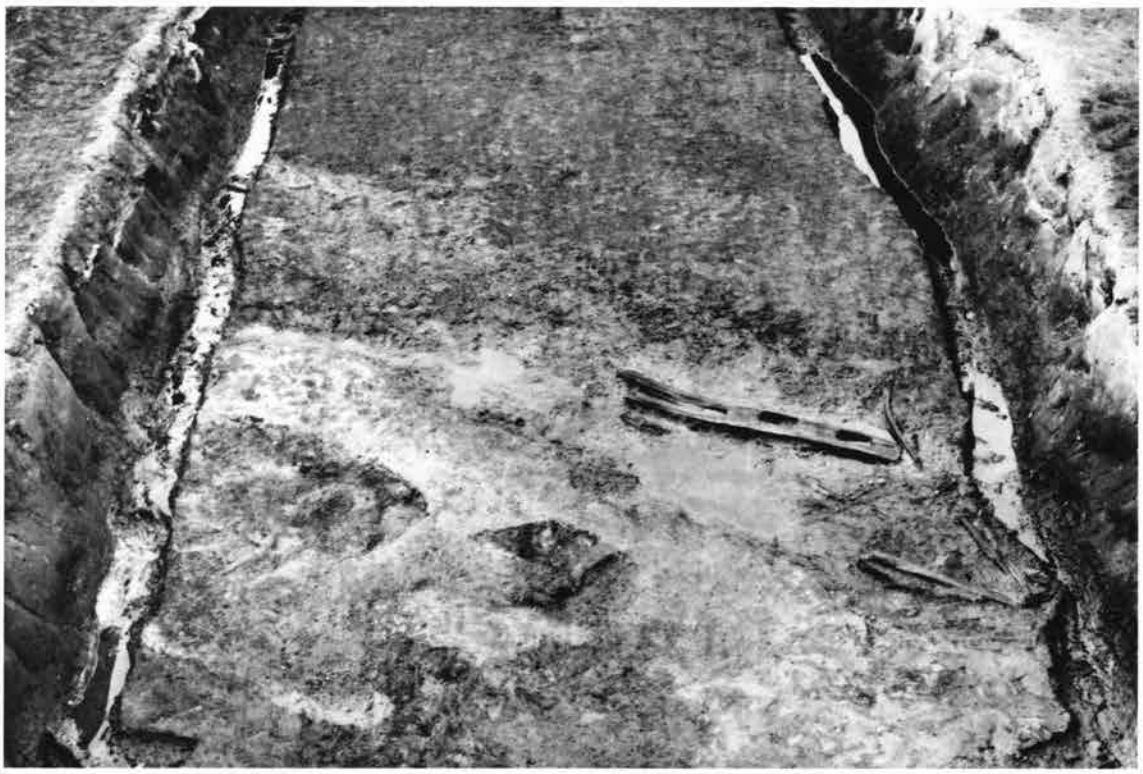
図版第９　　千代川遺跡第９次

(1)　調査地全景（南から）

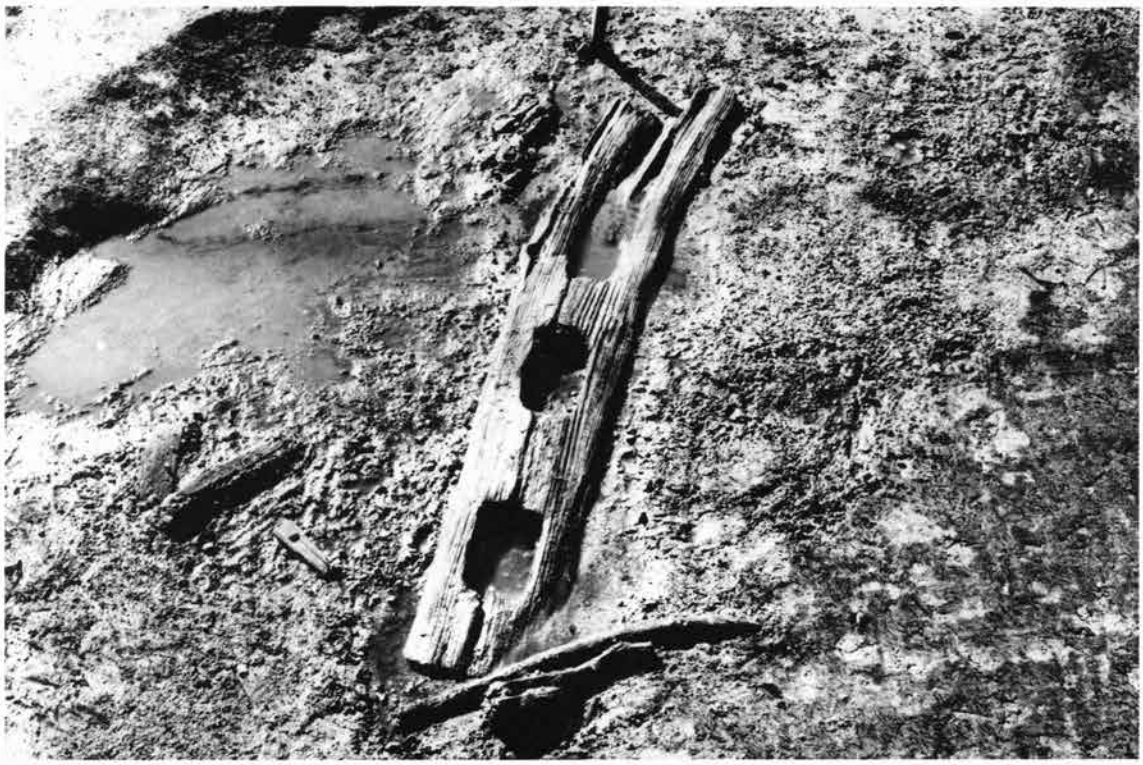
(2)　調査地全景（北から）

(1) No.1トレンチ遺構検出状況

(2) No.3トレンチ遺構検出状況

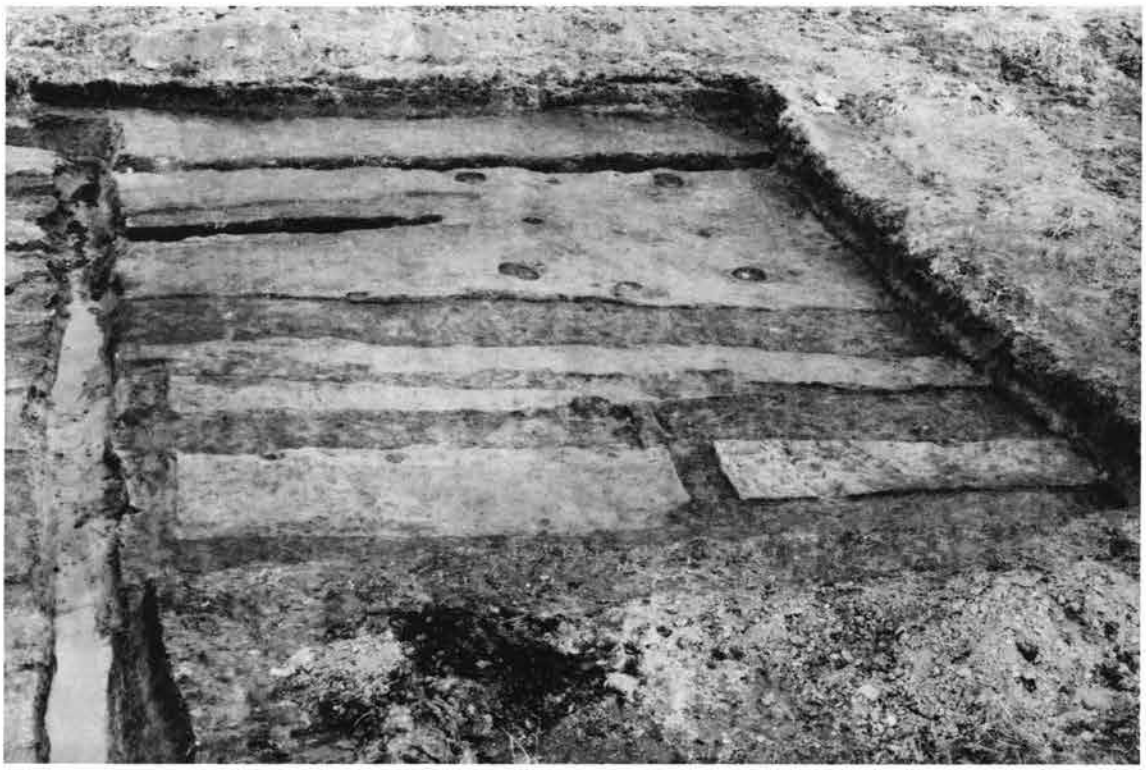


(1)　№6トレンチ木製品出土状況



(2)　№6トレンチ建築材出土状況

図版第12　千代川遺跡第９次



(1) No.7トレンチ遺構検出状況

(2) No.14トレンチ遺構検出状況

6-11

7-15

6-14

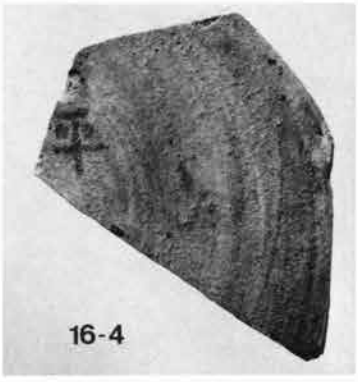
10-7

7-9

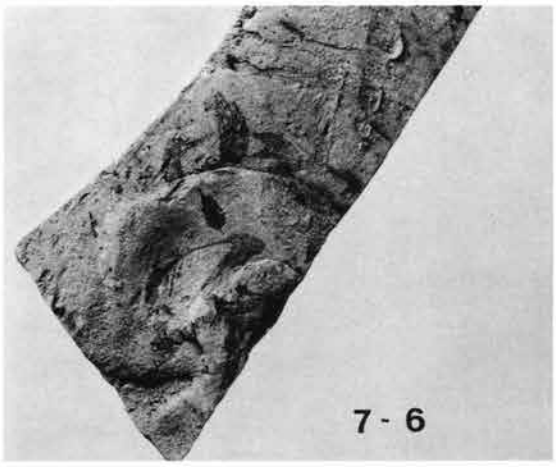
13-4

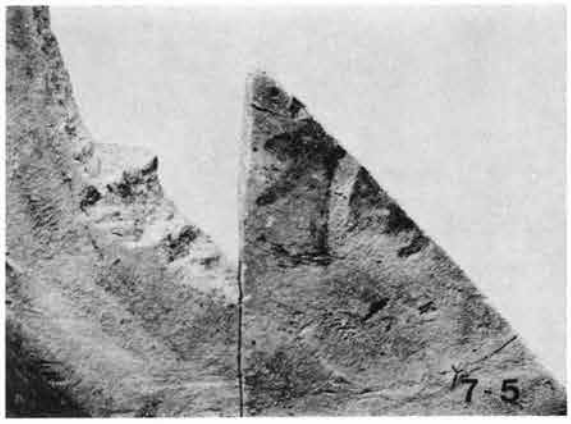
10-9

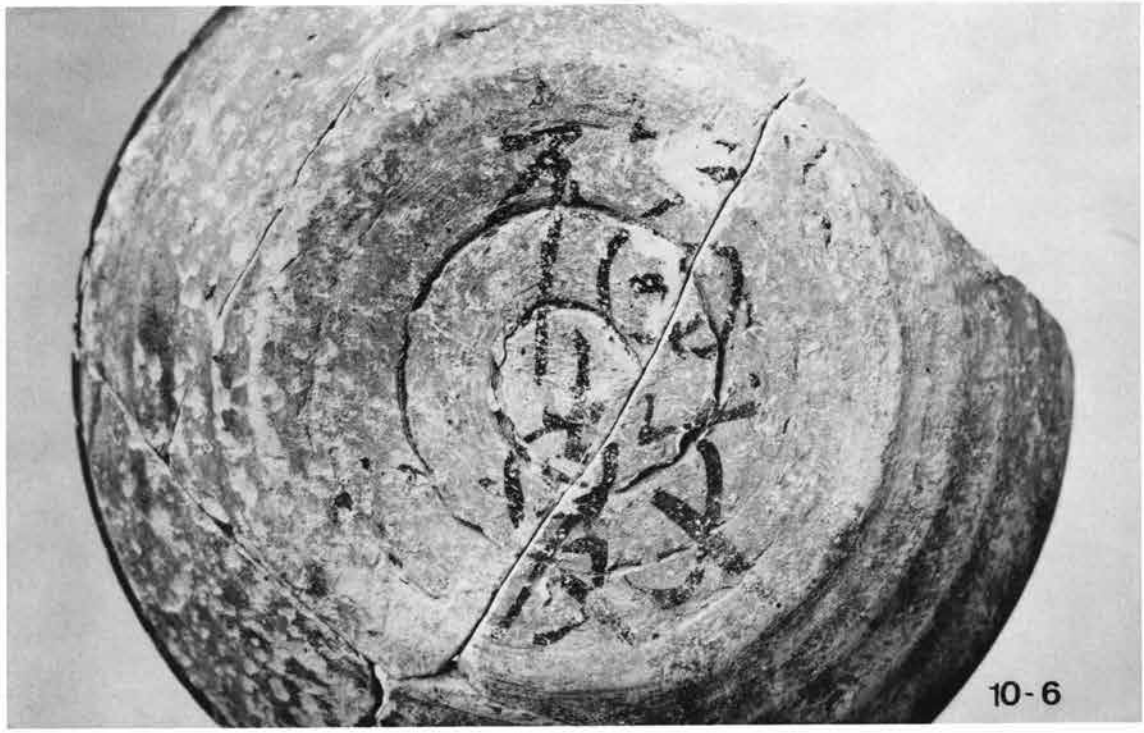
10-8


16-4

出土遺物（須恵器・墨書土器）(1)

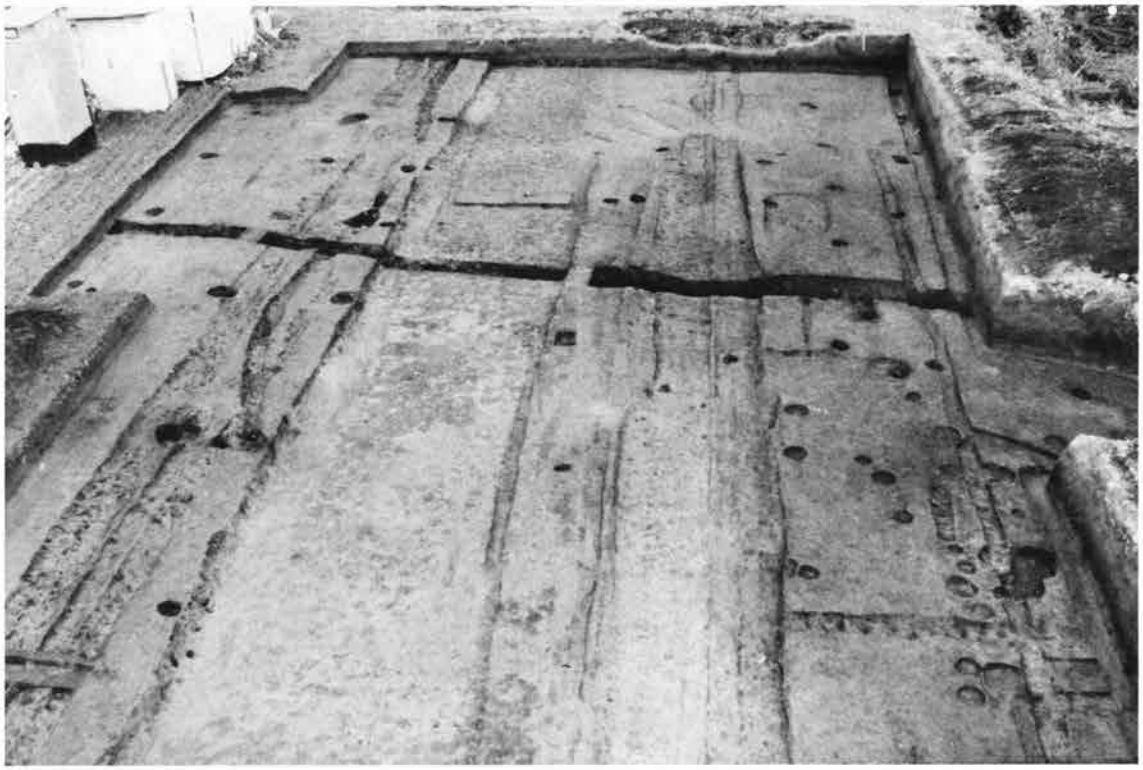




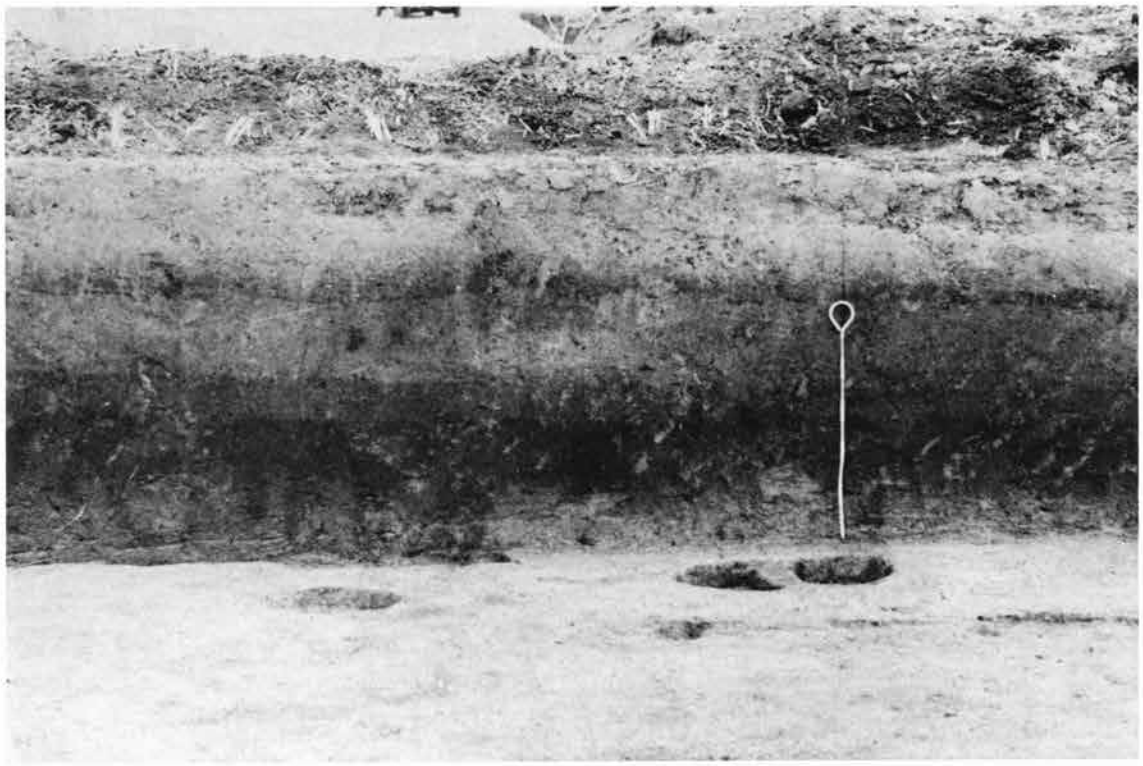


出土遺物（須恵器・墨書土器）(2)

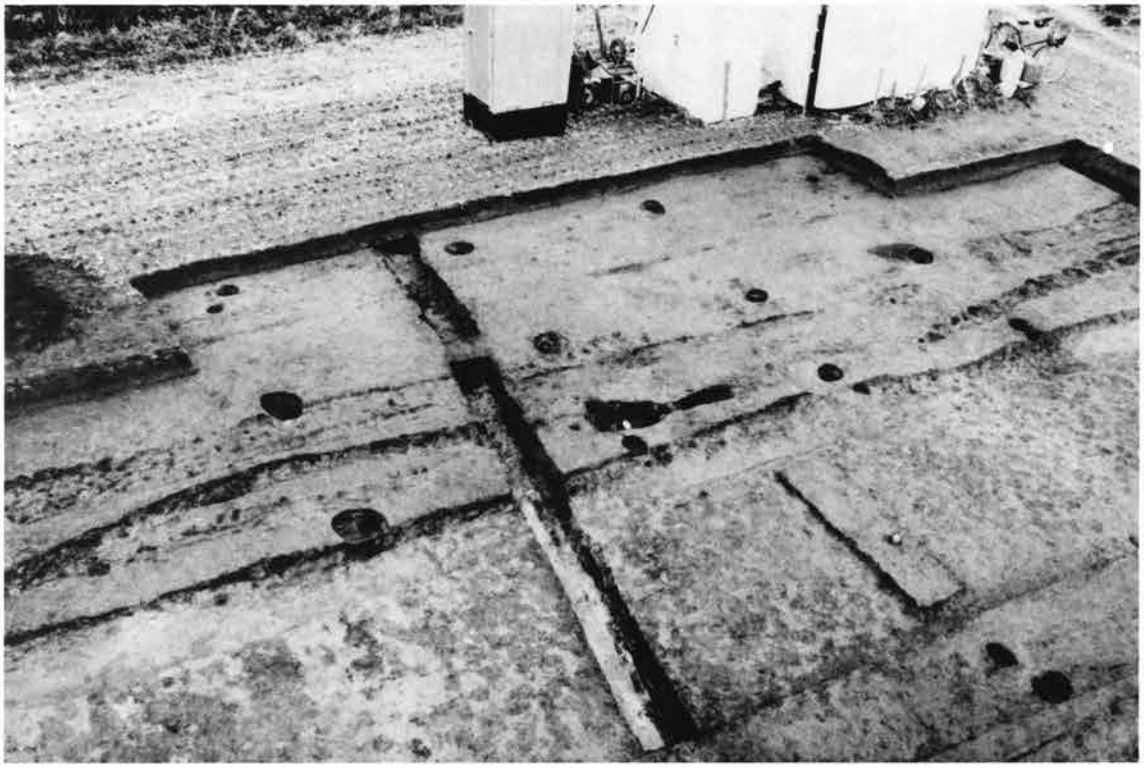
図版第15　北金岐遺跡



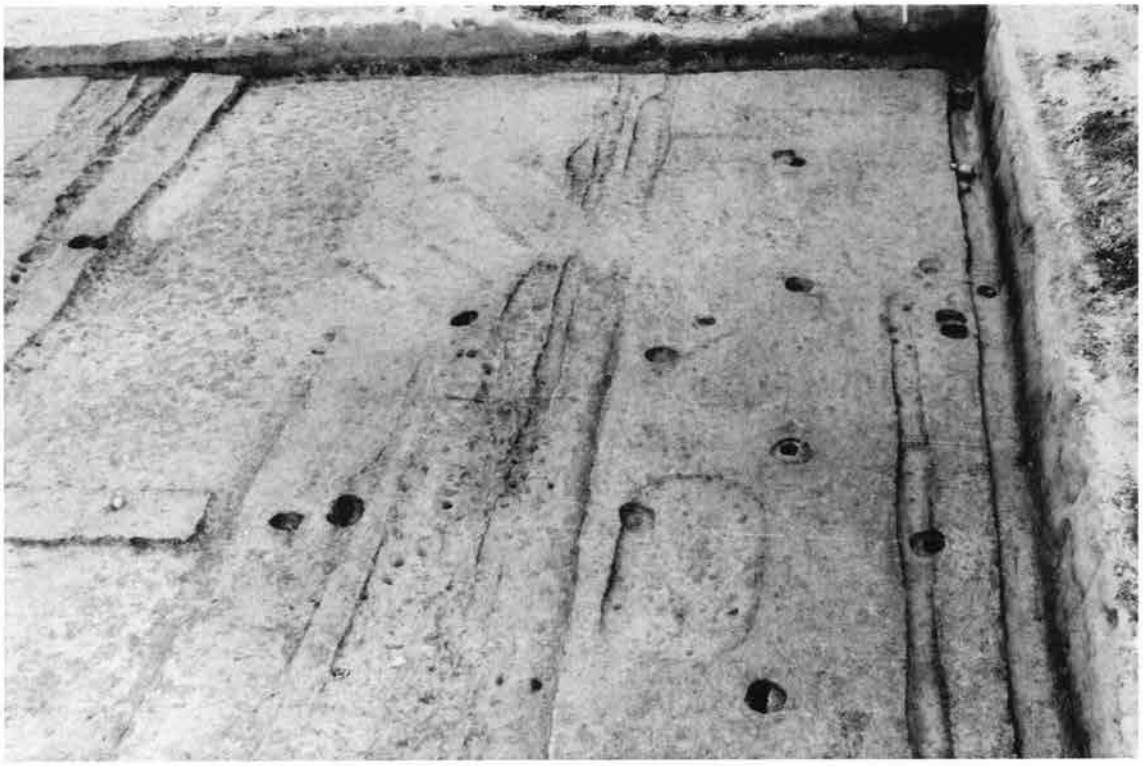
(1) 遺構検出状況（南から）



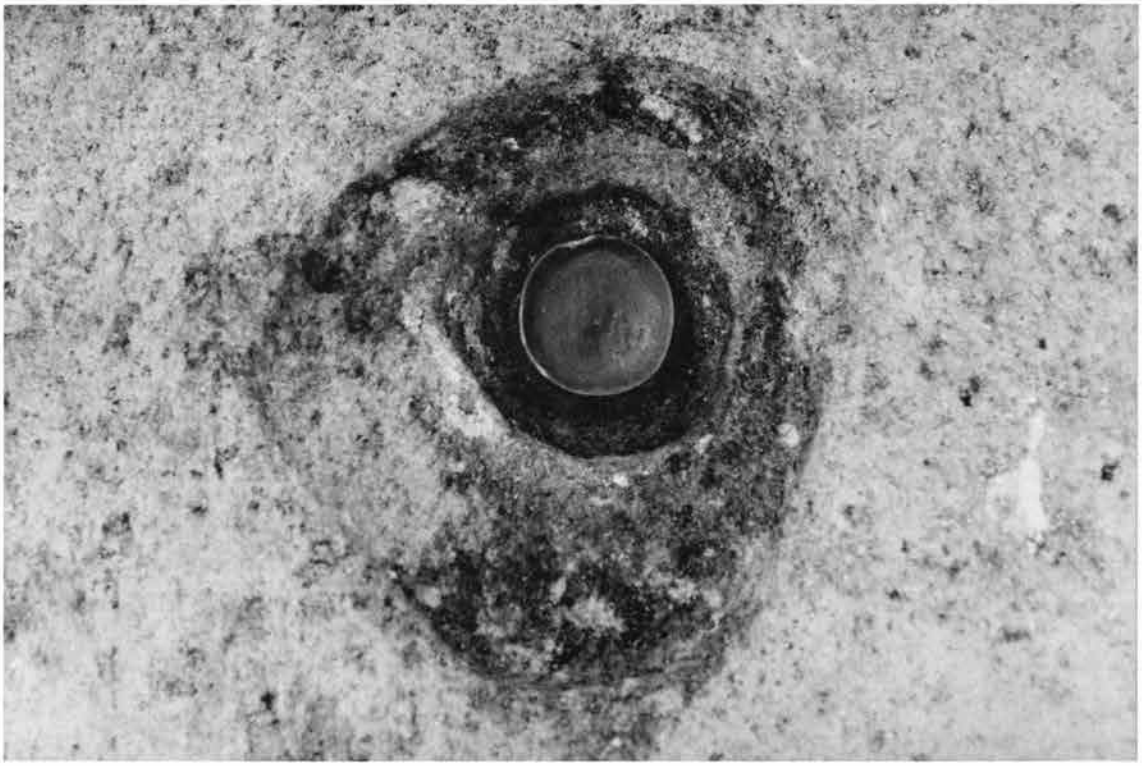
(2) 東壁土層図



(1) 掘立柱建物ＳＢ－01（南東から）



(2) 掘立柱建物ＳＢ－02（南から）



(1) 瓦器皿出土状況（ＳＢ－01ピット）

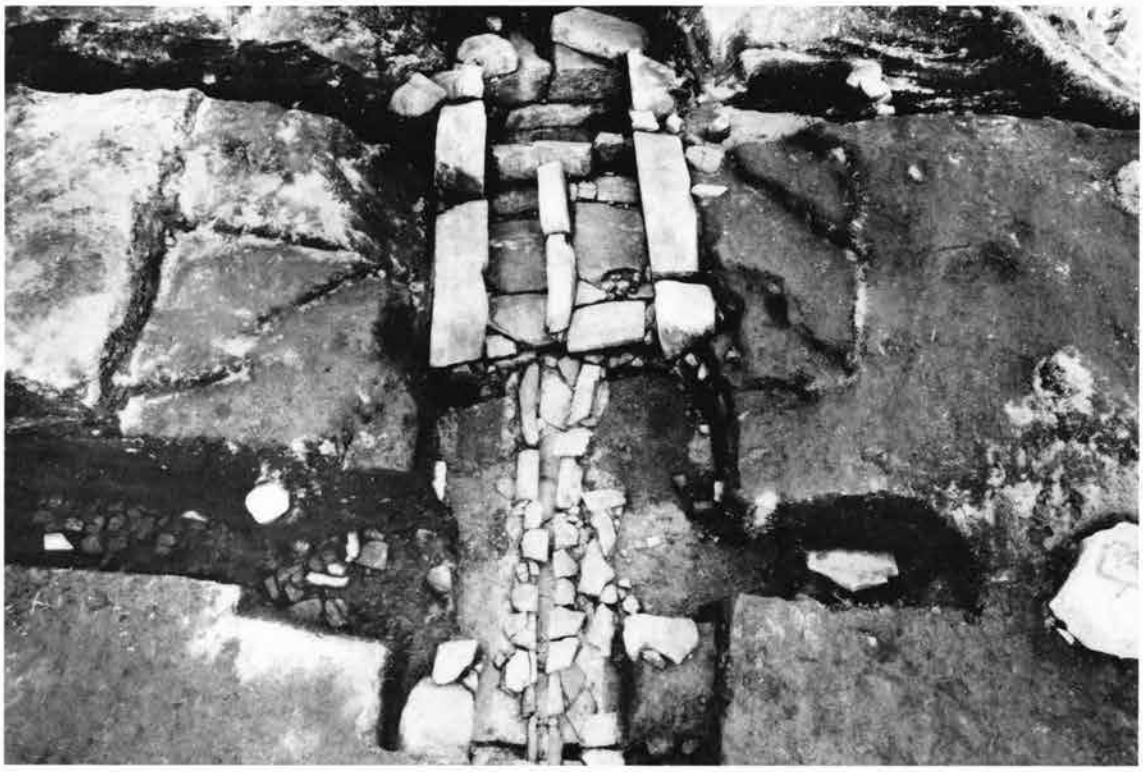
(2) 溝15遺物出土状況

図版第18　小金岐古墳群

(1)　1号墳調査前全景（西から）

(2)　1号墳墳丘築成の状況・部分（南西から）

図版第19　小金岐古墳群

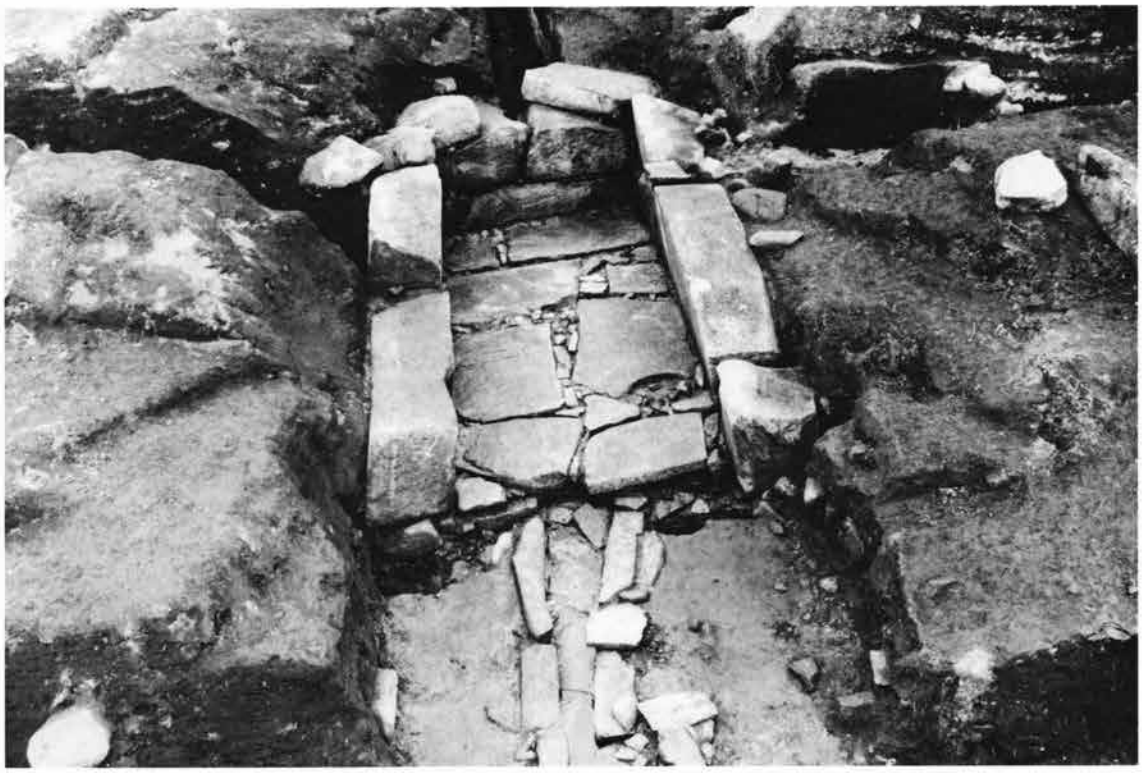


(1)　1号墳石室全景（南西から）

(2)　1号墳玄室見通し（南西から）

(1)　1号墳玄室内の施設（北東から）

(2)　1号墳玄室床面と棺障状遺構（北東から）



(1)　1号墳玄室・敷石床面の状況（南西から）

(2)　1号墳玄室・敷石除去後の状況（南西から）

(1)　1号墳玄室基底と羨道部排水施設（南西から）

(2)　1号墳羨道・排水施設末端の状況（西から）

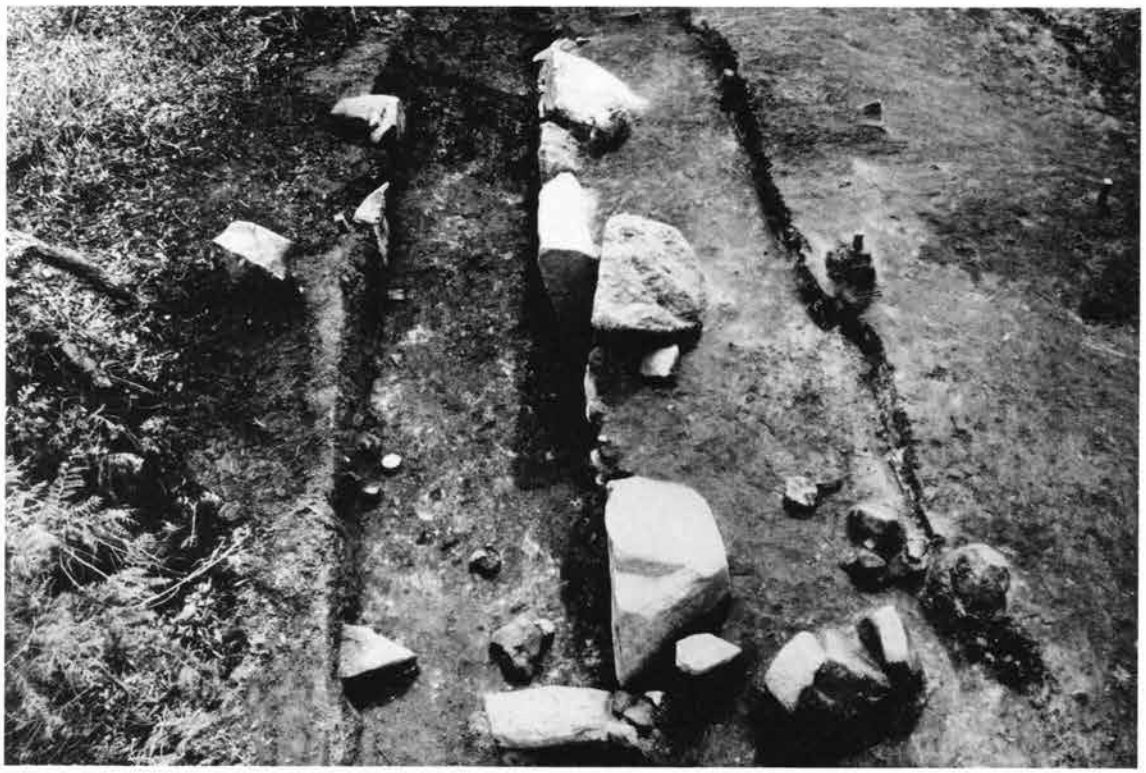
(1)　Ⅰ号墳左側石背後の状況（南から）

(2)　Ⅰ号墳瓦器出土状況（南西から）

(1)　3・7号墳調査前墳丘の状態（南から）

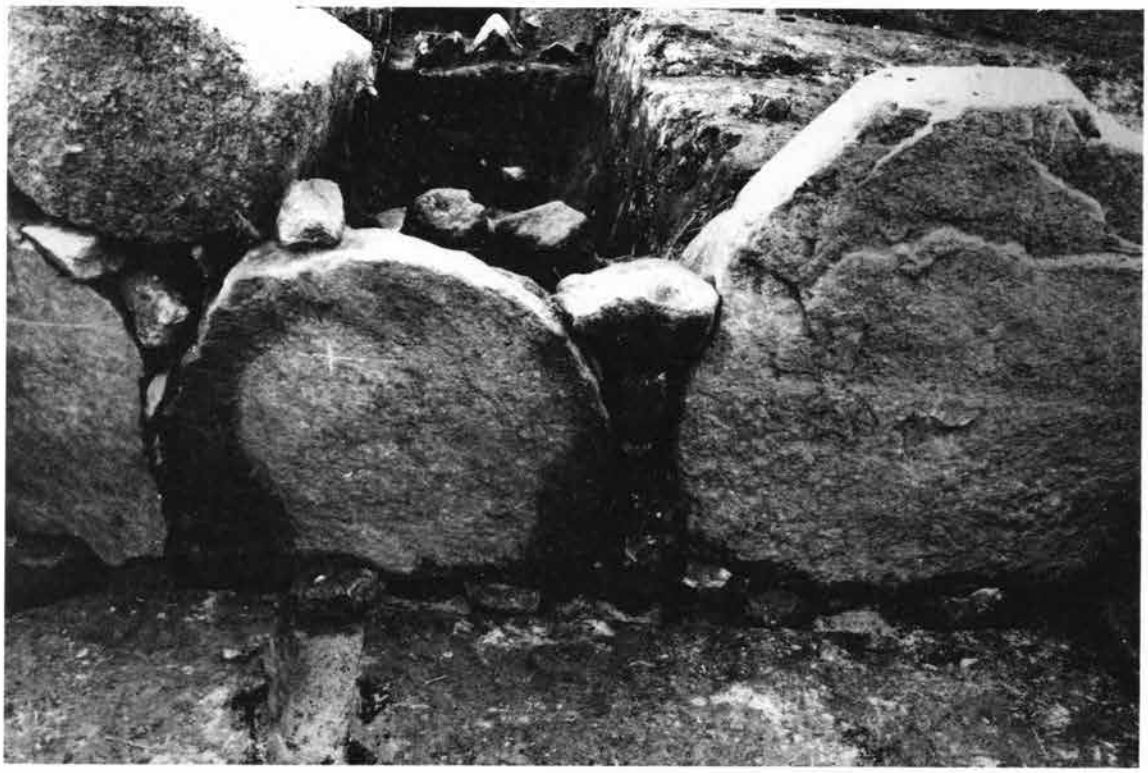
(2)　3号墳石室検出状況（北から）

図版第25　小金岐古墳群



(1)　3号墳石室全景（北から）

(2)　3号墳石室と7号墳墳丘（東から）

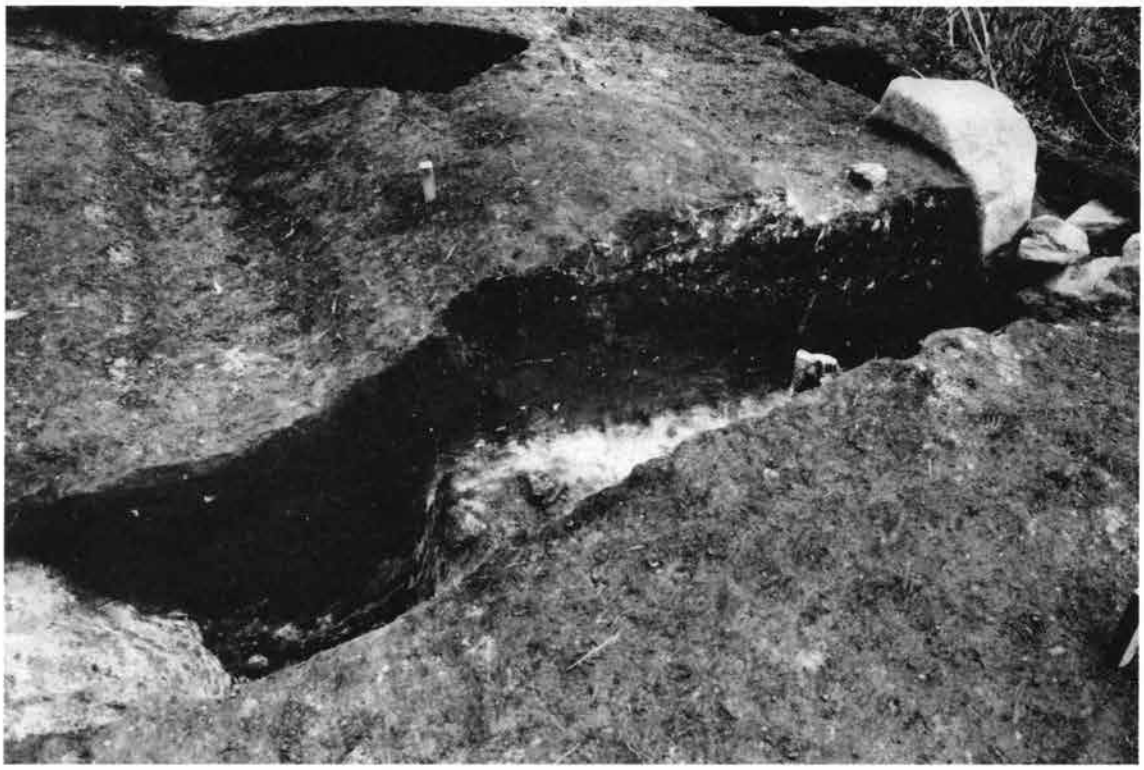


(1)　3号墳石室構築状況（右側石）（東から）

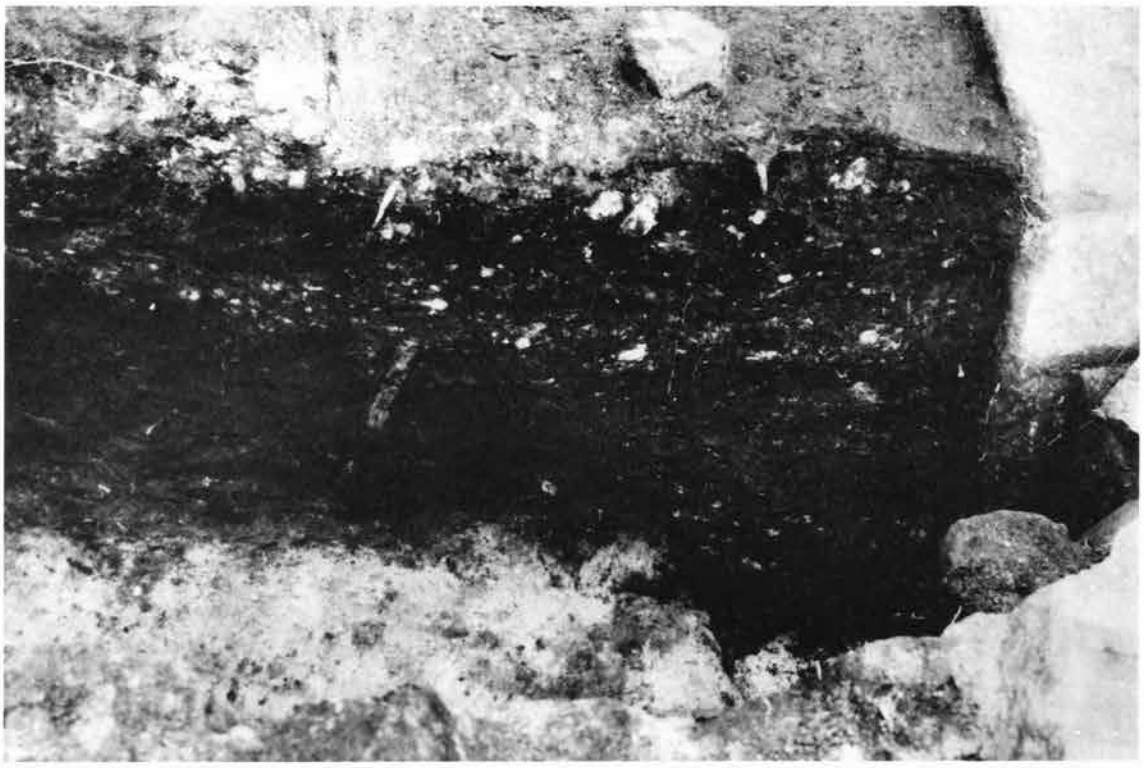
(2)　3号墳棺台状遺構と出土遺物（東から）

(1)　3号墳第1トレンチ全景（北から）

(2)　3号墳奥壁構築状況（東から）

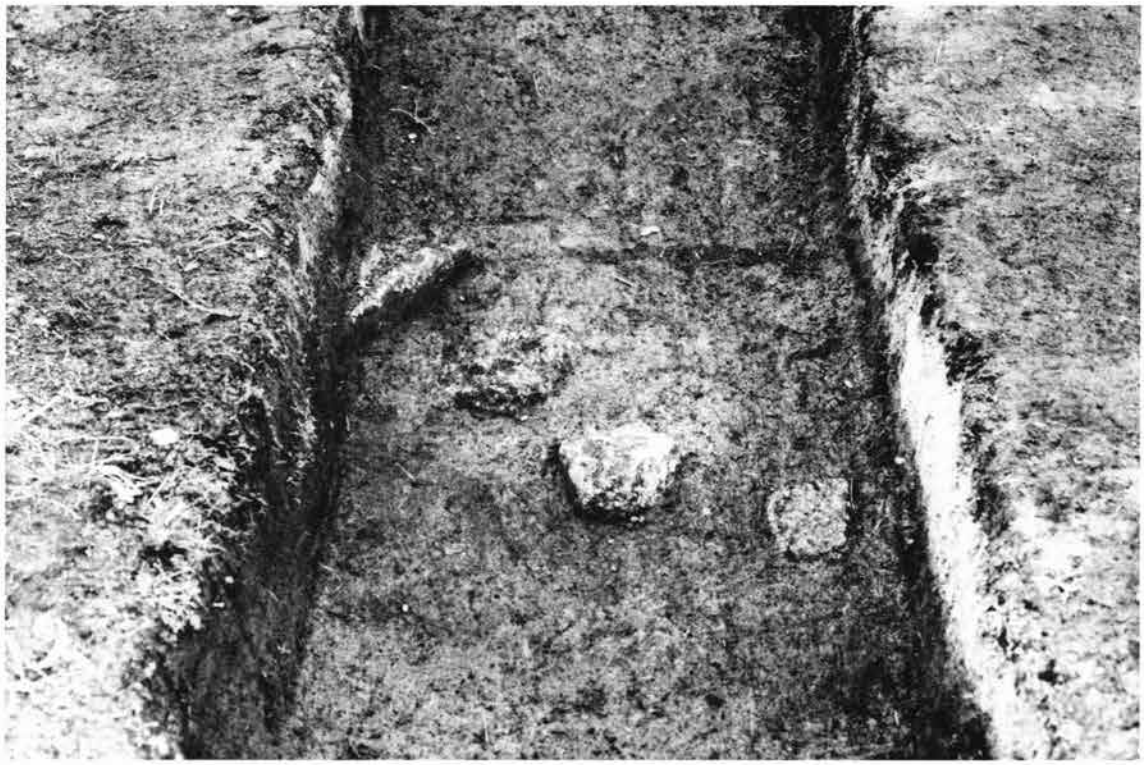


(1)　3号墳周溝と墳丘の状態（南西から）

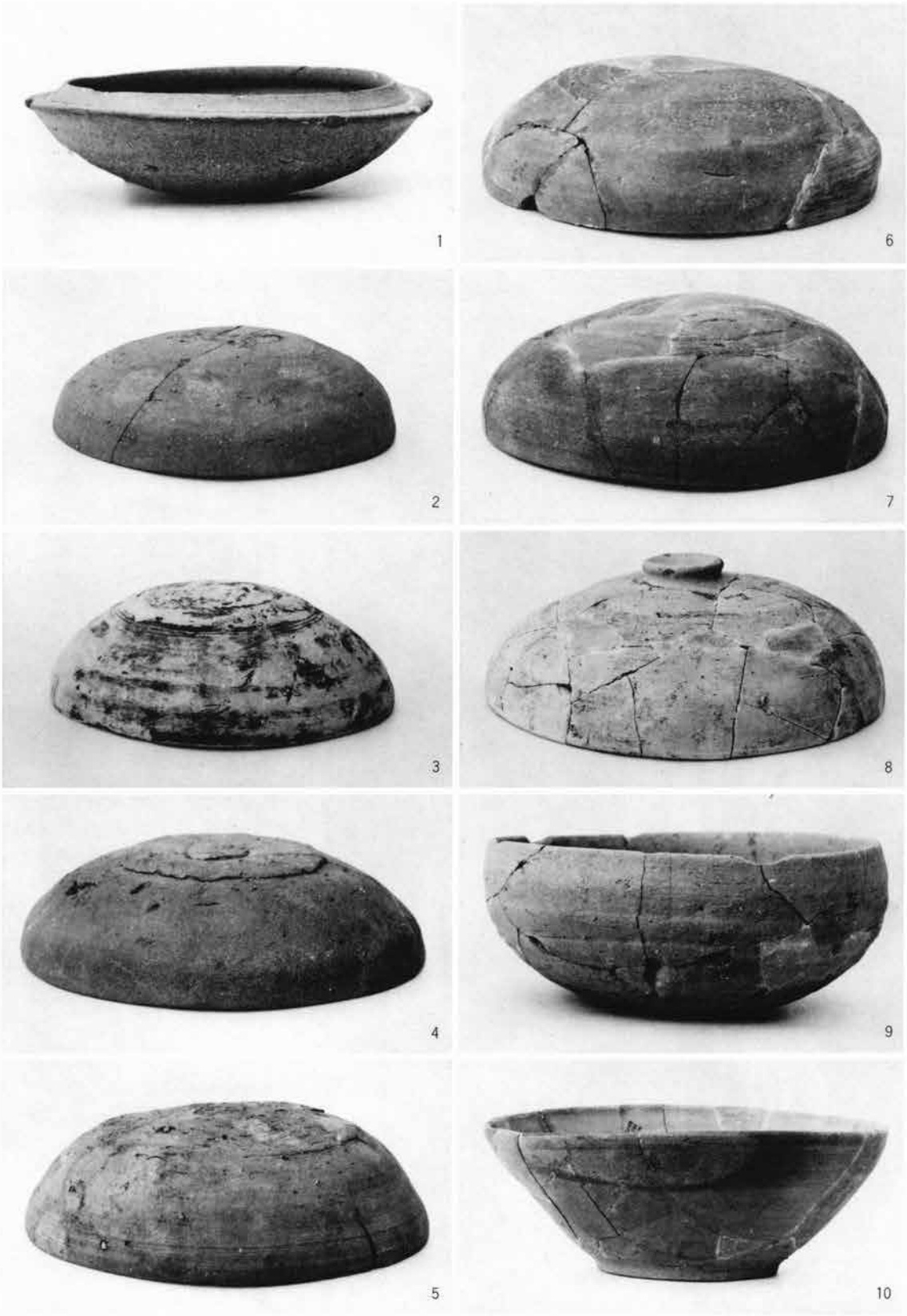


(2)　3号墳石室掘り方の土層堆積状況（南から）

(1)　3号墳右側石背後の状況（西から）

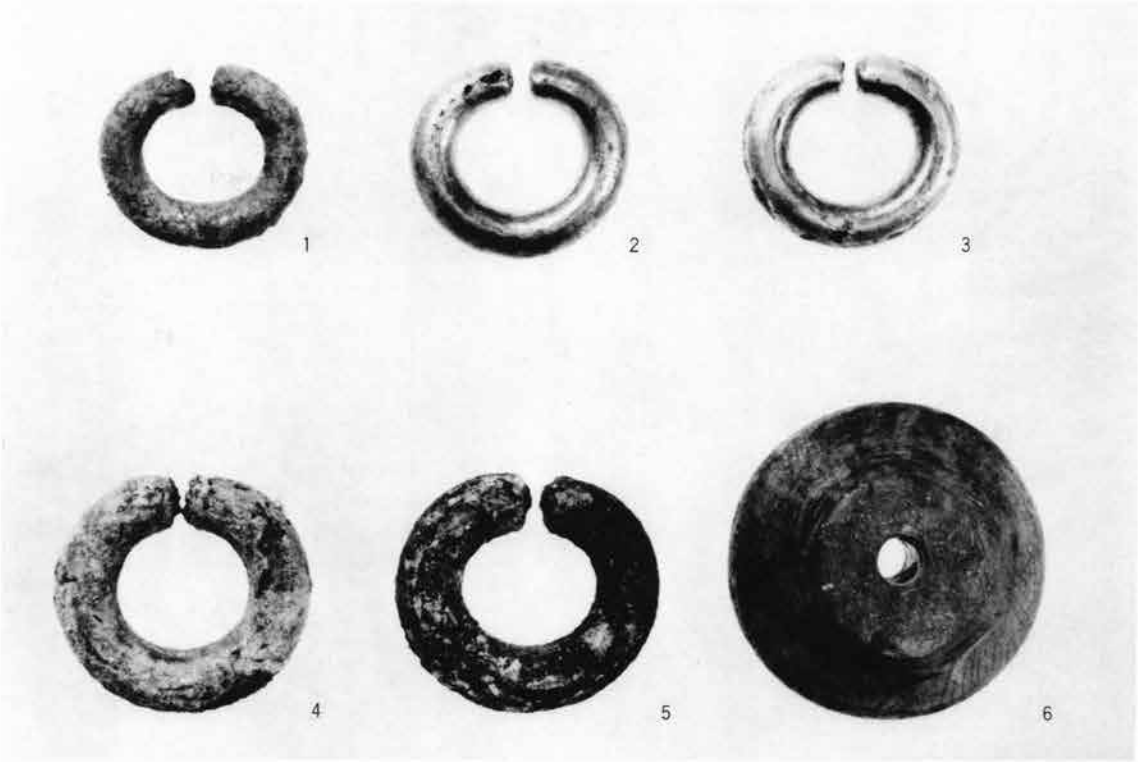


(2)　3号墳墳丘裾部列石（第4トレンチ）（西から）

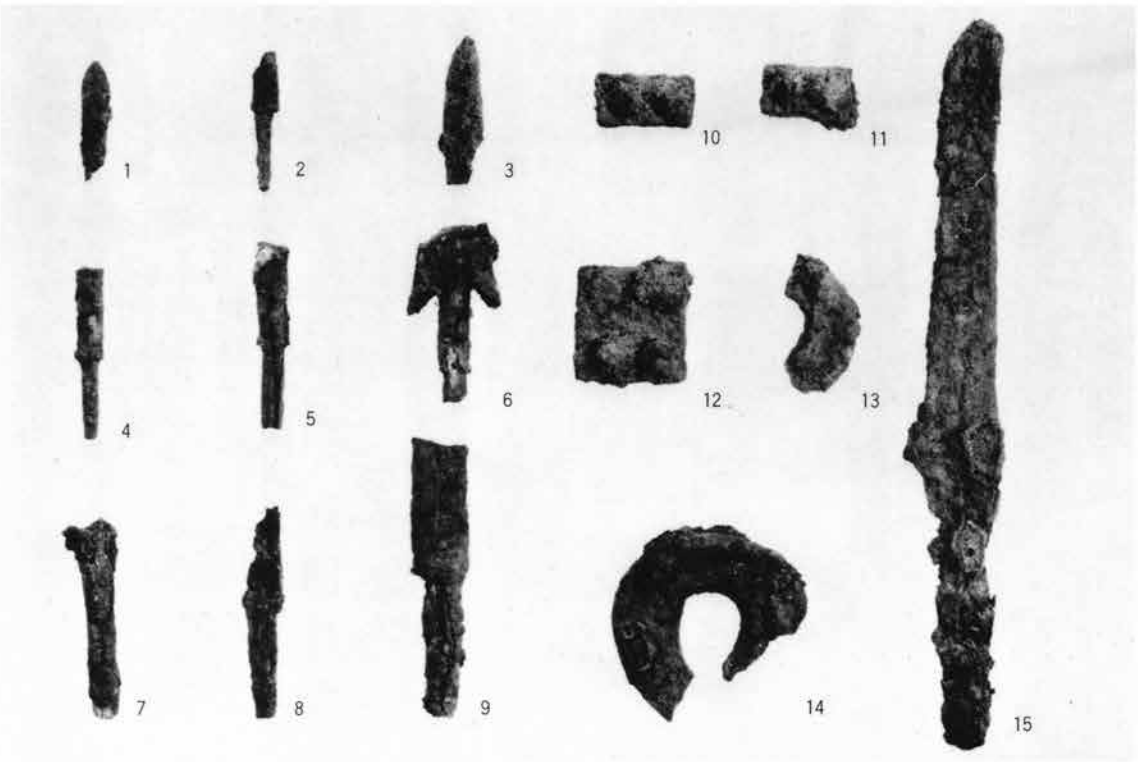


1・3号墳出土遺物(1)（1号墳：5·8　3号墳：1·2·3·4·6·7·9·10）

1・3号墳出土遺物(2)（1号墳：12･13　3号墳：11･14～17）



(1)　1・3号墳出土遺物（1号墳：4～6　3号墳：1～3）



(2)　1号墳出土鉄器（番号は実測図と同じ）

図版第33　赤ヶ平遺跡

(1) 調査地全景（北から）

(2) 7bt調査前風景（南西から）

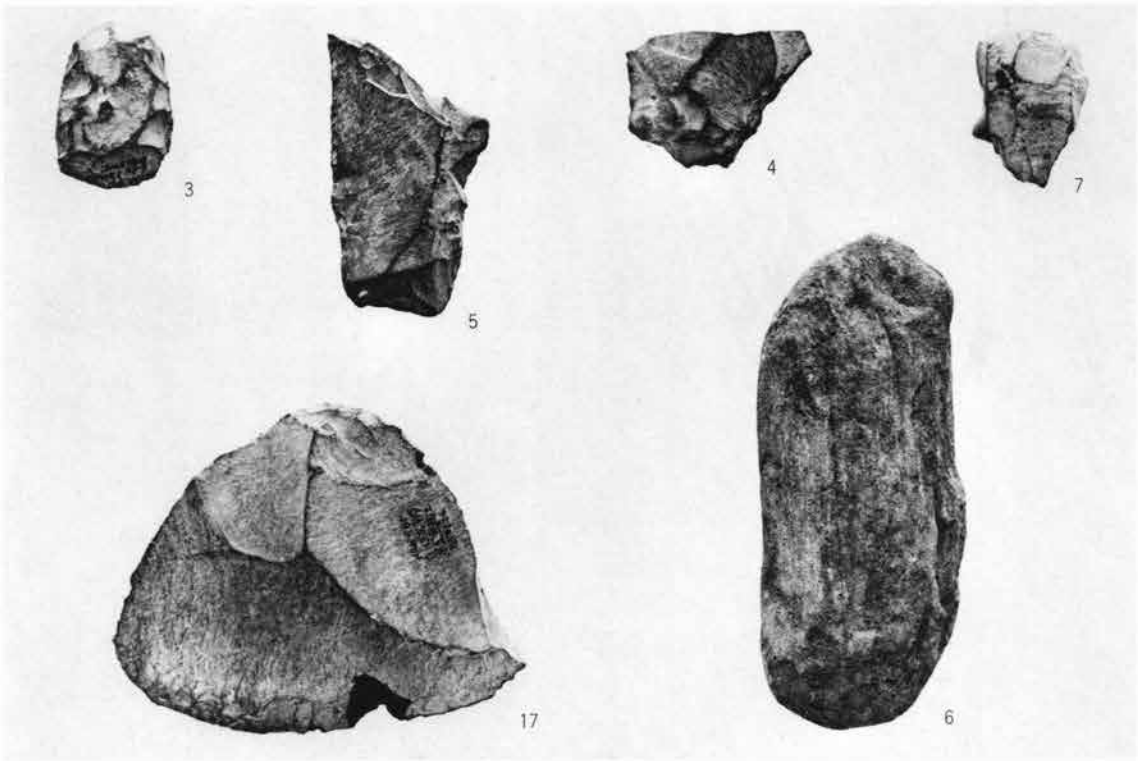
図版第34　赤ヶ平遺跡

(1)　7bt遺物出土面検出状況（北から）

(2)　1bt掘削状況（北から）

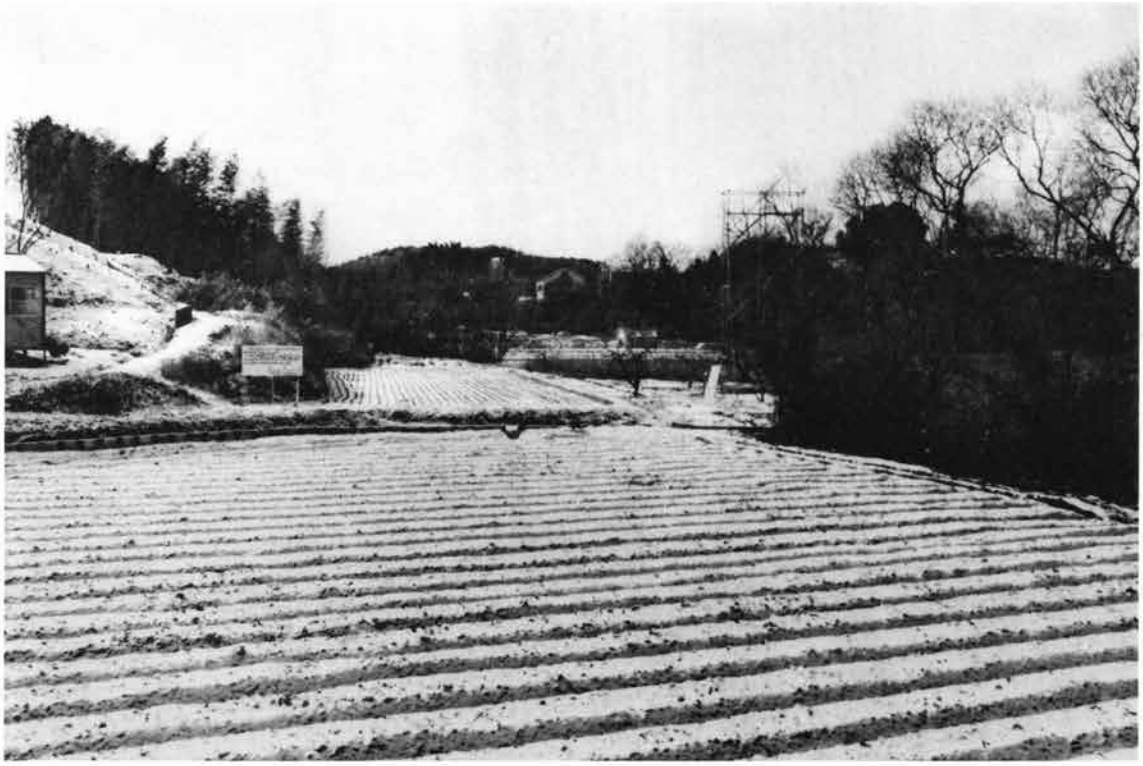
図版第35　赤ヶ平遺跡

(1)　4 bt 土層断面



(2)　出土遺物

図版第36　釜ヶ谷遺跡

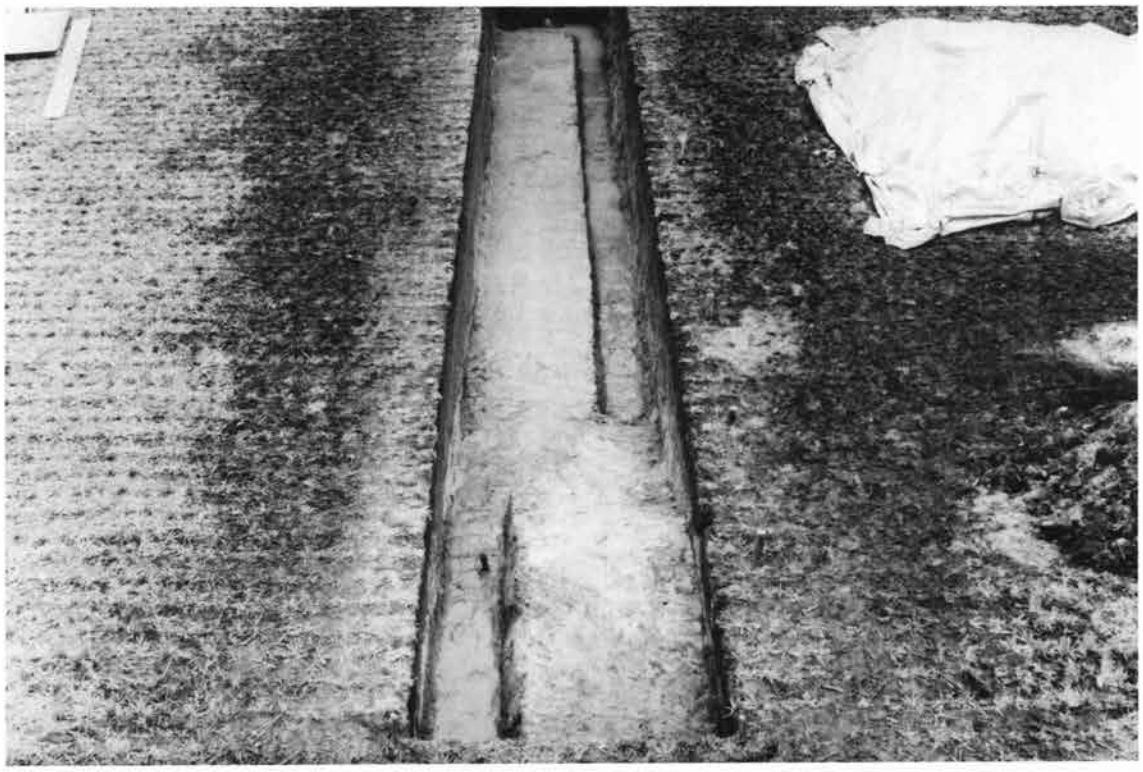


(1) 調査地全景（北から）

(2) 10bt掘削状況（北から）

図版第37　釜ヶ谷遺跡

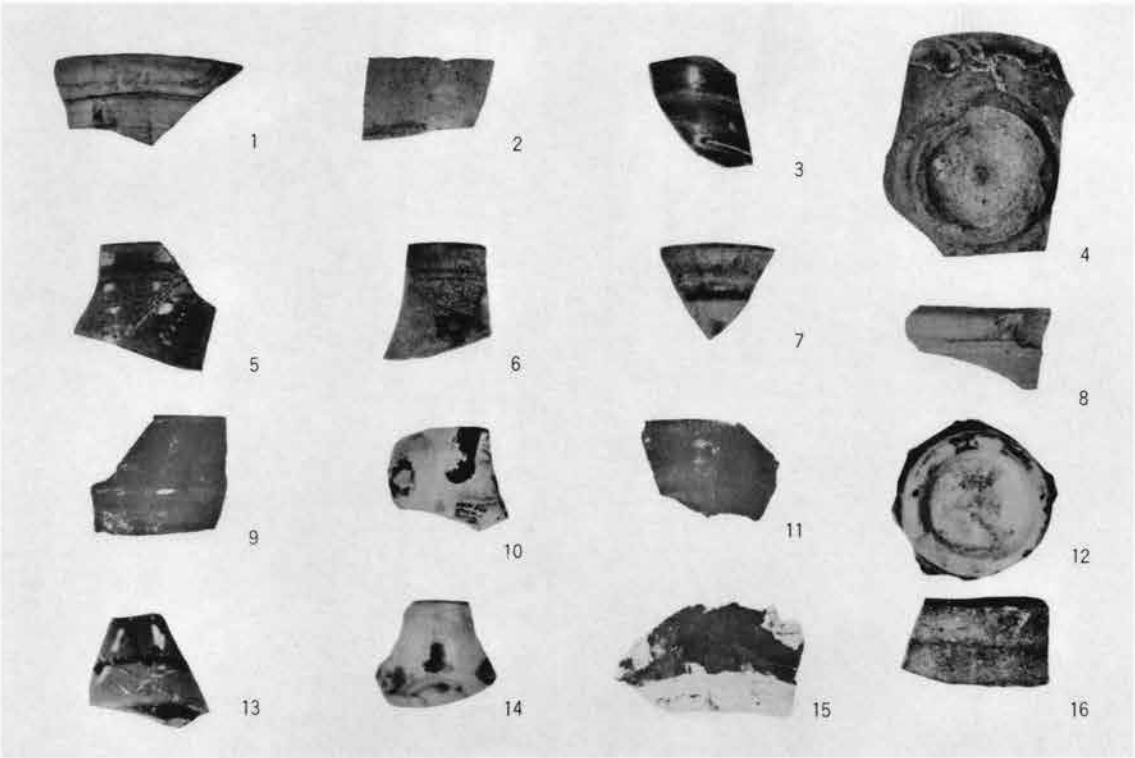
(1)　45bt掘削状況（西から）



(2)　114bt掘削状況（西から）

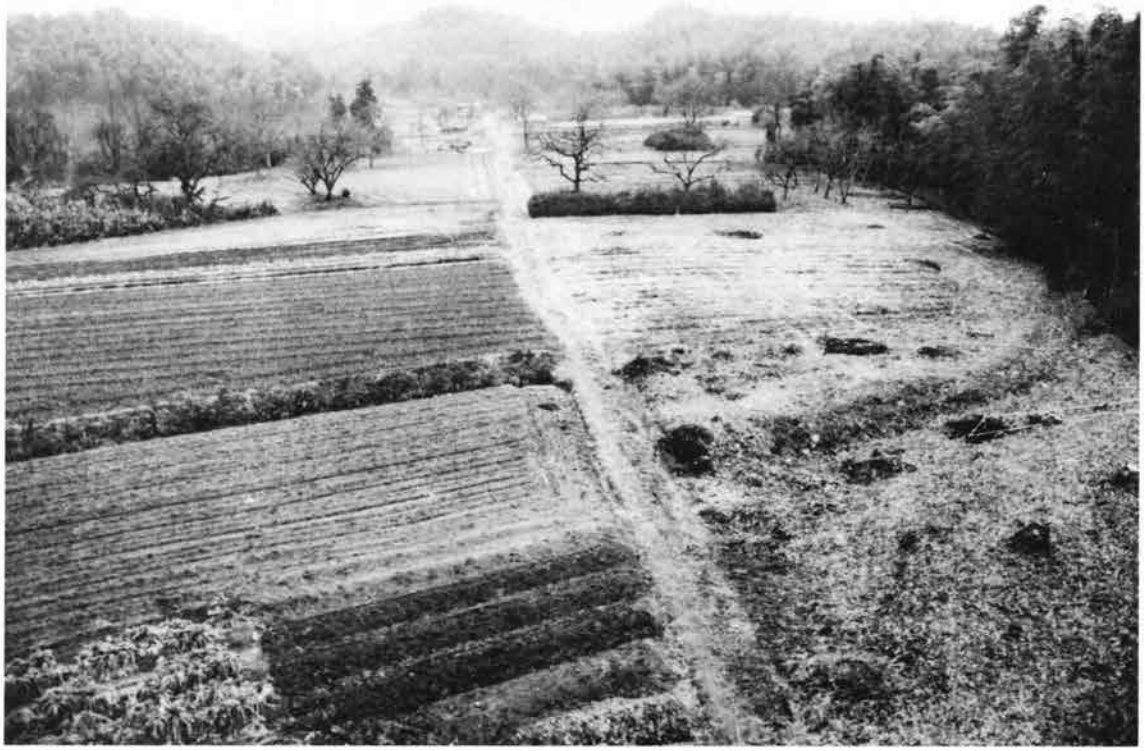
図版第38　釜ヶ谷遺跡

(1) 釜ヶ谷遺跡出土遺物　1．18bt出土，3．5bt出土，4･5．10bt出土

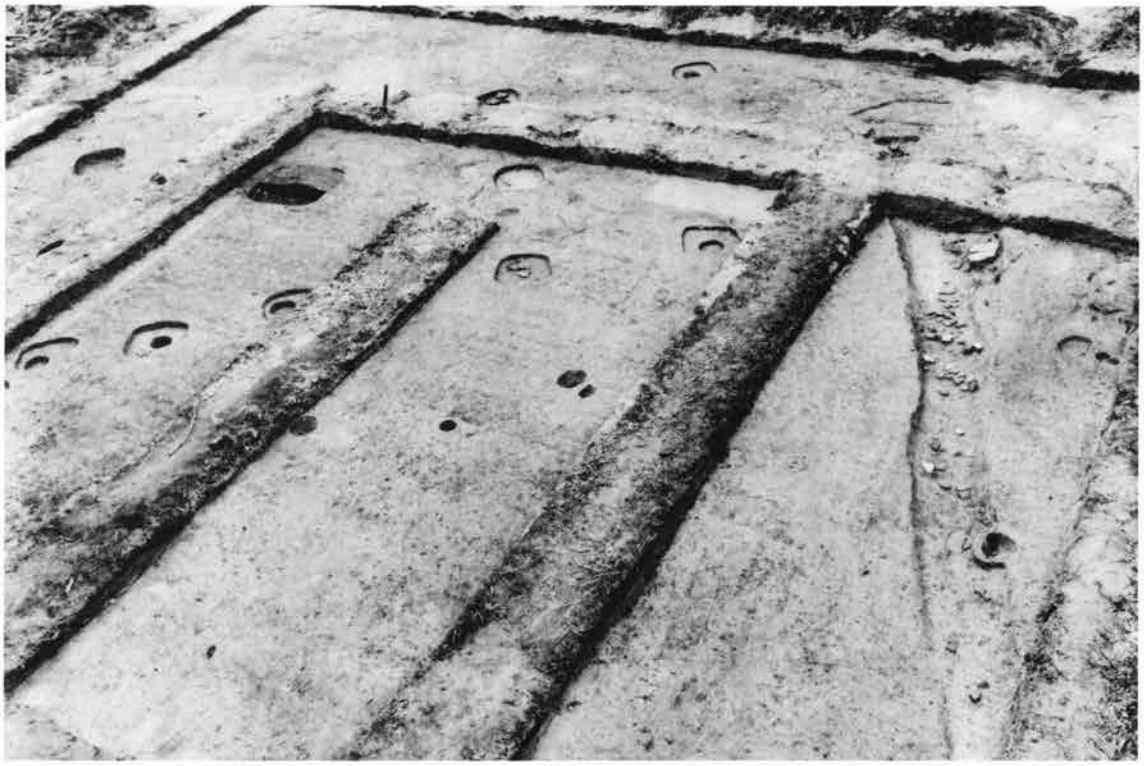


(2) 釜ヶ谷遺跡出土陶磁器　1･3･4･6～12･15･16．5bt出土，2･13･16．18bt出土，5･13．18bt出土

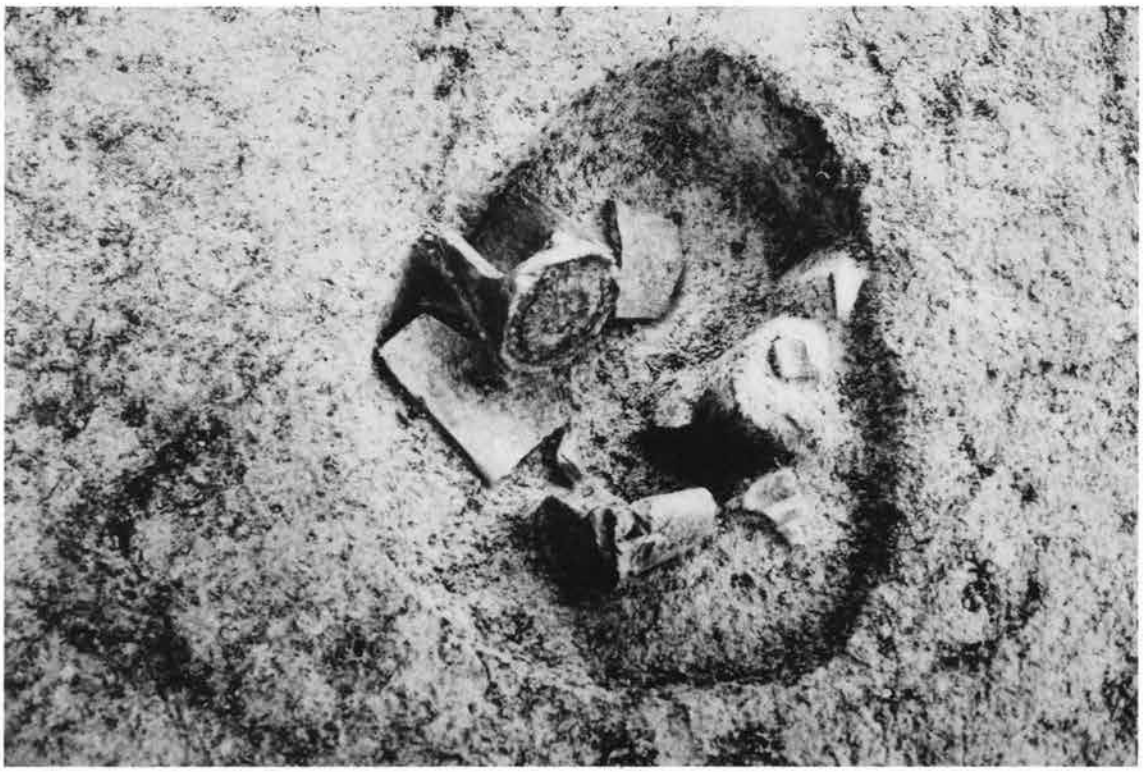
図版第39　上人ヶ平遺跡



(1) 調査地全景（西から）



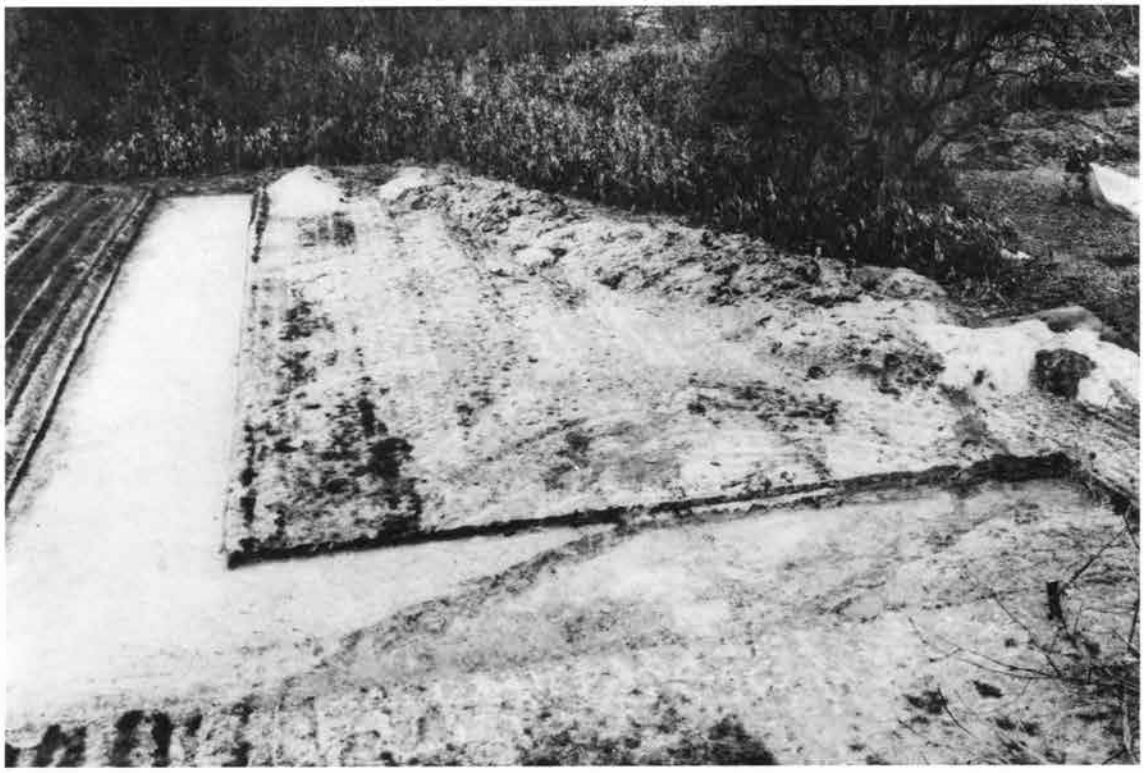
(2) 12bt遺構検出状況（南から）



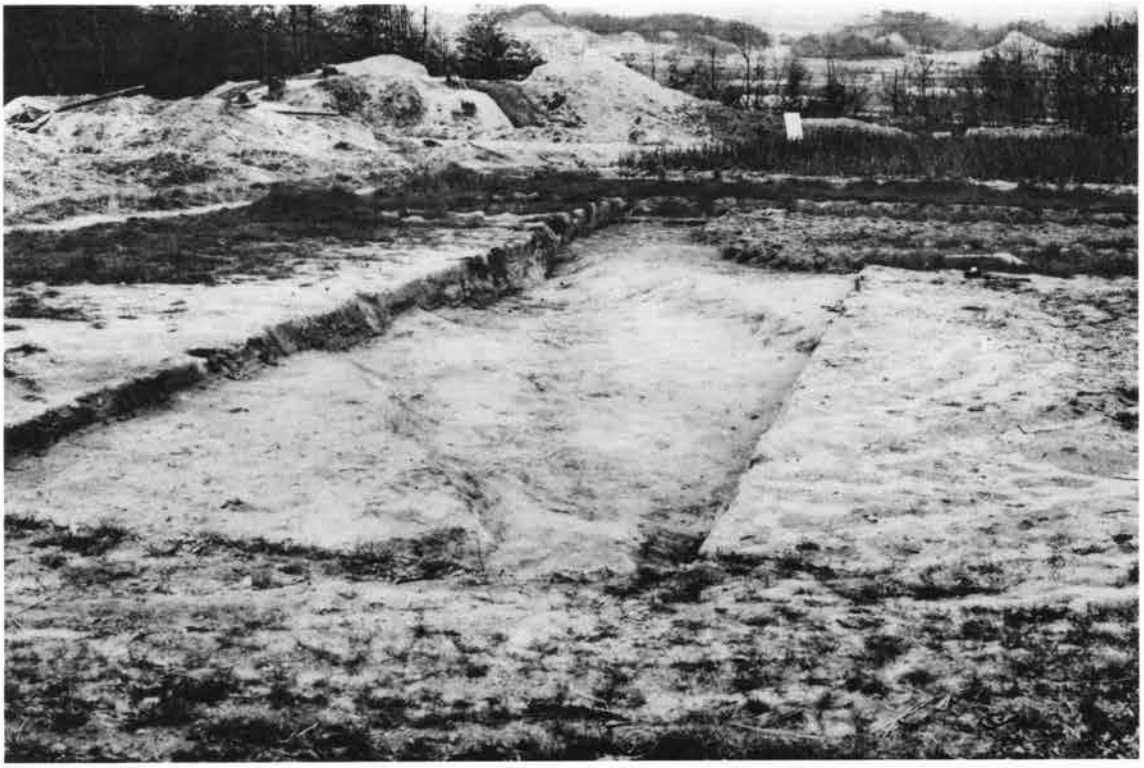
(1) 掘立柱建物SB01　北西柱穴検出状況

(2) 掘立柱建物SB01　北東柱穴検出状況

図版第41　上人ヶ平遺跡



(1)　11bt溝状遺構SD05検出状況（南から）



(2)　11bt溝状遺構SD05検出状況（東から）

図版第42　上人ヶ平遺跡

(1) 17･18bt掘削状況（南から）

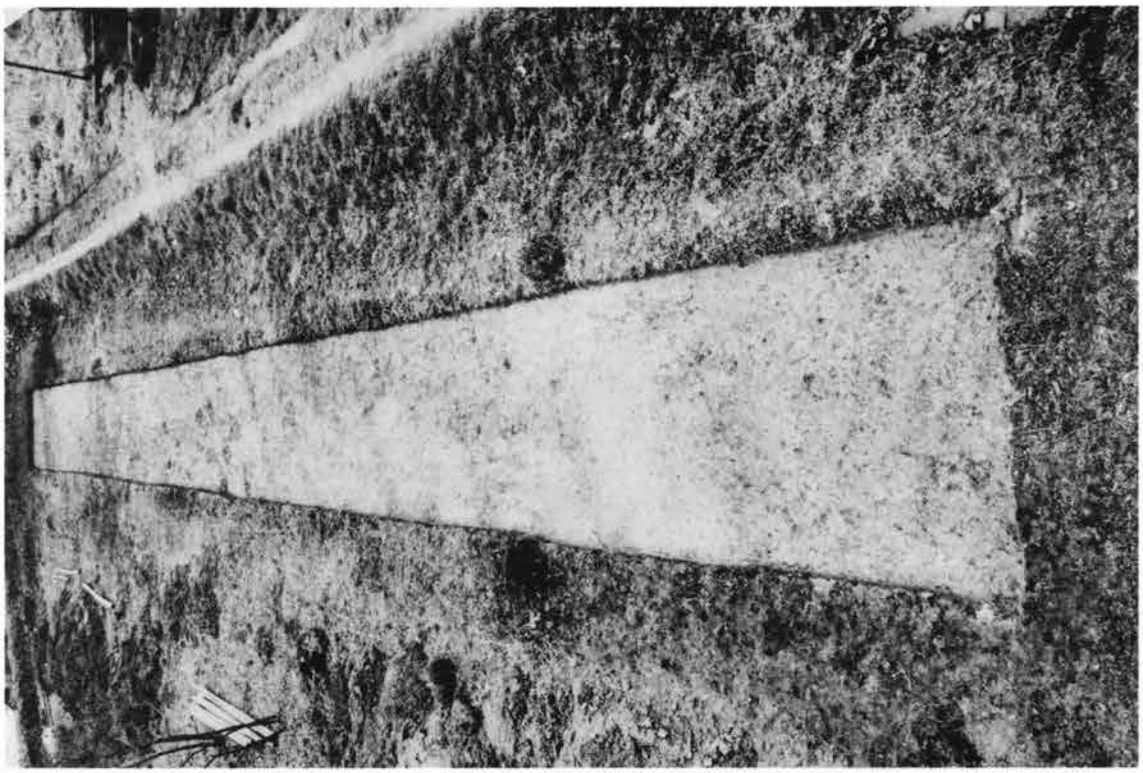
(2) 17bt検出状況（東から）

図版第43　上人ヶ平遺跡

(1)　13bt溝状遺構SD01検出状況（北から）

(2)　13bt SD01出土鬼瓦

図版第44　上人ヶ平遺跡



(2)　33bt掘削状況（北西から）

(1)　37bt掘削状況（南東から）

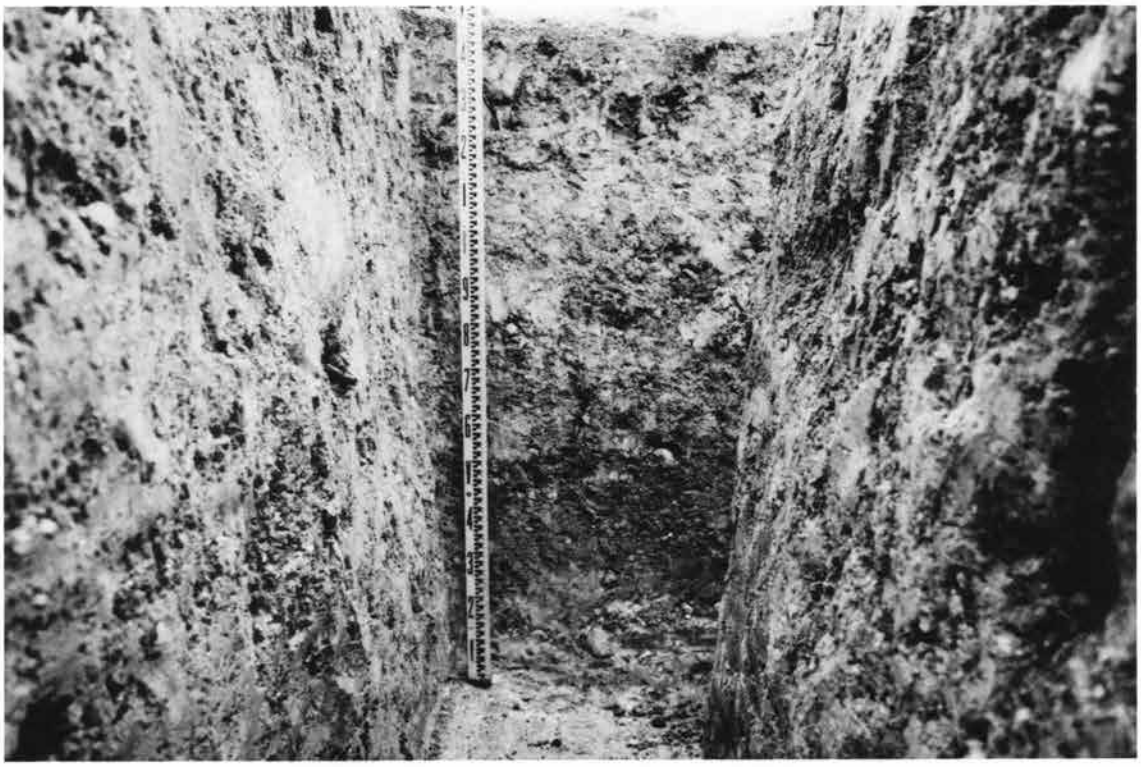
図版第45　市坂1号墳

(1) 調査地全景（東から）

(2) 周溝断面（南西から）

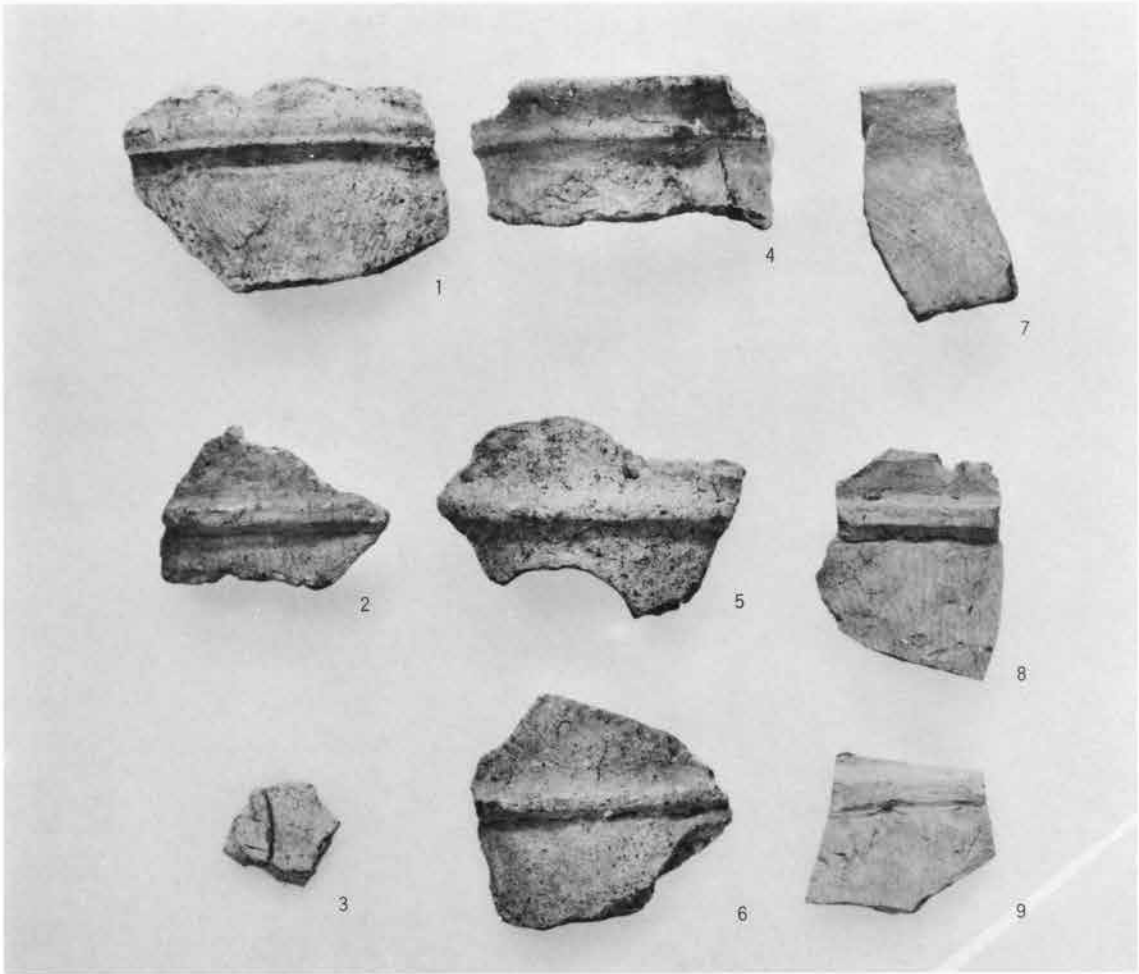
図版第46　市坂4号墳

(1) 調査地断ち割り状況（北から）



(2) 土層断面（東から）

(1) 上人ヶ平出土遺物　1．鬼瓦　2．軒丸瓦



(2) 市坂１号墳出土埴輪　1～3．４トレンチ出土　4～6．３トレンチ出土
7～9．２トレンチ出土

京都府遺跡調査概報 第17冊

昭和60年12月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）